

Gender and Sexuality

Journal of the Center for Gender Studies, ICU

目次

目次	1
----------	---

**特別寄稿：2014 国際基督教大学ジェンダー研究センター開設 10 周年シンポジウム
「境界と共生を問い直す：ナショナリティ、身体、ジェンダー・セクシュアリティ」
「特別寄稿」によせて**

加藤恵津子	5
「慰安婦」問題を覆うネオリベラル・ジェンダー秩序 ——「愛国女子」とポストフェミニズム	
菊地夏野	9
「留学制度」と妊娠・出産 ——事例の考察から——	
高松香奈	31
宗教的マイノリティとしての留学生と大学の環境	
田中京子	43
レイシズムとしてのセクシズム、セクシズムとしてのレイシズム —ジェンダー・セクシュアリティの視点から考える“ヘイト・スピーチ”—	
鄭暎恵	57
日本の留学生政策と実践に内在する象徴暴力	
虎岩朋加	79

研究論文

カップケーキの寓話： ロンドン暴動にみる情動・国家の身体・ホモナショナリズムの接続	
飯田麻結	91
留め置かれる彼女たちの身体 ——「レシタティブ」における「グロテスク」のイメジャリと障害をもつ身体	
五十嵐舞	123
クィア・ネガティヴィティの不可能な肯定 ——固有／適切でない主体の脱構築的批評	
羽生有希	149

肉を避ける人々：草食男子と無性愛 フォタケ・イワナ	175
------------------------------------	-----

研究ノート

ケア役割とキャリアをめぐる「困難」 ——家族を介護する20代から30代女性の場合 松崎実穂	205
---	-----

ジェンダー研究センター（CGS）2014–2015年度イベント報告

トークセッション報告 「第4回座談会 みんなで語ろう！大学での子育て」	223
第3回R-Week報告	226

ジェンダー研究センター（CGS）活動報告・予定

多摩ジェンダー教育ネットワーク 第21–24回会合	232
2015年度CGS活動報告	237
2016年度CGS活動予定	260

付記

執筆者紹介	268
CGS所員リスト	271
第12号投稿規程	275
編集後記	286

Contents

Contents	1
-----------------------	---

Invited papers: 2014 CGS 10th Anniversary Symposium

“Redefining Boundaries and Conviviality: Nationality, Body, Gender and Sexuality”

“Special Contribution” Column

Etsuko KATO	5
-------------------	---

The Neoliberal Gender Order Masking the Problem of Comfort Women: “Patriotic Girls” and Postfeminism

Natsuno KIKUCHI	9
-----------------------	---

Study Abroad Programs and Pregnancy / Childbirth: From Case Study

Kana TAKAMATSU	31
----------------------	----

International Students as Religious Minorities and the University Environment

Kyoko TANAKA	43
--------------------	----

Sexism as Racism, Racism as Sexism:

Considering Hate Speech from Gender and Sexuality Perspectives

Yeonghae JUNG	57
---------------------	----

Symbolic Violence Latent in Japan’s Policies and Practices for International Students

Tomoka TORAIWA	79
----------------------	----

Research Papers

Parables of a Cupcake:

the Deployment of Affect, the National Body and Homonationalism in the Aftermath of the London Riots

Mayu IIDA	91
-----------------	----

Restrained Female Bodies: The Relationship between the Imagery of "Grotesque" and the Disabled Body in "Recitatif"	
Mai IGARASHI	123
The Impossible Affirmation of Queer Negativity: A Deconstructive Critique of Improper Subjects	
Yuki HANYU	149
Matters of the Flesh: Japanese Herbivore Men and the Asexuality Umbrella	
Ioana Fotache	175

Research Notes

Difficulties Faced by Caring Roles and Careers —Case Studies of Women in their 20s–30s Who Care Family Members	
Miho MATSUZAKI	205

CGS Events Reports

Report: Talk session	
Let's Talk about Parenting on Campus #4	223
3rd Annual R-Week Report	226

CGS Activity Reports and Schedule

The 21th–24th Meetings of the Tama Gender Education Net	232
AY 2015 CGS Activity Report	237
AY 2016 CGS Activity Schedule	260

Notes

Author Profiles	268
Regular Members of the Center for Gender Studies	271
Journal Regulations for Vol. 12	275
Postscript from the Editor	286

「特別寄稿」によせて 国際基督教大学 加藤恵津子

「特別寄稿」は、ICU ジェンダー研究センターが設立 10 周年を迎えた 2013 年に、新たに設けたセクションです。ジェンダー・セクシュアリティ研究において見過ごされがちな問題、チャレンジングなテーマ、時宜に合ったトピックなどについて、独自の視点から果敢に研究・実践活動をされている第一人者の方々に、不定期にご寄稿いただいております。

境界と共生を問い直す

二回目の今回は、2014 年 11 月 23 日に本学で開催したシンポジウム「境界と共生を問い直す：ナショナリティ、身体、ジェンダー・セクシュアリティ」の講師より、ご発表をもとにご寄稿いただいています。いずれの論考も、人と人、人と社会を分断する「境界」がいかに人為的に作られるかを、ジェンダー・セクシュアリティの視点から分析します。

菊池夏野さん（名古屋市立大学）の『「慰安婦」問題を覆うネオリベラル・ジェンダー秩序——『愛国女子』とポストフェミニズム』、そして鄭暎恵さん（大妻女子大学）の「レイシズムとしてのセクシズム、セクシズムとしてのレイシズム——ジェンダー・セクシュアリティの視点から考える“ヘイト・スピーチ”——」は、ともにシンポジウム第一部「対立を語りなおす：ジェンダー・セクシュアリティの視点からレイシズムを考える」（企画：堀真悟）でのご発表に基づいています。在日コリアンに対するヘイトスピーチ、また「慰安婦」問題に対する日本側の否定は、（その後、多少の外見上の変化があったとはいえ）いずれも、「民族」と「ジェンダー・セクシュアリティ」の不可分性を示しています。民族的マジョリティたる「国民」が、他民族を「被支配者」または「マイノリティ」と見なす時、そこには性の支配が当然視されます。長年にわたりレイシズムとセクシズムの共犯関係を研究してこられた菊池さんと鄭さんの議論は、「女性から女性へのまなざし」においてさえも、ナショナリズムやレイシズムが暴力的に働くことを明らかにします。

虎岩朋加さん（敬和学園大学）の「日本の留学生政策と実践に内在する象徴

暴力」、田中京子さん（名古屋大学）の「宗教的マイノリティーとしての留学生と大学の環境」、高松香奈さん（国際基督教大学）の「「留学制度」と妊娠・出産―事例の考察から―」は、いずれもシンポジウム第二部「留学制度と身体の周縁化」（企画：生駒夏美）でのご発表に基づく論考です。留学生は、ホスト国により「善意ある態度」の対象とされると同時に、国家間の力関係に組み込まれて劣位化・周縁化もされやすいということは、彼ら・彼女らのジェンダーやセクシュアリティもまた劣位化・周縁化されやすいことを意味します。長年、留学生や留学制度が担う課題に真摯に向き合ってこられたお二人の指摘が、「グローバル化」や「多様化」を売り物としていく今後の日本の大学に示唆するものは大きいでしょう。

いずれの論文も、国家、民族、人種、性といった、所与のものとして考えがちな「境界」を私たちが再考し、乗り越えようとするとき、身体や人間そのもののリアリティを私たちに思い起こさせるはずです。

加藤恵津子（編集委員長）

"Special Contribution" Column

A "Special Contribution" Column was added to this journal in 2013, the year that celebrated the 10th anniversary of the Center for Gender Studies (CGS). The column receives contributions on easily overlooked issues, challenging topics, and other critical issues from leading scholars.

Redefining Boundaries and Conviviality

The following four papers are based on the writers' presentations in the symposium "Redefining Boundaries and Conviviality: Nationality, Body, Gender and Sexuality" held on November 23, 2014, hosted by CGS. Each paper analyses, from the perspectives of gender and sexuality studies, how artificially made boundaries break up person-to-person, person-to-society relationship today.

Natsuno Kikuchi and Yeonghae Jung discuss the conspiracy between racism and sexism exemplified by "comfort women" issues or hate speech directed to Korean residents in Japan. The writers explore power structure where the ethnic majority naturalizes their rule over sexuality of the minority.

Tomoka Toraiwa, Kyoko Tanaka and Kana Takamatsu on the other hand, problematize the marginalization of the sexuality and body of international students in Japan. International students are often the objects of goodwill of host countries while placed lower or marginal in host countries, due to the power relationship between their own countries and host countries.

Written based on the writers' long-term, often personal commitment to the issues, the four papers urge us to critique and overcome such naturalized boundaries as nations, ethnicity, race and gender.

Etsuko KATO (Editor in Chief)

「慰安婦」問題を覆うネオリベラル・ジェンダー秩序

——「愛国女子」とポストフェミニズム

名古屋市立大学 菊地夏野

はじめに

「慰安婦」問題が混迷を深めている。被害女性たちが名乗りを上げてから既に4半世紀経とうとしている。これだけの長い時間が経過してもいまだ政治的解決は成し遂げられず、この問題に関する日本への国際的な批判は大きい。その一方で被害女性たちは永眠されてゆく痛ましい事態が続いている。

本論は、政治的なタブーとして議論することすら避けられがちな傾向にある「慰安婦」問題を取り上げ、あえて正面から論じることを試みたい。ただ、この問題に関する歴史的事実や法的責任などの点についてではない。そのような種類の議論はもちろん必要であるが、「慰安婦」問題というと往々にしてそのような面ばかり論じられやすい。本論は、そうではなくて、「慰安婦」問題をめぐる現在の日本社会の状況に注目したい。

「慰安婦」問題は、もう既に、日本社会を映す鏡のような存在となっているのではないだろうか。この問題は一般的にはごく周辺的な、あるいは特殊なテーマとして認識されているが、実はその逆である。この問題は、立場によって問題の形すら全く異なって見え、異なる意味づけを与えられている。このずれのなかに現在の日本社会、さらにはこれまでの日本の近代そのものの混乱が逆に正確に写し取られているように思える。

この視点にもとづいて、本論では「慰安婦」問題をジェンダーおよびセクシュアリティ、(ポスト)コロニアリズム・ネオリベラリズム批判の観点から位置づけ直したい。「慰安婦」問題の混乱を読み解く中で、日本社会の抱えている問題を明らかにすることが本論の目的である。「慰安婦」問題をめぐる言説状況を考察し、そのなかから「ネオリベラル・ジェンダー秩序」と言うべき状況が立ち上がっていることを試論したい。

1 鏡としての「慰安婦」問題

「慰安婦」問題が進展したのは1990年代である。1991年の金学順さんを始

めとする被害女性たちの告発と支援団体の運動、それに続く研究者の調査と資料の発見は、日本政府の一定の対応を引き出すことに成功した。だが1995年に発足した日本政府の「女性のためのアジア平和国民基金」は、その曖昧な形のため被害者と支援者の反発を呼び、支援運動のなかに傷を残した。また被害女性たちは日本の裁判所に提訴したが、敗訴が相次いだ。これを受けて、支援運動が正義回復のために行った2000年の女性国際戦犯法廷は、90年代の運動の成果として意義を認められている。

それに続く2000年代はこの法廷を取り上げたNHKの報道番組をめぐって政治家の介入が問題となった事件から始まり、解決への道が遠くなっていくことを感じさせられた（VAWW-NETジャパン（Ed.）, 2005）。しかし国外では、アメリカ合衆国の下院を始め多くの国の議会で日本政府に対して法的解決を求める決議が採択されるなど、国際的な批判が高まっていった。

さらに2011年には韓国憲法裁判所が、「慰安婦」問題は「政府の不作为による違憲状態」が続いているという判決を出した。同時に韓国内の日本政府への抗議運動が大きくなり、また韓国内外で被害者を模した少女像が設立される動きが続いている。そのようななか安倍政権となった日本政府は各国から警戒を呼んでおり、2013年には橋下大阪市長（当時）が「慰安婦」制度を肯定するかのような発言を行い国際的な批判を浴びるという問題が起きている。2014年には政府が河野談話を継承するという姿勢を確認したものの、これまで「慰安婦」問題に関して活発に報道してきた朝日新聞に対する激しいバッシングが起こり、『従軍慰安婦』は朝日新聞のねつ造だ」と主張するマスメディアまで登場した。

以上のような政治的膠着状態が固定している現状だといえる。マスメディアが報道しなくなった2000年代以降、一般市民がこの問題について得られる情報源の主要なものは、インターネットである。だがインターネット空間にはこの問題についてはとりわけ否定的な情報があふれている。被害者をおとしめ、政府の責任を無化する立場からの情報に偏っているため、ネットに多く触れる若い世代は、そのような認識を往々にして信じがちである。

このような状況のため、多くの人びとにとって「慰安婦」問題の輪郭すらあやふやになってきているのではないだろうか。しかし、この問題は周知的であ

るところか、日本社会にとって大きな意味を秘めている。じっさい、安倍政権下において「ファシズム」とも批判されるような政治的動向が進行しているが、この政治的变化を「慰安婦」問題をめぐる諸相は早くから体现していた。マスメディアがこの問題について触れなくなるきっかけをつくったのは、上述の2000年の安倍首相（当時官房長官）によるNHKへの政治介入である。そのさいにマスメディアが問題の重大性を認識できなかったことが、現在のマスメディアにおける批判精神の後退を許してしまった。そして、マスメディアの問題に止まらず、「慰安婦」問題は、様々なレベルで日本社会の抱えている問題を照らし出している。

被害者が告発してから現在までの25年のあいだ、「慰安婦」問題に対する日本社会の姿勢はその時代の社会の状況を照らし出し続けている。「慰安婦」問題は日本社会の鏡となってしまっているのである。

本論では、この鏡としての「慰安婦」問題から、そこに映し出されるものを言語化する作業を行いたい。

2 ヘイト・スピーチ論からの植民地主義の消去

今日日本国内では、「慰安婦」問題はひとびとの記憶から消し去られようとしている。マスメディアが報道せず、一部の政治家の発言が国際的に批判される時か、保守・右翼の立場の者たちが問題を否定して国際的に反発を呼ぶ時にしか話題にならないため、この問題は「真偽があやしい問題」「政治的なタブー」として認識されているようだ。

ここで注意しておきたいのは、必ずしも否定派ではない者たちも、この消失に手を貸してしまっているのではないかということである。この数年、マスメディアが取り上げる社会問題の一つに、「ヘイト・スピーチ」がある。これはここでは、街頭やインターネット上で人種や民族を理由に少数集団を攻撃する差別的な言動を指している。主に「在日特権を許さない市民の会」（略称在特会）等の団体が在日朝鮮・韓国人を対象に行う攻撃的なスピーチやシュプレヒコールのことである。この言動は、「レイシズム」として批判的に論じられている。

しかし狭義の意味で「レイシズム」を解するなら、このヘイト・スピーチと

いう現象の一部しか見えてこないのではないだろうか。街頭で、あるいはインターネットの動画でこの差別的行動を観察すれば、ほとんどの場合「慰安婦」被害者や支援運動への非難や攻撃が含まれている。にもかかわらず、マスメディア等で問題化される時には「慰安婦」問題に関わる部分は論じられない。奇妙な消失が生まれているのである。

ヘイト・スピーチは、1990年代に生まれた「慰安婦」問題否定運動を主要な源流のひとつとしている。本来であればヘイト・スピーチと「慰安婦」問題の関連性を見なければ、現在起きている問題の全貌を理解することはできない。

ヘイト・スピーチに対しては国際的な世論を背景に、日本政府も取り組み、対策に乗り出している。だがその同じ日本政府が「慰安婦」問題については否定的な対応を繰り返している。¹ この矛盾は、「慰安婦」問題の日本社会における根深さを示している。

すなわち、ヘイト・スピーチの前身のひとつとして、1990年代に登場した「新しい歴史教科書をつくる会」（略称つくる会）らによる教科書への「慰安婦」の記述に反対する運動がある。つくる会らの運動は、「新しいナショナリズム」と称して「国家の誇り」を守ることを前面に掲げた。そして重要なことは、その活動の中で大きな位置を占めたのが「ジェンダー・フリー」やフェミニズムへのバッシングであり、また「慰安婦」問題の否定だったということである。

つくる会のリーダーである藤岡信勝は、「慰安婦問題は国家の恥部」「子どもたちに絶対教えてはいけない」としている（藤岡、1996）。「慰安婦」問題はいわばナショナリズムのアキレス腱なのである。「慰安婦」制度に関する国家責任を認めてしまえば、「日本国家の名誉」が傷つけられてしまうため、この問題は消去されなければならないというのがナショナリズムの思考であり、それは政治家であろうと同様である。ヘイト・スピーチについては一部の集団の行為として切り離せても、「慰安婦」問題は明確に国家責任が問われている。国家は、暴力を箱に入れながらもそれを隠してしまい、自分たちは暴力とは無関係であるかのようにふるまうことができる。

にもかかわらず現在のヘイト・スピーチ現象を狭義の「レイシズム」として

のみ解釈するとすれば、現象を構成している重要な要素である「セクシズム」を見逃すことにつながってしまう。通常、「レイシズム」と「セクシズム」は別個の問題として理解されているからである。セクシズムの無化は、マスメディアや学問あるいは社会運動の男性中心主義から来るものであり、これは後述するジェンダー・セクシュアリティをめぐる現状の複雑さも後押ししているだろう。さらにレイシズムという言葉のもつ広さとそれゆえの曖昧さを考えたい。

レイシズムという概念は、各国家・社会が並列して在り、それぞれの内部で同じように差別が発生しているという事態を想起させる。ヘイト・スピーチやレイシズムの報道で多くの場合参照されるのが欧米の現象である。欧米で戦後継続して存在している移民や外国人に対する差別とそれに対する批判が、現在の日本におけるヘイト・スピーチと比較され論じられる。

しかしじっさいには国家間の不平等な関係性によって「国際秩序」が形成されてきたのが近代世界であり、その国家間の権力関係が現在の外国籍住民や移民への差別・暴力への根本にある。差別主義者は、外国籍であればどの国であろうとターゲットにするのではなく、ある特定の外国籍のみを攻撃するのである。それは、欧米を範とし、アジアを含むそれ以外を劣位におく植民地主義に沿っている。したがって、単純に欧米と日本を並列することはできない。欧米と日本では、近代植民地主義においておかれた歴史的な位置が全く異なるからである。

そのような面を考慮せず議論がなされるとしたら、サイドやスピヴァクが批判した「知の植民地主義」を超えることはできないだろう。近代は植民地主義にもとづいて形成されていながら、決してそれを清算できていない時代だが、植民地主義の抑圧性は、とりわけ学問・科学や文化を通じてわたしたちの認識まで構成している点にある。

小森陽一は、福沢諭吉『文明論之概略』を読解して、「福沢が怯えているのは、欧米列強のオリエンタリズムの視線に、『日本』が『支那朝鮮』とひとしなみに刺し貫かれてしまうこと」（小森, 2001, p. 44）と分析している。日本はアジア諸外国と違って欧米列強と同等に「強い国家」であらねばならないが、「慰安婦」問題は日本国家の誤りを白日の下にさらしてしまう。「慰安婦」

制度は植民地主義の暴力の中でも最も個的な、人間の精神や内面、価値観、主体形成にまで及んだ支配装置であり、そのためにナショナリズム側は隠蔽しようとするのである。

差別への批判がこのような植民地主義の構造的レベルまで進まないということは、植民地主義に絡まるジェンダー、性差別の問題をクリアにできないことと同義である。

植民地主義は必ず性差別や性暴力を伴うと考えるのがポストコロニアル・フェミニズムである。「慰安婦」問題の解決は、ポストコロニアル・フェミニズムの視点が共有されていかなければ実現できない。現在、「慰安婦」問題が消失されていこうとしている一因は、日本社会でフェミニズムへの理解が進まないことにある。

3 フェミニズムを装う「愛国の慰安婦」表象

前節でヘイト・スピーチと「慰安婦」問題が分離されて認識されている現状の問題を考えたが、「慰安婦」問題とフェミニズムの関係も明確に理解されているとはいえない。

現在「慰安婦」問題をめぐって議論となっていることのひとつに、朴裕河『帝国の慰安婦』の評価がある。朴は日本文学を研究する韓国人研究者であるが、これまでも「慰安婦」問題を始め日韓の政治的課題をめぐって物議をかもす発言を行ってきた。とりわけ『帝国の慰安婦』は注目され、朝日新聞出版から出されたこともあり、高く評価する声が多い。ここでは、この本をめぐる解釈のなかで、「植民地主義批判」「フェミニズム」の立場として本書を理解する評があることに着目したい。

本書は韓国内の「慰安婦」被害者を支援する運動、具体的には「挺身隊問題対策協議会」を、被害当事者を「抑圧される民族の娘」として政治的に利用し、問題解決を妨げたと批判する。「慰安婦」制度については、被害女性の周囲の家族や共同体、民間の韓国人業者の責任を強調し、日本政府に対しては、「日本政府の責任は性の需要をつくり出したことにあり、法的責任は問えない」として政府の法的責任を否定する。

2014年に出版された日本版に先行して2013年に出された韓国版は、翌年

「慰安婦」被害者から名誉毀損で提訴された。その結果、2015年2月にソウル地方裁判所で出版等禁止及び接近禁止の仮処分決定が出されている。

韓国内で大きな反発を呼んでいるこの本が、日本のマスメディアや一部の言論人に高く評価されているのはなぜだろうか。それは、この問題をめぐる日韓の対立および諸外国からの日本への批判があまりに膠着していて改善が見られない状況に面して、日本政府へ期待することを諦め、政府を批判する運動側へと矛先が移っていると考えられることもできる。その上でここでは朴の言説がもっている危険性について警鐘を鳴らしたい。

朴は「慰安婦」にされた朝鮮人および日本人女性が日本軍に協力した側面を強調しようとする。「帝国の慰安婦」というタイトルはこの意味で用いられている。

彼女たちにとって、軍人を支えることで〈愛国〉的行為につながる「慰安婦」という存在は、初めて自分の居場所を日なたに作ってもらえたことでもあったはずである（朴, 2014, p. 74）。

それ（＝〈疑似家族〉や〈銃後の女〉という役割、引用者注）はもちろん国家が勝手に与えた役割だったが、そのような精神的「慰安」者としての役割を、慰安婦たちはしっかり果たしてもいた（朴, 2014, p. 74）。

彼女たちは、自分たちに与えられていた「慰安」という役割に忠実だった。彼女たちの笑みは、売春婦としての笑みというより、兵士を慰安する役割に忠実な〈愛国娘〉の笑みだった（朴, 2014, p. 231）。

ここで描かれているのは、男性中心的「慰安婦」観であり、「慰安婦」問題をめぐってしばしば出される反応である。まさに「慰安婦」制度を作った者のねらいをそのまま忠実に写し取って擁護するイメージを形成しようとしている。その意味では新しいものではないが、ここで着目したいのは、これまで否定派が提示してきた「慰安婦」観との違いである。

1990年代以来、「慰安婦」否定派は、「慰安婦」問題の核心は強制連行の有

無にあるという前提を設定し、「慰安婦」は売春婦だったのだから強制連行は存在しなかった、そのため軍や政府に責任はないという論理を展開してきた(菊地, 2010)。現在でも否定派の多くは同じ論理に沿っている。そこでは往々にして、「金に汚い、ずるい年かさの売春婦が若く純真な日本兵を手玉に取る」イメージが流布されている。ここでの「慰安婦」は日本国家に対して忠誠心や愛国心をもたず、金銭など自分の利害のみ考えているものとして表象される。

しかし朴の「慰安婦」表象は、そのような売春婦イメージではなく、「より自発的に素朴に『戦争』『軍隊』『国家』に寄り添う女性」を提示している。いわば、前田(2015)も指摘しているように、「愛国の女」である。少女たちは貧困や家父長制の呪縛から逃れ、「居場所」を求めて自発的に「性を提供する仕事」に励んだと朴は語る。そこからは、悲惨な境遇の中から立ち上がり、「醜業」によって自由を得ようとする少女たちの姿が描き出される。被害女性を露骨におとしめる否定派の従来の「売春婦」表象に比べ、一見肯定的に見えるため、一部の知識人も賛同できる。だがあくまでも日本にとっての「愛国」であり、植民地主義の肯定につながるものであり、韓国内から大きな反発を受けるのも当然であろう。

本書を植民地主義批判のものとして位置づけている評があるが、本書は植民地主義を批判的思考の対象としてではなく、あくまで「仕方のなかったこと」として見なしている。また、「慰安婦」問題を「女性の人権の問題」ではなく、「植民地の問題」として見るべきだと主張しているので、フェミニズムの書と評するのも困難である。「女性の人権」と「植民地の問題」を切り離し、後者のみ考えようとするのはフェミニズムとはいえないだろう。

本論で注目したい問題は、このような「愛国の女」の表象が現代日本社会で要請されている女性イメージと重なっていて、そのためにその抑圧性が気づかれにくくなっているのではないかということである。関連する動きとして、ナショナリズム運動を取り上げよう。

4 ナショナリズム運動における「愛国女子」の誕生

近年のナショナリズムの運動の特徴として、女性の参加が目立つことがしば

しば指摘される。これは必ずしも実際に参加する女性の数が多いということではなく、女性の運動家が前面に立つようになっているということである。3つの例を紹介しよう。

まず、2011 年（ブログによる）に開始された「なでしこアクション 正しい歴史を次世代に繋ぐネットワーク Japanese Women for Justice and Peace」は、海外における慰安婦像設置に対する反対活動を始め「慰安婦」問題を「終わらせるために」、ネット上で活発に活動している。代表の山本優美子氏は外国特派員協会の会見で下記のように発言している。

女性の人権が非常に大事な私は私も同意します。それとは別に、私たちが今やろうとしていることは、正しい日本の歴史、正しい情報を世界の人に理解してもらおうとしています。ですから女性の人権の問題と、私たちのやりたいことはまた別になります。（BLOGOS, 2014）

「女性の人権の問題」の存在に賛同した上で、自らの主旨から切り離すのは前節の朴につながる論理である。

私は学者でもジャーナリストでもない、ごくごく普通の日本人女性です。ただ、慰安婦について、間違ったことが事実になって世界に広まっていることを非常に心配しています。私も慰安婦の女性が非常に辛い経験をした、そういうことには非常に同情します。ただ、間違った日本の歴史が世界に広まっていることに対して、声を上げたいと思いました。そして慰安婦の問題は、男性が言うよりも女性が声を上げたほうがいいと思いました。それが私のこの問題を始めた理由です。（BLOGOS, 2014）

ところがある日、私たちは、世間の人にとって保守層の男性が反論をしている光景は「過去にひどいことをされたおばあさんたちが、また男に虐められている…」と見えているということを知りました。このままでいけないと考えた私たちは「ならば同性である私たち女性が立ち上が

れば、そのような構図はできあがらないのではないか」と思い、団体を設立させました。(BLOGOS, 2013)

日本に対する誤解を糾すために、男性よりも女性が立ち上がった方がよいと考え、参加するようになったという説明がなされている。

次に、2009年（会則より）に設立された「日本女性の会そよ風」は「慰安婦」問題を含む政治的なテーマに取り組んでいる。サイトトップに下記のように記している。

マスコミの偏向報道、教育の場での自虐史観授業等に日本の危機を感じています。

もう男性達だけには任せておけない！

日本を護る為に私たち女性は立ち上がります。

先人達が命をかけて築きあげてきたこの素晴らしい国、日本を失わないために

今、私達が頑張らないといけないのではないのでしょうか。

語るだけでは何も変わらない、私達は行動します。

そよ風は日本を愛する女性の会です。(日本女性の会 そよ風, 2009)

なでしこアクションもそよ風とともに、署名活動の呼びかけなども行っているが活動はブログ等のインターネット上で活発に展開されている。

第3に、佐波優子著『女子と愛国』は「愛国活動に走る若い女性たち」にインタビューした書である。本書によれば、「古今、女性たちは国を愛してきた」が、「ブログを通じた嫌韓流の拡散」により、もともと「学校の歴史授業への疑問」をもっていたこともあり「女子」たちは「愛国」に目覚めた。

女性が家族を愛するようになるのと同じように、家族を護り育む基盤となる、国を愛するのだ。それは独身の時には気付かなかった感情に違いない。結婚と愛国は、女子の中では深く結びついているものなのである（佐波, 2013, p. 221）。

これらの言説は、「愛国女子」という参画型女性役割を提示していると解釈できる。「国家」という従来男性の領域とされていたマクロな世界に女性も「参画」していく、しかしあくまでもその参画の形は従来の女性役割から決して逸脱することなく、男性の活躍に対して補助的、代替的な効果をねらったものという範囲を守っている。

ナショナリズム運動に参加する女性の存在は、1930年代の女性活動家の戦争協力や一般女性の「挙国一致」愛国運動の歴史にあるようにこれが初めてではない。ただし、現在の動きには、より自発的主体的な特徴が見て取れる。

上記の言説では、男性に代わって「女性が自ら国家のために立ち上がる」ことが強調されている。そして、それが社会的に有効であるという自覚がもたれている。社会的な視線に対して戦略的に女性としての自己を演出していこうという主体性が見出せるのである。これは「参画型女性アイデンティティ」ともいえるものである。政治に関わるときの自己の「女性」「女子」というアイデンティティは自覚的に利用するが、そこでの政治の内容からは「女性の人權」のようなジェンダーに関わる問題はあらかじめ排除される。この参画型女性アイデンティティによって守られるのは「国家」の権威であり、国家のためにこそ「女子」の立場は価値をもっている。

ではこのような運動の特徴はより広範な社会的状況とどのように関連しているだろうか。

5 ポストフェミニズムと「愛国女子」

これまでジェンダー論では、1990年代後半頃からのフェミニズムに対するバックラッシュの担い手として、旧来の保守層の他に若年男性について論じられていた。日本社会で格差が拡大し、男性の一般的な既得権から周縁化された若年男性たちが閉塞感を国家の権威によって解消しようとする中で、保守的なジェンダー秩序の復権を求めるのがバックラッシュだと考えられた。彼らは自己の生活や社会への不満を、国家の権威に同一化することで払拭しようとしているという解釈である。

確かに、若者世代の保守化について中西（2013）が論じているように、中高年世代にはあまり認識されていないが、グローバルな国家間競争の中で日本

が下降していくことへの恐怖感を、その恐怖が事実にもとづいているかどうかは不明だとしても、若者世代は強く感じている。過去に日本は繁栄を終え、自らの世代の未来は韓国や中国に追い落とされ、衰退していく一方だと認識している。そのような閉塞感は暴力性を恒常化させ、捌け口を常に求めている。これは、小森が批評したような福沢の時代よりも、国家的「繁栄」の歴史が語られた後であるため、より大きな閉塞感だといえるかもしれない。

だが、バックラッシュの担い手は男性だと考えていると、女性たちが愛国運動の中で目立つという近年の変化は理解し難い。近年の女性あるいはジェンダーをめぐる変化は、ポストフェミニズムの議論を通して考えることができる。

ポストフェミニズム論は英米で蓄積のある議論で、イギリスのメディア研究者アンジェラ・マクロビーによれば、ポストフェミニズムはバックラッシュとは別の、反フェミニスト的感情によって特徴づけられる社会文化的状況を指している (Mcrobbie, 2009)。まず背景として、グローバル化とその結果の世界経済秩序の変化の中でイギリスやアメリカ合衆国の家父長制も再編された。資本主義の再構築のなかに女性が不可欠の労働力として位置づけられ直し、またそれ以上に女性、とくに少女が変化を示す象徴として称揚されるようになる。

ポストフェミニズム下のマスメディアで頻繁に用いられる少女のイメージは、従来の規範である「かわいらしさ」や「無垢さ」を中心的価値として保持するが、それらをより積極的に「能力」として使いこなす。ときに性的魅力すらも戦略的に発揮し、自らの欲望達成のために性的アイコンを演じることができる。

少女をとりまく男性社会にとっても、資本のために積極的に献身してくれる少女はありがたい存在である。男性中心社会の存在を隠蔽するアリバイとしても少女は機能する。少女のアリバイによって従来のフェミニズムは「過去の遺物」として葬られ、少女の表象はフェミニズム以上に多くの支持を得るため男性中心社会の再生産に貢献する。

バジェオンが論じるように、後期近代において理想的な主体は「フレキシブルで、個人化され、弾力的な、自己を駆動し、自己を作り出す者」だが、このような主体のあり方は若い女性たちにとくに要請されている (Budgeon,

2011)。自由と選択という新自由主義のボキャブラリーは「若い女性」というカテゴリーに結びつけられる。

このような英米のポストフェミニズム状況を日本に照らして考えてみよう。まず、日本社会でフェミニズムやジェンダーがどのように意識されているかといえば、男女共同参画政策や「女性の社会進出」言説による男女平等達成イメージにより「女性差別は解消した」という一般的イメージが広がっている。ジェンダーに関する差別の認識についてはもともと世代による違いが大きい。性差別が存在しているかどうかについては社会的に混乱している。

例えば中西は「フェミニズムという言葉が若年層にどうイメージされているか」というと、ジェンダー関係に潜む権力性や抑圧性に対する女性の告発は、男性女性の二分法を前提とした強者側の位置に了解されてしまっているのではないか（中西, 2013, p. 158）としている。つまり若い世代は、フェミニズムによる性差別に対する批判を、男女二分法を前提とした古い認識にもとづいた考えで、かつ強者、権力を持った者の言説だと感じているということである。性差別を批判する「フェミニスト」は、社会的に権力を持った強者だとイメージされがちである。これがフェミニズムへのネガティブなイメージを醸成している感覚である。

前節で見た佐波の著や、あるいはそもそものつくる会の主張によれば、国家への愛を否定する「自虐史観」を広めている拠点として学校教育が槍玉に挙げられるが、フェミニズムによる男女平等を求める言説は、学校教育と同様に、「個人のリアリティを否定する権威ある存在」として感受され、反発されていると考えられる。

そのように性差別とそれを批判するフェミニズムを過去のものとして認識する意識が広がっている一方で、「女子力」や「草食系男子」等の言葉が流行している。これは、一般的な認識とは逆に、ジェンダー規範が社会で根強く機能していることを証明しているのではないだろうか。菊地（2015）で論じたように、流行語のジェンダー化は、日本社会におけるポストフェミニズム状況を端的に表現しているように見える。

様々な社会現象を見渡してみると、「ビリギャル」の流行はポストフェミニズム論からみて象徴的である。『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて

『慶應大学に現役合格した話』は、少年ではなく少女によって演じられるからこそ新自由主義社会において正当化されるのだろう。学歴社会を勝ち残って社会的上昇を果たすのにふさわしい主役はもはや男子ではなく、女子なのである。

AKBグループは男性の人気を得る競争で頑張る少女の世界をそのまま視聴者に差し出し、安価な費用を払うファン全てに参加資格を認める最大級の参画型エンタティメントである。「少女性」を様々に演じてみせるメンバーからファンがそれぞれ嗜好にもとづいて選ぶことができ、少女たちは相互的な競争に邁進しながらもチームワークを保持する。少女たちは「卒業」によって入れ替わるため、この世界には終わりが無い。AKB総合プロデューサー秋元康が語るように、コアなファンの多くは男性であり（秋元 & 田原, 2013）、少女たちを応援する男性同士の強いネットワークが形成される。この世界は伝統的なジェンダー秩序を「少女の主体的参加」という免罪符によって社会に新たに浸透させる意味をもっている。そして、AKBグループが体現するような「女子っぽさ」「女子力」は年齢を問わず全ての女性にとって望ましい魅力としてマスメディアやマーケットによって喧伝されている。

このようなジェンダーをめぐる変化を批判しようとする時の難しさは、フェミニズム的論理との関係である。前述したように社会主流に広がる価値観としてはフェミニズムは古いものとして廃棄されかかっているが、例えば「女子力」のように女性のアイデンティティを前面に出すレトリックは、これまでのフェミニズムの方法に共通しているため混同されやすい。「女性」というアイデンティティに肯定的な意味をもたせて「女性の力」を再評価しようとしたのはフェミニズム自身なのであるから。そのため従来のフェミニズムの支持層も「女子力」現象の抑圧性を見極めにくい。そうするとこの新しい状況を批判する勢力が不在になってしまうのである。

また、1990年代以来広がった少子化という問題設定は、「人口減少」というマクロな現象を「国家の危機」と位置づけ、個々人の存在を、国家を構成する一要素と考える思考法を浸透させた。さらに2000年代から、結婚するための活動を意味する「婚活」という流行語が生まれ、企業だけでなく公共自治体もが事業化して支援するまでに発展した。それまでは一応個人の私的な領域にあると見なされていた結婚という行為が、公的機関によって後押しされてよい

「活動」と考えられるように変容した。国家や公的存在が個のセクシュアリティを明示的制度的組織的に管理することへの違和感のなさは、現在のジェンダー秩序の重要な特徴であろう。

以上のようなポストフェミニズム的ジェンダー秩序が展開する日本社会において「慰安婦」問題はどのような意味をもってくるだろうか。女子力は女性を競争させ、序列化していく概念であり、その競争は経済的社会的権力の獲得に向けられている。さらにその競争の意味づけが、国家という権力に方向付けられれば、それは容易にナショナリズムに転化する。国家秩序に従って輝くのが「新しい女子」の魅力であり、優等生となる。このような「女子力」の論理でいうと、声を上げた「慰安婦」被害者は、国家に「楯突く」違反者になってしまう。

逆に言えば、声を上げずに軍人に献身的に尽くした「慰安婦」を「愛国の女子」として語る歴史観は、この新しいジェンダー秩序のひとつの戦略として捉えられなければならないだろう。その意味で、「愛国の女子」表象の危険性がある。

新しいジェンダー秩序の中で「慰安婦」問題がこのまま消去されていってしまえば、性暴力被害者の尊厳より国家の権威のほうが重要なのだというメッセージを与えることになってしまうかもしれない。そのとき、国家は無謬の権力として感受され、女性から抵抗する自由は奪われてしまうだろう。

6 ネオリベラル・ジェンダー秩序を批判するフェミニズムへ

本論では、以上のような新しいジェンダー秩序を「ネオリベラル・ジェンダー秩序」と名付けたい。ネオリベラル・ジェンダー秩序とは、ポストフェミニズム的な社会状況の下で旧来のジェンダー秩序を軸にしながら、ネオリベリズムに適合的に再編されたジェンダー秩序である。

女性は若さと美しさが以前にもまして至上の価値となり、旧来の家事労働に加えて労働市場においても輝くことを求められ、競争の中におかれる。男性はバックラッシュの担い手となるような下層に加え、細谷（2006）が指摘する階層の高い男性性が形成され、男性集団内で差異化されていくだろう。細谷によれば、近年、新自由主義や個人主義に共鳴する都市部の中間層が保守層と連

動してきている。実は彼らもバックラッシュの担い手であったが、フェミニズムは見落としてきたと細谷は批判する。社会的地位や経済力のある層の男性がネオリベラル・ジェンダー秩序を積極的に展開していく可能性がある。ネオリベラル・ジェンダー秩序は女性性と男性性の意味合いをこれまでの内容を維持しながら変えていくため、その変容を見極めていくのが重要である。

2000年代以降の新しい社会運動は、旧来の「左翼」運動の歴史から自らを差異化する特徴がある。そこでは「左翼」的な論理や方法論は否定され、「終了」が宣告され、代わりに「普通のひと」のもつ「主流の価値観」がよいとされる。そのなかでフェミニズムも忌避されがちである。そのような傾向はナショナリズム運動における「左翼」やフェミニズム・バッシングと共通しており、フェミニズムに対する風当たりは厳しい。ネオリベラル・ジェンダー秩序はこのような近年の運動の変化にも支えられている。

このようななかでの「愛国女子」の表象は「慰安婦」問題をより混迷させ、記憶の消失と改ざんを促進する。「慰安婦」の表象が、従来の「金のために兵をだます売春婦」イメージから、「愛国の慰安婦」へと変質し、しかも「慰安婦」を否定する女性自身が「愛国女子」を名乗るという複雑な構図を呈している。「少女」のポジションをめぐる意味づけの争いが起きているかのようである。

本論で概観したこういった新たな状況をフェミニズムは批判できているだろうか。これまで、日本のフェミニズムが「慰安婦」問題の解決のために十分に役割を果たしてきたとはいえない。そこには従来から指摘されている学問と運動の距離の遠さも関わっているだろう。「慰安婦」問題は国家が加害者となった性暴力であるが、フェミニズムにおいて「国家」は十分批判的に検討されてこなかった。

1990年代後半から2000年代にかけてのバックラッシュに対抗する動きを振り返ると、最も攻撃されていたのが日本軍「慰安婦」被害女性だったにもかかわらず、フェミニズム側からは「ジェンダーフリー・バッシング」として対抗された。「ジェンダーフリー」概念が攻撃されていたことに対して反論する必要はあったものの、同時に「慰安婦」バッシングに対しても同等の力が傾注されればよりよかつただろう。

フェミニズムの限界が意識されるのは日本だけではない。ナンシー・フレイザー（2009=2011）は、第2波フェミニズムの軌跡を、現在のネオリベリズムの時代状況に照らして考察している。1960年代に生まれた第2波フェミニズムは、「国家により組織された資本主義」の男性中心主義への批判として出現した。それはその段階では一定の意義をもったが、資本主義の構造変化によりネオリベリズムの時代へ移行すると、フェミニズムは換骨奪胎されてしまったのではないかと問う。

第2波フェミニズムによって始まった文化的変化は、それ自体は有益なものだとしても、公正な社会のフェミニスト版と真っ向から対立する、資本主義社会の構造的変化を正当化するのに一役かったというものである（Fraser, 2009=2011, p. 29）。

フレイザーは、第2波フェミニズムの様々な手法をネオリベリズムが流用し、道具としたというのである。例えばフェミニズムは、家族賃金という考え方が男性を稼ぎ手で女性を主婦とする家族モデルにもとづいていることを批判した。だがその批判はネオリベリズムによって女性を安価な労働力として、男性稼ぎ手モデルからふたり稼ぎ手モデルへと代替させることへ還元された。フェミニズムの下地の一つだった女性の社会参加の意欲は、ネオリベリズム下で資本蓄積のための動力として利用されたのである。

フレイザーの反省が正しいとすれば、ネオリベラル・ジェンダー秩序に対して抵抗するためにはフェミニズムは根本的に変革されなければならない。日本におけるネオリベリズム的社会変化は英米と比較してより伝統的な要素を保持して展開されるため、フェミニズムが英米以上に否定的に意味付けされる。日本のフェミニズムは伝統的保守勢力とネオリベラルな個人主義勢力との双方から攻撃されるという難しい局面におかれている。

このような危機的状況の中でフェミニズムを現実的批判勢力としてどのように構想できるだろうか。

本論は、「慰安婦」問題はフェミニズムにとって最大の課題のひとつであるという視点に立ち戻ることを提唱したい。「慰安婦」問題は国家、民族、階級

等々の複雑な権力配置を踏まえなければ解決できない、困難な課題である。だがだからこそ、その解決を目標と設定すること自体に意味があるといえるのではないだろうか。

「慰安婦」問題に十分取り組みなかったフェミニズムの問題と、フレイザーの批判のようにフェミニズムがネオリベラリズムに換骨奪胎された問題は遠いところで関連しているように見える。それは新自由主義や植民地主義という概念で問題化される資本と国家の絡まった権力構造をフェミニズムが批判的に見据えることができていないということを示している。

現在、ネオリベラリズムが進展して、資本の暴力性が強化されるにつれて国家の権威に依存しようという層や国家に希望を見出す言説が増殖している。「慰安婦＝売春婦」表象は、そのように資本の抑圧からの救済を国家に見出そうという心性からも立ち上がっているだろう。

このようななか「愛国女子」の表象は強力に機能し得る。「愛国女子」の表象に対して抵抗していくことはネオリベラル・ジェンダー秩序の増進を止めることにつながるだろう。フェミニズムに可能なことは、「愛国女子」に代表されるネオリベラル・ジェンダー秩序の抑圧性に気づき、批判的想像力を蓄えうる空間を開くことである。ジェンダー秩序に違和感のある層に向けて、抵抗や批判の言語を創造し続けていく必要があるだろう。そのためには、従来のフェミニズムの視座を更新して、「女子」を称揚するネオリベラル・ジェンダー秩序と見紛うアイデンティティ・ポリティクスとは違う方法を見出すことが求められる。

新自由主義が破壊した最大のものは社会的連帯への希望的感性・価値観である。効率や利潤、競争とは違う理念を言語化できない無力感が広がっている。社会的連帯へと向かうべき意識がナショナリズムへと引き寄せられているのである。フェミニズムが分離主義的方法を越えて、広い範囲での社会的連帯を見据えていく過程に、国家による女性の間、さらには女性とそれ以外の間の分断から回復することが可能になるだろう。

Footnotes

- ¹ 「上からのレイシズム」について森（2014）参照。

References

- 秋元康 & 田原総一朗. (2013). 『AKB48の戦略!』. 東京: アスコム.
- 菊地夏野. (2010). 『ポストコロニアリズムとジェンダー』. 東京: 青弓社.
- 菊地夏野. (2013). 「大阪・脱原発女子デモからみる日本社会の(ポスト)フェミニズム——ストリートとアンダーグラウンドの政治」. In ひろしま女性学研究所 (Ed.). 『言葉が生まれる、言葉を生む』. 広島: ひろしま女性学研究所.
- 菊地夏野. (2015). 「ポストフェミニズムと日本社会」. In 越智博美 & 河野真太郎 (Eds.). 『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」』. 東京: 彩流社.
- 菊地夏野. (2016). 「「女子力」とポストフェミニズム——大学生の「女子力」使用実態アンケート調査から」. 『人間文化研究』. 25.
- 小森陽一. (2001). 『ポストコロニアル』. 東京: 岩波書店.
- 佐波優子. (2013). 『女子と愛国』. 東京: 祥伝社.
- 坪田信貴. (2013). 『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に合格した話』. 東京: KADOKAWA.
- 中西新太郎. (2013). 「なぜ多くの若者は『慰安婦』問題を縁遠く感じるのか」. 「戦争と女性への暴力」. In リサーチ・アクションセンター (Ed.). 『「慰安婦」バックシニングを越えて』. 東京: 大月書店.
- 日本女性の会 そよ風. (2009). 日本女性の会 そよ風 トップ,
Retrieved from <http://www.soyokaze2009.com/index.php> (2015, August 24 最終閲覧)
- 朴裕河. (2014). 『帝国の慰安婦』. 東京: 朝日新聞出版.
- 藤岡信勝. (1996). 『汚辱の近現代史』. 東京: 徳間書店.
- 細谷実. (2006). 「フェミニズム、バックラッシュ、個人主義 シンポジウム 女性学のこれまで・これから——新自由主義にどう対峙するか」. 『あごら』, 306号, BOC出版部.
- 前田朗. (2015). 「植民地解放闘争を矮小化する戦略」. 『社会評論』. 第180号.
- 森千香子. (2014). 「ヘイト・スピーチとレイシズムの関係性」. In 金尚均 (Ed.). 『ヘイト・スピーチの法的研究』. 京都: 法律文化社.
- BLOGOS編集部. (2013, October 21). 「慰安婦=性奴隷」のウソに終止符を! ~までしこアクション代表山本優美子インタビュー.
Retrieved from <http://blogs.com/article/71922/>

- BLOGOS編集部. (2014, July 9). "従軍慰安婦" は "性奴隷" ではない～なでこアクション・山本優美子氏が会見. Retrieved from <http://blogos.com/article/90160/>
- VAWW-NETジャパン (Ed.). (2005). 『NHK番組改変と政治介入——女性国際戦犯法廷をめぐって何が起きたか』. 横浜：世織書房.
- Budgeon, S. (2011). The Contradictions of Successful Femininity. In Rosalind Gill & Christina Sharff. (Eds.). *New Femininities*. London: Palgrave Macmillan.
- Fraser, N. (2011). 「フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ」. (関口すみ子, Trans.). In 『法学志林』. 第 109 巻, 第 1 号. = (Original work published 2009).
Feminism, Capitalism and the Cunning of History. *New Left Review*, 2: 56, March / April.
- McRobbie, A. (2009). *The aftermath of feminism*. London: SAGE.

「留学制度」と妊娠・出産 —— 事例の考察から ——

国際基督教大学 高松香奈

1 はじめに：留学生の妊娠と出産

近年、日本国内では留学生の受け入れに積極的な動きがあるが、「グローバル化」や「国際化」などが強調される施策に対し、疑問や物足りなさを感じる。実際に留学生を受け入れていると、「学び」という側面だけでなく、人の生活そのものを受け入れ、様々なサポートが必要であることを痛感させられる。特に、病気、妊娠や出産などは、留学生の多様な年齢層や文化的背景から当然想定されることであり、長期間日本に滞在する留学生が安心して生活できる環境づくりは多岐にわたるのだ。

本稿の目的は、実際にあった留学生の妊娠・出産という事例から、「留学制度」に内在する意識が、妊娠・出産する人を排除するプロセスを考察することである。

ここでいう「留学制度」とは、規範化されていることを意味する。それは、奨学金提供機関や留学生受入機関（高等教育機関、主に大学）がつくりあげた規範を留学生に（一方的に）求め、その規範を前提に運営される奨学金制度や大学環境を示す用語として使用する。奨学金を受けて留学する学生の妊娠・出産は、幾重にも重なる排除の構造が内在する。

まず本稿の導入として留学生をめぐる現状について簡単に確認することから始めたい（2節）。そして、実際の事例を提示し（3節）、妊娠・出産する「身体」と奨学金との間の力関係を考察する（4節）、そして「留学生制度」の一つとして機能する大学の環境について検討していく（5節）。本稿の問題提起が、真の意味での“包括的”な体制整備に繋がれば良いという期待を持っている。

2 「グローバル戦略」としての留学生受入

日本政府は、2008年に「留学生受入れ30万人計画」を打ち出した。この計画は2020年を目途に、留学生30万人受け入れを目指すものであり、その目的は経済成長戦略の一つとして位置付けられている。当時首相を務めた福田総理

が施政方針演説において、「経済成長戦略の実行」の一つとして、「開かれた日本」を作るための「グローバル戦略」の展開として留学生の受け入れについて言及している通りである。しかしなぜ、留学生を増やすことが、経済成長戦略なのか。具体的に演説の内容は、対日投資の倍増計画等の経済政策に言及する中で、産学官が連携することにより、日本の大学院や企業において「海外の優秀な人材」の受け入れを拡大し、経済成長に貢献していくことを目指している（第169回国会における福田内閣総理大臣施政方針演説）¹。すなわち、この施策における留学生とは「海外の優秀な人材」であり、それは「日本の経済に貢献する／その可能性のある」人が浮かび上がってくる。その背景にはもちろん、人口減少化社会が直面する労働力不足への対応という目的が見える。

この計画を受け、現在のところ留学生の数はどう変化しているだろうか。独立行政法人日本学生支援機構は「外国人留学生在籍状況調査」をしている²。2014年3月に出された「平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果」（独立行政法人日本学生支援機構，2014）が示す留学生の推移をみると、留学生総数は2011年以降減少傾向にあるものの、例えば10年前と比較すると109,508人（2003年）から135,519（2013年）と増加している。一方で、演説があった2008年以降、留学生の顕著な増加は見られてはおらず、また日本政府が奨学金を提供する国費留学生も顕著な増加は見られず、数字としてのインパクトは今の段階では明らかではない。他方、この計画は留学生の受け入れ側である大学には「環境づくり」という意味で、ある一定のインパクトをもたらしていると言える。

2008年に文部科学省とその他5つの関係省庁で策定された「留学生30万人計画骨子」では、「3. 大学等のグローバル化の推進 ～魅力ある大学づくり～」に言及があり、例をあげると、国際化の拠点となる大学の選定が実現され、国際的な教育研究拠点づくりを推進しているのだ（文部科学省他，2008）。文部科学省がこれまでに実施してきた「国際化拠点整備事業（大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業）」（通称、グローバル30）や、実施している「スーパーグローバル大学創成支援」などが知られているが、これらの事業が採択された大学は特に「国際化の拠点」としての包括的な体制整備が目指されている。

では、包括的な体制整備として、受入大学にはどのような環境づくりが求められているのか。同骨子には、「4. 受入れ環境づくり ～安心して勉学に専念できる環境への取組～」も示されており、以下抜粋すると、次の点について言及がされている。

- ①大学等が各関係機関と連携し、短期留学を含め渡日後1年以内の留学生に宿舎を提供できるよう、大学の宿舎整備、民間宿舎確保の円滑化、公的宿舎の効率的活用等の多様な方策を推進。
- ②国費外国人留学生制度、私費留学生学習奨励費については、その改善を図りつつ活用。
- ③地域・企業等のコンソーシアムによる交流を支援することや、関係者が一堂に会する場として、全国レベルの交流推進会議を創設。
- ④留学生が留学後困らないよう、日本語教育機関・大学等の日本語教育担当部署をはじめとした国内の日本語教育の充実。
- ⑤カウンセリングなど留学生や家族への生活支援の取組を促進。

(文部科学省他, 2008, p. 3)

上記⑤に指摘されているように、環境づくりには生活支援なども含まれるが、生活者としての留学生の個々の状況に対応できているのだろうか。留学生の個々の状況の例として、次節では事例を考察していく。

3 実際の事例から

ここでは、特定の奨学金や大学の問題を明らかにするのではなく、実際の事例の考察を通し、「留学制度」が結果として一部の身体を周縁化するプロセスを明らかにすることを目的としているので、具体的な名前を示すことを控えた。また留学生本人に了解の取れた事実に限定し述べていくこととしたい。

3.1 事例

A国から日本の「政府系奨学金」を利用して日本の大学に留学したBさん。2年間の修士課程に在籍していた。当初単身で留学をしていたが、奨学金で認められている手続きを経て、パートナーが訪日し一緒に生活をしていた。2年

生になる直前、妊娠していることがわかり、修士課程修了の約3か月前に出産した。

妊娠してから帰国まで、奨学金の様々なルールにより感じる疎外と奨学金運営団体からのプレッシャーを感じるようになった。本人への聞き取りの結果、本人が直面した問題は以下の通り。

- 1) 留学生は生活面や学業面などについて運営団体との面談が定期的に持たれているが、そこで出産に関しての団体からのサポートは一切なく、修士課程修了が遅れることは何があっても認められない旨伝えられる。
- 2) 授乳期の子どもを連れての帰国や帰国前に予定されているイベント（関連機関等へのあいさつ）であるが、パートナーが日本に滞在中なので当初安心していた。しかし、奨学金のルールによると、パートナーおよび家族（この場合授乳期の子ども）は、留学生本人よりも先に日本を出国する必要がある、残留は認められないという事が明らかになった。
- 3) 上記②については、子どもの健康や福祉にかかわる問題なので、留学生の指導教員と運営団体間での話し合いに発展することになる。指導教員によると、基本的に、ルールは曲げられなかった。また、話し合いの際に明確になった点としては、留学生の妊娠は想定していないこと、また歓迎していないということ。また運営団体の中で、日本で子どもを産む留学生が増加する懸念（一部の大学では留学中は出産しないよう明確に伝えている大学もあるとのこと）、受入大学にとって負担であること、そして出産に関わる留学生が受ける市町村等からの支援（出産一時金など）についても問題ではないかというような趣旨の内容が伝えられた。留学期間の延長や特別な措置について、病気の場合も同様の扱いかという指導教員の質問に対し、これまで修了を遅らせるほどの前例がないが、病気の場合などは仕方がない場合もあるという担当者レベルの見解が示された。
- 4) Bさんによると、大学の担当者（本奨学金担当部署の担当者）は、留学生の出産について親切に対応してくれた。しかし、奨学金団体と学生との板挟みになったことも事実であり、大学が制度として留学生の妊娠を支援するというではなかった。妊娠・出産にかかわるあらゆる対応は、大学の奨学金担当者と指導教員の個人の裁量で対応しているということで

ある。

- 5) Bさんの学ぶ大学は、子育て環境が整っておらず、子どもを一時的に預ける施設もなかった。また、市町村の子育て支援についても、言葉の問題がありどのようなサービスがあるのか把握できず、また保育などは子どもの年齢等から保育施設利用の対象ではなかった。
- 6) Bさんによると、Bさんが留学中に妊娠・出産をしたことについて、Bさんの職場（A国政府）では全く問題になっていない。帰国後、復職するまでに育休期間が付与され、帰国後すぐに仕事復帰をしなくても問題はなかった。また当然のことながら、育児休業を取ることで不利な処遇をうけることもなかった。

3.2 事例の奨学金について

ここで、留学生の受けた奨学金がどのようなものであったのかについて確認をしておきたい。

この奨学金は、日本政府が対象国の「中堅レベル」の公務員を日本の大学に2年間招聘し、修士号を取得させ、将来的に帰国した留学生が国の発展や2国間（対象国と日本政府）の橋渡しになることを目的とした奨学金である。

この奨学金の対象国に準備された『応募ガイドライン』を見ると、出産については次のような言及がされている。例えば、妊娠・出産にかかる費用について注意書きが示されており、通常検診では合計約US\$1,000、出産費用は約US\$6,000が必要となり、これらの費用は健康保険ではカバーされず、留学生本人が負担すること。また、通常の分娩では約US\$5,000を留学生本人が事前に支払う必要があること。分娩に問題があった場合手術や特別な対応が必要となるが、それらの金額はかなり高額であることが言及されている。また、追記として、この奨学金は2年で終わらせることが必須条件であり、これに影響を与えるいかなるイベントやリスクを回避する必要があると記載されている。もし渡航前にこれらのイベントやリスクが明らかになった場合、奨学金は取り消されるとされている。

また、他の対象国で配布された資料には、申請者の要件の注記として、妊娠中の者はこの奨学金には応募できず、また選考プロセス中や最終結果報告の後

に妊娠した応募者は奨学金の対象から外れることが記されている。

以上のように、本奨学金は中堅公務員（すなわち多くの対象者が20代後半から30代）を対象としているのもかわらず、応募前・応募中・応募後、そして留学中のすべてにおいて、妊娠・出産を歓迎していない姿勢が明確といえる。

以上、奨学金の考察から、留学生の妊娠・出産は想定されていないことであり、そのような選択をしてはいけないというプレッシャーも見えてきた。また受入側である大学にとっても想定されていないことであり負担であるという奨学金提供機関の「配慮」が示された。妊娠・出産する「身体」が排除されることについては4節で、そして受入大学の環境については5節で考察していきたい。

4 妊娠・出産する「身体」と奨学金留学生

本稿の取り上げたケースで、この留学生の「不快な経験」を作り出したものとは何だったのか。妊娠・出産する「身体」がどう扱われたのか考察していきたい。

これまで、妊娠・出産する「身体」について労働の場では様々な調査研究がおこなわれてきた。例えば、日本労働組合総連合会（連合）は、「働く女性の妊娠に関する調査」の結果として、妊娠期間中に妊娠・出産やそれに伴う体調不良により不利益な取り扱いや嫌がらせを経験していない人が多数であるものの、そのような経験をした人は20.9%にのぼると公表している（日本労働組合総連合会, 2015）。また、同調査では妊娠中の働きかたと、流産や早産などの関係性についても調査をしているが労働時間が9時間以上と答えた人で、が早産経験で24.6%、流産経験で20%であり、出産まで順調であった人の13.3%と比較し高くなっている（日本労働組合総連合会, 2015）。この連合の調査から、妊娠・出産と就業の継続という点をみると、精神的負担・身体的負担を感じながら働いているという課題が読み取れる。このように労働の場における妊娠・出産は、当事者（妊娠するもの、出産するもの）が、自分で何とか調整すべき問題であり、「労働者」とは何があってもこれまで通り就業するものという前提が見えてくる。杉浦は妊娠期にある働く女性に焦点を当てた研究

で、労働領域における「身体」が「産む性としての身体的負担がない」「男性の身体」とされている事を指摘した上で、「産む身体」が意志／選択の問題とされ、その結果として妊娠期の困難を訴え難い状況が生まれ、様々な圧力が働き続ける妊娠期の女性に向けられると述べている（杉浦, 2009, p. 196, pp. 200-201）。

労働領域における議論と比較すると、高等教育の場における「妊娠・出産する身体」の問題はクローズアップされてこなかった。その理由の一つに、「妊娠・出産しない学生」像や、労働の場と比較し、自由に時間をマネジメントできる学生像や、拘束されるものが少ない学生像というイメージが浸透しているからではないだろうか。しかし実際には、本稿が焦点を当てる「奨学金の支払いを受ける身分」となると、労働の場と同様に、個人の意志や選択の問題と解釈され、様々なサポートを要求することさえ困難な状況に追いこまれてしまう。奨学金を受ける学生と妊娠をめぐる問題は実に複雑である。事例に関しては、既述の杉浦の言及を留学生に適応するならば、奨学金制度が想定する「学生」とは、「産む性としての身体的負担がない」「男性の身体」のことに他ならないのであろう。

奨学金を受ける学生の妊娠については、これまでに問題となったケースがある。例えば、米国ではスポーツ奨学金を受けていた学生が妊娠をしたことによって奨学金が打ち切りになった問題に関心が集まった。この件について専門家は、大学が妊娠を「選択の問題」だと捉えていることや、このような措置が法的にも問題となるのではないかという指摘をしている（Hiestand, 2007）。このように妊娠・出産を「選択の問題」と捉える意識に指摘があるが、本稿の事例においても、この意識は奨学金提供機関に深く内在化された問題といえる。

以上のように、特に奨学金を受けて学ぶ学生にとって、妊娠・出産はしてはいけない選択と捉えられているのである。自分の身体にいかなる変化があったとしても、それが「選択」として捉えられる以上、奨学金提供側の持つ規範に従い続けなくてはならないのだ。事例では、奨学金提供側から理解やサポートを得られなかったのだが、それは留学生がした個人の選択であり、個人で調整しなくてはならない課題として扱われた。「選択」ではない病気に対して、「病

気の場合などは仕方がない場合もある」という担当者レベルの見解は、妊娠・出産が「選択」であるという意識を如実に示している。

5 奨学金に内在する意識を下支えする大学の環境

本稿が取り上げた事例では、大学担当者も指導教員も、学生の妊娠・出産についてはサポートを「個人的」に行い、留学生本人としてはこの点に関しては問題を感じていなかった。しかし、この「個人的」な対応が奨学金に内在する意識の問題を不可視化させるという形で下支えし、また学生の妊娠・出産が大学環境の中で想定されていなかったという事実を示していると言える。ではなぜ想定することができないのか。この点を考える上で、いくつかのデータを参照していきたい。

まず確認したいのは、出産年齢である。出産はあらゆる年齢で想定されるが、傾向を把握する上で確認する。また、留学生の受け入れに際しては、様々な国からの学生が想定されるが、ここでは比較データが揃うOECDを参考に考察したい。OECD Family Databaseを調べると、OECD諸国において最初の子どもを産む女性の年齢は30歳付近が多く、具体的には、チリ、メキシコ、トルコ、アメリカ合衆国の4か国の平均は28歳かそれ以下、カナダ、チェコ、エストニア、ハンガリー、ニュージーランド、ポーランド、スロバキア、UKでは28歳～30歳で、残りの22か国の平均は30歳に達し、日本、アイルランド、スウェーデンなどは31.5歳、スペインでは31.6歳となっている（OECD, 2014a）。

この出産年齢の傾向と大学の関係を考察するために、大学生の年齢にも着目をしておきたい。入学者の年齢については、例えばアイスランド、ニュージーランド、スウェーデンでは入学者平均年齢が25歳またはそれ以上であり、OECD諸国とG20諸国の平均は22歳としている。しかし日本を含む、ベルギーやインドネシアについては例外であり、大学入学者の平均年齢は19歳またはそれ以下という特徴がある。このように、日本においては、出産年齢と学部レベルの大学入学者の平均年齢には開きがある。日本の大学において、妊娠・出産や子育てを想定せずに環境整備をしてきた背景にはこのような点があったことが推測できる。しかし、「グローバル化」や「国際化」を目指す現在、学生

の妊娠・出産や子育ての役割について無視することはできない。日本を含め例外の国はあるものの、OECD 諸国や G20 の傾向としては、学生の年齢層の上昇が指摘され、大学は「年齢の上昇」という意味で多様化しているのである。2013 年 6 月に OECD が公表した "Education Indicator in Focus" では、高等教育に入学する学生について考察し、大学入学者の多様化に言及している。その背景には、大学教育へのアクセスが拡大したことに加え、大学志願者の国際化と年齢層の上昇傾向を指摘している (OECD, 2013)。つまり、近年の大学の多様化とは学生の国際化と年齢の上昇化を意味しているのだ。

さらに、国により大学のシステムが異なるので、単純に比較するのが難しい点も指摘できるが、OECD の公表したデータによると、学部レベルの卒業生の OECD 平均は 26 歳で、修士レベルの修了生の OECD 平均は 31 歳となっている (OECD, 2014b, p. 81)。尚、日本の年齢のデータは示されていないため、OECD 平均には含まれていない。しかし、既に多くの大学院において学生の年齢は幅広く、社会人入学制度を導入している大学院も少なくない。さらには OECD のデータが示したように学生の年齢が上昇しており、特に「グローバル化」「国際化」を目指すのであれば、学生の妊娠・出産や子育てについて大学が想定し、環境整備を整えていくことが当然求められてくる。本報告の事例において、奨学金提供機関が受入大学に「配慮」をするかたちで妊娠・出産する「身体」を排除している側面があったことが明らかとなったが、もし受入大学が学生の妊娠・出産を想定し、また子育ての環境を整えていたとしたら、奨学金提供機関の対応もより柔軟なものとなったであろう。

6 まとめ：大学には何が求められているのか

本稿では、実際にあった留学生の妊娠・出産という事例から、「留学制度」に内在する力関係が、妊娠・出産する人（想定される人）を排除するプロセスを考察してきた。考察から明らかになったのは、奨学金が想定する「学生」とは、「産む性としての身体的負担がない」「男性の身体」のことに他ならないということ。奨学金提供団体が受入機関である大学に学生の妊娠・出産という「負担」をかけないという「配慮」をするということは、裏返せば大学が学生の妊娠・出産、そして子育てを想定しておらず、これらに対応した環境整備が

できていないということ。しかし、諸外国の大学入学者の動向や、大学院への入学者について考察すると、そもそも想定できていないことが不自然であり、「グローバル化」や「国際化」をめざし教育環境を整備する上で、妊娠・出産、そして子育てをする学生へのサポートは見落とすことができない点なのである。奨学金と同様に大学も「学生」とは、「産む性としての身体的負担がない」「男性の身体」を前提にしており、これをいかに変革していくかが真に「グローバル化」や「国際化」を目指す上で鍵となっている。

Footnotes

- ¹ 演説の内容については、首相官邸ウェブサイト参照。「第 169 回国会における福田内閣総理大臣施政方針演説」（最終アクセス 2014/10/28）

Retrieved from <http://www.kantei.go.jp/jp/hukudaspeech/2008/01/18housin.html>

- ² 在籍状況調査の対象は、日本の大学（短期大学含む）・大学院・高等専門学校・専修学校（専門課程）に加え、大学入学のための準備教育課程を設置する教育施設となっている。

References

国際化拠点整備事業（グローバル30）推進事務局「グローバル30とは？」.（最終アクセス 2015/6/22）.

Retrieved from <https://www.uni.international.mext.go.jp/ja-JP/>

杉浦浩美.（2009）.『働く女性とマタニティ・ハラスメント』. 256. 東京：大月書店.

独立行政法人日本学生支援機構.（2014）.「平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果」.（最終アクセス 2014/11/9）.

Retrieved from http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data13_brief.pdf

日本労働組合総連合会.（2015）.「働く女性の妊娠に関する調査（2015年2月23日）」.（最終アクセス 2015/8/17）.

Retrieved from <http://www.jtuc-rengo.or.jp/news/chousa/>

文部科学省.（2008）.「「留学生30万人計画」骨子」.（最終アクセス 2014/11/9）.

Retrieved from <http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>

Hiestand, Michael.（2007, May 11, Friday）. ESPN looks at athletes who must choose pregnancy or a scholarship. USA TODAY. Pg. 3C.

OECD.（2013）. Education Indicator in Focus.（最終アクセス 2015/2/23）.

Retrieved from https://www.google.co.jp/?gws_rd=ssl#q=education+indicators+in+focus+2013

OECD.（2014a）. SF2.3: Age of mothers at childbirth.（最終アクセス 2015/2/23）.

Retrieved from <http://www.oecd.org/social/family/database.htm>

OECD.（2014b）. Education at a Glance 2014.（最終アクセス 2015/2/23）.

Retrieved from <http://www.oecd.org/edu/Education-at-a-Glance-2014.pdf>

宗教的マイノリティとしての留学生と大学の環境 名古屋大学 国際教育交流センター 田中京子

1 はじめに

日本の大学における留学生数の増加に伴って、宗教を持つ学生たちの存在が顕在化してきた。大学はこれまで留学生に対する日本語教育や生活支援、カリキュラムや単位制度の国際化、教職員の国際化などを推進してきたが、学生たちが持つ文化、宗教やそれにまつわる制度や環境についてはまだ十分に検討がなされていない。特に宗教は個人の領域に属すると一般的に考えられており公の場では語られない傾向があるとともに、国立大学では、日本国憲法が掲げる政教分離の原則によって、宗教の問題については教育現場で公に取り上げることがないという傾向があった。

しかし現在、日本政府は留学生数をさらに増やす方針を掲げており、¹ 大学生の文化的宗教的多様性はさらに豊かになると予想される。様々な制度や環境を整備する中で、学生たちが持つ宗教の多様性への配慮は欠かせない。

本稿では、大学の中での宗教的マイノリティとしての留学生の立場を明らかにし、日本の大学がこれまで進めてきた留学生受け入れ制度における彼らの位置の変遷を概観し、今後大学が、構成員たちの文化的宗教的多様性を尊重できる環境を整備していくためにできることを検討する。

* 日本の私立大学においては、それぞれの大学が文化や宗教に関する方針を持ち、独自の制度や環境を整えているところが多い。そこで本稿で「大学」という時には、国の政策がより濃く反映される国立大学を主に指すことにする。特に筆者が 1991 年から勤務している名古屋大学（国立大学）で経験した事例を紹介しながら論を進める。

2 宗教的マイノリティとしての留学生の立場

日本では 1980 年代から特に、高等教育機関への外国人留学生の受入れが盛んになった。日本政府が「留学生受入れ 10 万人計画」を発表した 1983 年の時点で日本国内の高等教育機関に約 1 万人在籍していた留学生は、30 年以上を

経た現在 20 万人近くとなっている。² 留学生受入れは当初（1980 年代～1990 年代）、知的国際貢献と国家間友好促進をその主な目的としていたが、その後高等教育の国際化や 21 世紀には知的人材の活躍による日本社会の活性化がより重要視されてきている。³ また従前は、「留学生は帰国する短期滞在者」であるという考え方が一般的にあったが、⁴ 現在では留学生が留学後も日本に留まって日本社会で活躍することが期待されている。⁵ 留学生に日本社会への適応だけを求めるのではなく、日本社会も、留学生たちの個性や文化が活かされ、多様な人々が共生できるような社会に変化することが大切である、という意識が高まっている。

留学生の増加に伴って、日本に住む多くの人々とは異なる容姿や外見の学生たちが、大学構内でより多く見られるようになった。例えば、帽子を被り長い髭を蓄えている体格の大きい男性たちや、頭をベールで覆い暑い日も長い裾や袖の服を着る女性たち、逆に首や腕、脚の大部分を露出している学生たちなど、これまでの伝統的日本人学生にはあまり見られなかったような様相の学生たちが現れ、また肌や目の色など身体的特徴も様々で、ここ数十年で日本の大学の風景は大きく変わった。学内のあちこちで、礼拝する学生たちの姿が見られ、礼拝室や低い洗い場を設ける大学、またイスラーム教徒たちが食することができる「ハラール食」を提供する大学も出てきた。⁶ 近年では、ベジタリアン食を導入している国立大学もある。⁷ 留学生の存在は、文化や宗教の多様性を顕在化し、大学の環境を変えるきっかけを与えたと言える。

「顕在化のきっかけ」と言うのは、実際には留学生の姿が大学に見られるようになる以前から宗教的マイノリティーは存在していたからである。例えば、日本人の人口の約 1% がキリスト教徒だとすると、⁸ 名古屋大学の学生約 1 万 6 千人のうち 160 人ぐらい、少なく見積もっても 100 名ぐらいがキリスト教徒である可能性がある。日本人イスラーム教徒もいるし、その他様々な宗教を信仰している学生たちがいるであろう。しかし彼らは多くの場合、集団の益が大切にされ人々の調和が良とされる傾向の強い日本の組織文化の中では、⁹ 個人の宗教について明言したり主張したりすることはあまりなく、宗教的マイノリティーとしての存在が顕在化し難い。国立大学の場合は特に、特定の宗教の信仰または布教を目的とした学生組織は公式に認可されていないのが一般的で、

名古屋大学の「文化系サークル連盟」にもそのような目的を持った学生組織は加盟していない。¹⁰

従来顕在化しにくかった宗教的マイノリティーが、留学生たちの存在によって目に見え、意識されるようになったと考えられる。

3 大学の制度や環境の変化と宗教的マイノリティーとしての留学生

3.1 留学生としての枠組化・周辺化：Categorization and Marginalization

前述のように、1980年代からの留学生受け入れ促進政策の中で、留学生はいずれ帰国する人々だと捉えられていた。留学生たちが短期間で日本の生活に適応し、いかに勉強に専念できるかという問題について、各大学では留学生寮の建設や、留学生へのチューター制度導入、留学生専門教育教官の任用等、留学生向けの諸制度や設備の設置等によって解決をはかってきた。1990年以降国立大学に「留学生センター」が設置され始め、留学生の日本語教育や生活指導に特化した機関として、専門性を持つ教職員が配置された。過半数の国立大学に同様のセンターが設置されることで、「留学生」としての枠組が明確に作られ（categorization）、そこへの特別措置がとられるようになったのである。

この特別措置は、留学生の特性への配慮であり留学生本人の勉学や生活を支援することになったとともに、多様な文化に関しての意識や経験のある教職員が留学生センターに集まり、日々の職務を通して学生たちと共に、また同僚間で学び合い、多くの大学間で情報・意見交換をしつつ、¹¹ 多文化環境を整備することに繋がった。

一例として、2005年、名古屋大学に留学生センター棟が新築されるとき、設計の段階でトイレの数が話題になった。日本の公共施設で女性用トイレの前に長い列があり、男性用トイレはガラ空きという光景は見慣れたものであり、強い抗議の声はあまり聞かれない。女性は小さい頃から、早めにトイレに行き、休み時間はトイレに行くために使い、忍耐強く列に並ぶことを教育されてきており、その状況が当然視されているからであろう。それどころか、時間がなくてまたは我慢ができなくて男性用トイレに駆け込む女性は、揶揄の対象となる。公平な目で見れば、女性用トイレの個室数は男性用の何倍も必要なの

に、マイノリティーとしての女性の声は出しにくく、出しても取り上げられない、という状況がある。当センターではこの状況を少しでも是正するために、女性用トイレを3箇所、男性用トイレを2箇所に設置し、個室数を調整した。¹²

留学生センター設置は、宗教的マイノリティーに関する環境改善についても、前進の契機となった。宗教を拠り所として結成された学生組織が、彼らの課題や問題を大学に対して表明しやすい環境ができたからである。名古屋大学の場合、ムスリム学生からは、安心して信仰を守るための環境作りについての相談が留学生センター相談室に度々寄せられた。その結果、相談室を通して大学関係者や学生たちが協力しながら、環境整備が進められてきた。一例として、ムスリム男性の義務である金曜集会の会場の予約について、またはハラル食の提供についてなどの相談が相談員に寄せられ、相談員が仲介しながら当事者と大学、関係機関との間で話し合いの機会が持たれ、検討されてきた。

このように、全国の国立大学で進められた留学生枠の設定とそこへの特別措置は、多文化環境の推進に一定の効果をあげたと言える。しかしそれは同時に、留学生と一般（日本人）学生を明確に区別し、留学生を周辺化すること（*marginalization*）にも繋がった。寮については、従来の学生寮に留学生が入居するという方法をとった大学は少数で、その場合には学生寮の荒廃ぶりに留学生が愕然としたという例がしばしば聞かれた。¹³ 大学が学生寮を管理するとはいえ、学生の生活様式や居住環境について大学が指導や介入をすることが一般的でなかったため、新たな留学生の入居を推進することは難しかったと考えられる。留学生のために学生寮を建設すると、財源の理由からそれは留学生専用の宿舍となり、留学生は一般（日本人）学生とは別の場所で生活することになった。1970年代から2000年初頭まで、留学生寮と一般学生寮が別々に設置されているというのが学生寮の一般的な形であった。一方大学や地域では、ボランティアたちが留学生のためにバザーや旅行、交流会などの催しを企画運営し、留学生支援組織や後援会などもこの時期に多く生まれている。

留学生が一般学生と区別され、特別待遇を受けながら、ある意味周辺化されていた時期は2000年代初頭まで続いた。この間、宗教的マイノリティーの学生たちも「留学生」の枠組の中で捉えられ、留学生の中に（勿論日本人学生等

一般学生の中にも) 宗教や信仰についてのマイノリティーが存在するという視点は希少であった。「留学生」というマイノリティーの中の「宗教的マイノリティー」は、二重に周辺化されていたと言える。(さらにマイノリティーである女性は、三重に周辺化されていたと言えるであろう。)

何重にも周辺化された宗教的マイノリティーの存在は、留学生センター等の専門組織が仲介したり関係機関と協働したりしながら、少しずつ大学組織の中で可視化されてくることになったのである。

3.2 「留学生」と「日本人学生」の枠の流動化と再編成：

Decategorization and Recategorization

留学生と一般(日本人)学生という二分法が続いた2000年代初頭までの間に、新たな問題点が明らかになってきた。留学生のための制度や設備を設計し実施するだけでは留学生の勉強と生活を支援するには不十分であるということである。学内で多数をしめる日本人学生や教職員、地域社会についても国際化(多文化に開かれた環境)が重要であり、それがあってこそ留学生受け入れもより効果的なものになるという意識が、政府¹⁴にも、大学にも、また留学生たちの中にも高まってきた。

留学生寮に住む留学生たちは「なぜ一般学生とは別の寮なのか」、留学生用授業をとる留学生たちは「なぜ一般学生と一緒に勉強できないのか」、一緒に活動する機会を持った留学生は「なぜ日本人学生は交流しながらないのか」などの疑問を表明するようになった。¹⁵ 2000年以降特に、一般学生の国際化、大学環境の国際化、地域の国際化等の重要性が謳われるようになった所以である。留学生の受入れとともに一般学生の海外留学が推進され始め、留学生も一般学生も入居できる学生寮は「混住寮」として注目され始めた。名古屋大学の場合には2002年に従来の学生寮が取り壊されて300室近い国際学生寮が誕生した。多くの留学生は大学在籍期間が一般学生と異なる場合が多いため、国際学生寮であっても「日本人学生」と「留学生」の区別は依然として残っているが、少なくとも同じ学生寮に多様な文化・宗教を持つ学生たちが居住するという状況が実現している。¹⁶

また多くの国立大学が「留学生センター」を改組し、「国際センター」「国際

教育交流センター」等の名称で、留学生の受入れだけでなく一般学生の海外留学や、海外協定校との連携、国際的な活動経験のある学生の就職支援等、より広い国際教育交流の役割を担っている。¹⁷ これは、「留学生」と「一般（日本人）学生」の二分法が崩れ（decategorization）、新たな「国際学生」の視点が生まれてきたことを表している（recategorization）。¹⁸

日本の大学の宗教的マイノリティーに関しての先駆的調査として、岸田由美が大学のグローバル化と宗教的多様性への対応について、オーストラリアと日本の大学の状況を報告し検討している（岸田, 2009）。このような研究が日本でなされ発表され始めていることは注目に値する。報告の中で岸田は、多様な集団間における資源配分の公平性については「ニーズの違いをふまえて概念を鍛えていく必要がある」（岸田, 2009, p. 105）と述べている。政教分離の原則により特定の宗教に対して資源を配分することはできないという方針をとってきた国立大学は、組織内で対話を継続し、何が合法的かつ公平、公正であるのかをさらに検討する必要がある。¹⁹

名古屋大学では、ムスリム学生からの相談に応じ信仰が守れる環境を整えるとともに、非ムスリムの学生や教職員たちのムスリム文化理解も進めることが重要であるとの認識にたち、2012年、公費により『ムスリムの学生生活—ともに学ぶ教職員と学生のために』という冊子を作成した（田中他, 2012）。冊子作成においては、5名のムスリム学生と、1名の留学生センター教員（筆者）が主に執筆し、モスク指導者が監修し、学内外の6名の教員が協力した。執筆6名のうち5名が学生でありムスリムであったこと、関係者のうち半数の6名は女性であったこともまた、教員が中心になりやすい大学において、また男性が中心になりやすい日本の大学とムスリムコミュニティの協働作業として、特記に値すると考える。勿論それは偶然ではなく、留学生や、宗教的マイノリティー、マイノリティーとしての女性が中心的構成員となるようなチーム編成を意図的に行なったのである。

また近年では、いくつかの国立大学が学食でのベジタリアン食提供を始めている。²⁰ 日本では現在数パーセントしか存在しないと言われるベジタリアン²¹に配慮した重要な取組である。留学生たちが中心になって活動を始め、一般学生や教職員も共に活動しているという。宗教的マイノリティー（ヒンズー教

徒)が中心となって、環境保護や動物の権利などについての信条や価値観を共有する人々が集まり、「ベジタリアン」という新たな枠が作られ協働するという事例である (recategorization)。本稿の最初に、日本人学生でも宗教的マイノリティーはいるが、多くの場合、日本の組織文化の中ではその存在が顕在化し難い、と指摘した。対話を始めることもしない、できないという集団の力があり、本人もそれで納得せざるを得ない面があるのかもしれない。留学生の宗教的マイノリティーが中心となり、隠れていた一般学生のマイノリティーたちも対話や活動に参加することになったのである。

4 文化・宗教の多様性の尊重と多文化協働のために大学ができること

大学における宗教的マイノリティーの立場とその変遷を理解したうえで、今後大学がどのようにして、文化や宗教の多様性を尊重し、構成員の人権を守るとともに、多文化協働による知的活動を推進できるかについて、検討する。

4.1 文化の枠を利用し、そこに歩み寄るための方策をとる：

仲介者と社会通念の利用

『ムスリムの学生生活』の冊子作成の事例では、それまで「留学生」という枠のみで理解されがちであったムスリム学生たちが、留学生の中の「ムスリム学生」として明示化され、語られることになった。多様な個人を「ムスリム学生」という集団の枠に閉じ込めることの弊害や、ムスリム以外の教職員や学生を主流派日本人と想定するという誤謬は残る。しかしステレオタイプ助長の危険をできるだけ避けながら、日本における社会通念を利用して「ムスリム学生」について語ることになった。

例えば、学食でハラール食が明示されていないことでムスリム学生が困難を感じている状況を説明する際には、「ハラール食がないと信仰を守れない」という側面よりも、「給仕の人に原材料を尋ねることで、待っている他の学生たちの列を止めてしまって申し訳ない」というムスリム学生たちの気持ちを強調して語った。日々の礼拝場所の確保の必要性については、ムスリム自身が「他の人たちがいると落ち着いて礼拝できない」からと言うよりも、「慣れていない非ムスリムの学生たちに不信感や不快感を与えたくない」というムスリム学

生たちの気持ちを特に説明した。日本社会では一般に「他の人に迷惑をかけない」ことが優先され、その側面から物事を語ることが社会通念として受け入れやすい。その通念に添って説明することによって、上記の日本文化の特性を共有する人々は、馴染みのない文化により自然に歩み寄り、共感することができると考えた。

漠然と「異文化」と感じる人々や物事に対して、恐れや無知、無関心によっていつまでも忌避感を持つよりは、明確な枠を作って、社会通念を通してそこに歩み寄り共感することが理解を深めることに繋がると考える。それには、多文化および社会通念への理解がある人々の力が必要であるのは言うまでもない。

しかし枠をそのまま固定させてしまうと、ステレオタイプが助長される危険が増す。池田が、学校現場で多様な文化背景を持つ生徒たちへの教育について「可変的である現実を無理に固定化させて『こちらとあちら』という認識枠組みで状況を把握しようとする事自体が権利侵害を生み出すことになる」（池田, 2012, p. 58）と述べているように、主流派「日本人学生や教職員」と、マイノリティー「ムスリム学生」という枠は、暫定的なものであるべきだ。かつて「留学生」と「一般（日本人）学生」の枠がありそれが流動的になりつつあるのと同様に、宗教的マイノリティー学生の枠も一旦明示化され歩み寄られるが、固定的になってはいけない。ではどのように枠を流動化させるのか。

4.2 文化の枠を流動化し拡張させる方策をとる：マイノリティー中心の事業展開

留学生の宗教的マイノリティーであるヒンズー教徒の学生たちが、日本の大学学食にベジタリアン食を導入する活動を始め、多様な学生が宗教に限定されず参加して、ベジタリアン食導入を実現させた事例は注目される。文化的宗教的マイノリティーが公共の場で個人の思想や信条に基づいた要求をする、という形ではなく、多様な学生たちがある共通点を核にして同じ目的のために事業を進める、という形である。『ムスリムの学生生活』冊子作成においても、マイノリティーと位置づけられるムスリム学生たち、そして同様にマイノリティーである女性たちが中心となって、非ムスリムや教職員、男性たちの参加

も得て事業を進めた。冊子を作成するという共通の目的を持って、イスラーム文化や日本文化、ジェンダー等について価値観や疑問を共有する多様な人々が、枠を越えて協働することになった。

ひとつの目的を持った事業において、マイノリティーが中心となって、多様な人々が参加することで、枠が流動的なものとなり、広がり、多様性が生きる事業が展開できると考える。

4.3 文化の枠が様々に再編成される仕組みを作る：

Recategorization & "Cross-categorization"

人々が出会い交流する時、相手をカテゴリー化して認知することが不可欠であることは認知心理学において言われていることである。²² しかし認識の枠が固定化するとステレオタイプに繋がリ、たとえステレオタイプとは異なる現実を目の前にしても修正がきかなくなり、偏見や差別などの弊害を生む。文化的宗教的マイノリティーが中心となって様々な人々が参加し、マイノリティーの枠が流動的になり拡張した時、また新たな枠ができる。そしてその枠も固定化させないことが大切である。そのためには、交差する様々な枠があり、²³ 時と場合によって認識する枠が変化することが必要であろう。

ベジタリアン食導入の活動から、環境保護を核とした人々の繋がリや、動物の権利を提唱する人々の繋がリができる。ハラール食導入の活動から、アレルギーに配慮する食事に関心を寄せる人々が集まる。同じ人が複数の集団と繋がリながら、または複数の集団が、一部の核を共通項として繋がることで、枠は流動化し、再編成され、変化を続けていくことになる。

Takai が言うように、文化の枠を流動化させたり再編成したりすることによって多文化交流を促進するのは、特定の教員やクラスの中だけに任されるべきことではなく、組織全体で考えるべきことである。(Takai, 2013, p. 192) 大学として、様々なマイノリティーの存在を常に意識し、その個人や集団が中心になるような活動を支援することが大切である。それによって、多様な構成員が尊重され、交流し、個人も組織も活性化することができるのである。

新規事業として、例えば、学内のマイノリティーとしての留学生、その中の宗教的マイノリティーとしての学生、その中のマイノリティーとしての女性が

中心になるような事業、かつ多様な構成員が自然に集まれるような事業が、試行に値する。その事業は、多様な個人が尊重され、それぞれの個性が大切にされ、組織全体が活性化することに繋がるような効果や新しい価値を、大学にもたらすのではないだろうか。

Footnotes

- ¹ 文部科学省他（2008）
- ² 日本学生支援機構（2015）
- ³ 日本の留学政策の経緯については寺倉（2009）が全体像を簡潔にまとめている。
- ⁴ 文部省も当時は、留学の制度や方針を説明する際に「渡日前から帰国後まで」という表現を使っていた。（文部省学術国際局留学生課 1990: 6 など）
- ⁵ 文部科学省他（2008）。名古屋大学でも 2013 年、国際教育交流センターに「キャリア支援部門」が設置され、留学生の日本での就職を公的に支援している。
- ⁶ 国立大学では、大阪大学が 1990 年代に、東京大学や名古屋大学が 2000 年代初頭に生協食堂でハラル食提供を始め、その後多くの大学で同様のサービスが導入された。
- ⁷ ベジタリアン食は、宗教上の理由からだけでなく、環境保護や動物の権利とも関係して推進されている。
Vege Project Japan (<http://vegeproject.japanteam.net/aboutus.htm>)
- ⁸ 渡辺（2011, p. 35）
- ⁹ ホフステードは「文化の次元」を提唱し、組織における「集団主義」「個人主義」についても国ごとの指標を示している（ホフステード, 2000 等）が、それによると日本は集団主義の指標が高い。
- ¹⁰ 2006 年、名古屋大学イスラーム文化会が連盟への加入を申請したところ、宗教関係団体ということで申請が承認されなかった。
- ¹¹ 国立大学の留学生指導関係教員は 1996 年に「国立大学留学生指導研究協議会（COISAN）」を組織し、全国ネットワークを作った。（<http://coisan.org/>）
- ¹² それでも、休み時間には女性用トイレに列ができることが多い。大学生の場合は一般に女性の 4-5 名に一人が生理中であり、トイレに多くの時間を要することを考慮する必要がある。女性用トイレの個室数は男性用の 4-5 倍の数が必要であることを、筆者は機会あるごとに伝えるようにしている。
- ¹³ 筆者は 1991 年より留学生アドバイザーの役を担っており、学生寮については勤務大学や周辺大学の留学生たちからも意見や相談が寄せられることがあった。
- ¹⁴ 「留学生 30 万人計画骨子」を参照。
（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm）
- ¹⁵ 筆者の留学生アドバイザーとしての経験の中で、これらの疑問や意見が頻繁に寄せられた。

- ¹⁶ 名古屋大学の混住寮「国際嚶鳴館」については、居住者 281 名に行なった生活環境に関するアンケートの結果が報告されている（石川 & 山田, 2008）。
- ¹⁷ 2015 年 2 月時点で、「留学生センター」として存続しているのは全国 11 国立大学（国立大学法人留学生指導研究協議会, 2015）
- ¹⁸ 実際のところ「留学生」「日本人学生」の枠には入らない学生が増えている。日本で育った外国籍の学生、海外で育った日本国籍を持つ学生、親の一方が外国籍である学生、日本に帰化した学生、等々である。
- ¹⁹ 対話と議論の必要性については、田中 & ストラーム（2013）を参照
- ²⁰ ベジ・プロジェクト・ジャパン（2015）によると、東京大学、京都大学、一橋大学で既に実施している。名古屋大学では 2015 年の留学生支援事業として企画が進行中である。
- ²¹ 垣本（2004）によると日本の大学生の約 10% が菜食の傾向にあるという。
- ²² 例えば Spencer-Oatey（2009, p. 144）では、カテゴリー化の必要性和、カテゴリー化されたグループについてのステレオタイプが持つ効果についての諸論を紹介している。
- ²³ Takai（2013, p. 191）はこれを cross-categorization と呼んでいる。

References

- 池田賢市. (2012). 「学校現場での「公正」をめぐる実践知の必要性」. 『異文化間教育』, 36.
- 石川クラウディア & 山田直子. (2008). 「名古屋大学学生寮アンケート調査報告～国際嚶鳴館の施設、運営、人間関係に対する寮生の認識」. 『名古屋大学留学生センター紀要』第6号, 17-48.
- 垣本充. (2004). 「日本におけるベジタリアン人口とタイプ」. *Vegetarian Research* Vol. 5, No.1, 17-19. Retrieved from <http://www.jsvr.jp/>
- 岸田由美. (2009). 「大学のグローバル化と宗教的多様性への対応」. 『異文化間教育』第32号.
- 国立大学法人留学生指導研究協議会. (2015). 『国立大学法人留学生センター等における留学生交流指導体制をめぐる最近の状況』.
- 田中京子. (2006). 「ムスリム学生たちと築くキャンパスの多文化環境について」. 『名古屋大学留学生センター紀要』第4号.
- 田中京子他、大久保賢監修. (2012=2014). 『ムスリムの学生生活—ともに学ぶ教職員と学生のために』. 名古屋：名古屋大学留学生センター・名古屋大学イスラム文化会.
- 田中京子 & ストラーム・ステファン. (2013, July 10). 「大学による多文化環境整備—ムスリム学生との協働の視点から」. ウェブマガジン『留学交流』, Vol. 28. 1-9. Retrieved from http://www.jasso.go.jp/about/documents/201307_tanakakyoko.pdf
- 寺倉憲一. (2009). 「我が国における留学生受け入れ政策—これまでの経緯と留学生30万人計画」の査定」. 『レファレンス』 No. 697. 2-47.
- ベジ・プロジェクト・ジャパン. About Us—ベジ・プロジェクト・ジャパン [Vege Project Japan]. Retrieved from <http://vegeproject.japanteam.net/aboutus.htm> (2015, August 24最終閲覧)
- ホフステード. (2000). 『多文化世界—違いを学び共存への道を探る』. 東京：有斐閣.
- 日本学生支援機構. (2015). 「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」. Retrieved from http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data14.html
- 文部省学術国際局留学生課. (1990). 「我が国の帰国留学生政策」. 『留学交流9』, Vol. 2, No. 9.

文部科学省、外務省他. (2008). 「留学生 30 万人計画骨子」. Retrieved from <http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>

渡辺浩希. (2011). 「日本の宗教人口—2億と2-3割の怪の解—」. 武蔵野大学仏教文化研究所『紀要』, No.27. 25-37.

Spencer-Oatey H. & Franklin, P. (2009). *Intercultural Interaction: A Multidisciplinary Approach to Intercultural Communication*. (p. 144). London: Palgrave Macmillan.

Takai, J. (2013). Considering Cross-Cultural Student Exchange from a Social Psychological Perspective. In T. Coverdale-Jones (Ed.), *Transnational Higher Education in the Asian Context* (pp. 185-194). London: Palgrave Macmillan.

レイシズムとしてのセクシズム、セクシズムとしてのレイシズム — ジェンダー・セクシュアリティの視点から考える「ヘイト・スピーチ」 — 大妻女子大学 鄭暎恵

1 今、日本でのヘイト・スピーチをどう見るか。

1.1 「オールドカマー」がターゲットとなるヘイト・スピーチ

この10年間、日本でヘイト・スピーチが台頭してきた要因は何だろうか。

それを分析する上で重要なのは、諸外国と比べて、日本でのヘイト・スピーチのターゲットが、ニューカマーより「オールドカマー」に集中してきたことの意味である。「オールドカマー」と言っても、旧植民地出身の「在日朝鮮人」であり、祖父母の世代より以前に「内地」（現在の日本）に渡り、もう既に日本で70年以上暮らす家族に生まれた、日本育ちの人々である。生地主義の国籍法をもつ国なら、外国人とはみなされない。よって外からやってきたことを意味する「comer」という呼称に違和感があるほど、既に日本社会の一部となっている人々である。新たな移民・難民・外国人労働者の流入が、国民・永住権者の失業率を高めるなど、既得権や社会秩序を脅かす不安をもたらすことで、「これ以上の外国人受け入れを容認できない」とレイシズムを強めて、移民や多文化共生政策を攻撃するヘイト・スピーチとは、日本のそれは明らかに異なる。

旧植民地出身は、「comer」と呼ぶのが相応しくないどころか、1945年以前は大日本帝国臣民として（男性は）参政権や徴兵に応じる義務まであった。ところが、現在は日本国籍を保有たず、「外国人」となっていること自体に象徴的な意味があり、矛盾と問題が凝縮されている。しかも、同じ旧植民地出身者でも、台湾系の人々より、同化に強く抵抗してきた「在日朝鮮人」が圧倒的にターゲットとなっている。

1952年4月28日、日本国は主権を回復すると同時に、旧植民地出身者に対する、過去から未来にわたる責任を放棄するため、日本政府は旧植民地出身者＝「元国民」から日本国籍を剥奪した。1947年日本国憲法の施行により、当時、主権在民となっていたが、日本政府は本人に直接通知することすらせず、国民でもあった「在日朝鮮人」から一方的に日本国籍をはく奪した。旧植民地

出身者の側が、国家から課せられる義務を拒否するために日本国籍を返上するならともかく、植民地支配をした側がされた側への責任を放棄するために国籍をはく奪したのだ。第二次大戦の苦痛に満ちた人類の経験から学び取った共通認識、植民地主義の否定、民族の解放と植民地の独立、個人の人権尊重という原則は踏みにじられ、世界人権宣言や国際法上もほかに例をみない措置であった。

こうして権利としての国籍を剥奪し、一方的に「外国人」扱いとしたこと自体、日本政府は責められるべきなのだが、そこからさらに「在日朝鮮人」を「特権をもつ外国人」と読み替えて非難するヘイト・スピーチは欺瞞であり、日本政府の責任を隠ぺいする以外の何ものでもない。

吉田茂がマッカーサーに「在日朝鮮人を全員送還したい」旨を打診したが、賛同を得られなかったこともあり、1952年、日本国籍をはく奪することで「在日朝鮮人」を排除しようとしたのだろう。しかし、今にいたっても同化政策に抵抗して日本国籍保有を「拒否」する「在日朝鮮人」が少なからず存在し、人権尊重を訴え続けていることは、何よりも日本政府の思惑通りにはならなかったことを物語っている。

1.2 朝鮮人が帰郷できず「在日朝鮮人」となった歴史と、朝鮮学校への弾圧

敗戦間近になると、解放を予想した朝鮮人の多くが、日本全国から下関を指していたが、解放を迎えても、朝鮮半島への自由渡航が認められなかった。そのため、帰郷を待ちわびて「懐かしい祖国へ一日でも早く帰るための準備を急ぐ一方、子供たちが、故郷に帰って母国の言葉と文字が多少なりとも使えるように」（4・24を記録する会，1988，p. 186）と、国語（＝朝鮮語）講習所をいたるところにつくったのが朝鮮学校の始まりだった（文，2005，pp. 19-59）。

しかし、東西冷戦構造の対立が深まり、ソ連の南下を阻止して東アジアでの覇権を握りたい米軍政は、日本撤退後の南朝鮮を統治していたが、朝鮮民族の自主独立を支持する「解放軍」であつたどころか、むしろ、米国の利益を優先して、独立した民主国家建設を目指す朝鮮人民の自治を封じ込め、草の根的な社会革命の機運を敵視して、服従を強いていった。

GHQは、日本国内では直接軍政を敷かず、日本政府をとおして統治したが、南朝鮮ではむき出しの直接軍政を敷いて、表面的にもきわめて乱暴で高压的な統治をおこなった。日本も南朝鮮も同じくマッカーサー司令部の管轄下におかれた占領だったが、明らかに「アメとムチ」で対照的な政策がとられた。その両者を合わせた全体を見ることで、「憲法9条」をも含めた、アメリカによる極東支配の意図が初めて理解できるのだが、日本と南朝鮮の民衆はそれぞれ隔離・分断されてきたために、そのことに気付かずにきた。それが、その後の現代史にいろいろな意味でマイナスの影響を及ぼしたと梶村秀樹は指摘している（済州島四・三事件四〇周年追悼記念講演集刊行委員会編、1988）。韓国現代史とは日本にとって「対岸の火事」ではない。それを知ることなくして、日本人の身に降りかかっている、アメリカ支配の全体像を十分理解できないからだ。

GHQは、朝鮮半島のみならず日本国内においても、1947年10月（11月との記録もある）、朝鮮学校を日本の法律に従わせようと日本政府に指令した。日本政府は翌1948年1月24日、各地にある朝鮮学校を閉鎖し、そこで学んでいる子どもたちを日本学校に転入させることを盛り込んだ通達を各県知事に出した。これに対し、朝連（在日本朝鮮人連盟）は、1月27日に第13回中央委員会を開き、「奪われたわれわれの文化を取り戻し、祖国を知らず、母国語を知らぬ朝鮮人児童に、朝鮮的なあらゆる教育と朝鮮建設に寄与する緊急かつ重大な教育を実施することは、何よりも大きなわれわれの使命」（解放新聞社、1948, Feb. 20）だと、再確認した。そして、朝連中央は、在日朝鮮人の歴史的特殊性からして、その子弟に民族教育を行う自主性を保証し、財政面・物資面で支援することを含め、日本政府は歴史的・道義的責任を果たさねばならないという6項目の決議文を、3月6日、森戸文部大臣（当時）に提出した。

解放で希望に満ち溢れ、朝鮮各地で人民委員会を立ち上げて、自主独立の民主国家を建てようとする朝鮮人に対し、露骨に弾圧する米軍政に比べ、「解放された朝鮮人民万歳！」と呼びかけたソ連軍ではあったが、その関心は、北朝鮮地域に親ソ政権を樹立して傀儡国家を建設することにあり、内実は米軍と異なっていたかどうかは疑わしい。しかし、GHQは、朝鮮民族による独立国家建設の動きがソ連・中国寄りになることを強く警戒し、新たな朝鮮の建国に連

動する日本国内の朝鮮学校を敵視し、一方的な封じ込めにかかった。「解放民族としての自覚を持った在日朝鮮人は、アメリカ占領軍にしてみれば、朝鮮支配を阻む後方基地攪乱者でしかなかった」(4・24を記録する会, 1988, pp. 4-5)。

しかし、幼い子どもを背負ったオモニたちは「この子には二度と亡国の辛苦を嘗めさせたくない」と、警察の警棒、米兵の銃口の前に立ちはだかり、日本全国各地で民族教育を守る闘いが繰り広げられた。命をかけて学校を守ろうとする抗議運動の結果、1948年4月24日、ついに朝鮮人代表と兵庫県知事との交渉が実現し「学校閉鎖例」が撤回された。それを記念して、「在日朝鮮人」はこの日を「4・24阪神教育闘争」と呼んでいる。

ところが、その夜GHQは、「戦後」初めてにして唯一の「非常事態宣言」を神戸中心に発令し、カービン銃をもった米兵と、武装した日本の警官による一大検挙「朝鮮人狩り」を行なった。朝鮮人学校で、同胞の部落で、電車の中で、駅の改札口で、老若男女の区別なく検挙は行われた。なかには結婚式を挙げている最中の新郎新婦もいて、無差別検挙のすさまじさを物語っている。大阪では、抗議運動に加わっていた16歳の少年が射殺され、朝連兵庫県本部委員長は獄死した(4・24を記録する会, 1988, p. 5)。逮捕された在日朝鮮人数は、兵庫県だけでも警察本部の記録では1,700余名とされているが、在日朝鮮人たちの証言では、4,000から5,000に上ったという(4・24を記録する会, 1988, p. 193)。この時に始まった朝鮮学校をつぶそうとする動きは、70年近く経った現在にまでいたっている。

1.3 アメリカの東アジアにおける安全保障戦略と日本でのヘイト・スピーチ

日帝から解放されたのもつかの間、米ソの対立の中で、朝鮮民族は南北に分断され、その独立と自治への希望は、再び強硬につぶされていった。

日本国内では朝鮮学校への徹底的な弾圧が行われている一方で、朝鮮民族の自主独立を封じ込めようとした米軍政に抵抗して、1948年4月3日、済州で武装蜂起がなされた。済州四三事件である。それはその後、解放直後21万余だった済州島の人口が、人々の帰郷で1948年には約28万人にまで急増したが、そのうち3万人近くが犠牲になるほど凄惨な事態に至った。そのため、帰

郷するどころか、逆に再び海を渡り日本に逃げてくる人が始めた。

そうした人々が、民族的コミュニティの拠点でもあった朝鮮学校に入ってきたことで、朝鮮学校への弾圧はますます強まり、それは一貫して、朝鮮学校への差別と偏見を助長しながら今に至っている。高校無償化の対象から朝鮮学校を排除し、在日朝鮮人と朝鮮学校を激しく攻撃するヘイト・スピーチは、民族差別・レイシズムだけが問題なのではなく、歴史的背景として、1945年から現代まで70年もの間、連綿と続いてきた東アジアでのアメリカ支配と、その安全保障上の戦略が色濃く反映していることを忘れてはならない (Roach, 2015)。¹

1945年8月15日、日帝から解放されたのもつかの間、米ソの対立の中で、朝鮮民族は南北に分断され、その独立と自治への希望は、再び強硬に弾圧されていった。しかも、1950年6月25日、帰る先の故郷はついに戦場となり、東西の冷戦構造に巻き込まれ、同胞同士が殺し合い、お互いの生死すら確認し合えないような多くの離散家族が生まれた。

私の母方祖母の弟は、朝鮮戦争に志願兵として出征したが、朝鮮人でも日本国民である自覚をもって出征したと言っていた。1927年に済州島で生まれた彼にとって、1952年4月28日まで実効的国籍は日本国籍のみだったからである。

1959年、帰るに帰れず、日本での差別と貧困に苦しむ在日朝鮮人の6人に一人は、赤十字の「帰国」事業で北朝鮮に棄民された。1965年、韓国とだけ国交回復をし、南北分断を固定化したことに反対し、祖国統一を願って、韓国籍を申請しなかった者は「朝鮮籍」として、帰郷どころか旅券取得や日本からの出国すら困難になった。

国民年金への加入に際し、それ以前は国籍条項で排除されていたことに経過措置も認められなかったため、失業・倒産・低賃金が日本人以上に深刻な朝鮮人高齢者が、そのままでは万単位で飢え死にするおそれがあったことから、日本政府は在日朝鮮人に生活保護受給を認めざるをえなかった。それは責任放棄を図った日本政府自身の戦後補償策の誤りに起因するが、そうした生活保護の受給をもって「在日特権」だと在特会は攻撃した。

1.4 国民を戦争ビジネスに加担させる「一億総動員体制」と

ヘイト・スピーチ

ヘイト・スピーチの攻撃対象として、旧植民地出身者とその子孫を意味する「特別永住者」が突出した理由について、もう一つ考えてみよう。「特別永住者」のカテゴリーには、「朝鮮籍」者と韓国籍者が含まれる。つまり、日米軍事同盟にとって敵視する対象ではないはずの韓国籍者まで、ヘイト・スピーチの攻撃対象になっていることは、安全保障上の理由からだけでは説明がつかない。

少子高齢化が進む日本は、近い将来「外国人労働者」を多数受け入れなければ、現在の経済構造を維持できないため、受け入れるからには徹底的に管理できる体制を組みたいと考えている。外国人を徹底管理するためには、「限りなく国民に近い処遇を受けている特別永住者という在日外国人」の存在は、国民と外国人の境界線を曖昧にするので、望ましくない。徹底した管理支配をする上で、「邪魔な存在」とみなされる特別永住者を排除する排外主義が、ヘイト・スピーチを後押ししている。

また「一億総活躍社会」など、総動員体制をとろうとしている時に、人権擁護と多文化共生を主張して一人一人の尊重を求め、全体主義に抵抗する者は、「邪魔な存在」とみなされているのだろうか。しかし、ジェンダー・セクシュアリティという差異など、社会の多様性に非寛容で、人々を序列化し、「マジョリティ」中心にして、さまざまな「マイノリティ」への排除を看過する為政者に対して、批判の声を向けていくのは、もはや「在日朝鮮人」だけではない。今や、日本国民も、4割を超える人々が非正規の使い捨て労働力とされ、若者や女性など日本国民も「植民地支配される人々」のように扱われる状況が進んでいる以上、弱肉強食の政治に対する、日本国民による批判は今後ますます大きくなるだろう。

民族差別やレイシズムがあるからヘイト・スピーチが広がるのではない。

逆である。ヘイト・スピーチとは、民族差別やレイシズムを助長し正当化するためになされる。なぜか。戦争や暴力を用いて、他者を思い通りに支配しようとする際、国民たちがその相手方を「同じ人間」として尊重していたら、戦争や植民地支配の遂行者として国民を動員できないからだ。戦争という手段を

用いてでも、相手方が「征伐すべき存在」「制裁を与えて懲らしめるべき存在」だと思ってくればくるほど、国民は自ら進んで戦争に加担していく。戦争は聖戦として正当化され、武器輸出も正当化されていく。

人・物・金が国境を超えて移動するグローバル化と財政赤字削減への対応策として、日本では国民総背番号制「マイナンバー制」が2013年5月24日成立した。(早くも先日、その改正案が通過)これに先立ち2012年7月9日には「新しい在留管理制度」が完全施行(2009年7月改定)されており、在日外国人、日本国民問わず全ての日本での居住者を、共通番号で管理できるようになった。これに加えて特定秘密保護法(2014年12月施行)と、安保関連法が2015年9月17日成立し、集団的自衛権のみならず、武器輸出まで含めた日米軍事同盟の強化が、朝鮮戦争以来、1955年自民党結成を経て、日米の保守政治が望んだかたちでようやく約65年かけて実現することになる。(日本国民の約3分の2はそれを望んでいないにもかかわらず。)

この体制により、それまで国民とは別システムで外国人を管理していた外国人登録法は廃止され、正規滞在の外国籍住民も国民と同様、住民基本台帳法に記載されるよう改定されたことにより、制限なしに高度なデータ・マッチングを行うインテリジェンス・システムを導入して、日本に居住する者を一元管理することが可能となった。しかし、その副作用として、住民基本台帳に記載されない非正規滞在の外国籍住民は、「存在しない者」として人権も保障されないこととなった。

こうした体制の成立過程は、2006年9月26日に成立した第1次安倍内閣以降に表面化した。2007年11月20日には日本に、2010年には韓国にもUS-VISITが導入され、それぞれ主権国家でありながら、技術上、出入国管理が一元化されることとなった。(ちなみに、カナダ-US間のNEXUSカードの発行も、2010年9月からである。)

また、日本で街頭でのヘイト・スピーチをさかんに行った在特会が発足したのもこの時期であり、第1次安倍内閣成立から約4ヶ月後の2007年1月20日のことである。2009年に成立し2012年7月9日から「新しい在留管理制度」が完全施行される、ちょうど「前夜」にあたるのは偶然ではない。日米韓軍事同盟を強化するにあたり、三者共通の「敵」として、「朝鮮人を敵視」するま

なぜしを日本国民に内面化させるために、演出されたのがヘイト・スピーチであろう。

生まれたばかりの赤ん坊の時から誰かを差別する人はいない。差別は、生得的なものでなく、後天的に社会で学習してしまうものだ。なぜ学習させられてしまうのか。国民を支配したい権力者にとって、洗脳されて（仮想敵に）偏見と敵意をもたされた国民ほど、思い通りに操りやすくなるからだ。差別について考える時、「差別する側」「差別される側」に二分法では肝心な権力関係が見えなくなってしまう。もう一つ、人々を扇動して「差別する大衆」につくりあげ、操りやすくしようとする権力者と、差別を内面化し洗脳されることで「弱者」を差別し、かつ、自らも権力者に支配されてしまう人々との権力関係を見なければならない。

2 レイシズム×セクシズムの共犯構造

—最も強力な支配の手段として濫用される性暴力—

女性の人格を認めず、その身体を民族再生産の「道具」としかみないセクシズムだが、そうした女性観を、植民者・被植民者の両サイドの男性や支配者が共有していたことが「慰安婦」制度を生んだ背景にある。

朝鮮民族抹殺をもくろんで発案された内「鮮」一体政策としての軍隊「慰安婦」制度。征服したい他民族男性を屈服させるために有効な方法は、その所有物としての女性を凌辱し、民族の「純血性」を奪うことで、民族再生産を不可能にすることだと考えた（歴史学研究会、1989）。

ホモ・ソーシャルな男性中心社会において「妻は夫の所有物」である。そのため、男性たちは闘いで、相手方の男性のプライドと名誉を最も効果的に傷つける方法として、その男性が「所有する女性を凌辱する性暴力」を濫用する。性暴力は、相手を同じ人間とみなさず、支配欲を満たす道具に貶める。間違った方法でありながら、戦争において相手方に最もダメージを与える手段としても“レイプ”がなされる。

2014年5月5日、ナイジェリアのイスラム武装集団「ボコ・ハラム」(現地語で「西洋の教育は罪」の意)は、政府やキリスト教会・教育機関への反撃方法として、キリスト教学校に通う女子高生ら100名以上(実際は200名以上)を拉致したことをビデオ声明で認め、奴隷として近隣国に彼女たちを売ると述べた(毎日新聞社, 2014, May. 7)。

また、^{マイノリティ}「他者への批判」(＝レイシズム)を正当化する理由として、“他者のセクシズム”が濫用される。

パキスタンで2012年、イスラム武装勢力タリバンに襲撃されて頭部に重傷を負った後、英バーミンガムの高校に通うマララ・ユスフザイさんは、「イスラム教は信者に教育を受けさせることの義務や他者への寛容を説いている」として、ボコ・ハラムを「イスラムの教えを理解しない過激集団」と批判し、彼らによる女子生徒集団拉致事件について、「世界が行動をおこさなければならない」と国際社会に対応を呼びかけた(毎日新聞社, 2014, May. 9)。

一ボコ・ハラム＝イスラム教徒だとして、「女性を差別するイスラム教は劣悪・邪悪である」という偏見を助長し、マララさんの発言も彼女自身の意図とは別に、レイシズム正当化に濫用されるリスクがあることに注意する必要がある。

もともとイスラム教が女性への暴力を助長していたのではなく、イスラム教徒が異教徒として迫害を受ける際の権力構造や、帝国主義支配に対抗しようとした長い歴史の中で、イスラム社会内部における家父長制が強化され、その結果、女性への差別が強まったことを忘れてはならない。

3 改めて、ナワル・L・サーダウィ『イヴの隠れた顔』‘英語版への序文’ が提起した問題を考える

アラブ・アフリカのイスラム社会における女性性器切除(FGM)を、イスラムの「伝統」であり、イスラム文化の「野蛮性」「劣等性」の証だとして批

判することの陥穽について、サーダウィは根気よく「言い返して」いる。

「安全地帯」から「他者」の問題として、ただFGMを批判することは、結果として、イスラム社会をとりまく偏見を助長し、グローバル資本主義の中で強化される南北関係の中で、男性間の覇権争いや政治・経済的な理由により、イスラム社会内の家父長制が強化され、その結果、女性の身体への管理が強化されている構造を見えなくしている。

化石燃料が乏しい日本に住んで、中東の石油に依存している限り、中東の富と権力を支配する者と、間接的にであれ「共犯」関係を結ばざるを得ない私たちの位置とジレンマを自覚するところから、私たちにとってのFGM問題は始まる。

日本政府が、強化する以外「選択肢」はないと思っている日米軍事同盟や、そのために行きしようとしている「集団的自衛権」と、FGM問題は水面下で連関している。グローバル石油資本の利害と、アメリカの安全保障戦略は連動してきたが、その一方で、中東の産油国やイスラム世界における家父長制が強化されるかいかも連動しており、その結果として、女性の人権やFGMにも影響が及んできた。その構造の中で、アメリカの安全保障戦略とFGMも連関している。

「イスラム教徒へのレイシズムに対抗する中で強化される、イスラム社会内の家父長制とセクシズム」

「イスラム教徒へのレイシズム強化／正当化に濫用される、イスラム社会内の家父長制とセクシズム」

そして、こうした構造連関を意識すると、日本社会において見えてくるものは何か。

「在日朝鮮人へのレイシズムに対抗する中で強化される、在日朝鮮人コミュニティ内の家父長制とセクシズム」

「在日朝鮮人へのレイシズム強化／正当化に濫用される、在日朝鮮人コミュニティ内の家父長制とセクシズム」

それら両者を可視化することを通じて、権力構造の脱構築を試みる必要がある。

3.1 私たちが生きる〈いま、ここ〉の日常生活を問い直す

女性の抑圧、女たちが受ける搾取と社会的圧力は、アラブないし中東の社会や『第三世界』諸国のみに特有のものではない。(略) 世界の大部分の地域で支配的な政治的・経済的文化的制度の不可欠な一部を成している。現代人間社会における女性の状況と問題は、一つの階級に他の階級を、男に女を支配させることになった、歴史の発展過程から生じたものである。つまり、階級と性の産物である (Saadawi, 1988, p. 5)。

「後進性」の要因は、帝国主義圏による資源の搾取が大きな一因としてあった。

特に西洋の帝国主義圏の有力筋は、アラブの女たちの問題は、イスラムの内容と価値に起因するとみなしている。同様に、多くの重要な分野におけるアラブ諸国の遅れは、主に宗教的・文化的要因、あるいはアラブ人の精神的・心的な構造に固有の特質による、とさえ考えている。彼らにとっては、後進性は、外国による資源の搾取が根本にある経済的・政治的諸要因とも国の富の略奪そのものとも関係ない (Saadawi, 1988, pp. 5-6)。

帝国主義による反革命の陰謀は、「女性解放」をよく利用する。

イスラム統治者のどんな反動的な措置や政治も、帝国主義の陰謀に利用される。(略) つい先頃も、西洋の新聞はイラン革命に反対するキャンペーンを一斉に張り、それを反動的である、女たちにヴェールとチャドルを押しつけている、女たちがシャーの治下で得た市民権を奪おうとしている、と非難した。西洋の新聞はイランで起きることを、驚くべき深さと決意に満ちた戦闘的な民衆の起ち上がりによって押されて進む政治的・

経済的な運動としてよりも、むしろ過去回帰的・伝統主義的・狂信的な社会変化として描こうとした。そのような反革命の陰謀は多様かつ巧妙である（Saadawi, 1988, p. 11）。

人権尊重を願う資本主義先進国の人々が、自分たちの帝国主義を支えてしまう矛盾がある。

進歩的なフェミニズムは、イラン女性に代わって干渉した。しかし、その干渉の仕方、さらには内容までもが、特にアメリカの干渉に反対するイラン人民の闘争の評判を落とすために使われている、ということに気付いていない（Saadawi, 1988, pp. 11-12）。

資本主義勢力はジレンマに陥っている。彼らはイスラムを必要としており、それを進歩的・社会主義的運動への対抗手段として利用している（Saadawi, 1988, p. 12）。

自文化中心主義によらない連帯をどうつくるか。

もちろん、女をチャドルや家の中に押し込めようとする試みは、人間を解放し、搾取と貧困を廃止しようと願う革命にはあるまじき、反動的な政策である。女たちは、自分たちの解放をめざす運動を強め、広げるために、いたるところで団結せねばならない。女の連帯は強力な変革の力となるだろうし、女だけでなく男にとっても望ましい方向で、将来の発展に影響を与えるだろう、しかし、そのような連帯も、全ての人々の自由と平等に反する他の目的に利用されないよう、低開発国の実情を十分に理解した上で行われねばならない（Saadawi, 1988, p. 15）。

民族社会の解放と、女性解放は緊密に結びついている。

『第三世界』の各地で人々が外国の支配と、国際資本主義による人的

資源・自然資源の搾取とに反対してすすめている民族・社会解放の闘いと、女性解放の闘いとが、緊密に結びついていることを常知しておかねばならない (Saadawi, 1988, p. 15)。

反帝国主義と親帝国主義、両勢力による女性差別への反対は、帝国主義そのものの闘いと不可分である。

反一帝国主義、親一帝国主義に分断支配されることで、家父長制は強化される。

帝国主義支配を受けると、反対派と体制派（外部支配者と利害を一致させて民衆を支配）に分断され、分断支配を受けることで、ますます抵抗の術を奪われていく。両陣営は対立し、内紛となって相闘う中で消耗するほど、その対立の根本原因である、外からの支配に抵抗できなくなる。外部勢力への抵抗が弱体化すればするほど、外部からの支配は強化される。

両陣営は民衆への支配を強化し、自陣営への結束を強化させ、うらぎり・逸脱を許さない。陣営内の上下関係は明確化し、その序列に逆らうことは許されない。権力を持たない者は逆らわないで生きるために、自分の頭で考えなくなる。競って服従するようになり、家父長制は強化される。男尊女卑も強化される。強制的異性愛主義も強化され、性的マイノリティへの排除が強まる。

3.2 Post-colonial Feminism—その課題と方法—

男尊女卑をなくすには、男女二者間の平等を考えるだけでは不十分である。セクシズムをなくすとは、男女間の平等を達成することと考えるのは、帝国主義支配を受けない特権階級の男女だけだろう。

セクシズムとは、外部からくる権力や暴力と対抗する中で強化される男女間の序列である。そのため、セクシズムをなくすには、支配—被支配関係を築いた根本的な構造をまず変えていく必要がある。例えば、南北（「開発途上」国—「先進」国）間の、支配—被支配構造をなくすことが、それにあたる。

また、異なる他者への寛容性を高め、文化的社会的に差異を持つ者を排除せずに、多様性を許容し、コミュニティ内の不平等をなくす。分断支配、対立

(内紛・戦争)をなくし、対等な関係を築く文化・制度をつくる必要がある。

そのためには、ナショナリズムや自文化中心主義を乗り越えて、課題を共有するあらゆる人を“われわれ”とみなして連帯する。排除しない。その結果、“Beyond Identity”, “Hybrid Identity”が生起する。

家父長制（特に、帝国主義、軍事独裁政権）は女性や年少者にかぎらず、さまざまなマイノリティを疎外する。例えば、セクシュアル・マイノリティは、強制的異性愛と家父長制の中で生きづらさを感じる。問題解決の課題を共有することで、さまざまなマイノリティの「たこつぼ化」したアイデンティティを超えて、視点を共有し、政治的に結集することにつながれば、そうした過程がポストモダンにおけるアイデンティティのHybridityを増幅させ、社会の「常識」を根底から変容させることになる。

4 ジェンダー・セクシュアリティの視点から考える“ヘイト・スピーチ”

同時に、ヘイト・スピーチが、ターゲットとされたコミュニティに与える影響を考えてみる必要があるだろう。ターゲットにされることで、疎外感や対抗同一性が強まり、コミュニティの中にも存在した「内なる多様性・差異」が消去される圧力が働く。「一致団結」しているように見えるが、コミュニティの画一化、多様性や自己決定権の否定、「保守」主義、閉鎖性といった弊害も生じる。

カウンター行動における、マスキュリティの強調や、ジェンダー化（engendered）現象も現れる。例えば、「男は守る者、女は守られる者」との関係性が浮上したり、「守る×守られる」の政治力学が派生したりする。

レイシズムと「闘う正義の味方」＝「日本人」「男」の自己普遍化、正当化がなされる一方では、「朝鮮人ならレイシズムと闘っても当然」とみなされ、「正義の味方」「良識派」として評価が上がるわけでもない。なおかつ、レイシズムから「守ってもらった」ことに対し、マジョリティに感謝しなければならず、「正義の味方」を批判すると「飼い犬の手を噛まれた」と言われる。差別と闘う中においても、マジョリティとマイノリティの間に権力構造が巧みに入り込んでくる。

4.1 ヘイト・スピーチによる PTSD の、ジェンダー格差

1990 年初頭に、「レイシズムと民族差別による PTSD と、性暴力による PTSD は似ていると思う」と、ある在日の若い女性が言った。それは何故なのか。

DV とレイプについて、DV のもたらす健康上の影響として、沖縄戦での PTSD と重なってくるものがある。精神的影響として睡眠障害、PTSD（米国の調査で DV 被害者の 31–84%）、抑うつ状態、不安障害、パニック障害、アルコール・薬物依存症、自殺念慮、自殺企図、種々の心身症や身体化症状、「性格や対人関係の変化」では「被殴打女性症候群」、自分自身への否定的な評価。自分の感覚や欲求、判断力への信頼の喪失、感情の豊かさ、意欲や気力の消失、対人関係能力の低下として説明されている（宮地, 2008, p. 83）。

例として「とくに性的暴力の影響や精神的影響は根深く、DV から逃れた後に PTSD の症状が強くなり、深い抑うつ状態に陥ることもある。これは、DV を受けているさなかには持続していた心身の緊張が解け、一安心してようやく症状を出す余裕が出てきたためかもしれません（宮地, 2008, p. 83）」。鄭香均さんが「毎日、日々生活に追われて必死だった 2 世ではなく、ある程度生活できるようになった 3 世だからこそ、自殺率が高くなった」と言っていたのは、それと重なるかもしれない。

「PTSD は、米国の研究レビューによると、DV 被害者の 31–84% にみられます」が、「自然災害や事故などによる PTSD の発症率が 10% 程度ですから、DV がいかに精神的なダメージが強いものであるかがわかります」。友田尋子『暴力被害者と出会うあなたへ——DV と看護』（2006）では、女性が DV 被害を受けることによって「好奇心が旺盛で、行動的である」「自分は明るく元気なほうである」「自分を大切に感じるし、自分が好きだ」「物事にすぐ感動するほうだ」という回答が減り、「何となく自信がない」「自分が何をしたいのかよくわからないことがある」「自分で物事を決めるのが苦手である」「一人でいると不安になる」「最初からうまくいかないと諦めてしまうことがある」「人との付き合いが億劫になる」という回答が増えているとされている。

DV がもたらす、このような自己肯定観・自信・感情の豊かさ・意欲・気力の喪失は、「症状」という範囲を超えて被害者に変化をもたらす、生きる力や

本来の「自分らしさ」、人とつながる力を奪っていく。被害者はたいてい「以前の自分とは変わってしまった」という感覚をもち、DV被害者の性格特徴は、「被殴打女性症候群（バタード・ウーマン・シンドローム）」として認識されてきた。それは、長期の暴力と貶めによって「学習性無力感」を刻みこまれ、主体性を奪われて感情を麻痺させられた状態である。

レイプの場合、米国の研究によるとPTSD発症率は、女性で46%、男性で65%と高くなる（宮地, 2013, pp. 131–132）。内閣府調査（2012年）によると、被害を受けた人のうち、「心身に不調をきたした」22.4%、「異性と会うのが怖くなった」20.1%、「自分が価値のない存在になったと感じた」15.7%、「夜眠れなくなった」11.9%、「外出するのが怖くなった」10.4%、「仕事（アルバイト）をやめた」8.2%、「引越しをした」6.7%、とある。性暴力が他のトラウマ体験より、PTSD発症率が高い理由として、加害者との距離が近いことが挙げられる。性的な関係というのは肌と肌を接するため、自分の身体がフラッシュバックのきっかけになる。自分の身体から逃れることが不可能な以上、安心できる空間が消失してしまう。それは「在日」3世のように、日本で生まれ育ち、日本以外に居場所をもたない者ほど、日本社会での排外主義のターゲットとなることが精神的に窒息死させられることと似ている。その上、民族差別によって低められた自己評価によって、「悪いのは自分の方だ」と思い込まされ、異議申し立てする発想も奪われている。

性暴力による被害が理解されにくい理由の一つに、「身体的暴力を伴わない場合」も多いことがある（宮地, 2013, pp. 137–139）。米国のレイプ被害者の調査で一番多く報告された反応は恐怖だが、恐怖で抵抗できなかった場合も、「合意があった」と一方的に解釈されてしまうことで、意思をもつ存在として認められず、「人間ではなく、モノ（＝性的対象物）として扱われた」と強い疎外感が生じる。

特に、夫婦・恋人・親子といった親密圏におけるレイプ（意思に反した性的接触）は、たとえ身体的暴力を伴わなくても、他者への支配・権力行使であることに変わりはないのだが、親密圏で起こるだけに、愛情と混同されることが多く、「アタッチメント（愛着）の根本的レベルにおいて混乱」が生じ、「安全なものには近づき、危険なものからは離れる」という生物としての行動の基本さ

え混乱させられ」てしまい、生命が深く傷つけられる（宮地, 2013, pp. 134–135）。

小早川明子は、精神科医の福井裕輝が著書『ストーカー病』において、ストーカー行為を四つのパターンに分類していることにふれ、執着型のストーカーは「自己愛性パーソナリティ障害」がストーカー化の因子となりやすいと推察している（小早川, 2014, pp. 92–93）。そして、「自己愛性パーソナリティ障害は自分を特別視してプライドが傷つくことを極端に嫌い、交際相手をアクセサリーのように扱う」と述べている。戦争や植民地支配で被害を受けた結果の PTSD として、自己愛性パーソナリティ障害を抱えることがあると蟻塚亮二『沖縄戦と心の傷』で指摘されていたことと合わせて考えると、こうした被害を受けて自己愛性パーソナリティ障害を発症した親や恋人が親密圏にいる場合、愛情を向け合うはずの相手から、支配・暴力を受けて「アタッチメント（愛着）の根本的レベルにおいて混乱」が生じるだけでなく、アクセサリー（物品）のように扱われて、自己の尊厳を感じ取れない深刻な状態に陥る可能性がある。

ところが、こうして連鎖する PTSD は不可視なものである。レイプされても「何も減ったわけじゃなし」という言説に象徴されるように、ヘイト・スピーチを向けられても、「殺せと言われただけで、誰も殺されてはいない」とされる。しかし、そこには構造的差別下の「深くて見えない心的外傷」被害が潜んでいることは認識されない。それによって生命が脅かされるような混乱すら起こりうる点で、性暴力や DV とヘイト・スピーチは構造的に類似性をもっているといえる。

植民地支配・戦争・レイプは、相手を同じ人間とみなさず、絶対服従を余儀なくして支配する点で類似した構造をもっている。レイシズム・民族差別と性暴力、その PTSD には「生命力を壊死させる」という類似性もある。

レイシズム・民族差別の対象とされるマイノリティの女性は、権力と支配の構造上、マジョリティの女性以上に、DV・性暴力のターゲットにされやすいと言える。民族差別がある分だけ、その存在と発言には価値がないとみなされ、異議申し立てをしても、傾聴するに値しないとされる。対等にものを言おうとすれば「生意気だ」といわれ、はっきり意思表示するほどハラスメントの

対象とされる。日本人でないこと、女性であることで、幾重にも就職しにくいのに、人一倍、ハラスメントに遭って辞職に追い込まれやすい状況の中を生きている。

マイノリティ女性たちのPTSDが、マイノリティの男性たちより重層的で複雑化しており、もっと生きづらさを感じるとしたら、それゆえ自分の痛みを感じるセンサーを断ち切って、弱音を吐くことも、誰かに甘えることも許されず、どん底から這い上がって「強くたくましく生きるしかない」。「時給生活」が原則であり、休めば生活できなくなるからと余裕なく踏ん張り続ける。休養する発想や文化とは無縁に、積もり積もった過労とストレスを抱えたまま、ひたすら働き続ける。「負けず嫌い」で気丈な意志を培った精神力に、自分自身の身体がついていかれなくなって拒否反応を起こすまで頑張ろうとする。既に分裂の極限状態に近かった、精神と身体がかりうじてバランスを保っているところへ、ヘイト・スピーチという表現の暴力が襲ってくるのである。中村一成『ルポ京都朝鮮学校襲撃事件』には、「今までこんなに頑張ってきたのに、そのすべてが打ち碎かれる、踏みにじられるような思いがした」という表現が何度も出てくる。今まで何とか乗り越えて踏ん張ってきたことを全部台無しにするような破壊力をもっているのが、ヘイト・スピーチだと言える。

繰り返しになるが、重層化、複雑化したPTSDを抱えるため、それに「蓋」をして難しいバランスをとりながら、やっと生き延びてきたところに、ヘイト・スピーチはトラウマ記憶の蓋を開ける引き金となる。個人では選択・変更が困難な属性や所属集団に対するステレオタイプを攻撃することで、ターゲットにされた側にとっては、「逃げ場」がないため、かなりの打撃力を与えることになる。それは自死に至るような致命的な打撃力だ。それは社会における安全、信頼、自分自身の存在価値そのものを根底から突き崩してしまうかもしれないからだ。

ヘイト・スピーチの表現には、「一般的な」差別表現と大して変わらないと誤解されるものもあるが、それがプライベートな場面ではなく、公の場においてなされることで、サイレント・マジョリティを巻き込んで、社会政治的なコンテキストを極右化させる点に、大きな問題がある。つまり、憎悪を扇動したり、表現として許容される範囲に関する規範を破ることで、社会秩序を崩すと

ともに、全体主義を広げる危険性がある。つまり、これまでは人々が議論を重ね、合意の上に構築してきた社会的状況、政治的文脈、歴史的解釈、あるいは権力構造や意味世界までが、ヘイト・スピーチという暴力的表現によって、民主主義からはずれ急激に極右化しうるからだ。

歴史的事実を歪曲し、「慰安婦」にされた女性たちを誹謗中傷する言説も、日本の戦争犯罪と性暴力加害について謝罪するどころか正当化し、社会政治的なコンテキストを極右化させる点で同様である。

Footnotes

- ¹ カナダは2013年連邦議会で人権法を改正し、「第13条第1項 憎悪メッセージ」が、ヘイト・スピーチ規制の対象から削除された（2014年6月から施行）が、その社会的背景として、ハーパー政権が安全保障上アメリカに同調し、ISIL支持者を徹底監視し服従させる体制をとるためには、「特定の民族・宗教集団に対し、憎悪メッセージともとれる否定的な言説が規制されないようにする」必要性があったことが背景にあったとうかがえる。ヘイト・スピーチ規制をするか否かは、反テロ対策と直接的な関連があることから、裏返せば、ある安全保障政策または反テロ対策を可能にすることが、あるヘイト・スピーチを行う目的でもありうる。

References

- 解放新聞社. (1948, Feb. 20). 『解放新聞』.
- 小早川明子. (2014). 『「ストーカー」は何を考えているか』. 東京：新潮社.
- 済州島四・三事件四〇周年追悼記念講演集刊行委員会編. (1988). 『済州島「四・三事件」とは何か』. 東京：新幹社.
- 友田尋子. (2006). 『暴力被害者と出会うあなたへ——DVと看護』. 東京：医学書院.
- 文京洙. (2005). 『済州島現代史』. 東京：新幹社.
- 毎日新聞社. (2014, May. 7). 『毎日新聞』. 東京夕刊9頁.
- 毎日新聞社. (2014, May. 9). 『毎日新聞』. 東京朝刊8頁.
- 宮地尚子編著. (2008). 『医療現場におけるDV被害者への対応ハンドブック』. 東京：明石書店.
- 宮地尚子. (2013). 『トラウマ』. 東京：岩波書店.
- 「4・24を記録する会」編. (1988). 『4・24阪神教育闘争 民族教育を守った人々の記録』. 大阪：ブレーンセンター.
- 歴史学研究会編. (1989). 『日朝関係史を考える』. 東京：青木書店.
- Roach, K. (2015). We Need to Have an Adult Conversation About Security. *Policy Options*. 36 (2). 53–57.
- Saadawi, N. El. (1988). 『イヴの隠れた顔 アラブ世界の女性たち』. (村上眞弓, Trans.). 東京：未来社 = (Original work published 1980). *The Hidden Face of Eve Women in the Arab World*. London: Zed Books.

日本の留学生政策と実践に内在する象徴暴力 敬和学園大学 虎岩朋加

はじめに

本稿では、**condescension**に着目し、留学生とのやりとりの中に、微細なあり方で権力が作用していることを示したい。まず、「象徴暴力」としての**condescension**を検討し、微細なあり方で権力が作用する関係性を理解する。つぎに、日本の留学生政策の歴史を概観し、留学生政策自体が、その当初から、日本と対象国との権力関係に基づいて構造化されていることを示す。留学生政策における権力関係の構造は、各大学における留学生に関わる日常の実践に繰り返されていることを示し、日本の留学生政策と実践が、象徴暴力の可能性を孕んでいることを議論する。

1 象徴暴力 (symbolic violence) としての **condescension**

微細な権力作用を読み解く分析枠組みの提示にあたって、**condescension**という言葉に注目したい。**condescension**とは、両義的な意味のある言葉で、良い意味では、へりくだり、謙遜、腰の低さ、丁寧を意味し、悪い意味では、人を見下すこと、恩着せがましいことを意味する。¹

*Oxford English Dictionary*には、「自発的な犠牲によって、優位であることがもつ特権をさしあたり放棄すること、身分や地位が異なることを丁寧に無視すること」であり、同時に、「劣ったものに対する愛想の良さや恩着せがましさを意味するとある (**Condescend, n.d.; Condescension, n.d.**)。

一方で、対等の立場に立ってへりくだる態度を示し、他方で、恩着せがましさを偉そうな態度を示す **condescension** の両義性の背景には、**condescension** が認識される状況に関わる人びとの間の上下関係や権力関係があると考えられる。上下関係や権力関係を背景として、**condescension** の言動を差し向ける者と、差し向けられる者のどちらのパースペクティブをとるかによって、あるひとつの言動が反対の意味をとることを示す。**condescension** は、権力関係のダイナミズムにいかなる効果を及ぼすかによって、善意とも侮辱とも捉えられるような性質の言葉であると言える。

ある者と別の者が権力関係におかれている場合、権力を持つ者による「善意ある」言葉や行動が、その言動が向けられた者にとっては、自らが劣っていることを暗示的に確認させられる機会となることがある。そのような効果をもたらすものとして、**condescension**の言動を理解することができるだろう。権力関係にある場合、権力を持つ者からそうでない者に向けられる善意ある言動は、場合によっては、象徴的な暴力として作用することがある。

フランスの社会学者であるピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）は、「贈与（**gift giving**）」の関係性の議論を通して、「象徴暴力」の作用を描いている。ブルデューによれば、「贈与」とは、権力が行使され、同時にその権力が隠蔽されるメカニズムのひとつである。返礼が不可能なほどの惜しみない贈り物を与えることによって、与える者は、受け取る者に対して、与える者に対する永遠に続く義務関係を作り上げ、受け取る者を個人的な負債関係において拘束することとなる。与えることとは、ある意味で寛大で善意ある振る舞いの中に、他者を拘束していることを覆い隠す方法だとブルデューは論じる。

ブルデューの議論にしたがえば、権力の行使の形態が、支配する者による無慈悲で非情な、明白な暴力として表現される場合がある一方で、優しさや善意、へりくだりといった暴力として表現される場合もある。後者の暴力は「寛大で、目に見えない暴力で、暴力としては認識されていない」ようなものである（Bourdieu, 1990, p. 127）。

善意ある言動という形態をとった象徴暴力をとおして維持される関係性は、一見、優しさや慈愛に満ちているものとして現われるが、それを被る側にとっては、善意の覆いの下に支配関係が認識されないままに作動しているという意味で、被る行為であり、象徴的な暴力となる。

condescensionは、ブルデューの論じる「寛大で、目に見えない暴力」つまり「象徴暴力」を表現するものと見なすことができる。ブルデュー自身、権力関係にある人々の間での、優しい声がけや、同情に満ちた励まし、善意ある言動を **strategies of condescension** として説明している（Bourdieu, 1989）。ブルデューによれば、**strategies of condescension**とは、「客観的空間において上位の社会的位置を占める行為者が、彼ら自身と他者とのあいだの社会的距離を象徴的に否定すること」である。そのような社会的距離は、「象徴的に否

定されることによって、存在することをやめてしまうのではない」という。むしろ「社会的距離の純粋に象徴的な否定によって与えられる承認から得られる利益を獲得すること」ができる。**strategies of condescension**とは、つまり、象徴的に社会的な距離を否定することで、かえって、隔たりが保証される一方で、その隔たりから得られる利益を積み重ねていくために、その社会的隔たりを利用することを意味する。

外国人との関係において、**condescension**がどのように示されるのか、私が東欧のある国を訪れた際に、英語が主たるコミュニケーション言語であった会合において観察した以下の事例から、考えてみたい。

その会合では、英語を母語とするイギリス人女性が会話をほぼ独占していた。そこに参加していたある日本人女性は、英語でのコミュニケーションを苦手としていたようである。会話への参加はせず、笑顔で座っているだけであった。イギリス人女性は、しばらくのあいだ自分自身の仕事の話について話し続けたあと、その日本人女性の方に顔を向け、話しかけた。話しかけられた日本人女性は、明らかに、イギリス人女性の英語を聞き取ることができないでいた。イギリス人女性は、その場にいた、他の人たちの方に向き直り、「彼女は英語がわからないのは知っていたけど、かわいそうだから、会話に入れてあげるために、話しかけてあげた」と言った。その場に居合わせた他の人たちは、その発言に、「そうね」とうなずいていた。

この事例のどこに象徴暴力を読み取ることができるだろうか。イギリス人女性の発言に見られるように、彼女は「話しかけてあげる」という親切な善意ある行為によって、英語を理解しない日本人女性の社会的立場まで、自分自身を下ろして、象徴的に社会的距離を否定しようとしている。そうすることでかえって確認されるのは、イギリス人女性のその場における絶対的優位性、そして、日本人女性との社会的隔たりである。会話に入れてあげようとする行為は、善意ある行為であり、イギリス人女性自身も自身の行為を善意と見なしているから、その暴力性は隠蔽されることになる。しかし、隠蔽されるその度合に応じて、まさに、その言動はその場において承認され、その結果、イギリス人女性は、日本人女性の劣位性という前提の上に、善意を行う者として、また、絶対的優位な立場にあるものとしての利益を積み重ねていくことができ

る。このように、condescensionの言動は、権力関係覆い隠しつつ永続させる象徴的な暴力として理解することができる。

2 留学生政策に組み込まれている象徴暴力の表現としての condescension

実のところ、日本の留学生政策はその発端から一貫して condescension の側面を持つものであり、象徴暴力が政策自体に組み込まれたものであるということが出来る。本節では、日本の留学生政策の変遷を概観しながら、留学生政策にみえる condescension の側面を明らかにしたいと思う。²

留学生政策は、当然のことながら、日本の国策の中に位置づけられており、国益にかなうようにデザインされていることは言うまでもない。第二次世界大戦末期の1934年から1944年においては、留学生政策は大東亜共栄圏構想の一環として位置づけられていた。「東南アジア七カ国（ビルマ、マレーシア、インドネシア、ブルネイ、タイ、カンボジア、フィリピン）から有力者の子弟等205名を日本に留学させるもので、日本に協力的な将来の指導者を養成するという目的」であった（横田 & 白土, 2004, p. 23）。「日本と東南アジアの友好関係の基礎」という位置づけだが、東南アジア諸国の日本への従属という関係性が政策の基盤にあると言える。実際、本制度は、占領政策の一環として位置づけられる。留学生たちは、現地で日本語教育を受け、渡日後の準備教育後、日本国内各地の学校に進学した。これらの留学生たちは、現地において日本に協力的な指導者として占領地の住民を統率し、占領地での行政の活躍することが期待されていた。

1954年には、文部省が「国費外国人留学生制度」をスタートさせる。「国費外国人留学生制度」は、その名の通り、「日本の国費」により留学生を受け入れるものであり、留学生は大学等の教育施設に在学することとなる。本制度は、現在まで続いており、2014年においては、留学生総数約18万人のうち、8,351人が国費留学生である（日本学生支援機構, 2015）。本制度の当初目的は、東南アジアや中近東の新興独立諸国からの留学生の招致であった。国費による修学援助をとおした発展の途上にある国々の人材の育成という意味合いがあったのである。

1980年代には、「国際化」の名のもとで、政府は、新たな留学生政策を提言

する。1983年のいわゆる「留学生10万人受け入れ計画」である。同提言は、国際理解、国際協調、途上国の人材育成という観点をもつ総合的留学生政策であった。本政策にも、引き続き、途上国援助の意図を見ることができる。

1990年代には、短期留学推進制度が打ち出され、95年の時点では、アジア太平洋地域からの留学生、96年には全世界からの留学生に、渡航費と奨学金を支給することとなった。

これらの留学生支援制度にどのような理念を見いだすことができるのかということを示すために、横田・白土は、江淵による日本の留学生政策理念の特色分析を参照している（横田 & 白土, 2004, p. 29）。横田・白土によれば、江淵は、「①日本の留学生政策には、ヨーロッパ諸国にあるような「経済政策」の視点がかけられていること。および、②「外交戦略」としての明確な位置づけがなく、「世界の中の日本のはたすべき役割」としての「対外援助」の理念を最も強調する立場にたっていること」を日本の留学生政策の特徴としてあげている（江淵, 1997, p. 128; quoted in 横田 & 白土, 2004, p. 29）。

以上のような特徴を横田・白土が参照する江淵は、「主体性の弱い援助理念」とする。留学生政策は、留学生への経済的支援を中心に組織されているため、かれらが日本に滞在することから得られる経済的利益増という観点が強調されることはない。また、留学生政策を通して、外交や経済的側面で積極的な益の追求する姿勢も見られない。むしろ「対外援助」とおして「日本の役割」を果たすということに主眼がおかれている。横田・白土が参照する江淵は、このような「主体性の弱い援助理念」について次のように指摘する。「主体性の弱い援助理念の持つ危うさは、経済的に反映している時にはそれほど問題にならない。余裕があるために責任を果たす（期待に応える）ことに苦労しないからである。しかし、その繁栄に陰りが出始めると、自分たちが苦しいのになぜ留学生を援助しなければならないのかという社会的ムードが醸し出される。その不満は、助けてやっているという傲慢さや権力性として突然表面に現れるのである」（江淵, 1997, p. 128; quoted in 横田 & 白土, 2004, pp. 28-29）。

「援助」という理念は、不可避免的に権力関係を前提とすることとなる。とくに、一貫して日本の留学生政策の根幹をなしてきた東アジア、東南アジア諸国にたいする「援助」というあり方は、当該諸国からの留学生との日本（あるい

は日本人)の関係性を規定してきたと言える。「対外支援・援助」というあり方をおして、実際、日本の留学生政策自体に **condescension** が埋め込まれている。「助けてあげている」という言説は、それ自体「対等なパートナーシップ」という公の見解を裏切る。「対外援助」の留学生政策は、それを通じて、近隣諸国に対する日本の優位性を繰り返し確認する装置、権力関係を繰り返し打ち立てるものとして構成されていると言えるのではないだろうか。「対外援助」の留学生政策においては、常に、留学生、あるいは、留学生を送り出す諸外国は、援助が必要な者(あるいは国)として定義され、その定義に従って、取り扱われることとなる。この意味で、留学生支援政策自体に「象徴暴力」を働かせる可能性が孕まれていると言えるのではないだろうか。

3 留学生支援の実践に繰り返される **condescension**

「対外援助」の理念に裏打ちされた日本の留学生政策の枠組みの内に、各大学における留学生に関する諸々の実践が位置づけられることになる。

大学内でよく聞かれる留学生に関するフレーズとして、「留学生のための……」があり、そのフレーズを冠したさまざまな行事やセミナーなどの実践がキャンパス内に存在している。「留学生のための……」というフレーズを冠した実践には、大きく分けて二つの種類があるように思われる。一つは、異なる文化的社会的実践に関する情報提供という意味で行われる「留学生のための……」という実践であり、もう一つは、援助が必要な者として定義された者にたいする必要以上の援助提供という実践である。前者については、たとえば、日本の大学実践(履修の仕方、授業の受け方、図書館の使い方など)についてのガイダンスやオリエンテーション、ガイドブック、ハンドブックなどが事例としてあげられるだろう。

後者に関して言えば、日々の留学生とのやりとりを含む、留学生を念頭に組織され、実行されるさまざまな実践のすべてに当てはまる可能性があるものである。「援助が必要な者として定義された者にたいする必要以上の援助提供」という実践は、留学生担当者による留学生の扱い方に関わることであり、「必要以上の援助提供」と見なされるかどうかは、ひとえに、個々の留学生担当者、あるいは、その大学の留学生課が、実際に留学生たちとどのように関わっ

ているのかということに依拠することとなる。たとえば一般的なガイダンスからは、留学生は十全に情報を得ることができないだろうという想定のもと、留学生にたいして「特別な援助」を措置することによって、それがたとえ善意からだったとしても、留学生にたいして不必要な不足状態を作り上げる。その際、留学生は、現実には存在しないニーズを受け取ることになる。援助を与える側が、それを必要なものとして、ある意味、そのニーズを押し付けることによって、結果的には、援助を受け取るものを無力な者として定義づけることになる。存在しないニーズを受け取る留学生たちの側からすれば、存在しないニーズを受け取ることが、自らが劣っていることを確認させられる機会となるのであれば、明らかに、その実践は **condescension** であり、象徴暴力が作用する場となる。そのような実践の効果は、依存を永続させる関係性を構築するようなものだと言えるだろう。

このような「援助が必要な者として定義された者にたいする必要以上の援助提供」という実践の事例として、「留学生のためのコンピュータ利用」をあげてみたい。この実践は、端的に言えば、留学生担当者の部屋に留学生のために PC やプリンターを特別に設置して、留学生に利用させてあげるという措置である。通常、学生たちは学生 ID をつかって公共の空間（たとえば図書館のコンピュータ室など）に設置されているコンピュータを利用することが可能であり、また、年間一定数のプリントアウトが可能となっている。こうした公的なシステムについての説明を省略し、「留学生のため」という言説のもとで、特別にコンピュータとプリンターを設置して、それらを使わせてあげるという支援は、留学生を留学生担当者が与える「特別な援助」に依存させてしまう。「特別な援助」をとおして、依存関係に留学生を拘束することとなる。重要なのは、留学生担当者も必ずしも意識的に依存させようとしているのではないという点である。留学生担当者の行為は、あくまで「留学生のため」という善意からなされるものである。しかし、結果的には、学生たちの通常のルート（大学が学生全体へ提供するシステム）へ留学生が向かうことを不可能にする。

「援助が必要な者として定義された者に対する必要以上の援助提供」という意識は、「留学生のための……」というフレーズのもとでおこなわれる前者の「情報提供」の実践にも、結果的に、露呈することがある。例えば、留学生課

が作成する留学生のためのチューター制度に関するハンドブックを、発行する前に、留学生に最終確認してもらった際に、留学生たちから、自分たちが無力であるという想定、自分たちがつねに助けを必要とする存在であるという想定がされているように感じて気分を害したという指摘がなされたという事例がある。担当者は、それを聞いて初めて、自らの先入見に気付いたという。ハンドブック作成は「留学生のために」善意からおこなわれているものである。しかし、それを受け取る留学生の側からすれば、その善意は、かれらを劣位におくものであった。「情報提供」の実践にも、**condescension**の言説が、時に、深くしみ込んでいることがあるということがわかる。

これらの事例に示されるように、留学生たちは**condescension**による象徴暴力が作用する象徴支配のマトリクスの上に、意図されることなく、位置づけられている。だれも、象徴支配を意図的におこなっているのではない。それでも、結果的に留学生をそのように位置づけるようなかたちで、象徴支配が生じてしまっているのである。

そのマトリクス内では、留学生たちは、つねに、助けを必要とする者であり、象徴支配のマトリクスの上に位置づけられているために、留学生たちは、ハラスメントを受けやすい立場にある可能性があると考えられる。ただし、ハラスメントに対する留学生の脆弱性については、事例に基づく慎重な議論が求められるため、本稿においては、その可能性に言及するにとどめたい。

おわりに

本稿では、これまで、留学生を一つのカテゴリーに括って論じてきた。しかしながら、実際は、留学生の実態は多様である。宗教、人種、出身国、ジェンダー、セクシュアリティ、社会階級、いずれの観点からも、留学生のあり様を一概に論じることとはできない。例えば、「国際化」「グローバル化」のための留学生数増加政策（留学生30万人計画）は、特に短期留学推進制度を利用する欧米諸国の学生たちに向けられたものであるといわれている。「国際化」「グローバル化」の外見を整えるために、かれらに「来てもらっている」という解釈をすることも不可能ではない。そうであれば、欧米諸国からの留学生は、留学生政策と実践の権力関係の中で、優位におかれ、同時に、劣位におかれるこ

ともなりうる。象徴支配のマトリクスは、かれらに対して異なるあり方で作用するかもしれない。他方で、欧米諸国からの学生という言い方も、かれらを一つのカテゴリーに括るという結果となる。これについても慎重な議論が求められる。

Footnotes

- ¹ 差別を読み解く分析枠組みとしての象徴暴力については、虎岩（2014）で詳細に論じた。
- ² 本節は、横田 & 白土．（2004）．「第一章 世界の戦略的留学生政策と日本の課題」．『留学生アドバイザー学習生活・心理をいかに支援するか』．京都：ナカニシヤ出版．に依拠している。

References

- 江淵一公. (1997). 『大学国際化の研究』. 玉川大学出版部.
- 虎岩朋加. (2014). 「象徴暴力の一形態としてのコンデセンション（見下し／謙遜（condescension））—教育環境における不平等を論じるための分析枠組み構築の試み—」. 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学専攻）』, 第 61 巻 1 号, 11–19.
- 日本学生支援機構. (2015). 「平成 26 年度外国人留学生在籍状況調査結果」.
Retrieved from http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data14.html
- 横田雅浩 & 白土悟. (2004). 『留学生アドバイザー学習生活・心理をいかに支援するか』. 京都：ナカニシヤ出版.
- Bourdieu, P. (1990). *The logic of practice*. (R. Nice, Trans.). Cambridge, UK: Polity Press. (Original work published 1980)
- Bourdieu, P. (1989). Social space and symbolic power. *Sociological Theory*, 7 (1), 14–25.
- Condescend. (n.d.). In *Oxford English Dictionary*.
Retrieved from <http://www.oed.com/view/Entry/38511?redirectedFrom=condescend#eid>
- Condescension. (n.d.). In *Oxford English Dictionary*.
Retrieved from <http://www.oed.com/view/Entry/38522?redirectedFrom=condescension#eid>

カップケーキの寓話：
ロンドン暴動にみる情動・国家の身体・ホモナショナリズムの接続
飯田麻結

1 はじめに

本論文は、2011年に起きたロンドン暴動を具体例として扱い、近年様々な学術領域で着目されている情動理論、また国家の身体やホモナショナリズムの構築との関係性から考察する。同暴動は、その喚起した二つの全く異なる反応において分析に値する。すなわち、人種や階級、貧困にまつわる差別の構造を暴動の要因として挙げ、それらの改善が社会的変革を導くとする議論が生じた一方で、暴徒やその支持者を「他者」として除外することで、国家が理想とすべき保守的な価値観を強化するような言説が広く取り上げられたのである。本稿は、これらの視点を「ケーキ」と「カップケーキ」という比喻を用いて論じた、エセックス大学の哲学講師であるトム・ワイマンによるガーディアン紙への寄稿記事を主に参照した上で、その二極性が示唆するものに焦点を当てる。暴動に対する対照的なレスポンスから生じた主要な論点としては、暴徒が「感情的な他者」として提示される際のロジックやネオリベラルな消費社会との接続、そして「危機」に直面した国家がその統合性を維持するために利用する、美化された想像上の過去への憧憬が挙げられる。そこで本論文は、近年フェミニズムやクィア理論の視点から語られてきた身体の境界や歴史性に関する議論を、具体的な事象を伴って前景化させた一例として、ロンドン暴動をめぐる諸々の問題を分析する。

その波及が広範囲に渡ったことから、イングランド暴動（2011 England riots）とも呼ばれる一連の出来事は、同年8月4日、ロンドン北部で銃器所持の疑いをかけられたマーク・ダガンという黒人男性が警察官によって射殺されたことに起因する。その2日後、射殺された男性の家族や知人たちによって警察官の行動を不当とした抗議運動が行われるが、当初は穏健なものであったそれは、略奪や放火、破壊行為を含む暴動へと発展し、イングランド各地へ飛び火することとなった。最終的に5人の死者と3,000人以上の逮捕者を出した6日間に及ぶ暴動は、参加者の多くが貧困層に属する若者であっただけでなく、

ブラック・コミュニティや人種的マイノリティへの偏見を浮き彫りにした。英ガーディアン紙とロンドン大学スクール・オブ・エコノミクスによる共同研究によれば、暴動の第一段階の特徴は市民の「怒り (anger)」の発露であった (The Guardian and LSE, 2012, p. 4)。彼らの怒りの矛先は、警察による不当で差別的な取り締まりや、若者の貧困に代表される社会的・経済的な不平等など多岐に渡る。暴動に参加し逮捕された270人に行われたインタビューの中でも、着目すべきは彼らの51%が「自分はイギリス社会の一部だと感じる」と回答したのに対し、ガーディアン紙と世論調査会社ICMが行った大規模な調査では国民のおよそ92%が「そのように感じる」と答えた点である (The Guardian and LSE, 2012, p. 25)。この割合は、24歳以下の逮捕者に限れば80%を超える。また、適切な社会保障を受けられない、職に就くことができない、といった理由で自らを「社会的に不可視な存在」と感じるという意見は特に暴動に関わった若年層に顕著であった。さらに、「何が暴動の重要な要因となったと考えるか」という問いに対して、逮捕者とその他の人々の回答には大きな隔たりがあった。特に「犯罪性」「モラルの低下」「家庭環境の問題」「ギャング」という四つの項目に関しては、それらが「重要な要因である」と答えた市民の割合は逮捕者のそれを20～30%も上回る。その一方で、逮捕者は「貧困」「警察の監視体制」「政策」「マーク・ダガンの死」を主な要因として挙げている。以上の統計からは、この暴動が包含する社会的課題が、個々の要因のみならず国家やコミュニティへの帰属意識における差異へと反映されていると言えるだろう。

また、ロンドン暴動が起きた当時のイギリスの社会的背景は、2007年から大衆紙ザ・サンが使用しているBroken Britainという語に代表される。同語は主に児童虐待、十代の妊娠、若者の失業率などを問題化する文脈で用いられ、これらの課題は国家の統合性 (integrity) を脅かす危機として語られた。さらに、伝統的な家族の形態や反移民といった保守的な価値観と親和性の高いこの語は、2010年に保守党の党首であったデーヴィッド・キャメロンの選挙演説にも引用されている。暴動に対する政府の指針を問われたキャメロン首相は、“Broken Britain”と明らかに対応する「壊れた社会 (broken society)」の分析が最重要の政治的課題であると宣言し、阻害されたと感じる若者の怒りを鎮め

る手段の一つとして「チームワーク、規律、義務、礼節といった古臭く聞こえるかもしれない語」の重要性を説き、「個々人の責任を無効化するような人権に関する捻じ曲がった認知」を政府は見直す必要があると述べた（Stratton, 2011）。2013年に政府が発行した暴動に関する最終報告書には、若者の失業率や教育・福祉へのアクセスの改善が不可欠であるとしながら「暴徒の大半は我欲によって突き動かされ [...] 貧困や人種、経済的状況は2011年8月に私たちの街に起きた事象の弁解としては受け入れられない [emphasis added]」と明記され、諸々の社会的要因は「暴動を引き起こしたマイノリティのマインドセット」の理由とはならないとの記述がある（“Government Response to the Riots, Communities and Victims Panel’s final report,” 2013, p. 15）。すなわち、政府や保守層に代表される暴動批判は、その原因を暴徒のモラルの低下や責任感の欠如に帰するものであり、上述のインタビューでは多層的だと捉えられる様々な要因は、単純化された「我々」と「彼ら」という線引きのために利用されていると考えられる。また、暴動の源泉となった「怒り」の表出に対しても、暴徒を理性的ではなく一般国民の常識に従わない人々として矮小化する傾向が見られる。従って、キャメロン首相がロンドン暴動を「国家に対する警告（a wake-up call for the country）」として言及するとき、「彼ら」は国家の枠組みから零れ落ちることとなる。

以上の点からも、ロンドン暴動を論じるにあたっては、ある社会における例外的な無秩序状態を指摘するのではなく、その背後にある排除と包摂のロジックに目を向けることが重要だと考えられる。そこで同暴動が示唆する課題は、他者の身体と特定の感情を結びつけるような構造や、国家によって理想化された歴史の再／生産などの問いをも喚起した。これらの問いはまた、フェミニズムやクィア理論の文脈で広く論じられてきた情動と身体の変容性や、支配的な歴史に対する抵抗的な視点と密接に結びついている。本稿では、情動の政治性をめぐる議論に焦点を当てつつ、国家の理想（the national ideal）が美化される一方で周縁化される歴史性や、ネオリベラルな市場経済との関連性に関する考察を試みる。

2 ケーキとカップケーキの比喻：ロンドン暴動に関する二つの言説

ロンドン暴動の収束へと向けたキャメロン首相の演説は、貧困や人種差別、若年層の失業率といった社会的課題を、モラルの低下や機能不全の家庭環境などの個人のバックグラウンドに負わせるものであった。それは同時に、暴徒を「模範的な国民」と対置させる意図を含んでいたと言える。恣意的にも見える暴動の要因の矮小化は、ロンドンで進行するジェントリフィケーションや再開発のアリバイとして働くだけでなく、「家族へのサポート」という名目で国家が私的な領域へと介入するきっかけを生むと共に、緊縮財政に基づく社会保障や教育に対するコストの削減などから目を背けさせる効果を有していたとみられる。社会学者であるピーター・ロジャースによれば、暴動が起きたコミュニティの自浄作用や回復力を求める言説には、「市民が中心となったコミュニティにおける意思決定への参加」を促すと同時に、「市民を意思決定の場から排除しながらも、彼ら自身の安全に対してより大きな責任を負わせる」監視の強化に基づく国家主導の統治機構を支持する側面があった（Rogers, 2013, p. 322）。換言すれば、マーク・ダガンの死に始まった抗議運動は、キャメロン政権下における政策を強固にする形で「壊れた社会」の修復を国家的な課題として提示したのである。よって、暴動への対応が示唆するものとは、社会的な包摂を優先事項として掲げる一方で、マイノリティや社会的変革に関する言説を不可視化するという二重性であったと考えられる。

暴動に対する二極的な反応は、トム・ワイマンが2014年4月8日にガーディアン紙に寄稿した記事から象徴的に読み解くことができる。“Beware of cupcake fascism”と題されたこの記事は、「伝統的なケーキ」と「ファッショナブルでカラフルに彩られたカップケーキ」の寓意的な対比からはじまる。前者がスポンジやジャム、クリームからつくられ、「手をべたべたに（wet and sticky）」するのにに対し、カップケーキはきちんと成型され、普段甘いものを好まないような層にも受け入れられる「健全さ（wholesomeness）やノスタルジアの象徴」であるとワイマンは論じる（Whyman, 2014）。では、両者の比較はどのようにロンドン暴動に対する異なる政治的姿勢を示すのだろうか。前者は暴動に参加した、あるいは暴動を支持する人々を、そして後者は暴動を批判する、主に中産階級的な価値観を共有した人々の比喻として用いられてい

る。この比喩が提示する重要な視点は主に三つ挙げられる。第一に、ある階級に属する人々の消費パターンとの対比、次にこの二つの対象が帯びる歴史性への言及、そして両者がいかに特定の感情を喚起するものとして描かれているか、という点である。これらは単に二つの異なる立場を示すだけでなく、その経済的な背景や歴史的含意に対する問いをも投げかけている。まずワイマンは、暴動に付随した混沌状態を「ケーキ的」な反応、すなわちすぐに崩壊する危うさを持ちつつ、変化に対する可能性の表象として定義している。その一方で、中産階級に属する消費者を念頭に置いた「カップケーキ」は、その制限的（*restrictive*）な形象ゆえに、所定の／規定された（*prescribed*）ルールに対して従順な主体や、そのような政治的姿勢を指し示すとし、ワイマンは彼らを、変化を拒絶する「幼児化された大人（*an infantilised adult*）」と描写している。加えて、カップケーキに付随する健全さやノスタルジアといったイメージは、既にイギリス社会における文化的な比喩（*cultural trope*）として機能しているとしながらも、それらは「誰にも経験されたことのない過去、あるいはビンテージ物の洋服が、理想化された1920年代を想起させるために描く『より完璧な過去』」への憧憬でしかないと彼は述べている。

そこで、ロンドン暴動に対する中産階級的な受動的攻撃性（*passive-aggressive attitudes*）は極めて「カップケーキ的（*cupcakey*）」なものとして表出したと考えられる。黒人男性射殺に対する市民の怒りを「不潔な」「好ましくない」ものとして排除し、保守的・中産階級的な価値観を強調した反動は、社会的変革への可能性を断ち切るものであった。このような反応は、TwitterやFacebook上で急速に広まった *#riotcleanup* 及び *#Operation Cup Of Tea* といったハッシュタグに特徴的に表れている。前者は略奪や放火にあった地域を清掃するための有志を募るものであるのに対し、後者は「暴動に参加するのではなく、家でゆっくり紅茶でも飲もう（“*Have a nice cup of tea*”）」という一見穏健な呼びかけであった。この二つのスローガンはしばしば同時に用いられ、暴動に参加した人々を感情的な他者として描くと共に、暴動そのものが国家の伝統に反する態度だとして非難する姿勢を反映している。新しい箒を手にした何百人もの人々が通りを歩くというイメージは政府の報告書にも取り上げられたが、地域の「浄化」というプロジェクトは文字通り、また比喩的

な意味でも暴動の残した痕跡を抹消する試みであった。彼らの理想とするビジョンは、国家の歴史や伝統と結びついた秩序の形式に則り、「伝統的」「イギリス的」とされる価値観を課すことでそこに帰属しない他者を排除し、「片づける」ことにも投影される。また上で挙げた受動的攻撃性は、第二次大戦中イギリスのプロパガンダ・ポスターとして提案され、実際に使われることがなかったにも関わらず今や代表的なモチーフとなった“Keep Calm and Carry On”という標語が示す「あらゆる状況に対する最も適当な反応は、現状を受け入れ、怒りや誇りを飲み込み、『唇をかみしめる (“stiff upper lip”)』態度に表されるような理想の英国人氣質 (Britishness) に従って進むこと」と共通するとワイマンは批判している (Whyman, 2014)。

ひとえに保守的な暴動への対応が、美化された歴史に基づくナショナル・アイデンティティとの同一化へと向かうという側面は、もはやカップケーキが新しい高級な嗜好品であることをも忘れさせてしまうという点で、ワイマンの比喩は痛烈な皮肉として機能する。また着目すべきは、中産階級的なレスポンスが彼ら自身の感情の抑圧だけでなく、とりわけ「怒り」の主体としての他者への非難という形で現れ、両者を差別化する点である。以下では、特定の身体に付随する情動・感情の政治性や歴史性、コロニアリズムとの関連性を論じた代表的な理論家であるサラ・アーメッドの議論を主に扱い、ロンドン暴動への異なる反応が明らかにした人種や階級の分断とネオリベラルな市場経済との共謀関係、またその過程で正当化される歴史性に関する課題が、クィア・ポリティクスの視点からどのように語られうるか読み解く。まず初めに、ワイマンの提示したケーキとカップケーキのメタファーが包含する情動理論との共通項を、前者が「粘着性」「余剰」といったキーワードによって示唆する政治的な可能性と関連づけて議論する。次に、同暴動への批判が投影する「国家の統合性」という幻想が「共有された歴史性」を要請するという点に触れ、そのような欲望がオルタナティブな歴史的語りを求める動きとどのように反発しうるのか、そして歴史的なモーメントとしての現在を構成するのか指摘する。そして最後に、中産階級的な価値観に基づいた受動的攻撃性とネオリベラルな消費主義の接続に関して、ジャスビール・ブアが導入したホモナショナリズム概念を参照しつつ、両者の共犯関係が理想化された国家のあり方を通じて温存される構造

について批判的に論じる。

3 余剰・変容・粘着性：ケーキの政治的可能性と情動理論の交差

上記の記事においてワイマンは、ロンドン暴動に対する中産階級的な受動的攻撃性をファシズムと呼び、同語が喚起する全体主義国家の脅威という一般的なイメージを日常的な文脈へと拡張した。また彼は、ファシズムを「危機に対するある種の反応」と定義し、変化の可能性へと向けられた感情の抑圧を通じて、既存の社会構造を維持しようとするマジョリティによる反応をその最たるものとして挙げている。そのようなファシズムの出現は、レイシズムに対する批判をニッチな主張（*niche-appeal*）として封じ込め、中産階級的な価値観の押しつけに伴い新たな政治的可能性を遮断するといった暴力性をも孕んでいる。暴動の要因についての考察が階級や人種、貧困に関する異なるオリエンテーションを示したことは、前述のガーディアン紙によるアンケートからも明らかである。だが一方で、保守的な視点からそれらの差異を隠蔽し脱文脈化するような反動が起きたという側面は、そのような反動が全体主義的なイデオロギーを帯びることを示しているのである。また、ワイマンの提示した近代的なファシズムの形態は、暴動に参加した人々の社会的・文化的アイデンティティの軽視にはじまり、「彼ら」の怒りを「イギリス的でないもの」として国家の枠組みから排除することで機能する。そこで、ケーキ／カップケーキというメタファーは特定の消費パターンと呼応するだけでなく、消費する・食べる（*consume*）対象という二重の意を含む。そして後者は既存の価値観——つまりそれを好む主体が、「よりよい（*nicer*）世界に対するビジョンは、権威者からの命令（*injunction*）から派生するものであり、正しく行動し、笑顔でやり過ごそうという試み」を支持する点において——の内面化と共に、身体化された規範のあり方を含意していると考えられる（Whyman, 2014）。

そこで、ワイマンが「ケーキのラディカルな可能性」を論じるにあたって用いたことば、すなわち余剰（*excess*）、粘着性（*stickiness*）、そして「オルタナティブな可能性に対して開かれることへの純粋な喜び」は、情動の政治をめぐる近年の議論においても非常に馴染み深いものである（Whyman, 2014）。現象学や認知心理学において主に論じられてきた「情動」概念は、イヴ・セジ

ウィックによる論考を一つの契機にフェミニズム・クィア理論の文脈で広く扱われることとなった。¹ また、身体物質性をプロセスとして捉える新たな唯物論との接続が、関係性や境界の流動性に焦点を置く情動理論の発展へと貢献したとも言える。しかしその定義は多岐に渡り、以下は様々な理論家がどのようなことばを用いて情動の性質を論じているかを挙げた一例である。

[...] 余剰、自律性、非個人的なもの、[...] 粘着性、集合性、偶発性、閾値あるいは転換点、潜在性（または未来）の遍在性、開かれたもの、クリシェや慣習の領域を循環する活気に満ちた非一貫性 [...]

(Seigworth and Gregg, 2010, p. 9)

とりわけ情動が「余剰」としてしばしば論じられる際に、あらゆる構造やナラティヴを越える可能性を提示するものとして描かれる (see Masumi, 2002) のに対し、ベン・アンダーソンによる「情動は『コントロール』という名を与えられた権力の新たなモダリティの対象であると同時に、互いに共鳴し干渉しあうような権力の様々な形式によって上書きされてきた」という指摘は非常に重要である (Anderson, 2010, p. 183)。言い換えれば、情動を余剰として捉える言説は、その不確定性ゆえ新たな可能性への指向と結びつくものの、既存の権力構造と切り離して論じることが難しい。それはロンドン暴動に関わった人々の怒りが多くの社会問題を浮き上がらせたと共に、彼らを「感情的な他者」として排除する言説が働いたことと密接に関連づけられる。そこで「余剰としての情動」は、既存の政治的枠組みから零れ落ちるものの持つ可能性だけでなく、脆弱性や傷つきやすさをも帯びることとなる。以上の論点を踏まえた上で、以下では「国家の危機」と捉えられる事象が、「怒り」や「嫌悪」に代表される感情を情動の政治としていかに利用しつつ、脅かされる「国家の身体」というレトリックを導入することで、ナショナリズムの称揚と特定の身体を持った「他者」の排除というナラティヴを生産するのか考察する。

The Cultural Politics of Emotion の冒頭で、サラ・アーメッドは亡命希望者や移民に対する脅威を主張する **British National Front** のポスターを例に挙げ、「騙されやすい英国 (Soft Touch Britain)」の社会保障の恩恵を受けようとす

る「彼ら」によって国家の境界が簡単に崩壊するというレトリックについて論じている。同ポスターは大文字の「あなた (YOU)」へと向けて書かれており、個人の身体と侵食される国家の身体は物質的なレベルにおいても容易に混同される。そして名指される「あなた」と同一化することは、国家の敵と見なされる他者に対する怒りといった特定の感情を共有することでもある。また、ここで述べる「国家の身体」という概念は、単に国家の地政学的な境界を示すのではなく、ある歴史性や家族の形態、人種に関する規範が具現化したものであると同時に、その内部に取り込まれた人々のアイデンティティを表象する。すなわち、「白人の国家」の危機は個々の「白人の身体」に対する脅威として容易にすり替えられるのである。しかし、そのような集合的な身体は、それに属さない「他者」の身体に意味や価値が与えられることによって初めて生じる。そしてその手続きは、「行動の反復や、他者へと向かう、あるいは離れるような指向性」を通じて感情が身体の表層を構成することに基づく (Ahmed, 2004a, p.4)。例えば、国境が移民によって侵犯されるという危機 (border anxiety) は、他者との近接性 (proximity) によって自らの身体的な境界が危ういものとなるという不安を包含する。以上の文脈において、国家の「騙されやすさ／柔軟性 (softness)」は、他者によって介入・変容される境界の脆弱性を意味するだけでなく、国家が女性的なものに見なされるというリスクを暴くとアーメッドは指摘する。その結果、国家に対する「暗黙の内に頑健で (hard) タフであること、つまり感情的にならず、より閉ざされ、簡単に動揺してはならないという要請」が働くのである (Ahmed, 2004a, p. 2)。この引用は、ワイマンによるケーキとカップケーキの比喩と明確に呼応するだけでなく、暴徒への対応について「厳しい愛情 (tough love)」が必要だと述べたキャメロン首相のコメントに反映されている。つまり「敬意や互いへの尊重だけでなく、愛情が欠如している。しかし、彼らが法を破るほど度を越したとき、私たちはタフでなければならない」という主張は、国家がその境界を維持しつつ他者のコントロールを行うためのレトリックとして「愛」や「頑強さ」が用いられる点を示唆しているのである ("Rioters need tough love, says David Cameron," 2011)。とりわけ手をべたつかせる「余剰」によって特徴づけられ、社会的変革を希求する人々を象徴するケーキに対し、「カップケーキ

的な」きちんと成型された外見が自制や潔癖さと結びつけられるという視点において、後者は理想化された国家のモデルとして機能する。そこで、ロンドン暴動の直後に見られた有徴化された他者（若者・非白人・貧困層）に対する受動的かつ攻撃的な反応は、脅威に晒された国家の騙されやすさ／柔軟性と、理想とされる頑強さの両者を露呈する。すなわち、中産階級的な主体が厳格な規範を他者に課するという攻撃性と表裏一体であるような、それを覆い隠すような穏健さや受動性は、対立項としての「感情的な他者」を生み出すことによって彼ら自身を特権化するのである。

また、国家の境界を脅かす他者の再／生産に寄与する戦略的な反応は、アーメッドによる **passion** と **passivity** という語を用いた感情の抑圧と受動性に関する考察と不可分である。すなわち、「受動性に対する恐怖は、感情性 (**emotionality**) に対する恐怖と結びつき、弱さは他者によって形づくられるという傾向によって定義される」という側面は、暴動に対する批判が「冷静さ (**calmness**)」を強調した点から垣間見えるように、自らの感情性の隠蔽と、感情を他者に付随させるような二面性を生み出す (Ahmed, 2004a, p. 2)。さらに、暴徒が「片づけられる (**clean-up**)」対象、あるいは嫌悪 (**disgust**) され排除される対象として見なされる際に、ワイマンが「伝統的なケーキ」の例を用いて挙げた粘着性や「手を汚すもの」というイメージは、アーメッドが提示した重要な概念である粘着性／くっつきやすさ (**stickiness**) と重なり合う。嫌悪の生産と粘着性のアナロジーについて、アーメッドは「粘着性は皮膚の表面が危機にさらされたときのみ、つまり何かべたべたするものが私たちにくっつくこうとする ("**what is sticky threatens to stick to us**") とときのみ極めて不快なものとなる」と述べている (Ahmed, 2004a, p. 90)。つまり嫌悪の感情は、何か異なるものを取り込む際に引き起こされる「表層」の変容によって生じると考えられる。だが、他者を内面化するプロセスは同時に、主体が存続するための条件となるというジレンマを顕在化する。そのようなジレンマは、「(ある対象を) 嫌悪することは結局のところ、彼／女が拒絶したまさにそのものによって影響を受けている (**to be affected**) ことを示す」という構造を暴き出すのである (Ahmed, 2004a, p. 86)。加えて、身体的な近接性に基づき歴史的に「汚れ (**dirt**)」とみなされてきた他者を取り込むという実践は、境界

の変容に対する恐怖を呼び起こす。そのような実践はまた、ジュリア・クリステヴァがアブジェクション概念を用いて、主体の形成は「『私』と対立するもの」の棄却に依拠するが、排斥される対象は主体と完全に切り離されえないとした議論を反映する (Kristeva, 1982, p.3)。そこで「私 (the I)」と「私ではないもの (the not)」との関係性は、あらかじめ措定されているのではなく、常に化する。従って、「粘着性」が主体と客体／対象を結びつけ、情動の転移を通じて主体を変容させる力を持つという寓意は、何か異なるものとの接触や邂逅が持つ潜在性を意味するのである。

しかし、感情が付着する対象の他者化と内面化のあいだを横断する言説は、単に流動的で変化を促すものではなく、「粘着性」が特定の歴史性を帯びるという点は看過してはならない。すなわち、主体が接触を通じてある対象を「嫌悪すべきもの」と見なす過程は、決して自然発生的なものではなく、粘着性は「身体や客体／対象、そして記号との接触における歴史性の結果」として捉えられるのである (Ahmed, 2004a, p. 90)。そして「我々」「理性的な、感情的でない人々」といったカテゴリーもまた、接触によって問い直され、新たに名づけられると共に、そのような問いは「他者」の身体が継承するオルタナティブな歴史性へと目を向けさせる。ワイマンの比喻を用いれば、あたかも「正当な歴史」を主張するカップケーキ的な主体は、より多様かつ複雑な他者の歴史を隠蔽し、余剰として切り捨てるのである。一方でケーキに象徴される政治的可能性は、主体の形成にとって必要不可欠であるような、切り捨てられてきた周縁的な歴史性に関する省察を促す。そして「手をべたべたにする」ケーキの粘着性が変化の可能性と同一に語られるとき、感情性に対する恐怖によって維持される中産階級的な価値観を帯びた「国家の身体」は、そこから排除された他者としての暴徒との近接性によって常に変容しうることを意味するのである。それは暴動の痕跡を「片づける」いくつかのプロジェクトに参加した人々が、暴徒の怒りの痕跡の抹消だけでなく、自らの「冷静さ」を様々な手段によって主張することで、暴徒との差異の強調を試みた点からも見受けられる。そこで次節では、感情と身体性の結びつきを正当化する歴史的な語りが、どのように「国家」の名の下に動員されるかについて詳細に論じる。

4 砂糖漬けの過去：危機の政治における歴史性の構築

前節では「他者」の身体と特定の感情の結びつきの固定化が、「我々」「彼ら」という個の身体に基づく分断のみならず、その背後に存在する国家の境界／表層の保持と密接に結びつくという点について論じた。本項では、国家が危機に直面した際に、理想化された歴史的な語りがどのように導入されるかについて議論する。そこで、ワイマンがカップケーキを「誰にも経験されたことのない完璧な過去」へのノスタルジアを呼び起こすものとして描出している点は重要である。また、カップケーキを好む人々がその「素晴らしさ (niceness)」を「現実世界に欠けているもの」として認識している、というワイマンの指摘は、歴史性の欠如をも意味している。すなわち「カップケーキ的な」過去への憧憬は、保守的かつ中産階級的な主体が、想像上の歴史性をいかに「国家の理想」を達成するための条件として取り込むかという問いを含んでいるのである。以上を踏まえた上で、ロンドン暴動に対する反応が特定の歴史性を正当化し「他者」の排除を肯定する図式について、オルタナティブな歴史的な語りを求める「クィアな歴史編纂 (queer historiography)」や、希望と不可能性に満ちたパラドクシカルな「現在」の維持へと向かう「残酷な楽観主義」の視点からの考察を交えて以下では批判的に分析する。

ロンドン暴動と理想化された過去が結びつけられた一例として、地域の問題解決に取り組む社会的企業 (CIC) である Community Resilience UK のレポートには、以下のような文言がある。

私たちのインスピレーションは、第二次世界大戦中に生まれ、それ以降イギリス文化に深く根付いた "*Blitz spirit*" であり、それは最近では 2011 年のロンドン暴動後の清掃 (clear-up) にも表れている。この精神は、我々が攻撃される前にそれに備えて事前に考えることを要求する。また、誰もが彼ら自身のみならず他者の面倒を進んでみようとする態度をも意味している。[...] これはストイックな勇気と忍耐力に基づく精神であり、「コミュニティ」や真の公的サービスの根幹となるものである [emphasis in original]。 (Community Resilience UK, 2012)

重要なのは、同CICの活動がコミュニティの活性化を促すことを目的とする際に、用いられる比喩が第二次世界大戦まで遡った国家の精神性を理想として描いている点である。前述のピーター・ロジャースは、暴動の帰結が市民間の監視や情報共有の強化へと繋がることを危惧した上で、上記の引用に触れ「個人の行いを馴化させることは、『英国人気質 (Britishness)』として美化された理想に対する順応性を奨励するための手段となる」と指摘している (Rogers, 2013, p. 326)。ワイマンが“Keep Calm and Carry On”という戦時中のスローガンを挙げて中産階級的な主体の言動を描写したのと同様に、Britishnessという理想はある歴史的なモーメントを強調することで具現化すると考えられる。だが一方で、基準となる歴史的な出来事、およびそれが示唆する「理想的な国民性」は政治的なプロパガンダに容易に回収される。エリザベス・フリーマンは、国家によって与えられうる公的な歴史 (official history) が基づく時代区分の指標について、次のように述べている。

国家から個人に至るまで、中産階級的でリベラルな主体は、ともすればすぐに人種化・ジェンダー化され、また性的なものとされるような、狭小かつ進歩に関するクロノポリティクスの枠組みの内部で定義される。例えば西洋の「近代」は、茶色の肌をした (brown-skinned)、女性的な、そして性的に倒錯したと見なされる緩慢な前近代に対して、それ自身を進歩的なムーブメントとして表象する。物質的なレベルにおいて、大規模な (large-scale) 時代区分のメカニズムは、何が社会形成のプロセスとして、あるいは個人の人生として生きられるかを形づくるのである。

(Freeman, 2005, p. 57)

言うまでもなく、以上の歴史生成のプロセスにおいて中心となるのは特権化された主体であり、彼らの生は「意味あるもの」として公的な時間軸に記録される。それに対して、進歩のロジックやリニアな時間性に依拠しない、ともすれば失われ忘れ去られる個の身体的な経験は、オルタナティブな語りとしての歴史を考察するための重要な視点を提示する。上記のフリーマンの論文の題目“Time Binds”が示すのは従って、過去に存在した形象との「繋がり (connec-

tivity)」のみでなく、「愛の絆——今ここにおけるアタッチメントだけでなく、時間的・空間的な障壁をも越えて築かれた絆」や、「どこかへ『向かう』こと」、そして同時にある時点に「捕らわれていること」を意味する (Freeman, 2005, p. 61)。多方向へと向かう複数の歴史性は従って、次節で論じるネオリベラルな進歩の言説と常に対抗する可能性を有しており、支配的な歴史から取り落とされてきたものを掬い上げる役割を担うのである。

同時に、歴史に関する語りの複数性は、語り手のアカウンタビリティを重要な問いとして示す。例えばダナ・ルチアーノが「クィアな歴史編纂」として提示した試みは、「異なる形で時間性と出会うことを約束しながらも、わたしたちはこれらのクィアな歴史と熱心に、だが一定の距離を置いて向き合わねばならない」という課題を残している (Luciano, 2011, p. 149)。また、クィアな形象と近代的なセクシュアル・アイデンティティの歴史についての著作で知られるヘザー・ラブは、歴史横断的な (cross-historical) ナラティヴの連続性を重視し、過去を美化するような言葉で語る批評家について批判している。ラブによれば、過去と向き合うことの困難は、それが常に矛盾を帯びている点にある。つまり「困難な過去と後ろ向きに (backward) 対峙すると同時に、『喫緊の、拡大する政治的論点』へと前向きに (forward) 目を向けなければならない」という二重の要請が常に立ちはだかっているのである (Love, 2007, p. 18)。過去へのアプローチが、ある形象の現在へと残した痕跡を辿ることを意味するのであれば、歴史の語り手との同一化の不／可能性や差異は見落とされてはならない。そこで、過去の理想化や恣意的な領有へと警鐘を鳴らす両者の議論に対し、ロンドン暴動という「危機」における想像上の過去へのノスタルジックな憧憬や同一化が「失われたはずのもの (what must have been lost)」の獲得を意味し、中産階級的で普遍的な価値観を維持するために収奪される危険性を帯びるという点は考察に値する。では、ワイマンが「想像上の過去」と呼ぶものに対するアタッチメントや欲望は、どのように構築されるのだろうか。

ローレン・バーラントによる「残酷な楽観主義 (cruel optimism)」という概念は、集合的なファンタジーを読み解くための重要な鍵となるだろう。同語は、ある欲望の対象に対するアタッチメントが、主体の存続を可能にしつつも

脅かすという二つの側面を包摂することを意味し、「(アタッチメントの) 形式の継続性は、ある主体が生存し続け、この世界に存在し続けるという期待が意味するものに対してもある種の継続性を与える」楽観性の形態を表す (Berlant, 2011, p. 24)。ここで挙げる「アタッチメント」とはすなわち、関係性の構造 (a structure of relationality) を意味し、連続性 (continuity) や繋がりを維持しようという欲望の根幹となる。² バーラントは、あらゆるアタッチメントは楽観的であるとするものの、それが対象／場面 (object / scene) に投影された可能性の維持へと向かうとき、残酷なものとなると指摘している。とりわけそれらが「よき生活というファンタジー (good-life fantasies)」を構成すべく動員されるとき、その対象としてはリベラルな資本主義社会が約束すると考えられるもの、すなわち社会的・政治的平等や社会階層の上昇、職の安定、永続的な親密性などが挙げられる。こうした対象の希求と結びつけられる「日常性 (ordinariness)」は、「多くの力や歴史が循環し、『引き継がれる』ものとなる交差の場」であり、「新たな生のリズム——いかなるときでも規範や制度、様式へと凝固しうるリズム」を生み出す (Berlant, 2011, p. 9)。ここで述べる「日常性」とは、可能性に満ちた「永続的な現在 (an infinite present)」を支えるための概念であり、決して達成されざるものとして維持されるという残酷さを帯びるのである。さらに、バーラントが日常性を「危機によって形成された袋小路」と定義している点からも、危機の政治と想像上の日常性は互いに相補的な役割を果たす。だが言うまでもなく、「危機」とは既にそこに存在するものではない。ロンドン暴動から導かれた「国家の危機」という言説はむしろ、「事実／形象／出来事を解釈し、独り歩きするようなフェティシズムの対象——つまり脅威の根源として解釈することができ、国家が宣戦布告する根拠となる対象——としてそれらを変容させる」ための宣言 (declaration) を通じてパフォーマティヴに構築されたものだと考えられる (Ahmed, 2004b, p. 132)。そして危機に組み込まれた日常性は、危機がもたらす苦痛や暴力を保持しつつ、主体の存続を約束する対象を「歴史上の確かなエビデンス」として成立させることで永続的に機能するのである (Berlant, 2011, p. 54)。興味深いことに、「危機の生産」を通じたファンタジーの共有は、リベラルで中産階級的な主体が描く理想を留め置くだけでな

く、それにアクセスすることができない「他者」の希望を引き延ばすことによる抑圧へとも転じる。すなわち、希望と不可能性を内包するアンビバレントで残酷な楽観主義は、欲望される対象／場面へと歴史的な意義を与えつつ継続されるのである。

「よき生活というファンタジー」への欲望は、「歴史性の『不在の存在（'absent presence' of historicity）』」が暫定的な「平凡で善良な主体」を生み出すことによって、同一化と理想化の境界を曖昧にするというアーメッドの主張とも関連づけられる（Ahmed, 2004b, p. 120; 2004a）。前節では「国家の身体」と同一化されるような個の身体が、情動的なプロセスを経て生産される点について述べたが、国家の理想を強化するような「想像上の歴史」と規範的な主体は相互依存的な関係性にある。重要なのは、同一化があらかじめ欠如に基づいている——ある対象へと接近する欲望に依拠する同一化の過程には、主体が未だに「その対象」ではないという条件が課されるという点である。国家に対する「愛」という名目で正当化される同一化の欲望が、「よき生活」を約束するはずの国家の失敗をも覆い隠すという側面について、アーメッドは以下のように述べている。

希望と、「国家はこうであったかもしれない（how it could have been）」というノスタルジアを介して人は国家を愛する。彼／女は国家への愛が報われなかった、あるいは今後も報われないことを認識する代わりに、国家を愛し続けるのである。（Ahmed, 2004a, p. 133）

国家への愛が報われる、あるいは「よき生活」の達成という形で国家から愛が返還される（returned）という希望は、国家に対する愛の「投資（investment）」が引き延ばされる条件ともなる。つまり「国家への愛はその希望を次世代へと繋ぐ、すなわち理想の遅延が『愛の返還』というファンタジーを維持する」のである（Ahmed, 2004a, p. 131）。バーラントとアーメッドの議論はいずれも、過去へと投影した理想が未来において達成されることを望む行為が、一方で理想化されたナラティブを提供する「国家」の地位をより強固にすることを示している。ワイマンの記事で言及されている「経験された

ことのない過去」とノスタルジアの結びつきはつまり、欠如を前提とした達成不可能な理想を描くことで、国家を継続させる次世代を再生産する装置としても機能するのである。その結果、過去への憧憬は「中産階級的でリベラルな主体」の価値観を、歴史的な正当性を帯びた普遍的で集合的な概念として維持し、変化の可能性や異なる歴史的な語りを「残酷にも」遮断することとなる。

5 「カップケーキ的な消費社会」とホモナショナリズムとの親和性

ロンドン暴動に対する保守的な反動が、ノスタルジアに基づく美化された過去や「他者」の感情の抑圧によって達成される国家の理想を浮き彫りにしたのに加え、中産階級的な消費パターンとジェントリフィケーションの図式が前景化したことは着目に値する。暴動の直後、ハーバード・ビジネス・レビュー誌は「ロンドン暴動とネオリベラリズムの勝利」と題された記事を掲載した。すなわち、緊縮財政や様々なインフラの民営化に代表される新自由主義的な政策は、暴動の要因と考えられる経済的格差を生み出しただけでなく「物質的な成功と消費が人生において最も望ましい要素である、という絶え間ないイデオロギー的な強調」を繰り返し行うことで、その「勝利」は暴徒までも「そのシステムの内部で成功せずとも、同じ価値観を適用する人々」として取り込むことを意味する (Milanovic, 2011)。また、ジグムント・バウマンは「我々は誰もが消費者である」とした上で、彼らの怒りが略奪へと向かった点について、次のように論じている。言わば「消費者としての享楽が満たされることが満ち足りた人生を意味する」社会において、彼らは「欠陥のある (defective) 消費者」であり、「憤怒や屈辱、恨みや妬みは『持たざること』、または彼らに持つことを許さないものによって生じる」のである (Bauman, 2011)。加えて、暴動のさなかで行われた略奪行為がとりわけショッキングなものとして報道されることで、暴徒の動機を脱政治化するという意図だけでなく、「彼ら」もまた中産階級的な市場経済への参与を望んでいるという主張が広まることとなった。そこで、略奪の原因は貧困ではなく「彼らが手に入れられるはずのない、にも関わらず重大な価値を置くもの」を強奪するというモラルの欠如や犯罪性へと置き換えられる。つまり消費者としてのステータスが最も重要な市民の条件となる社会において、「(略奪に参加した) 若者が最もあからさまな富や権力

の象徴に予先を向けると同時に、実際は彼らもその一部を望んでいる」という構図は、その根底にあるネオリベラルな価値観を温存するのである (Wall, 2011)。よって、ロンドン暴動に対する批判とのネオリベラリズムの関連性は、保守的な家族観やモラルの強化、自己責任の論理などの視点から広く議論されてきた一方で、特権的な消費主義が及ぼす影響とその含意という側面からも注視する必要がある。

ワイマンは前述の記事で“Reasons to Believe” というコカ・コーラの企業キャンペーンに用いられたイメージを、特定の消費行動に基づく「カップケーキ的な楽観主義」の具体例として挙げている。2011年に開始された同キャンペーンは「よりよい世界を信じる理由はある」という共通のスローガンの下にいくつかの短いビデオで構成され、各国によって使用される映像の違いはあるものの、基本的には対照的と見なされる二つのイメージと短いフレーズの組み合わせが続く。2013年にイギリスで放映されたバージョンでは、一台の戦車と何千個ものケーキ、警察から逃げる一人の人物の映像と献血に協力する何百人もの人々、一枚のレッドカードと12回のお祝いのハグ、といった映像が対比されている。中でも最もあからさまな対立項は、憎悪と愛の表現としてキャプションが付けられた二つのイメージである。前者はロンドン暴動の報道映像に“a display of hatred”という文字が重なり、後者は“5000 celebrations of love”という表示とともに白人男性二人の挙式の映像が流れることで、両者の対比が行われている (see Figure. 1)³。このキャンペーンのイギリスにおけるマーケティング・ディレクターであるブリッド・ドロハン＝スチュワートは、その戦略が「彼らと密接に関連したトピックについて、人々に感情的なレベルで語りかけ、幸福と楽観主義を広めること」を目的としていると述べ、「誰もが同ブランドに対して、幸せな記憶を呼び起こすようなノスタルジックなつながりを持っている」という仮定に基づくとしている (Faull, 2013)。この広告が多重に問題含みであると考えられるのは、「ネガティブ」なものとして描かれた出来事を恣意的に脱文脈化しているだけでなく、感情を喚起することを意図した語りが、何が彼らの生活に「関連する」トピックであるのか予め提示し、支配的な価値観を反映・強化しうる点である。さらに、幸福な記憶と結びついて立ち現われるノスタルジアは、強迫的にも「よりよき未来」へと向

かう指標として繰り返し用いられるのである。

では、ロンドン暴動の映像を用いた同広告は、マーク・ダガンの射殺に対する「怒り」の意味をも取り去ったのだろうか。また、「憎悪の表出」として描かれた略奪行為の、憎悪の対象とは何だろうか。望ましい「愛」の称揚と対照的に、暴動の発端となった「怒り」があたかも「憎悪」の露呈と見なされることによって生じるのは、それが「我々」の暴徒に対する憎悪が、

「彼ら」が示した「我々」に対する憎悪として読み替えられるようなレトリックである。その他のイメージからも明らかになる通り、比較された二つのイメージの前半は「望ましくないもの」、後半は「好ましいもの」として描かれている。しかし、暴動の一瞬を切り取った映像において、暴徒は「望ましくないもの」として描写されている一方で、憎悪する主体は「我々」＝マーケティングの対象者ではない。反対に、「彼ら」が憎悪を表す（display）主体として記述されることで、その対象は我々＝消費者であるかのような錯覚させる効果を持つのである。「ひとつの」憎悪の表現が5000回の愛の祝福とどのように対応するのか、そして「統計に基づく」とされた数字がいかにある感情の強度や優劣を正当化するのか、という問いに加えて、とりわけ愛と憎悪の対称性についてはアーメッドが「表層化（surfacing）の効果」と呼ぶ、「他者に対する否定的なアタッチメントは同時に、例えば『白人の』というシニフィアンとの反復を通じて構築された、想像上の主体に対する肯定的なアタッチメントとして再定義される」情動的なプロセスにより補強される（Ahmed, 2004b, p. 118）。コカ・コーラの広告においては、白人のゲイ男性が「愛」のシニフィアンとして描かれている。よって同キャンペーンは、ある対象と結びついた「憎悪」が数値においても強度においても「愛」によって克服されるべきだとする要請を示唆し、両者の分断は「よりよい世界」への希望の布石として機能するので

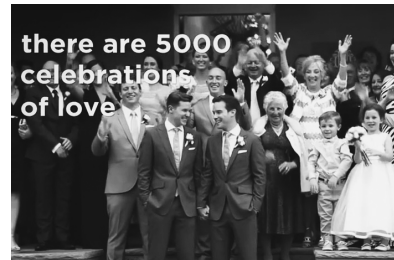


Figure 1. "Coca-Cola indulges gay couple in new ad — in some versions." (2013). Retrieved from <http://dot429.com/articles/3747-coca-cola-includes-gay-couple-in-new-ad-in-some-versions>⁴

ある。

消費のパターンや文化的固有性に裏打ちされた感情の政治的動員は、これまでに論じたロンドン暴動に関する言説が国家の統合性を主張するために用いたロジックと共犯関係にあると言える。中産階級的な価値観の肯定と結びつく「カップケーキ的な楽観主義」は、消費行動を通じてその優位性を常に維持するのである。そこで、暴動の映像に対置された同性婚のイメージについて、ワイマンが「同性パートナーシップに関する、政府の周回遅れの認識が解き放った愛の潮流」として着目している点は非常に興味深い（Whyman, 2014）。前節で扱った「理想化された過去」へのノスタルジアと、コカ・コーラの広告に代表される進歩のナラティブは一見相反すると思われるが、いずれも社会的課題を他者に負わせ、彼らを啓蒙あるいはジェントリフィケーションの対象とすることで成立するのである。さらに、「よりよい世界を信じる」という指向性こそが、これまでに論じた受動的な政治的姿勢を裏付けるものとして働くと考えられる。以下では、ジャスビール・プアによるホモナショナリズムの議論を引用し、国家が正当化する支配的な価値観と消費の関係性を考察すると共に、その背後にある他者の排除というレトリックに言及する。

まず近年のクィア・ポリティクスとネオリベラリズムの接点を考察するにあたって重要なのは、セクシュアル・ポリティクスが「自由な」市場や愛国心を推進する「国家のメインストリーム」と強固に絡み合う点を指摘するためにリサ・ダガンが導入した「ホモノーマティヴィティ」概念である。同概念は「同性愛者を支持基盤とする選挙区の解体や、家庭生活や消費に縛り付けられた、私的で脱政治化されたゲイ・カルチャーを約束する一方で、支配的でヘテロノーマティブな仮定や制度に異議を唱えず、むしろそれらを支持し持続させるポリティクス」として定義づけられる（Duggan, 2003, p. 50–51）。その過程で公的／私的領域の境界は再設定され、主に婚姻や軍隊への所属を通じた同性愛者の「自由な」市場への参入や愛国心は称揚されるものの、それらは国家によって是認された異性愛中心主義を暗黙の了解とすることで初めて許容されるのである。また同概念を「性的な例外主義（sexual exceptionalism）」と関連づけて発展したホモナショナリズムの言説は、危機において国家から除外される他者と、人種・セクシュアリティ・消費社会との接続に焦点を当てている。

9. 11以降のアメリカにおける「国家の連帯」という語りと、同時に立ち現われた新たな生政治の形態へと着目したジャスビール・プアは、ホモナショナリズムを「国家と、その近代性や人種の・階級的なヒエラルキーとの結びつきが、リベラルな主体性を模倣し再び中心に置くような正当で（upright）順応的なクシアネスと、制御不能で縛り付けることのできないクシアネスを分断する決定的な要因」として定義している（Puar, 2007, p. 47）。すなわち「白人の」「男性的な」「愛国者の」「豊かな消費者」という承認を得て初めて、同性愛は規範的な国家の身体に「例外的に」組み込まれるのである。また、プアの文脈における「例外性」は、アメリカという国家の特異性を強調するだけでなく、その価値観を普遍的で尊重されるべきものと見なすような要請と両立する。とりわけ同性婚の推進が文化的な優位性を獲得するとき、それは保守的な結婚観を肯定し、文明的で世俗的な国家のアピールに加え、市場経済の促進と関連づけられる。キャメロン首相が「家族の復権」を暴動後の課題として挙げ、公的領域のみならず私的領域への国家の介入を主張した通り、婚姻と結びついた保守的な家族観は同性婚への寛容さの裏で「最も重要な幸福への指針」として温存されるのである（Ahmed, 2010, p. 6）。

以上の議論を踏まえた上で、前述のコカ・コーラのキャンペーンとネオリベラリズム、同性婚を進歩的で国家の寛容さの表れと見なす言説に共通するのは「状況は（今より）よくなるはず」という楽観主義であり、未来への指向性だと言える。それは2010年に立ち上げられたIt Gets Better Projectという若年層LGBTの自殺を防ぐためのプロジェクト名そのものに反映されている。このスローガンが含意する姿勢はすなわち「我々が物事を改善する」のではなく「物事はいつかよくなる」という受動的な楽観主義である。そこで、プアが同プロジェクトを「金融資本主義における、特権的なジオポリティクスを指示する情動的なアタッチメント」を喚起し、LGBTの若者の自殺を国家の文化資本にとっての喪失と見なすとして批判している点は驚くに値しない（Puar, 2011, p. 149）。このプロジェクトが広く知られるきっかけとなったタイラー・クレメンティの死は、彼のルームメイトがウェブカメラで彼が同性と性行為を行っている場面を撮影し、インターネット上に拡散しようとしたことが原因であった。しかし、“it gets better”という包括的なフレーズは、ホモフォビアや

レイシズム、インターネット上のLGBTに対する誹謗中傷や憎悪犯罪の拡がりといった個々の問題に対して人々の目を向けさせるのではなく、より多くの共感を呼ぶことを目的としていたと見られる。同スローガンは、シンパシーや情動の喚起による連帯を示唆し、「自身を、都会的でネオリベラルなゲイの集団に組み入れるための日常」を表す標語として、差異や類似性に基づくアイデンティティ・ポリティクスの代わりに文化資本の獲得や喪失というイデオロギーによって特徴づけられるのである（Puar, 2011, p. 151）。シスジェンダーかつ中産階級に属する白人ゲイ男性に限って状況は良くなるだろう、というプアの批判は、そのまま理想の愛の形としてコカ・コーラの広告に表れている。なぜなら、愛のシニフィアンとしての同性婚もまた、「ただ単に異性愛規範と対になるような平等の要求ではなく、白人の特権性や権利——とりわけ所有や相続の権利——を回復させるための要求」と密接に結びつくことで、国家がクィアな身体を承認するだけでなく監視・管理するための手段として動員されるためである（Puar, 2007, p. 29）。

同様のレトリックを通じて機能する「カップケーキ的な消費主義」は、消費行動が国家への愛として直接置き換えられるような利益の追求の中で生まれたと考えられる。ワイマンが着目した同性婚と暴動の対比が、製品に対するノスタルジアを介した市場の拡大や保守的な婚姻制度を肯定的に強調している点は明らかである。同広告の手法は一方で、暴徒の多くが貧困に苦しみネオリベラルな市場へと参入できないという背景を取り払い、彼らの憎悪が理想的な消費者への憎悪、転じて国家への憎悪へと変容させられる過程を示唆している。従って、同性婚が表象するような「よりよい未来」への共有されたファンタジーは、それを阻む「他者」が望む社会的変革を逆説的にも「進歩への抵抗」として排除し、彼らの多様なバックグラウンドを不可視にするのである。以上の観点から、ホモナショナリズムの言説が、同性愛者の権利の拡充や、順応的なクィアネスの特権化を通じた社会の寛容さのアピールとして用いられる反面、「国家」というカテゴリーは依然として介入されないまま留まることが分かる。重要なのは、何／誰が国家にとって優先されるべきかという価値判断が常に働き、その中で切り捨てられる他者は市場への貢献の度合いによっても差別化される点だと考えられる。言い換えれば、カップケーキ的な消費者が「よ

りよい世界を信じる」理由は、国家が彼らの理想とするネオリベラルで自由な市場における利益を約束する限り、維持され続けるのである。

6 結論

本稿は、ロンドン暴動に関するトム・ワイマンの記事を参照し、同事象を近年のクィア・ポリティクスにおける重要な議論と関連づけて論じた。暴動についての二極的な反応から推察できるのは、国家の理想が複雑な歴史化のプロセスによって保持される反面、ネオリベラルな市場経済への参入が優先される社会において、人種や階級、貧困といった差異の脱文脈化が進むという側面である。また、「国家の身体」と対置される「他者」が、危機の宣言を通じて偶発的に再／生産される構造についても同記事は省察を促している。さらにワイマンの比喩が画期的であったのは、暴徒の身体と中産階級的で規範的な身体が「何を消費／体内化するか」によって意味づけられる過程や、怒りや憎悪、愛の情動的な循環における政治性と歴史的な含意について論じたためだと考えられる。そこで、中産階級的な主体が、保守的な価値観を温存し国家の理想を体现するのに対し、「ケーキ的な」可能性は余剰や粘着性に表される変化の潜在性にあるとワイマンは主張する。だが同時に、これら二つの比喩が既に蓄積された文化的な「集合体 (constellation)」として認識されうる点は見落としてはならない。つまり、ケーキとカップケーキという形象に投影された二項対立的な分断は、互いに「開かれた可能性」や「よりよき未来」といった楽観主義を内包する一方で、既存の価値観を維持するために回収されてしまうという危機を生じさせる。それはワイマンが初めて「カップケーキ的なファシズム」に言及した、彼のブログのタイトルと冒頭の但し書き「無限の希望に満ちたブログ——でも君のためではない」が示す、希望の永続性と「君」という誰か＝他者の排除というロジックに皮肉にも反映されている (Whyman, 2013)。このように「我々」と「彼ら」を分断する境界生成の論理は、容易に解体することはできない。だが同時に、ロンドン暴動から派生した社会的・政治的課題が示唆する、特定の身体性と感情の強固な結びつきと、それらを維持するために動員される「想像上の過去」への憧憬は、国家がその普遍性と統合性を保持するための戦略として批判的に読み解くことができる。さらにネオリベラルな消費

社会への参入が、国家による承認の条件となるという議論は、LGBTの権利が市場価値との関連性によって推進されるという問題と重なり合う。そこで本論文で導入した、情動と国家の身体、ホモナショナリズムの視点における同暴動に対する考察からは、同時代的なボディ・ポリティクスの議論が、一つの「危機」を契機とした包摂と排除のダイナミクスへと着目するための抵抗的な視点を提示すると言えるだろう。

Footnotes

- ¹ セジウィックは、「情動は、事物、人々、概念、感覚、関係 (relations)、活動、意思、組織、また他の情動を含む多くのものと結びつき、あるいは結びつきうる」と定義している (Sedgewick, 2003, p.19)。
- ² バーラントはアタッチメントを「関係性の構造」と定義しているが、感情や情動もまた様々なあり方で関係性へと付随する (attach) と述べている。そこで、感覚的な領域で生じる情動的なアタッチメントは、「残酷な楽観主義」における達成されることのないファンタジーが、歴史性に裏打ちされた直観 (intuition) を伴い、規範として成立する際に不可欠な要素だと捉えられる。またバーラントは、楽観主義における欲望の対象 (an object of desire) は「一塊の約束 (a cluster of promises)」と言い換え可能だとしている (Berlant, 2011, p. 23)。しかし、欲望の対象との近接性は「対象が約束してくれるもの」との近接性を意味するため、対象を手に入れる=近接性が消失することはその喪失に対する恐怖を生む。その結果、近接性・関係性の維持を通じて世界の連続性 (continuity) を保つことが主体の存続に関わる最も重要な要請となるのである。
- ³ アイルランド版の広告では、同性婚を挙げるカップルは、白人男性と黒人女性の結婚式の映像に置き換えられた。「憎悪の表出」が同じくロンドン暴動における略奪行為を扱っていることから、同性婚と異人種間の婚姻は「社会における望ましい進歩」の象徴として代替可能であるかのように導入されている。そこで憎悪の表現は普遍化される一方で、愛の表象が意味するものは、ある社会に固有な寛容性や進歩のナラティブを補強するものだと考えられる。同性婚だけではなく多様な人種についての寛容さが、より多くの「他者」を取り込むことによる国家の理想の達成のためには不可欠なものとして利用される点に関しては、アーメッドの提唱する「多文化主義的な愛 (multicultural love)」や、移民へと課される文化的な同化政策に基づく「条件付きの幸福 (conditional happiness)」についての論考も参照のこと (Ahmed, 2004a; 2010)。また、これらのイメージのすり替えについての批判は様々なメディアで取り上げられたが、企業側はこの判断を消費者のリサーチに基づくものとし、当時アイルランドで同性婚が認められていなかったことを理由に挙げた。
- ⁴ 本画像は、LGBTに関する情報を発信するオンライン・プラットフォームの一つである FourTwoNine に掲載された、2013 年のコカ・コーラの広告キャンペーン映像からの抜粋である。この画像を含む記事の詳細は以下を参照のこと。Welsh, Morgan. "Coca-cola includes gay couple in new ad — in some versions." (2013,

December 30). FourTwoNine. Retrieved 10 December, 2015,
from <http://dot429.com/articles/3747-coca-cola-includes-gay-couple-in-new-ad-in-some-versions>

References

- Ahmed, Sara. (2004a). *The Cultural Politics of Emotion*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Ahmed, Sara. (2004b). "Affective Economies." *Social Text*. 22. 2, 121–139.
- Ahmed, Sara. (2010). *The Promise of Happiness*. Durham: Duke University Press.
- Anderson, Ben. (2010). "Modulating the Excess of Affect: Morale in a State of 'Total War.'" In Melissa Gregg and Gregory J. Seigworth (Eds.), *The Affect Theory Reader*. Durham: Duke University Press. 161–185.
- Bauman, Zygmunt. (2011, August 9). "The London Riots: On Consumerism Coming Home To Roost." *Social Europe*. Retrieved August 18, 2015, from <http://www.socialeurope.eu/2011/08/the-london-riots-on-consumerism-coming-home-to-roost/>
- Berlant, Lauren. (2011). *Cruel Optimism*. Durham and London: Duke University Press.
- Community Resilience UK. (2012). *Community Resilience*. Retrieved August 2, 2015, from <http://www.communityresilience.cc/>
- Duggan, Lisa. (2003). *The Twilight of Equality?: Neoliberalism, Cultural Politics, and the Attack on Democracy*. Boston: Beacon Press.
- Faull, Jennifer. (2013, December 27). "Coca-Cola launches #ReasonstoBelieve campaign with new ad." *The Drum*. Retrieved August 5, 2015, from <http://www.thedrum.com/news/2013/12/27/coca-cola-launches-reasonstobelieve-campaign-new-ad>
- Freeman, Elizabeth. (2005). "Time Binds, or Erotohistoriography." *Social Text*. 23.3–4, 57–68.
- "Government Response to the Riots, Communities and Victims Panel's final report." (2013). *Gov.uk*. Retrieved August 5, 2015, from https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/211617/Govt_Response_to_the_Riots_-_Final_Report.pdf
- The Guardian and LSE. (2012). *Reading the Riots: Investigating England's Summer of Disorder*. *LSE Research Online*. Retrieved July 20, 2015, from [http://eprints.lse.ac.uk/46297/1/Reading%20the%20riots\(published\).pdf](http://eprints.lse.ac.uk/46297/1/Reading%20the%20riots(published).pdf)

- Love, Heather. (2007). *Feeling Backward: Loss and the Politics of Queer History*. Cambridge and London: Harvard University Press.
- Luciano, Dana. (2011). "Nostalgia for an Age Yet to Come: Velvet Goldmine's Queer Archive." In E. L. McCallum and Mikko Tuhkanen (Eds.), *Queer Times, Queer Becomings*. New York: State University of New York Press. 121–157.
- Massumi, Brian. (2002). *Parables for the Virtual: Movement, Affect, Sensation*. Durham: Duke University Press.
- Milanovic, Branko. (2011, August 17). "The London Riots and the Triumph of Neo-Liberalism." *Harvard Business Review*. Retrieved 17 August, 2015, from <https://hbr.org/2011/08/the-london-riots-and-the-triumph>
- Puar, Jasbir K. (2007). *Terrorist Assemblages: Homonationalism in Queer Times*. Durham and London: Duke University Press.
- Puar, Jasbir K. (2011). "Coda: The Cost of Getting Better: Suicide, Sensation, Switch-points." *GLQ*. 18:1, 149–157.
- "Rioters need tough love, says David Cameron." (2011, September 2). *BBC News*. Retrieved August 12, 2015, from <http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-14760686>
- Rogers, Peter. (2013). "Rethinking Resilience: Articulating Community and the UK Riots." *Politics*. 33: 4, 322–333.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. (2003). *Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*. Durham and London: Duke University Press.
- Seigworth, Gregory J., and Melissa Gregg (2010). "An Inventory of Shimmers." In Melissa Gregg and Gregory J. Seigworth (Eds.), *The Affect Theory Reader*. Durham: Duke University Press. 1–25.
- Stratton, Allegra. (2011, August 15). "David Cameron on riots: broken society is top of my political agenda." *The Guardian*. Retrieved August 5, 2015 from <http://www.theguardian.com/uk/2011/aug/15/david-cameron-riots-broken-society>
- Wall, William. (2011, August 10). "Tottenham: Neoliberal Riots and the Possibility of Politics." *Critical Legal Thinking*. Retrieved August 17, 2015, from <http://criticallegalthinking.com/2011/08/10/tottenham-neoliberal-riots-and-the-possibility-of-politics/>

Whyman, Tom. (2013, June 22). "Cupcake Fascism and the Death of Possibility." *Infinitely Full of Hope*. Retrieved 28 July, 2015,
from [http://infinitelyfullofhope.wordpress.com/2013/06/22/
cupcakefascism/](http://infinitelyfullofhope.wordpress.com/2013/06/22/cupcakefascism/)

Whyman, Tom. (2014, April 8). "Beware of cupcake fascism." *The Guardian*. Retrieved
July 28, 2015,
from [http://www.theguardian.com/commentisfree/2014/apr/08/
beware-of-cupcake-fascism](http://www.theguardian.com/commentisfree/2014/apr/08/beware-of-cupcake-fascism)

**Parables of a Cupcake: the Deployment of Affect, the National Body
and Homonationalism in the Aftermath of the London Riots**
Mayu IIDA

This paper examines how the notions of affect, the national body and homonationalism have been deployed and articulated in the aftermath of the London Riots that took place in August, 2011. With reference to Tom Whyman's article "Beware of cupcake fascism" published on *The Guardian* in 2014, which illustrates oppositional responses to the riots, I will investigate the way the cultural tropes of cake and cupcake could be associated with emerging debates within feminist and queer politics. As the incidents have brought out several structural deficiencies in terms of race, class and poverty, it is significant to pay careful attention to the ongoing construction of the bodies of others in contrast with the government's comprehensive recovery scheme entangled with the declaration of the national ideal as well as the re / production of privileged citizens. It must be stressed that the government insisted on mending "broken society" with a specific focus on conservative values of family and ideal Britishness regardless of rioters' varying backgrounds and causes of social oppression. Whyman's article does not only offer a critical insight into differential orientations towards what is deemed a national crisis, it also reveals the rhetorical affirmation of middle-class values against possibilities of social change by claiming emotional others as the objects of "clean-up," who disturb the existent boundaries of the national body. Reflecting upon Sara Ahmed's influential argument of the stickiness between bodies and emotions, I will first attempt to unfold the complicated process of incorporation into the body of the nation, which is followed by an in-depth analysis of legitimate and alternative historicity in relation to "good-life-fantasies" and Lauren Berlant's concept of "cruel optimism" that the nation promises as a normative condition of everyday lives, which is, however, suspended for the maintenance of the

future. The arbitrary appropriation of the imagined past for a better future then secures the national ideal, while it inevitably bears a historical burden such as the privilege of whiteness and the liberal-bourgeois subjecthood. In addition, the metaphors attached to the objects of consumption will further be discussed with regard to homonationalism defined by Jasbir K. Puar, in that the rioters' bodies marked as others are meticulously expelled from neoliberal political economy behind the logic of social progress. The riots bring to the fore the intersection of affective politics, queer alternative historiography and the rise of homonationalism against universalising and idealising narratives deployed by the nation in the face of a crisis, whose underlying imperative may sound surprisingly familiar.

Keywords:

affect, the national body, homonationalism, cruel optimism, queer historicity

留め置かれる彼女たちの身体 —「レシタティブ」における「グロテスク」のイメージと障害をもつ身体 五十嵐舞

1 はじめに

トニ・モリスン唯一の短編「レシタティブ」(1983)は、孤児院で出会ったトワイラとロバータという二人の女性が成長する過程で数年ごとに再会する様子を描いた作品だ。語り手は、トワイラとロバータ。舞台は1950年代から1980年代頃のニューヨーク近郊と推測される。おどってばかりいる母親をもつトワイラと、病気の母親をもつロバータは、ともに8歳のときに聖ボニーに預けられ同じ部屋で4カ月を過ごす。その後それぞれ退所し(ロバータはさらに二度入所し、脱走する)、8年後、トワイラが働くレストラン(ハワード・ジョンソン)にロバータがあらわれたことで再会する。その12年後に高級スーパー(フード・エンポリウム)にて、その後公立学校の人種統合をめぐるピケで、その後ホテルのダイナーで出会い、その時々二人のやり取りで作品は構成される。この再会の度に話題にあがるのは、聖ボニーの果樹園におけるマギーという障害¹をもつ女性と「ビッグ・ガールズ」という孤児院で暮らす女の子たちの間に起きた出来事と、二人の母親の近況についてである。

この作品については、モリスンの執筆意図²の言明から、当該作品に描かれる「人種」に関する研究が作品の発表直後よりその中心を占めてきた。この研究上の傾向に対し、近年、マギーの身体的な特徴に注目し、障害をもった身体の表象と他の項、とりわけ人種などとの関係を検討する研究がいくつか行われている。

「レシタティブ」における障害の表象に対する注目はここ数年のことだが、モリスン作品における障害をもつ身体の表象はそれ以前からしばしば検討される対象であった。そうした研究では、モリスン研究全体の特徴として見られる長編作品ばかりが注目される傾向から漏れず、『青い眼がほしい』(1970)や『スーラ』(1973)、『ピラヴィッド』(1987)、『パラダイス』(1998)といった作品に焦点が当てられその機能や効果が論じられてきた。以上に挙げた作品の分析を通じて導かれることは、端的には、障害をもつ登場人物のその身体「グ

ロテスク」性が、身体に関するヒエラルキーや (Thomson, 1997)、美の価値基準を書き換える力をもつということや (Hall, 2012)、回復の可能性の象徴 (Corey, 2000)、もしくは抑圧の歴史や政治制度に対するその傷跡を提示するもの (荒, 2008) として機能するという結論である。

対して、「レシタティブ」の障害を論じる先行研究において、マギーの障害をもつ身体はグロテスク性と結びつけて論じられてはいない (金丸, 2004; Sklar, 2011; Stanley, 2011; Androne, 2007)。しかし、作品に目を向けると、「レシタティブ」ではある種のグロテスク性が、マギーとは別の、健全な身体をもつと推測される人物にも付与されている様子が見えてくるのではないだろうか。「ガーゴイル」に由来する「ガー・ガールズ (gar girls)」とトワイラとロバータと呼ばれる「ビッグ・ガールズ (big girls)」だ。ガーゴイルとは、よく知られているように、西洋建築 (特にゴシック建築) の屋根の端に取り付けられる雨どいで、その形状は「グロテスク」な怪物を模したものである (馬杉, 2007)。すなわち、ビッグ・ガールズの身体には、比喩的な表現ではなくより明確に呼び名の次元でグロテスクな怪物としての表象が付与されているのだ。繰り返しになるが、彼女たちの身体にはマギーのような障害は描かれない。するとここに、障害をもつ身体と「グロテスク」のイメージリとを直線で結ぶといったこれまでの研究が共有する前提とは異なる、より複雑な関係が存在することになる。

障害をもつ身体をグロテスクのイメージリと無批判につなげることは、それ自体が非常に健常主義的な思考だと言える。また、フェミニスト障害学は、西欧近代の文化において障害をもつ身体がグロテスク性や怪物のイメージリと結び付けられて表象されてきたと指摘する (Thomson, 1997, 2011; LaCom, 2002; Shildrick, 2002, 2009)。しかし、モリスンは人種をはじめとするステレオタイプに挑戦する作家である。これらの点を踏まえると、むしろ先行研究に見られるような、障害の身体とグロテスクのイメージリを無批判につなげることは不自然と言えるだろう。既述のとおり、「レシタティブ」は、障害の身体をもつ人物が登場しながら、グロテスクのイメージリが健全な身体をもつ人物へ明示的に付与されている。したがって、「レシタティブ」は上述のような従来の研究が前提としてきたものの書き換えを試みるに適した作品だと考えられる。

作品中でビッグ・ガールズは、ある地点から、語り手であるトワイラとロバータによって、ガー・ガールズと呼び変えられる。本稿では、この呼び変えに注目する。作品が二人の語りによって構成されることを踏まえれば、呼び変えは、当初グロテスクでなかった者へグロテスク性を付与する過程である。したがって、そこに注目することで、作中でグロテスクのイメージとそのものをもつ意味を検討することが可能になる。本稿では、まずこの呼び変えで起こる変化と、その変化が意味するところの検討から、「レシタティブ」におけるグロテスクのイメージが象徴する内容を検討する（2章、3章）。その後、トワイラとロバータによってグロテスクなものと位置付けられるガー・ガールズと、障害の身体をもつマギーの関係の分析から、「レシタティブ」におけるグロテスクのイメージと障害の身体の関係性を検討する（4章、5章）。

2 ビッグ・ガールズからガー・ガールズへ

本章では、トワイラとロバータが果樹園の場面の回想を繰り返す中で、当初「ビッグ・ガールズ」と呼んでいた女の子たちを、ある時点から「ガー・ガールズ」と呼び変えることについて、その変化によって引き起こされることの分析から、二人にとってのガーゴイルの意味、すなわち「グロテスク」のイメージがもつ内容を検討する。

トワイラによって語られる8歳の頃の場面で、ビッグ・ガールズと呼ばれる彼女たちは次のように描かれる。彼女たちはリップスティックとアイブ로우ペンシルをつけていてテレビを観ているあいだ中、貧乏ゆすりをしているような子であり、そのうちの何人かは15歳や16歳くらいである（pp. 160–161）。さらに、“They were put-out girls, scared runaways most of them. Poor little girls who fought their uncles off but looked tough to us, and mean. God did they look mean”³と描写される（p.161）。この描写からは、性的な表象をまとった彼女たちは、Morrisも指摘するように（2013, pp. 166–167）、性暴力の被害者であることが推測される。そして、彼女たちは果樹園でラジオをかけてダンスをしており、それをトワイラとロバータが観ていると、二人を追いかけてつかまえ、髪を引っ張り腕をひねると描写される（p. 161）。

次に彼女たちが登場するのは、二人が16歳でハワード・ジョンソンにて再

会したときに、揃いの水色のホルターネックにショートパンツをはき、プレスレットのような大きさのイヤリングをつけたロバータを見たトワイラの感想においてだ。**“Talk about lipstick and eyebrow pencil. She made the big girls look like nuns”**⁴と言及される彼女たちは (p. 164)、二人が8歳のときの語りにつき、リップスティックとアイブロウペンシルの存在として描かれる。

以上に見てきたように、二人が8歳と16歳のときの語りではビッグ・ガールズと呼ばれている彼女たちは、二人が28歳のときフード・エンポリウムにて再会した際には、**“The big girls (whom we called gar girls — Roberta’s misheard word for the evil stone faces described in a civics class) there dancing in the orchard”**⁵と、「ガー・ガールズ」と言い換えられる (pp. 167–168)。「邪悪な石の顔」すなわち「ガーゴイル」の表象が付与された彼女たちは、その後、学校統合ピケでのやり取りの数年後にトワイラが一人で車の中で回想する場面でもガー・ガールズと (p. 173)、最後クリスマスの時期に二人が再会した際にロバータが果樹園での出来事を語る際にもガー・ガールズと呼ばれ (p. 174)、作中では最後までガー・ガールズと呼ばれ続ける。ガー・ガールズと呼び変えられて以降の彼女たちは、後に示すようにマギーを押し倒し蹴るイメージの他には、二人が28歳の再会の際に**“Those girls had behavior problems”**⁶とロバータに語られるよう (p. 169)、行動に問題のある女の子たちと描写される。

では、このビッグ・ガールズからガー・ガールズへと呼び方が変わる過程で何が起きているのだろうか。「怒っている」等はその言葉のとおり理解できるが、繰り返し付与される「リップスティックとアイブロウペンシル」と「ダンス」については、それぞれが意味するところを検討する必要があるだろう。

まず、「ダンス」が象徴することについて検討したい。ダンスは他のモリスン作品でもしばしば登場する。Hallは、『ビラヴィッド』のthe Clearing sceneにおけるベイビー・サッグスのダンスと、*Foreign Bodies*⁷という、モリスンがアメリカ人の振付師のWilliam Forsytheとドイツ人の彫刻家でビデオアーティストのPeter Welzとコラボレーションし企画した展示におけるダンスを分析し、モリスン作品におけるダンスを次のように結論付ける。「モリスンの執筆においてダンスは、身体の規律化の形態としてではなく、むしろ自発的で

すべての人に解放されたものであり、また非一言語の形態をとり、非一可視的で、幸福の経験として描かれている」(2012, pp. 81–82)。しかし、Hallによるこの結論は、「レシタティブ」には当てはまらないだろう。

「レシタティブ」に描かれるダンスは、ビッグ・ガールズ／ガー・ガールズがおどるものの他にもうひとつある。それはトワイラの母親メアリーに関する描写である。作品は、“My mother danced all night and Roberta’s was sick”⁸という言葉ではじまり (p. 159)、その後もメアリーは「ダンスし続ける母親」と描写される (p. 162, p. 173, etc.)。このようにダンスを原因に母親が生きているが孤児院に預けられることになったトワイラにとって、それは杉山が述べるように、「だらしく破綻した生活」の象徴である (2006, p. 22)。すなわち、「レシタティブ」に描かれるダンスはHallが述べるような「幸福の経験」とは決して言えないだろう。それが最も顕著なのは、再度10歳と14歳のときに聖ボニーに入所することになったロバータが、14歳のときに脱走した話をトワイラに話す場面での言葉だ。脱走したという話に驚くトワイラにロバータは、“What do you want? Me dancing in that orchard?”⁹と答える (p. 169)。すなわち、二人にとってダンスは、破綻した生活が永遠に続くような、もしくは聖ボニーのような囲われた場所でひたすらに続く生(活)といった、将来への希望のないもの、すなわち絶望の象徴であるのだ。

続いて、「リップスティックとアイブロウペンシル」という象徴について検討したい。メアリーが聖ボニーでトワイラと面会する場面で次のような描写がある。挨拶をして握手をしようとロバータの母親に手を差し出したメアリーを、ロバータの母親は見下し無視して行ってしまう。それに怒ったメアリーは礼拝のあいだ、ずっと貧乏ゆすりをしたり、悪態をついたりする。その後、讚美歌を歌おうと皆が立ち上がったときにも、歌おうとせずに彼女が行うことが、“She actually reached in her purse for a mirror to check her lipstick”¹⁰である (p. 163)。それを見てトワイラは、“she really needed to be killed”¹¹と考える (p. 163)。このやり取りからは、リップスティックもダンス同様、破綻や墮落の象徴であることが読み取れる。

リップスティックとアイブロウペンシルは、モリスン作品では、『青い眼がほしい』においても登場する。本稿は、マギーという障害をもつ存在とは別に、ビツ

グ・ガールズ／ガー・ガールズに「ガーゴイル」の表象が付与されることに端緒を求められるが、実は『青い眼がほしい』においても、障害をもつ存在とは異なる登場人物に「ガーゴイル」の表象が付与されている。『青い眼がほしい』における障害の表象が研究されるとき、分析対象となるのは、2歳のときに事故で足を損傷しているポーリーン・ブリードラヴである (Thomson, 1997, etc.)。他方で、“Three merry gargoyles. Three merry harridans”¹² とガーゴイルの表象が付与されるのは (p. 55)、チャイナ、ポーランド、ミス・マリーという三人の売春婦だ。したがって、今後、当該作品のグロテスクと障害をもつ身体の関係性を再考することが必要だ。しかし、紙幅の都合上それは他の機会に譲ることとし、ここでは当該作品におけるリップスティックとアイブロウペンシルの表象に焦点を当てたい。

『青い眼がほしい』では、モービルやエイケン、メリディアンという町から来た、慎ましく控えめで、セックスのことを“nooky”と言うような女の子たちが、けばけばしさを取り除くことの象徴として“when they wear lipstick, they never cover the entire mouth for fear of lips too thick”¹³ という描写がされ (pp. 82–83)、チャイナが化粧をする“Now she gave herself surprised eyebrows and a cupid-bow mouth. Later she would make Oriental eyebrows and an evilly slashed mouth”¹⁴ という場面でそれらが描かれる (p. 58)。これらの描写からは、リップスティックとアイブロウペンシルが、性的過剰や性的逸脱のイメージをもつものとして描かれていることが読み取れる。さらに重要なことに、売春婦がガーゴイルと呼ばれることから、**「ガーゴイル」自体にそもそも性的過剰や性的逸脱のイメージが付与されていると言える。**

以上分析した、ダンス、リップスティックとアイブロウペンシルそしてガーゴイルがもつイメージを踏まえると、ビッグ・ガールズからガー・ガールズへと呼び方が変わるとき次のことが起きていると指摘できる。すなわち、この呼び変えによって、彼女たち自身が「怯えた家出人」や、「おじさんたちの性暴力から逃げている被害者」であるという側面が落とされるのだ。当初、ビッグ・ガールズの説明として描写されていた、「怒っている」「強そうに見える」「意地悪に見える」といったものは、ガー・ガールズの「行動に問題がある」

や「邪悪な顔」といった描写によって引き継がれる。そして、ビッグ・ガールズに付与されていた「リップスティックとアイブ로우ペンシル」のもつ墮落や性的なイメージは、ガー・ガールズの、「行動に問題がある」という描写、そして「ガーゴイル」という表象そのものによって引き継がれる。その結果、ガー・ガールズは、ビッグ・ガールズにはあった、怯えている様子や性暴力の被害者としての側面が失われ、怒っていて、強そうで、意地悪そうで、行動に問題があり、墮落していて、性的に逸脱している存在とイメージされるものになる。また、「ダンス」のイメージがビッグ・ガールズとガー・ガールズ両方に付与されていることから、彼女たちがどちらの名で呼ばれているときにも、破綻した生活や囲われた生活が続くような、「絶望」に留め置かれている存在とイメージされるものとなる。したがって、ガー・ガールズに付与されたイメージから、二人にとっての「グロテスク」が象徴する内容とは、意地の悪さや邪悪さというある種の暴力的な恐怖を引き起こすものであると同時に、墮落や性的に逸脱していることであると理解できる。

3 「ビッグ」・ガールズでなくなること

本章では、ビッグ・ガールズからガー・ガールズへと呼び名が変わることの、特に「ビッグ・ガールズではなくなる」ということがもつ意味を検討する。この検討により、トワイラとロバータにとってのガー・ガールズと呼ぶ対象、すなわちグロテスクのイメージを付与する対象の位置付けが明らかになる。二人にとって実際にはどのような存在に対して、二人は2章で明らかにしたような意味をもつグロテスクの表象を付与するのだろうか。

ビッグ・ガールズの「ビッグ」とはどのような意味をもつのだろうか。「レシタティブ」では、『オズの魔法使い』やジミ・ヘンドリックスそして公立学校の人種統合に関係するピケなど、さまざまな時代的アイコンがちりばめられるものの、厳密な時代の特定を拒む（鵜殿, 2015）。二人が出会った8歳という年齢、ハワード・ジョンソンでの再会が16歳であること、フード・エンポリウムでの再会が28歳であることは作中で明らかにされているが、ピケの際の再会や、続く車の中でのトワイラによる回想、そして最後のクリスマスの季節の再会については、二人が何歳のときの出来事であるか明示されない。これ

らのことから、一見すると、彼女たちの年齢は作品において一定の意味はあるものの特に重要ではないという印象を与えるかもしれない。しかし、以下に見ていくマギーの描写からは、二人にとって「年齢」が重要な関心対象であると言える。

障害を含め、マギーの特徴として語られるものを見ていきたい。8歳のときのトワイラの語りでは、「括弧のような脚」「啞¹⁵」「年をとっている」「土色」、そして「子どもの帽子をかぶっている」というように、マギーには知的障害もあると推測できる描写がされる（p. 161）。16歳と28歳の再会においてマギーの身体的な特徴が語られることはなく、次に言及されるのはピケの際である。そこでは、ロバータがマギーを「貧しい年をとった黒人女性」「叫ぶことのできない黒人女性」と語ることに對し、トワイラが「彼女は黒人じゃなかった」と応酬する（p. 172）。その後、トワイラによる回想では、「真っ黒ではなかった」「聾」「啞」「半円形の脚」「子どもの帽子」と語られ（p. 173）、クリスマスの再会ではロバータが、「黒人だったかどうかは自身がいない」「年をとっていた、本当に年をとっていた」「うまく話せない」「いかれてる」と語る（p. 174）。しかし、これらの特徴は、トワイラの回想とクリスマスの際に、トワイラとロバータそれぞれによって次のように語られる。“Maggie was my dancing mother. Deaf, I thought, and dumb. Nobody inside. Nobody who would hear you if you cried in the night. Nobody who could tell you anything important that you could use. Rocking, dancing, swaying as she walked”¹⁶（p. 173）, “And because she couldn’t talk — well, you know, I thought she was crazy. She’d been brought up in an institution like my mother was”¹⁷（p. 174）。すなわち、これまで二人によって語られてきたマギーの特徴のうち、「耳が聞こえない（聾）」「口がきけない（啞）」「知的に遅れがある」「うまく話せない」「いかれてる」といったものは、二人がそれぞれの母親の特徴を投影していたということだ。ここではそのような母親の投影の一方で、マギーの特徴として明らかだと思われるものに注目したい。それは、「年をとっている」ことである。確認したように、身体や知的な障害の特徴が全て二人による母親の投影で語られており、また二人の間でもその特徴が一致せず、さらに人種の特徴が、「土色」「黒人」「真っ黒じゃなかった」と度々

言い換えられ明らかにならないことに対して、唯一「年をとっている」ことだけは二人の語りで一致している。こうした様子からは、マギーの特徴の一つとして年をとっているということがあり、それが二人に共通する関心の対象であると言える。

「ビッグ・ガールズ」という呼び名は、2章で扱ったように、トワイラとロバータが8歳のときに用いられ、28歳の再会の以降は「ガー・ガールズ」へと変わる。本章冒頭で指摘したように、二人の年齢は、8歳、16歳、28歳までは作品中で明らかにされている一方で、それ以降は明示されない。これは、見方を変えれば、8歳、16歳、28歳という年齢がとりわけ意味をもつものだと考えられる。作中では、そうした二人の年齢の他にも、明示される年齢がある。ビッグ・ガールズたちのうちの何人かが、15歳か16歳くらいというものだ (p. 160)。こうした年齢に対する言及からは、二人が、ビッグ・ガールズの15歳、16歳という年齢を明確に超えた地点から、彼女たちを「ビッグ・ガールズ」ではなく「ガー・ガールズ」と呼び変えると理解することが可能だろう。すなわち、8歳の二人にとって「ビッグ」とは、まず「年長」を指す。では、年齢を超えることは二人にとってどのような意味をもつのだろうか。

28歳の再会で、16歳の再会のときのロバータの態度を思い出しつつも、そんな些細な事を気にしても仕方がないと表現するときにトワイラは“it seemed childish”¹⁸という言葉を用いる (p. 169-170)。また、ピケの際にトワイラに向かってロバータは、“Maybe I am different now, Twyla. But you're not. You're the same little state kid who kicked a poor old lady when she was down on the ground”¹⁹ と言い、これが攻撃的な意味をもつ (p. 172)。これらからは、トワイラとロバータは“child”や“kid”、すなわち「子ども」であることに対して嫌悪感や拒絶する感覚をもっていることがわかる。同時に、後者は、ただの子どもではなくマギーを蹴った子ども、すなわちビッグ・ガールズであることに対して嫌悪感や拒絶する感覚を二人がもっていることを示す。このビッグ・ガールズであることに対する拒絶が最も顕著に表れているのは、先にも引用した、ロバータの最終的に脱走したという話を聞いて驚くトワイラに対し、“What do you want? Me dancing in that orchard?”²⁰ とロバータが答える場面だ (p. 169)。これは、聖ボニーに居続けることによってビッグ・ガー

ルズのようになることに対するロバータの拒絶と理解できる。脱走した当時のロバータの年齢が14歳であることを考えれば、あと数カ月から数年後に自身がビッグ・ガールズのようになることを、ロバータは拒絶したと言えるだろう。このように二人が、子どもであることやビッグ・ガールズであること、ビッグ・ガールズになることに対して嫌悪感や拒絶の感覚をもつ様子と、以下に見るような28歳以降の二人の生活を参照すれば、二人が15歳や16歳といったビッグ・ガールズの年齢を超え、ビッグ・ガールズが「ビッグ」でなくなることもつ意味が明らかになるだろう。

28歳のとき、トワイラは消防士のジェームズと結婚しミセス・ベンソンとなり、息子ジョゼフがいて、さほど裕福というわけではないが義両親とも仲の良い幸せな家庭を築いている。ロバータはコンピューター関係の仕事をしているケニス・ノートンと結婚し、連れ子四人の母親となり、二人の使用人がいる裕福な家庭をもっている（pp.166-168）。その後、学校の人種統合については、関心のないトワイラと積極的にピケに参加するロバータというように二人の立場には違いはあるが（pp.170-173）、トワイラはジョセフを大学に進学させ、ロバータも（家族と推測される）男性と女性と一緒にいる様子が描かれ、それぞれが生活を維持させている様子が描かれる（pp. 173-174）。これらの様子からは、2章で分析したガー・ガールズに付与される、破綻や墮落、性的逸脱といったイメージとは異なる人生を、二人が送っていることが伺える。すなわち、もはや二人は、自身がそうである可能性、将来そうなる可能性として嫌悪し拒絶してきた対象にはならなかったということである。

以上を踏まえると、二人がビッグ・ガールズの年齢を超え、ビッグ・ガールズが「ビッグ」でなくなることは次のことを意味する。すなわち、二人が聖ボニー退所後にも抱いていた、自身も彼女たちと同じではないのか、自身も将来彼女たちのようになるのではないかというある種の恐怖を克服するということである。二人が成長し、ビッグ・ガールズがもはや年長のものとして「ビッグ」でなくなるとき、それは同時に、二人が彼女たちの存在が象徴する脅威を乗り越え克服したことを意味するのだ。したがって、2章で明らかにしたように、二人にとって「グロテスク」は恐怖を引き起こすものを象徴するものであるが、ガー・ガールズという名で呼びそれを付与する対象は、もはや実際に

は、二人を脅かす存在ではないということが明らかになる。すなわち、実際には恐怖ではない存在に対して、二人はガー・ガールズと呼び、邪悪さ等のイメージを付与しているのである。

4 「ガールズ」ではなく「ガー・ガールズ」

もはや「ビッグ」でなくなったビッグ・ガールズは、トワイラとロバータによって「ガールズ」ではなく「ガー・ガールズ」と呼ばれることで「ガーゴイル」、すなわちグロテスクのイメージを付与される。本章では、前章で論じたように「ビッグ」でなくなったビッグ・ガールズが、なぜ「ガールズ」ではなく「ガー・ガールズ」と呼ばれるのか、二人が彼女たちを「ガー・ガールズ」と呼ぶ理由を検討する。どのような必要性から、彼女たちをガー・ガールズと呼び、またそのように呼ぶことで二人は何をしているのだろうか。以下で論じるように、そこにはマギーとの関係が重要であることが見えてくる。したがって、上記の検討は次章で行うグロテスクと障害をもつ身体の関係性の検討へとつながる。

ガー・ガールズという呼び名の基である「ガーゴイル」に目を向けたい。ゴシック建築につけられた雨どいとしてのガーゴイルは、13世紀頃までと、14世紀15世紀以降でその特徴が変化する（馬杉, 2007; 尾形, 2013）。怪物的でグロテスクな様相を特徴とする13世紀頃までのガーゴイル像は、14世紀15世紀以降は恐ろしいものである以上に滑稽なものとなっていく。それに伴いガーゴイルの象徴も、13世紀頃までは「魔除け」のイメージをもつのに対し、14世紀15世紀以降はそうした象徴的な意味合いを失う。では、ガー・ガールズに付与されたガーゴイルとはどの時代のものだろうか。公民の授業で見た「邪悪な石の顔」の絵に基づくこと（pp. 167-168）、そして2章で分析したように彼女たちには意地悪で暴力的な記述が続くことを考えれば、13世紀頃までの怪物的なガーゴイルであることが容易に推測される。さらに、聖ボニーの正式な名前である聖ボナヴェチュール（St. Bonaventure）は、13世紀に活躍したカトリックの聖ボナヴェントゥーラに由来すると推測できることから、その名がついた施設で育つ彼女たちにはガーゴイルの13世紀的なイメージが付与されていると考えられる。

この、ガーゴイルが「魔除け」のイメージをもつ点に注目したい。前章で明らかにしたように、大人になったトワイラとロバータにとって、もはやビッグ・ガールズは、自分がそうである可能性や、将来そうなる可能性として迫ってくるものではない。そうした、もはや「ビッグ」ではない彼女たちを、「ガールズ」ではなく「ガー・ガールズ」と呼び、グロテスクのイメージをもたせることは、二人にとってどのような意味をもつのだろうか。結論を先取りしてしまえば、二人は、この「魔除け」、すなわち自らを脅威から護る楯のようなものとしてガー・ガールズを用いていると考えられるだろう。

前章で引用したトワイラとロバータがマギーと自身の母親を重ねる語りの直後に、トワイラとロバータはそれぞれ以下のように続ける。“And when the gar girls pushed her down, and started roughhousing, I knew she wouldn’t scream, couldn’t — just like me — and I was glad about that”²¹ (p. 173)、“She’d been brought up in an institution like my mother was and like I thought I would be too. [...] We didn’t kick her. It was the gar girls. Only them. But, well, I wanted to. I really wanted them to hurt her”²² (p. 174)。ここからは、トワイラはマギーをまさに8歳のときの自身と重ね、ロバータは将来の自身と重ね、それゆえにマギーがガー・ガールズに痛めつけられることを望む様子が伺える。痛めつけることを望むことをある種の拒絶と理解するならば、ビッグ・ガールズに対する拒絶と同様に、マギーについても、自身もそうであるかもしれない、もしくは自身もそうなるかもしれない存在として二人が拒絶していると言い換えられる。そして、二人は、このマギーを拒絶する際に、「魔除け」としてガー・ガールズを利用しているのではないだろうか。

では、二人にとって「魔除け」としてのガー・ガールズがなぜ必要か。なぜ二人は自らの手でマギーを追いやらないのか。以下、その理由を検討する。公立学校の人種統合に関してモリスンは、『覚えていて—学校統合への旅』(2004)という児童書を編集出版している。1954年の「ブラウン対教育委員会判決」の重要性を覚えていて／忘れないで(“remember”)と訴えかける当該書籍は、主に1940年代から1970年代にかけて撮られた、ジム・クロウ制度下やブラウン判決前後の学校、「レシタティブ」でも描かれるピケ、公民権運動などの写真とそれらにつけられたモリスンによる文章で構成される。そう

した当該書籍のタイトルページと本文最後 (p. 70) (と背表紙) がそれぞれ、1965年にアラバマ州でモントゴメリの行進の前に撮られた、黒い手と白い手が手をつないでいる写真と、1975年にボストンで撮られた、学校統合後のバスで黒人の子どもと白人の子どもが手をつないでいる写真であることに注目したい。すなわち、当該書籍のはじまりも終わりも黒人と白人が手をつなぐ写真で構成されているということだ。

この「手をつなぐ」という行為に関して、「レシタティブ」でも次に挙げるような場面が描かれる。二人が聖ボニーに入所して28日後、母親たちが訪問する日、握手をしようと差し出したトワイラの母親メアリーの手をロバータの母親は無視する (p. 163)。この差し出した手を無視する行為は、ピケでの再会のときに、ピケをしている女性たちがトワイラの車を囲み揺らし始めたとき、助けを求め車の窓から伸ばしたトワイラの腕をロバータの手はつかまないという場面で再演される (p. 171)。この腕を伸ばしたときのトワイラは、8歳のときに果樹園でビッグ・ガールズから逃げるとき、一人が転んだらもう一人は引っ張り上げ、一人が捕まったときにはもう一人はとどまって彼女たちを蹴ったり引っ掻いたりしたことをイメージしていた (p. 171)。ここからは、8歳で二人が仲の良かったときには二人が手をつないでいたことが読み取れる。

『覚えていて』と「レシタティブ」に描かれるこれらのことから、手をつなぐことが友好や共存の象徴であり、対して不仲を象徴するものとして手をつなぐことの拒絶があると理解できる。ここで、「手をつなぐこと」がもつ、手と手が触れ合う、すなわち「接触」という側面に注目したい。『スーラ』に関するインタビューで、「普通ではないキャラクター、パラiah (Pariah) [を描くこと] をあなたは楽しんでますね」と聞かれたモリスンは次のように答える。「さまざまな次元でのパラiahの姿がわたしの作品には描かれています。黒人のコミュニティとはパラiahのコミュニティです。黒人の人びとはパラiahなのです。他の社会から離れながらしかし並立する黒人の人びとの社会は、パラiahの関係と言えるでしょう。実際この国における黒人の概念とは常に既にある種のパラiahなのです」(Tate, 1988, p. 129)。このパラiahと呼ばれる集団は、しばしば“untouchable”とも呼ばれてきた。“untouchable”は、語のとおり彼らが接触 (touch) 困難な存在であることを示す。それは一面では、

接触によって彼らの「穢れ」がうつると考えられていることによる（関根 & 新谷, 2007）。すなわち、そこには「パライア」とされる存在との「接触」が引き起こす「感染」のイメージリが存在すると理解できる。

作品冒頭で、ロバータと同室になったことを母親が知ったらどう思うかと考えるトワイラの様子からは（pp. 159-160）、二人の母親も同様に、一方が黒人で他方が白人であると推測される。少なくとも、トワイラとロバータは一方が黒人で他方が白人だ。したがって、作中で描かれる手をつなぐこととその拒絶は、黒人と白人が手をつなぐこととその拒絶を意味する。そして、『覚えていて』の黒人と白人が手をつなぐ写真だ。これらの描写と、先のモリスンが黒人はパライアだと語るインタビューを参照すれば次のように言えるだろう。すなわち、手をつなぐことは、それまで築きあげられてきた“untouchable”としての黒人—白人関係を乗り越え友好的に共存することの象徴であり、反対に手をつなぐことの拒絶は、接触することによって相手の「穢れ」が感染するといった思いを抱いている様子を象徴しているということだ。²³

既に述べたとおり「レジタティブ」は舞台となる時代の明確な特定を拒むが、凡そ1950年代後半から1980年代頃の出来事であると推測される（鶴殿, 2015）。当時、障害者の公民権獲得が黒人の公民権運動と深いつながりをもっていたことに注目したい（Scotch, 1984）。また、「レジタティブ」が発表されたのは1983年である。こうした作中及び執筆の時代背景を踏まえると、当時、黒人と障害者が置かれた社会的地位に一定の共通する側面があることが伺える。すると、障碍の身体も一面では、ある種の「パライア」としての位置を共有しているとは考えられないだろうか。²⁴ すなわち、マギーの障碍をもつ身体もまた、そこに触れると感染するようなイメージリをもつとは考えられないかということだ。²⁵ トワイラは車の中で回想するとき、マギーを蹴ることについて、“I know I didn’t do that, I couldn’t do that”²⁶と語る（p. 173）。「やっていない」だけでなく「できなかった」と彼女が語るとき、その「できなかった」という表現はまさに“un (touch) able”を連想させる。

重要なことに、殴る蹴る押し倒すという暴力の動作は、手をつなぐこととは一見対照的な行動に見えるが、しかしどちらも相手と直接身体同士が接触することを必要とする点では共通している。そうであるとき、マギーの身体的な特

徴をそれぞれ自身の母親と重ね、さらに、本章冒頭で分析したとおり、自分もそうであるかもしれない、将来そうなるかもしれない対象として、マギーを拒絶する二人にとって、彼女を蹴り接触することは感染の視点から極めて避けたいことだとは考えられないだろうか。その結果、二人に代わってマギーを遠くへと追いやる存在、マギーを攻撃する存在が必要となる。すなわち、その存在こそが「魔除け」のガーゴイルとしてのガー・ガールズとは考えられないだろうか。

では、ガー・ガールズはマギーの脅威から二人を護る存在として、実際にはどのように二人によって機能させられているのだろうか。

ガー・ガールズの描写を追うと以下のとおりである。トワイラとロバータが28歳の再会のときには、*"They knocked her down. Those girls pushed her down and tore her clothes"*²⁷ (p. 169)、ピケの際には*"You're the same little state kid who kicked a poor old black lady when she was down on the ground"*²⁸ (p. 172)、その後のトワイラによる回想では*"I didn't join in with the gar girls and kick that lady [...]"* And when the gar girls pushed her down, and started roughhousing²⁹ (p. 173)、最後のクリスマスの頃には*"We didn't kick her. It was the gar girls. Only them"*³⁰ (p. 174)、と描かれる。ここで注目したいのは、結婚して子どもをもったり、ピケに参加したりするトワイラとロバータはもちろん、マギーの特徴も3章で扱ったように度々語り直されることに比べ、彼女たちの加害者としての描写は全くと言っていいほど変化しないということだ。ガー・ガールズは、常にマギーに暴力をふるう存在として留め置かれている。

2章で分析したように、ビッグ・ガールズに付与されるダンスし続けるイメージは、彼女たちが希望のない位置に留め置かれる様子を表す。そのようなビッグ・ガールズが「ビッグ」でなくなった後、ガー・ガールズ、すなわちガーゴイルとしての彼女たちは、より以前にも増して、まさに建物に取り付けられた石の置物のように、二人とは対照的に、一切成長することなく、固定され留め置かれる。このように、既に克服しもはやある種の脅威ではない彼女たちを、二人はガーゴイルという邪悪な存在に位置づけ直し、今度はその恐ろしさのイメージを、自分たちを護るものとして利用しているのだ。

5 ガー・ガールズを「魔除け」とすることの失敗

—「グロテスク」のイメージリと障碍をもつ身体

しかし、前章で論じたように、ガーゴイル的な「魔除け」としてガー・ガールズを置き、自分たちをマギーというある種の脅威から護ろうとする二人の試みは、以下に示すとおり成功したとは言い難いように思える。本章では、ガー・ガールズを「魔除け」として機能させることの失敗により二人が克服できない、マギーがもたらす不安の内容と、「レシタティブ」におけるグロテスクのイメージリの意味の比較から、本稿の課題である、当該作品におけるグロテスクのイメージリと障碍の身体の関係性について検討する。

クリスマスの時期の再会で、トワイラに自分たちはやっていないという一連の話をした後に続く、作品最後を締める“*Oh shit, Twyla. Shit, shit, shit. What the hell happened to Maggie?*”³¹ というロバータの叫びに目を向けたい (p. 175)。ロバータにとってマギーは、自身の母親と同様に施設で育ち、自身も将来そうなるだろうというものを示す存在として脅威であった (p. 174)。マギーに対してと同様に、自身もそうなるかもしれないという脅威であったビッグ・ガールズについては、彼女たちの年齢を超え、彼女たちのようにはならなかったという事実によって二人は克服できた。しかし、ロバータ自身がこの叫びの前に“*I just remember her as old, so old*”³² と語っており (p. 174)、3章でも扱ったようにマギーは年をとっていたことが伺える。少なくとも、彼女が年をとっていたということがロバータにとって印象的だったと言える。そうであるとき、まず、トワイラの息子ジョゼフの大学進学という出来事から、二人の年齢が凡そ30代後半くらいと推測され、したがって「本当に年をとっていた」マギーの年齢を語りの時点で二人は超えていないのではないかと考えられる。加えて、台所婦であるマギーは、聖ボニーで台所仕事や洗濯をしていた (p. 161)。これは、ビッグ・ガールズがダンスしたりリップスティックをつけたりしていたのに対して、家事の行為であり、こうした行為は結婚し家庭をもった二人も日常的に行っていると考えられる。さらに、マギーは朝から14時過ぎまで仕事をした後は、バスに乗って（恐らく）帰宅する (p. 161)。聖ボニーの二階に住んでいたビッグ・ガールズの生活が、ある程度二人にとって把握できるものであることに比べ、マギーがどのような生活を送っていたかに

ついては、二人は殆ど把握できないと考えられる。これらからは、最後の語りの時点で、年齢、マギーが仕事で行っていたこと、自身の現在の生活とマギーの当時の生活との比較困難さという様々な要素によって、未だマギーが将来の自身の姿である可能性を二人は払拭できないのではないと言えるだろう。すなわち、ガー・ガールズという「魔除け」を用いてマギーという脅威から自身を護ろうという二人の試みは失敗しており、先のロバータの言葉はその不安からくるものだと考えられる。

マギーによって二人にある種の不安が引き起こされることから、ともすれば、マギーの障害をもつ身体のアグロテスクさに何らかの可能性をみる議論へと収束するように見えるかもしれない。しかし、本稿でこれまで分析してきたことを踏まえ、「グロテスク」のイメージとはどのようなもので、マギーの何が二人を不安にさせるのかについて検討すると、やはり両者を等式でつなげ上記のような結論を導くことは妥当ではないということが明らかになる。

前章を踏まえると、マギーが現在の自分がそうであるかもしれない、もしくは将来そうなるかもしれない存在であることが、二人を不安にさせていた。二人がマギーをそのような存在と捉える前提には、マギーをそれぞれの母親と重ねることがある。トワイラはマギーが子ども用の帽子をかぶっていることと、マギーの脚が括弧のようなかたちをしている点をメアリーと重ね(p. 173)、ロバータはマギーがうまく話せない点を母親と重ねる(p. 174)。確かに、二人がマギーに見出すこれらの特徴は、それぞれ身体的な障害や精神的な障害を示していると考えられる。しかし、最終的に二人を不安にさせていたのは、すぐ上で分析したように、年をとっていること、彼女が台所婦として行っている内容、そして自身の現在の生活とマギーの当時の生活との比較困難さという要素であった。では、これらの特徴は、はたしてグロテスクなものであるのだろうか。2章で分析した、二人にとってのグロテスクの意味を参照したい。二人にとってグロテスクの象徴とは、怒っていたり、意地悪そうであったり、強そうであるといった攻撃性や、墮落や性的過剰、性的逸脱を意味していた。そして、上記の特徴を分析する過程で既に比較したように、年齢や台所婦としての仕事等に示されるマギーの特徴は、ガー・ガールズが、成長しないものとして留め置かれ、墮落していると描かれることとは対極になるようなも

のである。また、グロテスクの象徴がもつ攻撃的な意味についても、果樹園の場面を見ると対応関係にはないと考えられるだろう。マギーは常にビッグ・ガールズ／ガー・ガールズに攻撃される位置にあり、二人は、マギーは叫んだり助けを呼んだりすることもできないと語る。すなわち、マギーは攻撃してくるような存在とは真逆の存在であると考えられる。したがって、以上を踏まえると、マギーの障害をもつ身体は二人にある種の不安を引き起こすものの、その内容は、二人が定義するところのグロテスクさとは異なるものであると導ける。

また、二人に不安をもたらす内容が、年齢や家事の行為や生活の比較困難さという必ずしも障害に焦点化されるものではない点は、グロテスク性に限らず、障害をもつ人物が「障害」に集約されて論じられることを拒絶すると考えられるかもしれない。（これは障害の身体と健常の身体のある種の近似性を示すことに通じる可能性がある。しかし、それには、家事を行えるなど、障害の種類や程度による様々な条件を前提としている点も見落としてはならない。）

6 おわりに

本稿の課題は、これまで等式で結ばれてきた「グロテスク」のイメージリと障害をもつ身体の関係性を描きなおすことであつた。まず2章では、作品におけるグロテスクの意味を分析した。そこでは、グロテスクは、攻撃性や墮落、性的逸脱等を意味することが明らかになった。続いて3章では、そのようなグロテスクのイメージリが付与される人物、すなわちガー・ガールズの位置づけを検討した。そこでは、実際には、成長後の二人にとって彼女たちは克服した対象であることが明らかになった。4章では、そのように、実際には恐怖の対象ではない存在に攻撃性等の意味をもつグロテスクのイメージリを付与することを通じ、二人が試みることについて検討した。そこでは、二人はマギーという脅威に対する、ある種の「魔除け」のようなものとして、ガー・ガールズというグロテスクなイメージリを付与された存在を必要とすることが明らかになった。しかし、二人はマギーの脅威を克服することはできない。5章では、その様子をもとに、拭い去れないマギーがもたらす不安の内容と、グロテスクのイメージリがもつ意味の比較を通じて、本稿の課題、障害の身体とグロテス

クのイメージ関係性を検討した。結論としては、マギーが二人を不安にさせることから、二人が作品の世界を構築することを踏まえれば、マギーの障害が何らかの攪乱可能性をもっていると考えられるが、それを従来の研究に見られるように、無批判にグロテスク性と結び付けることは不適切であることが導かれた。

「レシタティブ」において「グロテスク」のイメージは、ガー・ガールズが成長せず留め置かれるように、もはやある種利用されうるものであると言える。本研究では、障害の身体に付与されるグロテスク性について考えたが、モリスン作品においてグロテスクは、例えば母（性）やゴースト、人種などとも結び付け論じられることがある概念だ。また、西欧文化において女性（性）とグロテスク性が結び付けられてきたという指摘もある（Shildrick, 2002, 2009; Thomson, 1997, 2011）。したがって、今後、他のモリスン作品におけるグロテスク概念との比較の必要性は指摘するまでもないが、「レシタティブ」についても、特に母性や人種そして女性性との関係を検討する必要がある。

トワイラとロバータは家庭をもつこと等によって、幼い頃に恐れていたビッグ・ガールズを克服する。しかし、母親を投影するマギーの脅威は作品中では解消されない。本稿はビッグ・ガールズ／ガー・ガールズが留め置かれることを注視してきたが、未だ幼い頃より抱えている不安から逃れられない二人もまた、留め置かれる存在と考えられるかもしれない。また、マギーも、彼女の身体がある種の攪乱を起こす可能性が見られるが、彼女は自ら語らない。二人の母親も最後までダンスし続け、病気であり続ける。主な登場人物が皆女性である「レシタティブ」において、彼女たちは皆何かに留め置かれている。

Author note

本研究の一部は、日本学術振興会（特別研究員奨励費）「トニ・モリスンの9. 11以降の作品における外傷的記憶の「証言」と「情動操作」」からの助成によるものである。

Footnotes

- ¹ 「障碍」という語の定義については様々な議論があるが、モリスン作品における身体や精神の「欠陥」や「疾患」等を論じる先行研究での使用を踏まえ、“disability”及び“impairment”どちらの意味も含み、「正常」から外れる身体及び精神両方を指す語として本稿では用いる。
- ² 「わたしが唯一書いた短編小説「レシタティブ」は、異なる人種の二人の登場人物についての語りから、全ての人種の記号を取り除き、人種のアイデンティティがいかに欠くことのできないものであるかを示す実験であった。」(Morrison, 1992, p. xi)
- ³ 「怒っている女の子たちで、彼女たちのほとんどは怯えた家出人。可哀想な小さな女の子たちで、おじさんたちを撃退しようと戦っていて、でもわたしたちには強そうに見えた、それから意地悪そうにね」。なお、邦訳は以下の篠森訳を適宜参照したが、全て拙訳である。Morrison, Toni. (2010). 「レシタティブ——叙唱」(篠森ゆりこ, Trans.). In 池澤夏樹 (Ed.). 『池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集 III - 05』. 東京：河出書房. 313-344.
- ⁴ 「リップスティックとアイブロウペンシルなんて次元じゃない。彼女に比べたら、ビッグ・ガールズなんて屁さんだよ」
- ⁵ 「ビッグ・ガールズ（わたしたちはガー・ガールズって呼んでいた——公民の授業のときに〔教科書に〕描かれていた邪悪な石の顔をロバータが読み間違えたの）果樹園でおどっていた」
- ⁶ 「あの女の子たちは行動に問題があったでしょ」
- ⁷ ルーヴル美術館で、2006年10月13日から Melpomène Gallery（12月11日まで）と Mollien Rooms（翌2007年1月15日まで）において開催。
Retrieved from http://www.louvre.fr/sites/default/files/medias/medias_fichiers/fichiers/pdf/louvre-quotforeign-bodiesquot-press-release.pdf (Accessed August 28, 2015)
- ⁸ 「わたしの母親は毎晩ダンスしていて、ロバータの母親は病気だった」
- ⁹ 「どうしろって言うの？果樹園でダンスし続けるとでも？」
- ¹⁰ 「彼女はリップスティックを確認するための鏡を取り出そうとハンドバッグに手を伸ばした」
- ¹¹ 「彼女は本当に殺されないといけない」
- ¹² 「三人の陽気なガーゴイル、三人の陽気な鬼婆」
- ¹³ 「彼女たちがリップスティックをつけるときには、濃くなりすぎることを恐れて、決

して口全体に塗ったりはしない」

- ¹⁴「いま彼女はびっくりした形の眉を描き、キューピッドの弓のような形のくちびるを描いた。後で彼女は東洋的な眉と悪魔の深い切り傷のような口に描きなおすだろう」
- ¹⁵言語障害者や聴覚障害者については、作中で込められている差別的なニュアンスを踏まえるために、本稿では必要に応じて「啞」や「聾」と訳す。
- ¹⁶「マギーはわたしのダンスしている母親だった。耳が聞こえないってわたしは思っていたし、それから口がきけないって。空っぽ。夜中に泣いたって誰も聴いてくれるひとなんていない。意味のあることを教えてくれるひともいない。彼女が歩くとき、身体が振れていて、ダンスしていて、揺れているの」
- ¹⁷「それから、彼女はうまく話すことができなかったから、ほらあなたも知っているでしょ、わたし彼女はいかれてるって思っていた。彼女は施設で育ったんだ〔とと思っていた〕、わたしの母親みたいに」
- ¹⁸「子どもじみているように思えた」
- ¹⁹「わたしはいまはもう違うの、トワイラ。でもあなたは同じ。あなたは、地面に倒れている可哀想な黒人の年とった女性を蹴った子どものまま」

²⁰ cf. Footnotes 9

- ²¹「それから、ガー・ガールズが彼女を押し倒して、乱暴を始めたとき、わたしは彼女が叫べないことを知っていて——ちょうどわたしみたいに——わたしはそれをよここんでいた」
- ²²「[cf. Footnotes 17] それからわたしも将来そうなるようにね。わたしたちは彼女を蹴ってはいない。やったのはガー・ガールズ。彼女たちだけ。[...] でも、ほら、わたしもそれを望んでいたの。彼女たちが彼女を痛めつけるのをわたし本当に望んでいたの」
- ²³ モリスンのインタビューにおける「パライア」は、白人側が黒人との接触を拒む文脈となりうるが、しかし学校統合については黒人側から統合を拒否する声もあり、それを踏まえると、この場合、どちらの人種の側からの拒否もありうると考えられる。
- ²⁴ 既述のとおり、モリスン作品における人種と障害の関係自体が論争の対象であり、本稿のここでの議論は両者の還元可能性を意図するものではない。
- ²⁵ 障害をもつ身体が引き起こす接触による感染の恐怖については Shildrick (2002) に詳しい。
- ²⁶ 「わたしは自分がやっていないって知っているし、できなかったって知っている」
- ²⁷ 「彼女たちが彼女を倒したの。あの女の子たちが彼女を押し倒して、彼女の服を引き

裂いたの」

²⁸ cf. Footnotes 19

²⁹ 「わたしはガー・ガールズと一緒にあってあの女性を蹴っていない。[...]」 [cf. Footnotes 21]」

³⁰ cf. Footnotes 22

³¹ 「ああ、いや、トワイラ。やだ、やだ、やだ。マギーに一体何があったの？」

³² 「わたしが覚えているのは彼女が年をとっていたということ、本当に年をとっていた」

References

- 荒このみ. (2008). 「トニ・モリスン文学における身体的欠落の「暴力」」. 『総合文化研究』. 12, 117–141.
- 鵜殿えりか. (2015). 『トニ・モリスンの小説』. 東京：彩流社.
- 馬杉宗夫. (2007). 『黒い聖母と悪魔の謎』. 東京：講談社.
- 尾形希和子. (2013). 『教会の怪物たち—ロマネスクの図像学』. 東京：講談社.
- 金丸敏志. (2004). 「"What the Hell Happened to Maggie?" —Toni Morrisonの "Recitatif" における人種と障害の政治学—」. 『中・四国アメリカ文学研究』. 40, 11–21.
- 杉山直子. (2006). 「人種をこえる娘たち—トニ・モリスンの「パッシング」小説「レシタティフ」と『パラダイス』」. 『言語文化』. 23, 19–33.
- 関根康正 & 新谷尚紀編. (2007). 『排除する社会・受容する社会—現代ケガレ論』. 東京：吉川弘文館.
- Androne, Helane Adams. (2007). Revised Memories and Colliding Identities: Absence and Presence in Morrison's "Recitatif" and Virmontes's "Tears on My Pillow". *MELUS*, 32 (2), 133–150.
- Corey, Susan. (2000). Toward the Limits of Mystery: The Grotesque in Toni Morrison's *Beloved*. In Marc C. Conner (Ed.), *The Aesthetics of Toni Morrison: Speaking the Unspeakable*. Jackson: University Press of Mississippi. 31–48.
- Hall, Alice. (2012). *Disability and Modern Fiction: Faulkner, Morrison, Coetzee and the Nobel Prize for Literature*. Palgrave Macmillan.
- LaCom, Cindy Marie. (2002). Revising the Subject: Disability as "Third Dimension" in *Clear Light of Day* and *You Have Come Back*. *NWSA Journal*, 14 (3), 138–154.
- Morrison, Toni. (1992). *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. New York: Vintage Books.
- Morrison, Toni. (1995). Recitatif. In Linda Wagner- Martin and Cathy N. Davidson (Ed.), *The Oxford Book of Women's Writing in the United States*. New York: Oxford University Press. 159–175.
- Morrison, Toni. (2004). *Remember: The Journey to School Integration*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Morrison, Toni. (2007). *The Bluest Eye*. New York: Vintage Books.

- Morris, Susana M. (2013) "Sisters Separated for Much too Long": Women's Friendship and Power in Toni Morrison's "Recitatif". *Tulsa Studies in Women's Literature*, 32 (1), 159–180.
- Scotch, Richard K. (1984) *From Good Will to Civil Rights: Transforming Federal Disability Policy*. Philadelphia: Temple University Press.
- Shildrick, Margrit. (2002). *Embodying the Monster: Encounters with the Vulnerable Self*. London, Thousand Oaks, New Delhi: Sage Publication.
- Shildrick, Margrit. (2009). *Dangerous Discourses of Disability, Subjectivity and Sexuality*. Palgrave Macmillan.
- Sklar, Howard. (2011). "What the Hell Happened to Maggie?": Stereotype, Sympathy, and Disability in Toni Morrison's "Recitatif". *Journal of Literary & Cultural Disability Studies*, 5 (2), 137–154.
- Stanley, Sandra Kumamoto. (2011). Maggie in Toni Morrison's "Recitatif": The Africanist Presence and Disability Studies. *MELUS*, 36 (2), 71–88.
- Tate, Claudia. (Ed.). (1988). *Black Women Writers at Work*. New York: Continuum.
- Thomson, Rosemarie Garland. (1997). *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature*. New York: Columbia University Press.
- Thomson, Rosemarie Garland. (2011). Integrating Disability, Transforming Feminist Theory. In Kim Q. Hall (Ed.), *Feminist Disability Studies*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press. 13–47.

Restrained Female Bodies: The Relationship between the Imagery of "Grotesque" and the Disabled Body in "Recitatif" Mai IGARASHI

"Recitatif" (1983) is the only short fiction which has been written by Toni Morrison. This story consists of the encounters and conversations every few years of two women, Twyla and Roberta, who first met in an orphanage when they were 8 years old. In addition to former research that had been discussed about racial matters, recently some studies have been engaged in analyzing a representation of disabled bodies. The theme of disability (or bodily impairment) in Toni Morrison's works have been deliberated upon her novels. Many of these investigations have been focused on the disabled body as a kind of "grotesque" thing. However, in "Recitatif", the imagery of grotesqueness is given not to just the orphanage's kitchen woman, Maggie, who is supposed to physically and mentally disabled, but also the other characters. These are older girls ("big girls") in the orphanage, who are called "gar girls" by Twyla and Roberta. The nickname of "gar girls" comes from "gargoyle", a character that has a grotesque figure. It is supposed that they have an able body. Consequently, there is a more complicated relationship than the premise that connects grotesqueness and the disabled body as a straight one. Therefore, in this paper, I would like to reconsider the relationship between grotesqueness and disabled body.

Maggie and big girls / gar girls appear in Twyla and Roberta's reminiscences of the orphanage which they talk about in almost every encounter. Twyla and Roberta firstly call older girls as "big girls", and in a certain point of this talk, they change it to "gar girls". In this essay, I want to focus on this change of nicknames in order to reexamine the relationship. Focusing on it means to analyze the process of giving grotesqueness to not grotesque one at the beginning of this story. First, what happens in this change will

be addressed. We will find the meaning of the imagery of “grotesque” as a sense of evil and sexual deviance in this story. Then, the meaning of this change will be explained. We will know the situation that Twyla and Roberta overcome a kind of threat by they became older than big girls. Thirdly, what Twyla and Roberta are doing in this change, especially how they are related to Maggie, will be examined. It will be show that comprehending this change is crucial for Twyla and Roberta to protect themselves against Maggie as a kind of danger. As a consequence, we will appreciate the failure of Twyla and Roberta’s attempt to guard themselves from the danger of Maggie. Finally, through investigating the meaning of this failure, the relationship between the grotesqueness and the disabled body will be elucidated. To conclude, it will find the fact that the possibility of the disabled body differs from the imagery of the grotesque in “Recitatif”.

Keywords:

Toni Morrison, “Recitatif”, (re) presentation of disabled body, imagery of grotesque, touch and contagion

クィア・ネガティヴィティの不可能な肯定
——固有／適切でない主体の脱構築的批評
羽生有希

「ウィ」の肯定とは他者の肯定、言語としての他者の、さらには言語の他者の肯定にほかならない。したがって、他者の肯定としての「ウィ」の思想は、脱構築はニヒリズムに帰着する否定思想ではないというデリダの主張をはっきり確証するものの一つである。…デリダがここで問題にする「ウィ」は、…言語以前に到来し、…それを可能にしているような「根源的な」肯定である。…「ノン」と語り書く場合でも、この根源的な肯定があらかじめ言語の場を開いているのでなかったら、まったく不可能になってしまうだろう（高橋, 2003, pp. 169–170）。

「否」を通して肯定することが構造的に可能であるのみならず必然であるとする言えることを認めつつ、私たちはある種の「否」が十分に否でなく、同一性の〈否認〉としての肯定となりうることをいかに批判できるだろうか。このように問うことすら十分ではなく、否を通じた肯定を説くことは、否を通じた〈否認〉としての肯定の批判と、実は裏表の関係にあるべきものなのではないだろうか。

このような問いかけがどれほど形而上学的に聞こえるにしても、この問いは性を問うにあたってひとが図らずも出会わざるをえないものであると筆者は考えるのであって、その意味で、多くの他のフェミニズム哲学の論者が行ってきたように、哲学の議論をフェミニズム／クィア理論に応用するのみならずむしろフェミニズム／クィア理論から哲学の問いを深化させることを本稿は狙っている。このようなプロジェクトの鍵概念は、クィア・ネガティヴィティ¹である。

クィア・ネガティヴィティの前提と遍歴

リー・エーデルマンは2004年に『未来なし』(No Future)を著した。ここではまず簡単に当該書のモチーフをクィア理論の大まかな流れとの関係で指摘するにとどめよう。エーデルマンは『未来なし』で、保守にせよリベラルにせよあらゆる政治的なものの領野が、望まれるべき未来とイコール化されている「御子 (the Child)」という形象を自らの限界にして構成されていることを指摘し、このような「御子」の保存とそれへの不可能な同一化を通じて私たちの生／性が構築されることを「再生産的未来主義」と呼んで批判した。当該書の冒頭からその姿勢は明らかにされる。曰く、「政治的なものそれ自体がそのうちで考えられるようなロジックを、御子のイメージを画定する幻想が不変に形作っている」のであって、その意味で再生産的未来主義は、「政治的言説なるものへのイデオロギー的限界を課しており、そのプロセスにおいて異性愛規範の絶対的特権を温存するのだが、それはこの共同体諸関係の組成的原理へのクィアな抵抗の可能性を想像できないようにさせ、政治的領野の外部に投げることによってである」(Edelman, 2004, p. 2)。そしてエーデルマンは、たとえば同性愛者を現在の未来の秩序に迎合させるのではなく、このように社会の外部に追放されるクィアの現今の社会に対する否定性をラディカルに受け取るよう示唆する。「私たちはむしろ形象的に、「上記のどれでもない (none of the above)」へと投票してよいし、象徴界の法に応じる恒常的な否の至高性へと投票してよいのであって、そのことは当の法の定礎的行為、その自己構成的否定に共鳴する」と彼は述べており (Edelman, 2004, p. 5)、ここでは法がクィアに課す否定を法それ自体に向け返すことが重要なのだ。クィア・ネガティヴィティの否定性は「どれでもない」ことの顕示に求められると言ってもよい。

だからこそ、クィア政治／研究におけるクィアという語の使用が侮蔑語の(再)領有であったことを知るものにとって、このように現今の異性愛規範的な秩序からの否定を受け取り、それを当の秩序自体に向け直す理論がクィア理論の正統——クィア理論においていかに正統が疑われるべきものであるにしても——に位置することを否定するのは不可能である。『未来なし』でのクィア・ネガティヴィティは、クィア研究の初期のテキストであるレオ・ベルサー

二の「直腸は墓場か」における、ゲイ・セックスの暴力による近代主体の解体の議論に共鳴することで過去の議論を引き継ぎ、発表直後から議論を喚起したため、2006年にはPMLAにてMLAでのパネル発表を受けた特集が組まれた。また、同時期のクィア理論における時間性への注目とそれを受けたGLQでのラウンドテーブルの特集においても、「再生産的未来主義」の批判は無視されるべきでない議論として受け止められた。さらにブームを経た後でなお、クィア・ネガティヴィティへの応答は続いており、2015年の4月には国際基督教大学にて「クィア・ネガティヴィティ再考」をタイトルに掲げた公開研究会が開かれた。また同年5月に刊行されたフェミニスト文化研究の代表的な学術誌である*differences*の特集は、「反規範性なきクィア理論」であったが、「反規範性」〈あり〉の代表的理論として集中的論駁の対象になったのがエーデルマン的な否定性であったことは(Wiegman & Wilson, 2015)、クィア理論が自らの支柱としてのみならず必要な亡霊としてのクィア・ネガティヴィティに依然として取り憑かれ続けてきたことを意味しているように思える。

けれどもクィア・ネガティヴィティのクィア理論における重要性を否定することができないということは、それに対する反対がなかったということとイコールではない。事態はむしろ逆である。すでにMLAパネルおよびクィアな時間性についての議論でも、セックス・ピストルズなどの大衆文化の諸作品に規範的枠組みを解体する契機を見出して、エーデルマンとは別の形で異性愛規範的な時間の在り方を批判しつつクィア・ネガティヴィティを定義づけようとしたジュディス・ハルバーシュタムとエーデルマンとの対立は見逃されるものではなかった。性的逸脱性を評価しつつも否定性を唱えるのではなく、あくまでクィア・ユートピアを目指そうとするホセ・E・ムニョスの議論も、やはり2006年のPMLAに明らかだった。このように考えるなら、クィア・ネガティヴィティの理論史的意義は単にそれが既存の議論を引き継ぎつつ後のパラダイムとしても定着したということにあるのではなく、むしろ様々な異論を含めて議論が続いていること自体に見出されるとさえ言える。

それではエーデルマン自身は自らの理論への反駁をどのように受け止めているのだろうか。エーデルマンは先に挙げたパネル発表において自らに対する批判に応酬している。彼はユートピアニズムの主張が社会の依って立つ「内的対

立」を無視したものであることを、フロイトの心的構造やアドルノの否定性についての議論を援用しながら足早に退け、ハルバーシュタムに対しても、「政治的対立そのものを説明するような滞留し続ける否定性と個別の政治的諸立場を否定するというより単純な行為とを混同している」と批判し、クィア・ネガティヴィティの意義を次のように再確認する。曰く、再生産的未来主義を最も揺るがすのは、「アドルノが書いているような「すべてを従属させる同一性 (identity) 原理」によってなされる原初の侵犯、暴力への欲動的な抵抗を通じて行われる実定的アイデンティティ／同一性 (positive identity) のクィア・ネガティヴィティによる拒否」なのだ (Caserio, Edelman, Halberstam, Muñoz, & Dean, 2006, p. 821, 822)。エーデルマンのこのような応酬を見れば、再生産的未来主義批判の理論的な核心はこの同一性原理への否定にあると考えてよいだろう。

筆者はこのようなアイデンティティ／同一性に対する根源的な否定性への注目を極めて重要なものと捉える。にもかかわらず、いやむしろだからこそ、エーデルマンの立場を彼自身に向け直すことが必要であるように思われる。彼が提唱する否定性の議論は、本当に実定的アイデンティティを否定しきれているだろうか。「欲動的な」、それゆえ特定の形式を帯びることのないクィアな抵抗が正にその否定性において暗黙の裡に卓抜した政治的主体を温存する可能性はないのだろうか。そのような可能性を批判しつつ否定性を重要視したとき、そもそも実定的アイデンティティを拒否することとはどのようなものとして再考されうるのだろうか。

このような問いに答えるため、本稿はまずクィア・ネガティヴィティのテーゼを理解するための補助線として、フレンチ・フェミニズムを利用し、両者の接点を固有／適切でない主体——このタームはいわゆる「分割された主体」を含む、自己を自己ならざるものにしていく／されている主体の総称として筆者が用いるものだ——による抵抗という点を軸として描き出す。クィア理論とフレンチ・フェミニズムの系譜学的関係を否定することは難しいにもかかわらず、クィア・ネガティヴィティとフレンチ・フェミニズムの理論的關係は管見では十分に明らかにされてこなかった。本稿の最初のセクションはそれゆえ一義的にはクィア・ネガティヴィティのテネットをフレンチ・フェミニズム、も

しくはラカン派精神分析を批判的に継承したフェミニストたちの主張²と照らし合わせることで理解することを目指すものの、その副次効果として両者の理論的結びつきを明らかにし、より広い理論史的観点の土台を提供するだろう。このようにフレンチ・フェミニズムとクィア・ネガティヴィティの接続を行ったうえで次に取り上げるのは、精神分析の理論家でありフェミニストであるジャクリーン・ローズの論とガヤトリ・C・スピヴァクによるローズ批判である。ここでは、ローズ的な「分割された主体」という概念について、スピヴァクの論点を考察する。本稿は最後に、スピヴァクのローズ批判から炙り出された問題をこれもまたスピヴァクによる別の批判に、すなわち西洋知識人による「労働者」主体の声の篡奪への彼女の批判に結び付ける。ここでは脱中心化された主体への批判の政治性に着目する。このようにして本稿は、クィア・ネガティヴィティとフレンチ・フェミニズムの接続から明らかにされる諸問題をスピヴァクの提示する視点から考えることで、単にクィア・ネガティヴィティを否定するのでもそれを無批判に称賛するのでもなく、その否定性の意味することをラディカルに考え直していく。そうすることでクィア・ネガティヴィティの他者の（不）可能性を、とりわけその倫理的意義にも着目しつつ、明滅させてみたい。

1 クィア・ネガティヴィティとフレンチ・フェミニズムの比較

——固有／適切でない主体をめぐる

まず示してみたいのは、フレンチ・フェミニズム、もう少し広く言えばラカン派精神分析を批判的に継承したフェミニズムとクィア・ネガティヴィティの議論との類似点である。第一に指摘すべきは、両者がラカン派精神分析に依拠しているということだ。両論を一読すれば明らかなこの点について筆者が強調しておきたいのは、エーデルマンもフレンチ・フェミニストとして分類される論者も、主体の形成について、欲望と言語、むしろ言語としての欲望といった観点から説明を行っているということだ。この第一の類似点は、より注目すべき他の類似点と不可避免に関係する。第一の類似点から帰結する第二の類似点は、自らに対して固有であるような個人主義的主体という近代以降前提とされてきた主体モデルに反して、両者が分割された主体（divided subject）、さら

には固有／適切でない主体という在り方を提示していることである。象徴界秩序が言語的なものである以上、その中で構成され、自らの同一性をシニフィアンにおいて表出しようとする主体は、常に自己から疎外されざるを得ないし、逆に言えば、そのような構造的自己疎外こそが主体の成立の条件なのだ。エーデルマン（2004）は次のように分割された主体を定式化する。

主体としての我々の象徴界的構成の疎外的で無意味な徴としてのシニフィアン…。このシニフィアンは一種の約束的なアイデンティティ／同一性のみを、われわれがそれと完全に一致することなど決して果たせないようなそれのみを授ける。なぜなら我々は…我々を分割しつつ逆説的にもそのような分割（division）の行為を通してのみ我々を主体にするギャップを閉じることによって、我々が何を意味しようとする意味するものに追いつこうと望むことしかできないからなのだ（p. 8; 強調は原文ママ）。

また、クリステヴァのフェミニズムに関する論文を訳出し、アンソロジー化した棚沢直子（1991）は、「クリステヴァの主体思想」を簡潔に整理している。

この概念〔クリステヴァの主体概念〕はそれまでの自己同一的なそれではなく、「今語りつつある主体」、つまり語りながら言語の中の言語でないもの…を噴出させていく、いわば非同一な主体の概念である。彼女に言わせれば、主体にはそもそものはじめからこのでないという否定性、この他者性、異質性、異端性、外国人性がその核に内在している。そして、主体が語るときに、これが湧出して主体の自己同一性を破壊しつつ、再構成し、同時に社会に働きかけ、社会性を破綻させ、更新し、拡大していくのである（pp. 238-9; 強調は原文ママ）。

厳密に言えば、シニフィアンが課す不可能な同一性による分割と、言語の中で言語でないものを維持することによる分割とは必ずしも同じではない。しかしながら、象徴界に収まることのないもののゆえにそもそも自己同一化できな

いものとして主体が構成されること、どこかその主体に「でないという否定性」が見出され、「社会性を破綻」し「拡大」するモーメントがあるとされることは、「反社会性」や「否定性」が焦点化されるクィア・ネガティヴィティについての議論において無視されるべきものではないだろう。

主体の固有なものを非固有化すること、もしくは常に非固有化されたものとしての主体。しかしながらこのような主体概念を提示するだけなら、これらは他の精神分析系批評と大した違いはない。また、すべての主体が常にこのような構成的矛盾を抱えているからと言って、すべての主体が等しく象徴界秩序を攪乱するわけでも逆にそれに完全に従属するわけでもないということは明らかだろう。とすれば、ファルス中心主義的秩序や再生産的未来主義を変革できる、ある意味で特権的とも言える主体とは、どのようなものなのか。言い換えれば、主体の非自己性、不適切さを明示的に表示する不可能な形象、非主体としての主体とは、一体誰なのか。フェミニズム、クィア理論としてこのような（非）主体を分節化するとはどういうことなのか。これらの問いがもう一つの類似点の鍵である。すなわち第三に、象徴界秩序を可能にしつつ、そこから排除されざるをえない構成的外部をエーデルマンもフレンチ・フェミニズムの理論家たちも打ち出しているのだ。そしてそのような象徴界の構成的外部とは、フレンチ・フェミニズムにおいては「女性」と名指され、エーデルマンにおいてはクィア、もしくは「症性愛者（sinthomosexual）」³と名指されていた。

たとえば先の棚沢の引用では明らかでない否定性の担い手を、クリステヴァは次のように明示する。

「権利要求の場面などよりも」もっと深い意味では、女性はあるということができません。…女性の実践は、存在するものに逆らって、「それではない」とか「まだそれではない」とか言うための否定でしかありえません（519; 強調は原文ママ）。

またシクスーは、「メデューサの笑い」（1975）で女性を「脱固有化」するものとして次のように定義する——たとえ定義という語がこの文脈でいかに不適切なものだとしても。

「女性に固有な」ものがあるとすれば、それは逆説的なことに、打算抜きに自らを脱固有化するという彼女の能力なのだ (p. 50)。

対して、アイデンティティ・ポリティクスを批判する文脈でのエーデルマン (2004) の、多分に皮肉を込めてはいるが適切なクィア (理論) の否定性についての描写は次のようなものであるが、その特質をシクスーによる定義のそれと比べないことは困難を極め、彼があたかも彼女の議論を領有したのではないかと錯覚させられる。

アイデンティティ主義のマイノリティたちの政治的諸介入が…対立的なものとして適切に (properly) 形を帯びうる…一方で、クィア理論の対立はまさしくそのようなあらゆる対立の／というロジックに対するものであり、その固有な (proper) 課題は、すべての尤もらしさ／恭しさ (propriety) の止むことなき脱領有化 (disappropriation) である (p. 24; 傍点強調は原文、太字強調は筆者)。

注意しておけば、このような「女性」、もしくはクィアが象徴界秩序の構成的外部の形象と見なされるからといって、実在する個々の女性や同性愛者がみな現在の社会にとって批判的実践を必ず行うというわけではない。エーデルマンやフレンチ・フェミニズムの論客が論じるのは、あくまで現在の社会体制からアブジェクトされたものが当の体制にとって逆説的にも必要不可欠なものとなっているということであり、また、そのような体制から懸け離れて何らかの本質的に革命的な実体があるわけではないということなのだ。

もちろん、クィア・ネガティヴィティの議論とフレンチ・フェミニズムの議論には見過ごすことのできない差異もあるだろう。たとえば死の欲動への注目の有無はそのような差異の一つである。『未来なし』はヒッチコックの『鳥』を具体例に挙げ、死の欲動を「非人間的なもの」の拡大として論じているが (Edelman, 2004, p. 152)、フレンチ・フェミニズムにおいてはそのような象徴界秩序を攪乱するモーメントは、「父の名」介入以前の母子関係が参照されながらむしろ、享楽に求められてきたと見てよいだろう。しかしながら重要な

ことに、エーデルマンは死の欲動を享樂と、さらに付け加えるならクィアとほぼ同義的に用いている。曰く、クィアネスが体現する「現実界の残余」への「一つの名は、ラカンが記述するように、享樂である」(Edelman, 2004, p. 25)⁴。両者の違いはあくまで、同性愛者、母としての女性というそれぞれの形象との、現今の秩序におけるそれぞれの差別的かつ支配的イメージ——たとえば「死すべき同性愛者」、「子供と未分化な母」といったような——との不可能な同一化の要請から来るものであって、両者の差異を考慮することはそれぞれの分野での理論化という面では不可欠であるものの、そもそもの象徴界の要請に対する抵抗の可能性は共に、主体の象徴界参入以前の欲動の充溢に結局は求められるのだ。それゆえ一見したところの大きな差異も実は、両者の類似性を指し示していると言える。

2 固有／適切でない主体への批判

——スピヴァクの脱構築的分析とイデオロギー批判から

したがって、私たちはクィア・ネガティヴィティの議論と精神分析系フェミニズムの議論との間にクルーシャルな理論上の類似点を見出すことができるし、そのかぎりで精神分析系フェミニズムへの批判をクィア・ネガティヴィティへの潜在的な警告として見ることは十分意義のあることだろう。この点を踏まえて、次にスピヴァクによるジャクリン・ローズへの批判を見てみたいが、その前に当のローズの『視覚の領野におけるセクシュアリティ』(*Sexuality in the Field of Vision*)の導入部での主張の骨子も振り返っておきたい。

ローズ(1996)の当該のテキストにおける主な主張の一つは、幻想の役割を強調する精神分析、イデオロギー批判を行うマルクス主義、さらに性的ヒエラルキーを問うフェミニズムの三者を分離させてはならないということだった(p. 7)。このような三者の接続においては、女性の心的抑圧と社会的疎外が還元的でないかたちで焦点になり、女性主体が現在の社会の認識論的フレームにおいていかに構成されるかという点が介入的言説の集結地点として注目されることになる。このような分析は、たとえば以下でも述べるように、分裂した主体としての女性を強調することなどにおいて今までに確認した精神分析的フェミニズムの主張と重なる部分が多いのであり、それゆえにクィア・ネガティ

ヴィティの議論を考える際に参照すべき議論であると言える。政治分析と精神分析、フェミニズムの交錯、および女性の主体性について印象深い箇所を引用しておこう。

…次のように言ってみよう。分割された主体性の概念が政治的分析と要求とに共存できないというのではなく、フェミニズムはセクシュアリティ…と性的差異…の前景化を自ら行うことを通じて、とても多くの伝統的政治的分析がしばしば依拠してきた諸々の二項対立…に挑む特権的な位置にいるのだと。というのも、…自らと反目する主体性 (**a subjectivity at odds with itself**) という概念のみが女性たちに性的アイデンティティの地点における袋小路への権利を与え返すのであり、そこには規範への自らの可能なもしくは将来的な統合へのノスタルジアなどといったものはないということは正しいままなのだから (Rose, 1996, pp. 14-5)。

個々の対立ではなく、あらゆる二項対立の問題を性的差異とセクシュアリティの観点から問い直す視点は、個々の政治対立が揃って依拠する社会の対立それ自体を批評対象とするクィア・ネガティヴィティに近いかもしれないし、完全には規範に統合されえない「自らと反目する主体性」と女性の関係は、今まで見てきた固有／適切でない主体とも無関係ではないだろう。

さらにローズは、当該テキストの後半部でデリダの脱構築に対する疑義を投げかけている。曰く、デリダはあらゆる二項対立を超えようとしているが、たとえば彼のニーチェ読解などにおいて不用意にも女性を差延と同一視することで、男女の二分法を温存し、しかもそのような現在のシステムの表面に現れない形而上学的次元を女性に割り当てることで、実存する女性のセクシュアリティへの分析を妨げているというのだ (Rose, 1996, pp. 20-22)。

それでは、スピヴァクはローズの議論のどこに問題を見出したのか。主なポイントは二つである。第一に、先に引用したように、ローズがラカン派精神分析を踏まえて女性の主体性を「自らと反目する主体性」、もしくは常に分割されたものとして捉え、そのような「袋小路への権利」を要求するかのように見

えるのに対し、スピヴァク（2009）はそのような様態を「注視されるべき拘束」として見ている（p. 137）。繰り返しておけば、分割された主体の特権的位置に関するこの批判はエーデルマンの論点にも直接向けられうる。スピヴァクはまた、フェミニストがいかに精神分析から利することができるかローズが述べている箇所を引用し、批判を加える。重要な箇所なので、引用されたローズの文章とそれへのスピヴァクの評価を煩雑ではあるが引いておこう。

フェミニズムが精神分析に依拠しなければならないのは、いかに諸個人が自らを男性もしくは女性と認識するかという問題が、彼女ら彼らがそうするようにという要求が、不平等と従属の諸形式と、すなわちそれらを変えるのがフェミニズムの目標であるような不平等と従属の諸形式と根源的な関係にあるからである⁵（Rose, 1996, p. 5; Spivak, 2009, p. 138）。

…上に引いたローズの文章の最後の部分に含まれる、[文前半に引き続く] 次のステップは、私を困惑させる。そのステップは認識論／存在論から倫理政治的プロジェクトへの手早い移行を覆ってしまっているのだ。…ローズが示唆するように主体の内部の分割（division）を認めることが肝要であるにしても、一方の認識論の主体（女性）と他方の倫理政治の主体（フェミニスト）との間の還元不可能な差異を認めることも劣らず肝要であると私には思われる（Spivak, 1996, p. 139）。

すなわち、とりわけ精神分析的アプローチによって明らかになるはずの存在論的／認識論的主体、女性主体と反セクシズムの立場から行動する倫理政治的主体、フェミニスト主体という二つの次元の主体がローズにおいては短絡されているのであり、これがスピヴァクの第二のローズへの論点となる。本稿の前提に沿って指摘すれば、エーデルマン（2004）もまた、あくまで象徴界秩序の外部として認識論的に理論化されてきたクィアを次の引用のように「倫理的」次元へとスライドさせることで、スピヴァクのローズへの第二の批判点を反復しているように思われる。

症性愛者の非情／非人間性 (inhumanity) を、不可能性を擁すること。
それは…クィアたちが選ばれし倫理的作業 (the ethical task for which
queers are singled out) なのだ (p. 109)。

しかしながら、そもそもなぜこの二つの点が問題となるのだろうか。ここでは敢えて図式的に、原理的側面と政治的側面にわけて論じてみたい。まずはスピヴァクが指摘する二つの問題を超越論的に、もしくは原理的な視座から考える。彼女のここでの議論の枠組みは一言で纏めてしまえば、範例的にデリダに、とりわけハイデッガーとニーチェを読む彼に則っている⁶。すなわちスピヴァク (2009) / デリダは、存在者は存在を問うよう定められつつその問いに答えることはできないという存在論的差異についてのハイデッガーの定式をまず参照する (p. 139)。とはいえしかしスピヴァク (2009) / デリダによれば、「存在があるとひとが言う以前でさえ、そのような命題の一部分であるかぎり、存在が自らに固有でありうるという決定があるのでなければならない」 (pp. 142–3, 強調は原文ママ)。あらかじめの固有化によってこそ存在と存在者の区別 (存在論的差異) が可能になるという点で、この固有化の暴力に晒されるものは「前存在論的な」「他者」であり、このような前存在論的な他者を、私たちは存在者として成立している限りでつねにすでに前提してしまっている。固有化の暴力に晒される他者へのいわば暗黙の「応答」が「私」を可能にするのであり、そのような必要な可能性としての応答＝責任 (responsibility) に関わるものという点で、この他者との関係は「倫理的な」ものである。こうしてスピヴァクは、政治的主体はそもそも「倫理的」で「前存在論的な」「全き他者」への応答なしにはありえないし、さらに言えば存在論的／認識論的主体もそのような応答という不可能な条件なしに可能にはならないということを確認していく。スピヴァク (2009) 曰く、

認識論／存在論の主体と倫理政治のそれとの間の連続性を想定するいかなるプログラムも、差異化 [差延化] されていない (undiffaranciaded [sic]) (ラディカルに前連続的な) 倫理的なものである全き他者への／の呼びかけが政治的なものの可能性の条件であることを、存在論／認識

論のための主体の固有化 (**appropriation**) もすでにこの条件を通じて可能となっているのだということを、能動的に忘れざるをえない (p. 141)。

ただし注意せねばならないことに、このような経験的なものの根拠としての全き他者は、結局のところ経験的な言語の流用によってしか、カタクレシスによってしか示されえない。そしてこのような概念の概念性自体を示すものを考える際に参照されるのがニーチェである。ニーチェは存在論的差異を直接問うてはいなかったものの、固有化という点について、あるものがあるものとして「真理」化されるプロセスについて、性的差異を比喻に用いて語っていたのであり、そのような固有化を示すカタクレシスが「女性」とされていた (Spivak, 2009, p. 141)。言うまでもないが、ニーチェはフェミニストであったわけではない。事態は正反対だ。ニーチェが哲学者、人間／男性による真理の捏造の系譜学的批判を行う際に女性を「真理」と名指すとき、彼は「女性とは自らを与える／演じる (*sich geben*)」ものである、それ自体では自らを固有化せず、つねに固有化されえないのに固有化されるものであるとする、当時の家父長制的女性観とそれと共謀する個人主義とに浸ったままだった。より正確には、あまりに深くそのような女性観に浸っていたからこそ、そのような言説の構成的矛盾を、あるものがあるものとしてその固有の真理として捏造されるために前存在論的な固有化されえないものが固有化されるという事態を、彼のテキストは端的に示したのだ。だからこそ読者のなすべきことは、そのようなカタクレシスが無批判に受け入れるのでも全否定するのでもなく、たとえば典型的な女性蔑視のテキストにおいてそのような蔑視を崩壊させてしまうような形象に注意深くあること、暴力の構造を不可避免的に含むテキストにその暴力の解きほぐしの可能性を見出すことであり、そのような内側からの理解を含む読解は、スピヴァク (2009) において——否定性を論ずる本稿からすれば異様かもしれないが——「肯定的脱構築」と呼ばれる (p. 143)。このような言説の構成的矛盾についての考察は一見するとフレンチ・フェミニズムやクィア・ネガティヴィティの議論と近いが、いかなる主体も十全に脱中心的ではありません、むしろ主体が常に中心化されていること、そのような主体の成立において全き他者の抑圧が行われることを示す点で、袂を分かっている。「脱構

築の有用な部分は、主体がつねに中心化されているという示唆にある」のであって（Spivak, 2009, p.147）、脱中心的主体は言祝がれるべきものではなく、その宣言が他者を忘却しないようあくまで注視されるべきもののなのだ。

ここまでの点を踏まえてスピヴァクのローズへの原理的批判を整理しよう。第一にローズのように倫理政治的主体と存在論的／認識論的主体を短絡させることは、そのような主体をそもそも可能にする審級を忘却しようとする暴力を暗黙に反復してしまっている。また、脱中心化された主体としての女性を称揚する言説は、存在論的な主体にせよ倫理的な主体にせよそもそも主体が主体として成立する際には、先の他者の抑圧に伴う中心化が不可避であることを覆い隠してしまうし、さらには、そのような脱中心的主体がその存在において、自らの必要な他者なしに現在の社会を変えられるといったような、言わば原理主義的な、ニーチェとは異なれども本質主義的なスタンスに行きつく危険さえあるのだ。ラカン派精神分析を継承したフェミニズムにおける「分割された主体」の称揚がこのような意味で批判される以上、また、その「分割された主体」が特権的に脱固有化し／されるクィアと比べられる以上、クィア・ネガティヴィティの議論もこの批判を免れるものでないことは当然のことだろう。

ここまでの批判はしかし、脱中心的主体としての女性のフェティッシュ化に警鐘を鳴らすにしても、依然としてデリダの哲学的議論の枠に収まっている。そもそも存在論的主体と政治的主体との差異の無視と脱中心的主体の物語という二つのポイントは、政治的にはどのような悪しき効果を持ちうるのか。そこで忘却される他者は誰なのか。たとえそのように問うことができないにしても、そのような他者はどのように忘却されるのか問うてみてよいだろう。先のテキストでスピヴァク（2009）は、最終的には女性という名をサバルタン女性に与えることを要請しているのだが（p. 155）、そもそもローズへの批判とサバルタン女性の消去とはどのような関係にあるのか。ここでは『ポストコロニアル理性批判』の第三章におけるスピヴァクのフーコー／ドゥルーズ批判を参考に考えたい。「サバルタンは語ることができるか」を元にしたこのしばしば引用される知識人批判を取り上げるのは、スピヴァクの政治的立場を確認するためではない。彼女の批判を再考する理由は、この批判においてローズへの

批判で指摘された二つのポイントとパラレルであると思われる二つの点が注目されているからであり、それゆえそこでの政治的批判がローズの枠組みのみならず、さらにはクィア研究の理論的潮流にも当てはまりうるからだ。以下の考察はそれゆえ、固有／適切でない主体についての原理的批判の政治的射程を明らかにするものだ。

スピヴァクのフーコー／ドゥルーズ批判の一つの注目点は、主権的主体の批判としてそもそもドゥルーズ自身によって提供された「欲望」というカタクレシスが経験的な次元の欲望へと還元させられることである。フーコーとの対話でのドゥルーズ（1972 / 1975）において、「あらゆる部分的で革命的な攻撃もしくは防御」は「権力」を吹き飛ばそうとする「欲望」を通じて「労働者の闘争にリンクしている」とされるが（p. 217）、ここでの欲望はスピヴァク曰く（1999）、「『アンチ・オイディプス』の欲望ではない、すなわち（「主体」がそこで残基であるような）全般的フローへの慎重な誤名や、それに対していかなる適切な名も見つけられないようなもの、すなわち名目主義的カタクレシスではない」というのだ（251）。カタクレシスとしての欲望の流用というこの点は、ローズの議論が同じくカタクレシスとしての「女性」の忘却により、脱中心的主体としての女性という概念を打ち出しているように見えることへの批判と、ここでの二つのカタクレシスの抑圧による具体的な主体生成のプロセスは異なるにしても、関係づけられよう。もう一つのフーコー／ドゥルーズ批判のポイントは、ドゥルーズ（1972 / 1977）が「もはや表象／代理などなく、あるのは活動のみです」（p. 206）と宣言することにおいて、表象と代理、**representation**という同一の語に含まれる二つの語義の差異が無視されてしまうことである。事物や概念の描写としての表象（**Darstellung**）と、利害の委任としての代表（**Vertretung**）との差異化について、ここでスピヴァクはマルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』での区別に依拠しているが、これらの短絡は、先に触れた存在論的／認識論的主体と倫理政治的主体との差異の短絡に、「である」と「する」との短絡であるという点で対応しているとみてよい。それでは、ローズ批判とも親和性のあるこの二つのポイントは、どのような政治的含意を持ちうるのか。

表象と代理の差異を無視することの政治的な帰結は、たとえばある同じ経済

状況下に属するという点で構成されるグループが、より支配的な別のグループの構成員を自らの利害の代表者に選ぶという資本主義体制に特徴的な現象を、たとえばマルクスの分析したような、ルイ・ボナパルトの実際には大ブルジョワジー優遇の政策が小土地所有農民やルンペンプロレタリアートの支持を得ていく過程を説明できないということだ。別言すれば、表象と差異の暗黙のすり替えについて批判的でない言説は、イデオロギーの作用の軽視に通じてしまい、「被抑圧者は自らの利害を自分で理解し、行動することができている」という疑わしく、かつ危険な想定を永らえさせてしまうのだ。スピヴァク(1999)は次のように述べている。

それら〔*vertreten*と*darstellen*〕は関連しているが、それらを共に作動させることは、とりわけ両者を越えたところに抑圧された諸主体が独力で語り、行為し、知る場があると言わんがためにそうすることは、本質主義的でユートピア的な政治に通じてしまう… (p. 259; 強調は原文ママ)。

そしてこのようなイデオロギーの軽視は、もう一つのポイント、すなわちカタクレシスとしての欲望の経験的次元への安易なスライドと関係することで、より問題含みとなる。フーコー／ドゥルーズの対話では、本来主権的主体とは異なる、残余としての主体の可能性の条件を構成するはずの欲望は、一方で虚偽意識としてのイデオロギーと対立させられる欺かれえないものとして、制度化されえないものとして経験的に位置づけられている。「カタクレシスの認められていないが不可避な経験的汚染によって、欲望は暗黙の裡に繰り返しオーソドックスなモデルに基づいて「定義」されているのだから、それは「欺かれている」ことへと一元的に対立させられる」(Spivak, 1999, p. 254)。他方であらゆる主体の可能性の条件としてのいわば超越論的な——あらゆるものに共通するという——含意が流用されることで欲望は、先に見たように、世界のあらゆる部分的な運動が「労働者たちの労働」なるものに繋がるような契機として評価されるようになる。かようにして、主権的主体の批判の議論は、結局は大文字の主体としての欲望と、それをそれぞれ体現し欲望にしたがって自らの

声を発するとされる労働者たちという小文字の主体群を打ちたてうる。その一方で、そのような「労働者の闘争」の打ち立てを、分析＝表象するという様態においてしかし代弁することで暗黙に行っているヨーロッパ知識人は、自らがそのような主体を代理／表象しているという事態を予め否認する——「もはや表象／代理はありません」——ことで、したがってまた国際的な分業体制における自らの位置づけを分節化しないことで、透明な主体として復権することになる。スピヴァク（1999）は以下のように纏めている。

フーコーとドゥルーズの対話では、問題はシニフィアンや表象などないということ…、理論が中継の実践であるということ…、そして被抑圧者が独力で知って語りうるということであるようだ。このことは少なくとも二つのレベルで構成的主体を再導入する。還元不可能な方法論的前提としての欲望と権力という大文字の主体と、被抑圧者という自己同一的でないにしても自己近似的な小文字の主体である。さらに、これらの大文字の主体でも小文字の主体でもない知識人たちは中継レースにおいて透明になる。というのも、彼／女らはリプレゼントされない主体について単にレポートしているだけであり、権力と欲望（によって前提される名づけられない大文字の主体）の働きを（分析することなく）分析しているだけだからだ。…この大文字もしくは小文字の主体は、興味深いことに否認によってともに透明性の内に縫い込まれながら、国際的分業の搾取者の側に属している（p. 265）。

本来、西洋近代の社会的枠組みに最も批判的であったはずの議論は、したがってスピヴァク（1999）によれば、西洋の理論家による「語るサバルタンの腹話術」（p. 255）と形容される事態を引き起こしうるのだ。

そしてここまでの「労働者」の闘争についての主体性の打ち立てと篡奪の議論は、スピヴァクにおいてフェミニズムと遊離した問題では全くない。むしろスピヴァクが指摘しようとするのは、資本主義のグローバルな進展とともに西洋の知識人女性もしくは女性運動が国際的にリーチするにしたがって、いつの間にか特定の女性「である」ことと特定の女性として「する」ことの区別があ

やふやにされたまま、その恣意的な（非）区別においてサバルタン女性が動員されていくことである。実は、表象と代理の差異の無視から帰結する「本質主義的でユートピア的な政治」についての先の引用には次のような続きがあるのだ。

そのような政治は、階級よりもシングル・イシューのジェンダーへと転移されるときには、地球の金融化に疑いを挟ませないサポートを与えうるし、地球の金融化は、国連行動計画を通して農村部の信用貸に餌付けされた女性たちを「フォーマット化」して彼女が「発展」されるようにしつつ、無慈悲に彼女の内に一般意志を構築するのだ（Spivak, 1999, p. 259）

公平を期せば、上記引用箇所就直接に批判されているのはフレンチ・フェミニズムではなく、国連主導のフェミニズムである。しかしながら、ポスト構造主義的カタクレシスの経験的次元への短絡とそれに伴う欲動的（非）主体の形成、「である」と「する」との差異の忘却という点においてフレンチ・フェミニズムとフォーコー／ドゥルーズにおける問題が共通している以上、より根源的な意味でフレンチ・フェミニズムは上で懸念された事態を理論的に促進してしまいうる。スピヴァクがローズにおける「女性」という超越論的カタクレシスの流用と、倫理政治的主体と存在論的認識論的主体の差異に拘泥していた理由は、おそらくローズのそのような議論の危険性を、脱中心化された主体を主張しつつその他者を認めず、しかし同時にその他者を自らの脱中心性を担保するようなかたちで動員していくことの政治的危険性を見て取っていたからだろう。形而上学的批判とイデオロギー的批判はかように補綴されねばならない。さらに言えばこれらのような批判こそ、コントロールされえない欲望に則る主体化されない主体の称揚に付随しうるリスクをマークするという点で、クィア・ネガティヴィティの（非）主体の議論にも向けられる必要があるのだ。

3 結ばれるべきでない結語——否定性の他者、他者の否定性

本稿はここまで、クィア・ネガティヴィティのクィア理論における特権的位

置を概観したうえで、クィア・ネガティヴィティの議論をフレンチ・フェミニズムやラカン派精神分析系のフェミニストのそれと比較し、そこで炙り出された共通点をめぐって、スピヴァクの原理的かつ政治的批判を参考にクィア・ネガティヴィティの（非）主体の可能な暴力について警鐘を鳴らした。

注意しておけば、ローズもエーデルマンも第三世界の女性や同性愛者たちを自らの理論に引きずり込んではいない。また、フレンチ・フェミニズムやクィア・ネガティヴィティの理論的貢献を過小評価することは不可能である。再生産的未來主義を問い直すことも、女性的エクリチュールを追求することも、象徴界から排除されたものがいかに象徴界を可能にするのか考察することも依然として重要だろう。さらにクィア・ネガティヴィティに限って言えば、フレンチ・フェミニズムに対する批判を認めるにしてもクィアは同じ轍を踏みはしないと考えることもできるかもしれない。

けれども多くの分析は似たような轍がより巧妙に踏まれつつあることを示唆している。たとえば欧米におけるLGBT政治とナショナリズムの共犯関係を指摘したジャスビル・プア（2007）は、LGBTアイデンティティと異なっただけでクィアネスは「アイデンティティ規範を特異に超越している」（p. 22）のだから、その意味で固有な主体になりえないのだから、オリエンタリズム的——すなわち他者の〈否認〉を構成的要素とする——ナショナリズムの枠組みに取り込まれないのではないかという批判に答えて、次のように指摘する。

「そのようなクィアの超越の主張は」つねにすでに権力の規範化する諸々の力に意識的で、つねにそれらを転覆し、食い止め、超越でき、そうする準備のある不可能な超越的主体に行きつく。正に有責性を否定することで、もしくは諸々の他者への暴力的諸関係に絡めとられていないと、自分がそれらの外部にいと想定することで、暴力が永続されうるのだ（Puar, 2007, p. 24）。

それゆえ、欧米圏のLGBT政治の主流化が進む一方でクィアの固有／適切でない主体が称揚されるかぎりでも、またそのプロセスとあたかもパラレルな、先に見た西洋のフェミニズムの国際化とそれに並行した不可能な女性アイデン

ティティの噴出の共犯関係を考慮するなら、クィア・ネガティヴィティの意図せざる暴力とそれによる（非）主体の温存について警戒しないことはむしろ不可能である。欲望のコントロールによる個人の成立を特徴とする社会への実践的な抵抗の契機を、実存する女性や同性愛者たちすべてでなくとも、そのような社会において不可避免的に自己矛盾を持つものとして構成される特定の主体存在そのものに見出すというアクロバティックな作業によって、そのような主体を可能にしつつ不可能にする他者が忘却されうるということを、その政治性に注意を払いながら指摘しておかなくてはならないのだ。

クィア・ネガティヴィティを否定するのではなく、「注視されるべき拘束」と見ること、その否定性を肯定しつつ、むしろ肯定することを通じてその他者の（否定性の）痕跡を不可能にも「肯定」すること。それはいかに可能だろうか。この問いを開いておくことを、クィア・ネガティヴィティの否定性自体にとってのラディカルな否定性へと応答するという肯定的な作業の一助として提案しておきたい。

Author note

本稿は2015年4月に国際基督教大学にて行われた公開討論会「クィア・ネガティヴィティ再考」で筆者が行った発表に基づいている。この討論会をオーガナイズしてくださったCGSおよび東京大学清水晶子研究室に、また筆者の他の報告者諸子に、そしてディスカッションの際に有益な指摘をくださった複数の匿名の参加者に感謝したい。

また、本稿のスピヴァク及びブアについての理解は、筆者が主催している私的な読書会「フェミニズムと脱構築」で練り上げられたものだ。本稿での議論に光るものがあるとすれば、それは読書会参加者の指摘及び質問によるものであるが、本稿の理解に脆さがあるとすれば、それは無論筆者の取りこぼしによるものだ。

最後にしかし些末ではないこととして、2名の匿名の査読者に向けて、ともすれば議論の枠を狭めがちな本稿に反省の機会を与えてくださったことについて、お礼を申し上げる。

Footnotes

- ¹ 訳語の選択について弁明しておきたい。筆者は当初、“queer negativity”を「クィア否定性」と訳そうとした。この訳語はしかし、クィアを否定する何かという意味にも取られかねない。「クィアの否定性」はよりクィアの否定的性格を表していると思われるが、クィアの名詞化を通じてそれを実体化することに参与しかねない。「クィアな否定性」は他方で、実体化を避けつつもその形容詞化によって、クィアが持つ文字通りの否定の性格を希薄化させる。それゆえ、日本語の議論への置き換えを重視せねばならないことを認めつつも、上記のような懸念を抹消しないように「クィア・ネガティヴィティ」という表記を筆者は採用した。
- ² フレンチ・フェミニズムは、周知の通りどれほど奇妙に聞こえようとも、英語圏の産物である。ただしこの生産が一樣ではなかったことには、あまり注意が払われていない。スピヴァクも別の論文で引いたことのある、1980年に出版されたマークスとドゥ・クールティヴロンによる『新しい諸々のフレンチ・フェミニズム』というアンソロジーはたとえば、ボーヴォワールなどの現在では狭義のフレンチ・フェミニズムの論者に含まれない論客を選んでいた。本稿の対象はクリステヴァやシクスー、イリガライといったラカン派精神分析を批判的に受容した著者は勿論のこと、彼女らに影響を受け、彼女らを一つのグループにまとめた英米圏、日本のフェミニストを含んでいる。なぜならそのようなグルーピングがフレンチ・フェミニズムを「産んだ」からだ。ちなみにフレンチ・フェミニズムに対応するような日本でのカテゴリーは、「現代フランス女性思想」——「フェミニズム」ではない——というものだろう。このような時代的かつ地域的に異なってきた腑分けはしかしながら、本稿後半の論点と重ねると、より大きな問題を提示する。というのも、これらの差異は第一世界の知識人に対して第三世界の「労働者」という他者がいるということではなく、第一世界の理論内部にすでに亀裂が入っていたことを示してしまうからである。また、フェミニスト主体と女性主体のスライドという本稿中盤以降に扱う論点もここには見出される。これらの問題の分析及び解釈は現在の筆者の能うところでない。
- ³ 「それぞれの主体が象徴界、想像界、現実界の秩序を編み込もうとする個別の仕方」であり、「象徴界的現実への主体の取り組みの必然的条件」でありながらも「象徴界論理を拒否する」ような、社会の「アンチテーゼ的定礎」としてのラカンの「サントーム (sinthome)」を、「反社会的な」ものとされてきた「同性愛」と結び付けることでエーデルマン (2004) は「サントーモセクシュアリティ」というこの反未来主義的な新語を鑄造している (pp. 35–6)。筆者の訳は、「症候」と「同性愛」のみ

ならず、同性愛と置き換えられ並置されながら病理化されてきた「小児性愛」をも音のレベルで一語の内に響かせることで、「社会秩序と御子を犯せ！」(Edelman, 2004, p.29) という反社会的テーゼを反復しようとした。

- ⁴ 死の欲動、享樂、クィアのこのような近接性ゆえに、上述したようにエーデルマンの議論はベルサーニのそれと共鳴するものとして受容されてきたが、両者の異同、およびその政治的効果については、ラカン派精神分析とフロイト派精神分析というそれぞれの理論的土台の違いも踏まえて今後議論されなければならないだろう。
- ⁵ この文はしかし、若干恣意的な引用である。というのも、スピヴァクは「精神分析に依拠しなければならない」という文言を補っているが、原文中の前文（「このこと [アイデンティティの問いが精神分析にとって中心的であったということ] が、ラカン派精神分析がフェミニズムと映画分析という二つの道を通して…英米圏の知的生活に入ってきた理由である」）を考慮するなら、当該の文は「なぜフェミニズムを通してきたか」といって、いかに諸個人が…からである」というように訳せるからだ。ただし、ローズの論文全体の趣旨はフェミニズムと精神分析（およびマルクス主義）が互いに補うように使用される必要があるというものなので、ここでの恣意的な引用によるスピヴァクの分析への大きな影響はほとんどない。
- ⁶ この読解についてはデリダ『エプロン』（1978）を参照。

References

- 高橋哲哉. (2003). 『デリダ——脱構築』(現代思想の冒険者たち Select版). 東京: 講談社.
- 棚沢直子. (1991). 「解説 クリステヴァの女性思想——母が自ら語りはじめるとき」(J・クリステヴァ『女の時間』棚沢直子、天野千穂子訳所収). 東京: 勁草書房. 235–271.
- Casero, R. L., Edelman, L., Halberstam, J., Muñoz, J., & Dean, T. (2006). The antisocial thesis in queer theory. *PMLA*, 121 (3), 819–828.
- Cixous, E. (1975). Le rire de la Méduse. *L'Arc*, 61, 39–54.
- Derrida, J. (1978). *Éperons: Les styles de Nietzsche*. Paris: Flammarion.
- Edelman, L. (2004). *No future: Queer theory and the death drive*. Durham and London: Duke University Press.
- Foucault, M., & Deleuze, G. (1977). Intellectual and power: A conversation between Michel Foucault and Gilles Deleuze. In M. Foucault, *Language, counter-memory, practice: Selected essays and interviews* (pp. 205–217). (Donald Bouchard & Sherry Simon, Trans.). Ithaca: Cornell University Press, 1977. (Original work published 1972)
- Kristeva, J. (1977). *Polylogue* (Collection “Tel Quel”). Paris: Éditions du Seuil.
- Marks, E., & De Courtivron, I. (Eds.). (1980). *New French feminisms: An anthology*. New York: Schocken Books.
- Puar, J. (2007). *Terrorist assemblages: Homonationalism in queer times*. Durham and London: Duke University Press.
- Rose, J. (1996). *Sexuality in the field of vision* (Verso Classics ed.). London: Verso.
- Spivak, G. C. (1999). *A critique of postcolonial reason: Toward a history of the vanishing present*. Cambridge and Massachusetts: Harvard University Press.
- Spivak, G. C. (2009). *Outside in the teaching machine* (Routledge Classics ed.). New York and London: Routledge.
- Wiegman, R., & Wilson, E. A. (2015). Introduction: Antinormativity's queer conventions. *differences*, 26 (1), 1–25.

* 上記文献には日本語訳された著作もあるが、本稿では文脈等の関係でそれらの訳を採用せず改めて拙訳したため、スピヴァクが自身の論文において英語

で引いていたFoucault & Deleuze (1977.)を除き、原典のみを参考文献として載せておく。

The Impossible Affirmation of Queer Negativity: A Deconstructive Critique of Improper Subjects

Yuki HANYU

Resonating with early queer theory's motifs such as appropriation, Lee Edelman's *No Future* or its central theme, queer negativity, has received not only applause but also fair criticism, and thereby occupied one of the central positions in recent queer theory. In response to such criticism, Edelman clarifies that the negativity he proposes should not be equated with the simple negation of particular political positions, and its refusal of "positive identity" should rather be directed to the identity principle on which our whole society rests. Although such a radical challenge to positive identity cannot be underestimated, we might question whether such a drive-like, amorphous queer resistance tacitly preserves or rehabilitates the positive identity it purports to negate. It should also be asked how, while criticizing such an insidious risk, we can reframe queer negativity.

In order to answer these questions, this paper firstly examines the similarities between the argument of queer negativity and that of French feminist theory, focusing on the concept of improper subject; both arguments, relying on Lacanian psychoanalysis, insist on dis (ap) propriation of identity.

After demonstrating their connection, the second section of this paper explores the criticism offered by Gayatri C. Spivak of such insistence on the divided subject, and, by doing so, marks the risk that the argument of queer negativity might entail. This section first considers her criticism against Jacqueline Rose. Based on Derridean affirmative deconstruction and his use of catachresis, Spivak proposes to understand the subjectivity of the decentered subject not as a privileged right but as "a bind to be watched". She also warns against Rose's reduction of the difference between the ontico-epistemological subject and the ethicopolitical subject. Through a

reading of such criticism, this paper suggests that an argument like that of Rose implicitly obliterates the trace of the wholly-other, which is only noticeable by attending to the catachresis “woman”, and that it reintroduces the sovereign subject.

The latter part of the second section connects such metaphysical arguments with the political analysis also made by Spivak. This part explores the criticism against Foucault / Deleuze, focusing on (A) the status of the “desire” as catachresis and (B) the inattention to the gap between descriptive representation and political representation, which can be respectively compared with (A') the status of the catachresis “woman” and (B') the reduction of the difference between the ontico-epistemological subject and the ethicopolitical subject. The inattention to the gap between *Darstellung* and *Vertretung* leads to, according to Spivak, the perpetuation of bourgeois ideology. Functioning with that kind of ideology, the confusion of the desire of the empirical instance with that of the transcendental instance rehabilitates the S / subject and implicitly preserves the transparent subject of the theorists. This paper, based on the similarities between the argument of queer negativity and that of the French feminist theory demonstrated earlier, lastly directs the criticism on French theory offered by Spivak to the argument of queer negativity. It concludes that queer negativity is to be “watched” in order to affirm the radical negativity of the other.

Keywords:

queer negativity, French feminism, deconstruction, desire, catachresis

Matters of the Flesh:
Japanese Herbivore Men and the Asexuality Umbrella
Ioana FOTACHE

1 Introduction

As birth and marriage rates have plummeted over the past few decades in Japan (Statistics Bureau, 2015; The World Bank, 2015), the public is expressing its concern regarding its future in a rapidly-aging world. Numerous studies and books have been published reporting this decline and hypothesising its causes and explore the possible tactics that Japanese society can employ to alleviate it, such as changes in public policies and labour conditions, as well attempts to raise consciousness regarding private life, sexuality and gender relations (Atoh, 2001; Coulmas 2007; Miyamoto, 2002; Miyamoto, Yamada, and Iwagami, 1997; Ueno, 1998).

Such observations of the private life of Japanese people have led to the emergence the *herbivore men* buzzword, whose exact definition varies considerably, but is generally used to describe young Japanese men who are not interested in pursuing relationships. Coined by Maki Fukasawa (2006), the term *herbivore man*¹ quickly caught on in Japanese women's magazines and newspapers, and has become the topic of an increasing number of articles, papers, and books (Chavez, 2011; Haworth, 2013; Neill, 2009; Otagaki, 2009; Wakatsuki, 2015). Multiple attempts have been made to explain the phenomenon from a socio-economic and gender perspective, supported by lived experiences and observations on the construction of masculinity in Japanese society.

In contrast to the sensationalist coverage of herbivory, a new sexual identity quietly emerged in the early 2000s, shaped by personal narratives and online transnational communities. Sometimes referred to as 'The Invisible Orientation' (Decker, 2014), *asexuality* is a sexual orientation characterized by a persistent lack of sexual attraction towards any gender.

Though socio-economic factors and gender politics can be linked to asexuality, members of the asexual communities insist that asexuality is a matter of natural orientation, rather than intentional behaviour. People in the communities have identified multiple subtypes of asexuality, leading to the use of the term *the asexual umbrella* to describe the spectrum (The Asexuality Archive, 2012).

This article aims to explore the possibility of the herbivore men's¹ presence under the asexual umbrella, as well as the potential that this classification can have in empowering the subjects as active participants in a culture of resistance. Part 2 will describe the history of asexuality as an identity and its characteristics. Part 3 will use previous studies to analyse the discourse on herbivory and construct a more palpable image of herbivory. Part 4 will draw parallels between the two groups in an attempt to encourage discussion of herbivory as a potential orientation and culture of resistance.

Przybylo (2011) notes that 'it is the work of cultural investigators [...] to consider not only what stories are being told but also how they are being told and who does the telling' (p. 1). What will become apparent throughout this paper is the contrast in the manner in which the identity of asexuals and the label of herbivory are constructed: one is self-proclaimed and community-based, whereas the other is a buzzword which has been mostly defined based on non-participant observation and stereotypes regarding gendered behaviour. We take on the premise of sexuality as a product of discourse, as promoted by the social constructivist school of thought promoted by theorists such as Michel Foucault, Judith Butler, and Jeffrey Weeks. Thus, we will focus on the discourse surrounding the two groups and the manner in which different modes of discourse have influenced the formation of two groups who are similar from an essentialist standpoint².

2 The Asexual Umbrella

2.1 The Emergence of Asexuality as Identity

Originally an 'X' on the Kinsey scale (Kinsey, Wardell, and Clyde, 1948) and officially introduced on a formal sexuality scale by Storms (1980), asexuality has been the target of increasing attention in the past decade, with an increasing number of people 'coming out' as asexuals. The 'coming out' stories are usually told in online transnational communities, where they discuss their sexual desire—or lack thereof—, its manifestation, and its effect on their everyday life. The Internet was the starting point of the movement, but in recent years asexuals have begun advocating for recognition in the offline world, and asexuality began receiving media and academic coverage (AVEN, n.d.; Bogaert, 2004, 2006; Chasin, 2011; Pacho, 2013; Prause & Graham 2007; Przybylo, 2011; Scherrer, 2008).

Though details, manifestations, and sexual behaviour vary among subtypes and individuals, an asexual person is most simplistically defined as a person who does not experience sexual attraction, regardless of gender or orientation (The Asexuality Archive, 2012). Additionally, an individual who does not experience romantic desire is described as 'aromantic' (AVEN, n.d.). In addition to the 'pure' form of asexuality, '*gray asexuality*' as a term was coined in 2006, and refers to people under the asexual umbrella who, while not meeting the standards of 'ideal' asexuality, experience sexual attraction sporadically or only under certain conditions: a prominent group within the gray asexuality spectrum consists of *demisexuals*, who experience no sexual attraction to a person with whom they have no emotional bond (Demisexuality Resource Center, n.d.; Hezekiah, 2013). As the asexual community is composed of individuals with eclectic sexual interests, varying levels of sexual desire, diverging attitudes and multiple means of 'coping' with their orientation, it has come to be described as an 'asexual umbrella', as it houses numerous microcommunities under its spectrom (The Asexuality Archive, 2012, p. 63–64). People belonging to all

sexual / romantic orientations and gender identities can identify as asexual (Miller, 2012).

The percentage of asexuality within the general population is difficult to estimate. In 1994, a survey regarding sexual behaviour was carried out in the United Kingdom ($N = 18,876$) which included a question on sexual attraction, to which 1% ($n = 195$) of respondents stated that they had 'never felt sexually attracted to anyone at all' (Bogaert, 2004). As this is the only large-scale survey carried out among a random sample, it has led to the assumption that asexuals represent 1% of the population until more information is made available³. Another issue which can be raised regarding this survey relates to the fact that the question implies a permanent, unwavering lack of attraction, thus excluding gray asexuals and leaving open the possibility for a higher percentage. In an online survey conducted among self-identified asexuals ($N = 3,436$), 56% identified as asexual, 21% as gray-asexual, 21% as demisexual, and 2% chose 'none of the above' (Miller, 2012).

2.2 Born With It: Essentialist Asexuality and the Biological

The blunt definition of asexuality as an inherent lack of sexual attraction can be seen as an essentialist interpretation of sexual identity. As was the case with many deviant sexualities before them, initial observations of asexual behaviour were pathologised (Kinsey, Wardell, and Clyde, 1948), and asexuals have been the subject of multiple medical studies in order to see whether their lack of sexual attraction is physiological (Scutti, 2015; Sundrud, 2011).

According to self-identified asexual people, and supported by empirical research (Bogaert, 2006; Chivers, Seto, Lalumière, Laan, and Grimbos, 2010), asexual people are not physiologically incapable of experiencing sexual arousal, and asexuality is therefore not a sexual dysfunction. According to current research, it is not recommended that self-identified asexual

people be subject to pharmaceutical / hormonal intervention, as is the case with sexual dysfunction patients, and studies have not found a significant difference between asexuals and non-asexuals regarding sexual inhibition levels or desires / abilities to masturbate; 18% of the respondents in the survey reported by Miller (2012) were sexually active at one point or another (Chasin, 2011; Prause & Graham 2007).

According to Chivers et al. (2010), 'the human sexual response is a dynamic combination of cognitive, emotional, and physiological processes'; They refer to the relation between cognitive and emotional factors (subjective experience, or self-report) and physiological response as 'subjective-genital agreement' (p. 5). Asexuals are reported as physiologically capable of sustaining sexual relations, but their cognitive and emotional factors prevent them from desiring to do so, either permanently or unless certain conditions are fulfilled. Following clinical studies and increased input from self-identified asexuals, the DSM-V (2013) officially recognises asexuality as an orientation, rather than a psychological disorder.

The separation between physiological and cognitive / social response can lead to confusion when viewed from an external perspective. As guides to asexuality constantly stress, asexuality is about attraction, rather than action; an asexual does not partake in sexual activity because they do not feel the need to, not because they are voluntarily celibate for ideological reasons, or are having 'a dry spell' due to a lack of potential partners. Though individuals can voluntarily choose (or are forced under certain conditions) to be celibate, they still experience sexual attraction—they simply choose not to act on it. Similarly, asexuals can engage in sexual behaviour for a variety of reasons, but it does not change the fact that they do not feel sexual desire in the first place (The Asexuality Archive, 2012). Asexuals—especially male asexuals—often report stigma in their everyday lives, as they realise their difference from what constitutes 'normal' development (Pacho, 2013; Przybylo, 2014).

2.3 Deconstructing the 'Natural': Subverting Sexusociety

Mirroring heteronormativity on the sexuality axis as an institutionalized structural construction of sexual behaviour, Ela Przybylo (2011) coined the term *sexusociety* as an attempt to 'mark the centrality of sex and sexuality in our culture and the ways in which we have come to organize our practices of joy and loving, life and fulfilment as well as institutional structures around conceptualizations of the sexual imperative':

The sexual imperative is a term that [...] relates, as I understand it, to a four-tiered functionality of sex in our culture, wherein: (1) sex is privileged above other ways of relating, (2) sexuality and the self are fused, (3) sex is configured as "healthy" (in particular, culturally designated contexts), (4) sex remains genital, orgasmic, ejaculatory, and in the case of heterosex, coital (Przyblo, 2013).

As sex is seen as a fundamental part of sexuality and human relationships within *sexusociety*, asexuality is deviant in its indifference towards it. Prior to being observed on the Kinsey scale, asexuality was invisible. Silenced by *sexu* societal values, asexuals unfamiliar with the orientation report feeling a sense of inferiority or inadequacy, and attempts to 'pass' as sexual are common (The Asexuality Archive, 2012). ' [People who are] unfamiliar with the existence of asexuality lack the ability to conceptualize anyone cogently as asexual' despite exhibiting the traits which would otherwise classify them as such (Chasin, 2011). Though their desires and attractions (or lack thereof) manifest identically, non-self-identified asexuals and self-identified asexuals feel differently towards them due to their ontological position dictated by their access to information regarding their orientation.

When non-self-identified "asexuals" encounter asexuality for the first time, they gain access to the cultural resources and discourses

of asexuality. The order of possibilities they can access expands to include asexuality and they are able to frame their experiences in new ways. [...] This is one way that asexual identification differs from other sexual identifications: people of other sexual identifications typically live in a cultural context where it is possible for them to frame their sexual attractions and desires (and lacks thereof) in meaningful ways (Chasin, 2011).

Thus, access to information regarding alternate manifestations of sexualities and peer support can help individuals achieve a higher level of self-satisfaction and offers them the ability to partake in a community bound by common traits. In 'coming out' with their personal narratives and working towards establishing a sexual identity, asexuals 'fundamentally disrupt [...] and question [...] the notion of a universal innate sexual drive' (Pacho, 2013, p. 13), and, in doing so, attempts to redefine sexuality as hegemonically constructed by sexsociety. Where asexuality can be seen as an essentialistically-defined orientation that one is born with, as a deviant sexuality it challenges the hegemonic essentialist premise of sex as 'a natural force' at the foundation of social life and institutions (Scherrer, 2008).

Though an impediment to its advocacy, the invisibility of asexuality in public consciousness has had a hidden advantage: asexuals, through having to discover their difference individually and forming their own communities, were free to construct their own labels. This places the identity building process of asexuality in stark contrast to herbivory.

3 Herbivore Men

Where asexuality is shaped by individuals coming to terms with their sexual identity, herbivory is so far a label shaped by mainstream discourse. Though the term was only introduced in 2006, it can be seen as a result of the

discussion surrounding young Japanese men as ‘tenderhearted’ (Ito, 2005) as well as of a long string of attempts to explain the decline in birth and marriage rates in Japan. Coined by a woman and picked up by sensationalist media and public discourse, the term itself is rather ambiguous, has taken on multiple meanings and characteristics over the years. While Fukasawa’s article was concerned solely with the herbivore men’s lack of concern for relationships, secondary characteristics such as a heightened interest in personal grooming and traditionally feminine pastimes, passive behaviour among their peers, tenderheartedness, a lack of interest in career advancement and financial well-being, etc. have become part of the herbivore ‘package’ (Ichibancho Herbivore and Carnivore Research Centre, 2009; McCurry, 2009; Morioka, 2009, 2013; Ushikubo, 2009).

3.1 A History of Herbivory

Before they were called herbivores, Japanese youths were attracting concern due to nation-wide tendencies to delay the age of getting married, the declining birth-rate, and the lengthening of the ‘moratorium period’ due to increasingly harsh socio-economic conditions following the burst of the economic bubble. Miyamoto (2002) traces the evolution of this phenomenon from the early 80s to the start of the millennium, attributing the lengthening of the post-adolescent period and phenomena such as increasing unemployment, delaying marriage, *parasite singles* (*parasaito shinguru*) and *noble bachelors* (*dokushinkizoku*) among youths to Japan’s economic decline and their exclusion from institutionalised courses of life. The label of *herbivore men* can be seen as a continuation of the trend, and poor financial status, lack of desire to advance in their career, or a preference to split the bill on dates has become associated with herbivorous behaviour (Morioka, 2009; Ushikubo, 2009) — a purely economic approach blames the herbivore men’s lack of romantic interest on their inability to pay for increasingly expensive dates (Willy, 2014).

As marriage rates have dropped considerably among Japanese men aged 25–29 throughout the decades, from 65% in the 1950s to 30% in the year 2000, Miyamoto (2002) blames the current values tied to the institution of marriage for deterring young Japanese people from wanting to partake in it, either as a means of protesting against the restrictions imposed by traditional gender and family-roles, or because they feel that they do not meet the high standards necessary to start a family. While it is true that one's financial situation provides the basic preconditions and limits for the organisation of sexual life (Weeks, 2003), it should be noted that many members of the pre-2000 groups described by Miyamoto had romantic partners (p. 34), or were actively interested in people romantically; this separates them fundamentally from herbivore men, who have little to no interest in romance in itself, despite many of them eventually wanting to get married or start a family (Ushikubo, 2009, p. 37).

According to *The Fourteenth Japanese National Fertility Survey* (2011) ($N = 10,581$), though 86.3% of the interviewed unmarried men aged 18–34 expressed their desire to marry eventually, 61.4% were not engaged romantically at the time, and 27.6% expressed no desire to pursue romance at the time. Moreover, according to a survey ran by the Meiji Yasuda Institute of Life and Wellness (2014), over 40% of Japanese men in their 20s had never been romantically involved, and Kitamura (2011) reports that 17.7% of Japanese men aged 16–49 ($N = 3,000$) have little to no interest in sex (p. 19). Thus, there is a clear separation between marriage and family as an institution and romantic engagement in the minds of young Japanese men, and their lack of romantic engagement is not necessarily a sign of their protest towards the institutions themselves. This is where herbivory begins to differentiate from previous buzzwords: though socio-economic constraints explain the declining marriage rate, they do not necessarily explain the declining overall interest in romance and sex.

3.2 What Makes a Man an Herbivore?

Despite the ambiguous definition of what herbivory entails, it is considered a common element of contemporary Japanese society (Fukasawa, 2006; Morioka, 2009; Ushikubo, 2009), with some surveys having up to 60–70% of Japanese men identifying as herbivore, or ‘herbivore, rather than carnivore’, though such numbers are only possible thanks to the ambiguity of the term (Deguchi, 2009; Morioka, 2009, p. 54). Contrastingly, Kitamura (2011) defines herbivore men as people who either have no interest in sex, or who actively despise it, and estimates that they make up 17.7% of the population based on his survey, which avoids the use of the word ‘herbivore’ (p. 19).

The ambiguity is a result of sensationalist media coverage, as well as informal attempts to categorise people as herbivorous based on observed behaviour. Perhaps the epitome of the sensationalistic and detached perspective on herbivory is represented by the ‘finger comparison’ method devised by Takeuchi Himiko (2010), wherein one can tell whether a man is herbivorous or not based on the proportions of their fingers.

Ushikubo (2009) attempts to find universal characteristics of herbivore men by interviewing over 100 people who identify as herbivorous. Similarly, The Ichibancho Herbivore and Carnivore Research Centre (2009) interviewed 24 self-identified herbivore men for the same purpose. The amount of characteristics that they describe as belonging to herbivore men is astounding; *The Herbivore Men’s Diagnosis Manual* (2009) has a list of over 700 traits, and readers are invited to check the ones that they identify with; if selecting over 400, they are informed that they are ‘completely herbivorous’; *The Herbivore Men’s User Manual* (2009) also features over 800 traits. Though still an attempt to categorise herbivorous men based on observed behaviour and adding to the increasing amounts of characteristics which enhance the ambiguity of the term, it is of note that self-identified herbivore men become involved in the process of definition. Additionally, characteristics which are more prominent are presented with

a larger font and bolded, whereas ones which applied to fewer interview participants are presented in small font. Thus, characteristics such as liking J-pop are presented as less important than complaints that girlfriends are not necessary or that masturbation is better than sex. This leads to the possibility of separation between herbivory as an essential lack of interest in sex and relationships, and the secondary characteristics which have been attributed to it, mainly based on stereotypes of feminine and subordinate masculine behaviour; the arbitrary attribution of secondary characteristics is amplified by such comprehensive guides, pop culture analysis, and even the cover images that these books choose to use⁴.

Professor Morioka Masahiro brings a new view to the definition of herbivory, as he identifies as ‘a late-blooming herbivore’ and uses his personal narrative, as well as interviews with other herbivore men, to explore the formation and characteristics of alternate masculinity in Japanese society. According to Morioka (2009, 2013), herbivory is a matter of internal thoughts and feelings — a personality trait, rather than a socio-economic response. To him, socio-economic factors contribute to the negative reception of herbivory, rather than to its formation (2009, p. 13; 2013, p. 6) : however, he blames the hegemonic construction of a society that he describes as carnivorous for many of the secondary characteristics of herbivore men and other deviant sexualities. According to him, as some men grow up, they realise that they are incapable of adapting to ideal images of masculinity and develop a deep inferiority complex which leaves them incapable of accepting their own bodies and desires, leading them to repress their sexuality and turn towards alternate means of manifestation (2005 / 2013, 2008, 2009). Though he bases his definition of herbivory on an inherent lack of interest or pleasure in sex, he also attributes personality traits to herbivore men such as ‘a gentle nature’, ‘not being bound by manliness’, a lack of aggression when it comes to romance, and a penchant for gender equality (2009, p. 17–21). In his attempts to improve the image of

herbivore men in general, Morioka ends up making the same generalisations that seem to follow the image of herbivory, and though he focuses on the positive aspects of the herbivorous personality, they are still deeply rooted in stereotypes belonging to subordinate masculinities. It should be noted that throughout his books, Morioka makes no reference to asexuality; while he considers that these men's lack of sexual pleasure via traditional means is intrinsic (though not biological), he focuses on their behaviour as a backlash towards hegemonic masculinity in Japanese society, what he refers to as the 'carnivorous world'.

Morioka states that there is more to the carnivorous / herbivorous dichotomy, and lists 8 possible subtypes based on their experience (2009, p. 29). Additionally, terms such as 'rolled cabbage men' (*roru kyabetsu danshi*) and 'bacon asparagus men' (*asupara bēkon-maki danshi*) have emerged to describe people who 'look' herbivorous but are secretly carnivorous, and vice-versa ('From carnivores to herbivores: how men are defined in Japan', 2012). Of note is that these assumptions separate *action* from *orientation*, and question how much herbivory / carnivory can be defined based on past experience and observed behaviour. Given the ambiguity of the term, which causes such a large part of the population to be labelled as such, it is of no surprise that there is much variety among individual herbivores. However, many of them express no sexual interest whatsoever. While masturbation seems to be common (Morioka 2009, p. 196–197), intercourse is 'troublesome' and they do not particularly seem to enjoy it (Ushikubo, 2009, p. 35–36), though some report engaging in sexual intercourse with their girlfriends in order to please them (Morioka 2009, p. 128). Kitamura (2011) also contrasts the 17.7% of the male population who not interested in sex to a different survey ($N = 200$) where 90% of the respondents declared that they masturbate once a week or more (p. 50–55).

The discourse on herbivory has been eclectic and subject to much informal debate, leading to the current ambiguity of the label. However,

the development described by Morioka can be seen in both his interviews and in Ushikubo (2009) and the The Ichibancho Herbivore and Carnivore Research Centre (2009) 's font patterns; despite the plethora of secondary characteristics attributed to herbivore men, a lack of interest in sex and relationships is present. This paper takes on Kitamura (2011) 's definition, and proposes that the lack of sexual attraction is the primary characteristic of herbivore men, with its secondary characteristics correlated or developed as a consequence of perceived inadequacy with hegemonically constructed masculinity, which is based on the sexual imperative.

3.3 Deconstructing the 'Manly': Subverting the Carnivorous World

Traditionally in the form of the 'salaryman doxa', as defined by Roberson and Suzuki (2002), dominant hegemonic masculine discourse in Japan traditionally took the form of salarymen as loyal productive workers, economic providers for the household, reproductive husbands, and fathers (Hidaka, 2010) within a corporate framework. Post-bubble disillusionment in traditional corporate career and increasing economic instability have slowly changed the definition of dominant masculinity by preventing the institutionalisation of the same values in Japanese youths. Supported by the emerging field of men's studies, which was established in the 1980s, this has allowed marginalised men to enter mainstream discourse (Dasgupta, 2005; Taga, 2005). However, Morioka (2009) considers that mainstream masculine discourse continues to cater almost exclusively to carnivorous men (p. 13).

Ito (2005) states that despite their gentle appearance in an era of tenderhearted men, traditional stereotypes of masculinity and gender roles persist in contemporary Japan — rather, young men are simply reluctant to express their views openly. However, Morioka (2009; 2013) makes repeated claims that herbivore men are moving gender equality forward due to the deconstruction of gender expression provoked by young men accepting themselves despite external pressure to be different. He suggests that

giving a voice to men who deviate from traditional masculinity, who accept their bodies and sexuality, will lead to a new generation of men who are more accepting, more in favour of gender equality, and who live more fulfilling lives. An important difference between Ito's observation and Morioka's is the passage of time and emergence of the *herbivore* label; Moreover, Ito speaks as a detached observer, whereas Morioka speaks as a representative.

The difference between observed behaviour and true feelings is important when separating the herbivore label from the individual. Morioka (2005 / 2013) considers that for the men who become 'frigid'⁵, ejaculation is a mere bodily function which brings no pleasure in itself (p. 37), though it does not stop them from masturbating or seeking out sexual encounters, and it bears no effect on their ability to be sexually excited. Thus, it is not a matter of biological frigidity, so much as a discrepancy with hegemonic constructed notions of sexuality, which indicate that ejaculation should be their main source of pleasure (2005 / 2013, p. 42–46). If sex is subordinate to sexuality, which manifests as a combination of individual preferences and responses to the socially constructed values of its time (Foucault, 1976 / 2006), then the 'frigid' men's sexuality ends up finding more satisfaction in fantasy rather than physical sex, given his inability to adapt to the hegemonic discourse on sexuality in twenty-first-century Japan, and the herbivore men renounce sex for the same reason.

4 The Intersection Between Herbivory and Asexuality

One major gap in the research on herbivory is the lack of mention of asexuality; asexuality as a sexual identity has not penetrated mainstream discourse in Japan, even among the LGBTQ communities, which is one possible reason for the lack of correlation between herbivory and asexuality. One of the few asexual communities on the Japanese Internet feature herbivory on their website, only to dismiss the association: 'The situations

of asexuals, who do not feel sexual attractions, and herbivore men, who feel sexual attraction but are not crazy about romance, are considered separate' ('What is asexual', n.d.). This is influenced by the coverage that the buzzword has gotten, which have moved the definition from its primary characteristic to its associated behaviour, and not all asexual community members agree with the division (Queenie Of Aces, 2012).

This paper considers that herbivory would fit under the asexual umbrella, and that it has a potential to become its own culture of resistance within Japan if its members manage to 'take back' the label and redefine it according to their own terms. To prove this, we will trace out the common points between both the essentialist elements of asexuality and herbivory (lack of sexual attraction) and the hegemonic discourse which socially constructs their images.

4.1 Images of Action and Identity of Attraction

Asexuals and herbivore men share the common characteristic of an inherent lack of sexual attraction; this is a strong tie from an essentialist perspective. As previously mentioned, asexual people are capable of physiologically experiencing sexual arousal, and demisexuals are capable of experiencing sexual attraction after fulfilling a certain emotional requirement. Similarly, Morioka mentions that his idea of male frigidity is psychological, rather than physiological (2005 / 2013, p. 43–44), and many herbivore men are portrayed as becoming romantically interested in women after a long friendship, much like demisexuals. Both groups report masturbating. Thus, they can be said to be prone to low subjective-genital agreement as their lack of interest in sex is caused by non-biological reasons.

Asexuality guides constantly stress on the irrelevance of sexual experience in defining oneself as asexual, and gray asexuals change their sexual behaviour over time. According to asexuals, this does not affect

the legitimacy of their orientation, as 'It's about attraction, not action', and labelling one's orientation based on external observation is a denial of the individual's subjectivity (The Asexual Archive, 2012). Herbivore men would understand this feeling, as herbivory has been constantly redefined by observations of their appearance and external interpretation of their behaviour. Where asexuality is an identity, herbivory is still a label.

Using the essentialist standpoint to advocate for legitimacy is a common tactic for sexual minority groups, and asexuals have taken on this tactic to establish the validity of their sexuality (Pacho, 2013; Scherrer, 2008). However, prior to discovering asexuality and starting to identify as such, asexuals report commonly having their orientation denied by those around them, who disregard it based on their past behaviour or future expectations to conform to the sex imperative. This is where the social construction of sexual identity enters the discussion.

4.2 Sexusociety and the Carnivorous World

Chodorow (1994) describes feminist and gentle men as expressions of subordinate (alternate) masculinity, compared to the hegemonic masculinity which is endorsed by mainstream society (p. 80). If sex is a tool of reinforcing dominant hegemonic masculinity, then a man who is not interested in it can be seen as forsaking his own masculinity and becoming subordinate in the power relations dictated by compulsive heteronormativity. Initially described by Connell (1984), the hegemonic masculinity power matrix involves a dominant and a subordinate type of masculinity, the dominant one being considered superior to the other from a cultural, psychological, and sexual point of view. Hegemonic masculinity is perpetuated by compulsory and naturalised heterosexuality (Butler, 1990 / 1999, p. 31), using heterosexual desire and the exchange of women as means of reinforcing one's own dominance. Desire is thus integrated into the heterosexist matrix, which is defined by Butler (1990 / 1999) as 'the grid

of cultural intelligibility through which bodies, genders, and desires are naturalised' (p. 208). Individuals are expected to conform to these norms in order to contribute and perpetuate their existing society.

Sexusociety and the carnivorous world are defined by the same premise of the sexual imperative. By building society and the idea of masculinity around mandatory sexual desire, asexuals and herbivores become invisible—at least until they begin affecting demographics; after all, discussions on young Japanese men's sexual behaviour only began as a reaction to declining birth and marriage rates. As mentioned in Part 2, asexuals only realise that they belong to a different orientation once they have become aware of its existence; similarly, the amount of men identified as herbivore skyrocketed after the term was popularised.

Herbivores and the asexuals share their status as deviants within a sexual framework: both are criticised for their lack of interest in sex; both are identified based on their sexual actions (or lack thereof); both raise questions regarding their mental or physical health due to their lack of interest in sex; despite possibly being interested in alternate manifestations of sexuality, both suffer due to rigid definitions surrounding the sex act. However, the acknowledgement of their existence is a *de facto* question of the 'naturalness' of sexual desire (Pacho, 2013; Przybylo, 2011; Scherrer, 2008; Scutti, 2015). Much like how heterosexuality was only offered a name and definition after homosexuality emerged as an identity (Katz, 1995), sexusociety emerges as a concept as a response to the emergence of asexuality, and the term *carnivore* emerges to contrast the herbivores—before, they were considered a universal standard.

4.3 Constructed Sexualities and Cultures of Resistance

Whereas 'frigid' men begin hating their bodies due to their 'frigidity' (Morioka, 2006, p. 170), asexual people report feeling that there is something 'wrong' with them due to their lack of sexual desire (The Asexuality Archive,

2012, p. 118). Herbivores, 'frigid' men, and asexual men alike feel alienated from hegemonic masculine discourse, can be ridiculed by their peers, or have their manliness questioned. In Ushikubo (2009) 's list of herbivore traits, many herbivore men report being called 'girly' (p. 11), and asexual men report having their masculinity constantly questioned; members of both groups have had their heterosexuality questioned (The Asexuality Archive, 2012, p. 100; Ushikubo, 2009, p. 66). While 'frigid' men struggle with their inability to conform to mainstream masculine standards, herbivore and asexual men who have accepted themselves as different seem 'resigned' to the fact that they simply express their sexuality differently. This difference brings us to the matter of self-identification and the power of identity politics.

Cultures of resistance, as defined by Jeffrey Weeks (2003), are identities whose subversion of established sexual moral codes could potentially lead to the evolution of institutionalised sexual behaviour. As Foucault (1976 / 2006) and Weeks (2003) state, sexual identity is constructed by discourse, and new identities emerge as a result of ostracisation from hegemonic expressions of sexuality. These are not fixed, biological, identities; rather, they evolve in response to how their desires are perceived by hegemonic discourse. Construction of identity is a continuous process (Hall, 1996), and this can be seen in the rapid emergence of new subtypes of asexuality based on personal experiences described in the ever-growing asexual communities. This paper suggests that herbivore men also have the potential to empower themselves by bringing in their personal experiences, taking the label of *herbivore* and redefining it as a means of empowerment.

Przybylo (2011) notices asexuality's power of unsettling the cohesiveness of the the heterosexual matrix, which is kept in place by the trifecta of normative sex-gender-desire, by eliminating one of its main components in its entirety (p. 123). How far the subversion goes can only be assumed, but its impact on society could be considerable. Herbert Marcuse (1955)

states that 'change in the value and scope of libidinal relations would lead to a disintegration of the institutions in which the private interpersonal relations have been organized, particularly the monogamic and patriarchal family' (p. 201), and Gayle Rubin (1975) theorises in that the subversion of the heterosexist matrix has the potential to lead to the corollary breakdown of gender itself.

Asexuality and herbivory have stayed invisible due to their deviance from hegemonic masculinity, as they have either passively removed themselves from hegemonic discourse, or performed their masculine role in order to avoid ostracisation. However, as herbivory and asexuality have become more common terms, members of these groups can see themselves reflected in public discourse. This has allowed herbivore men to 'resign' themselves to the herbivore status, and has released the pressure to meld themselves to the hegemonic masculine image as they are becoming more commonly recognised. Asexuals have actively involved themselves in identity politics, calling for a spot on the LGBTQ acronym, forming online communities, and announcing the world of their presence and freedom to behave in a manner more true to themselves.

Herbivory is a label constructed by mainstream discourse to describe the young Japanese men who deviate from hegemonic masculinity. The manner in which such deviant behaviour is constructed as herbivorous also serves to construct what constitutes 'normal', —carnivorous— behaviour. One considerable difference between asexual and herbivore men lies in the method of identification; whereas asexuals are almost entirely all self-identified and using platforms such as the Asexual Visibility and Education Network (AVEN) to establish asexuality as a valid sexual identity, herbivore men have had a rather passive role in establishing the herbivore identity, usually being described as such rather than taking pride in their identity — with the exception of bitter exclamations of 'that's because I'm herbivorous' to explain 'strange' behaviour (Ushikubo, 2009, p. 39). Morioka (2005 / 2013)

uses his personal narrative as an example to inspire other men to accept and talk about their sexual identity, and mentions that after publishing *Confessions of a Frigid Man* he was flooded with reactions by men who were grateful to have found a peer (p. 221). Similarly, asexuals who have taken the time to write about their own experiences often express their first encounter with the asexual community as the relief of knowing that they are not individuals with 'something wrong with them'. Becoming part of a community and establishing an identity lessens the burden that the individuals hold in being unable to accept themselves.

One of the first steps of forming such communities and leading to discourse lies in what Foucault (1976 / 2006) refers to as confession (p. 59), in which individuals shape their sexuality by 'confessing' their desires and thus manifesting them. Whereas the asexual community now hosts multiple platforms in order to help asexual people interact with one another, how much herbivore men assert their status rather than allow themselves to be categorised is questionable. Morioka was the first herbivore to actively confess, at first regarding his fetishes and 'frigidity' in *Confessions of a Frigid Man*, then depicting his experience as a herbivore man in *Herbivore Men Will Bring Your Last Love*, thus setting the ground for more herbivores to bring forth their own stories. People are born herbivorous or asexual, but only by choosing to represent themselves and actively partake in the discourse which shapes them do they take on an identity (Hall, 1996).

The power that discourse plays in shaping sexual identity can be observed in the history of homosexuality. Early discourse on homosexuality was profoundly negative, pathologising it and attacking it as a form of deviant sexuality; however, entering public discourse is what allowed it to develop as its own identity, rather than as an invisible aspect of society. Taking the discourse which had marginalised it and claiming it for its own, homosexuality as an identity was allowed to emerge and begin claiming its rights and recognition (Foucault, 1976 / 2006). A similar event is occurring

with asexuals and herbivores; before, they were simply invisible or marginalised categories, thrust aside by hegemonic heterosexist discourse. As the 2000s have identified both groups' behaviour as collective and unified to a certain extent, they can emerge as new sexual identities and fight for their acceptance. As cultures of resistance, they have the power to challenge hegemonic discourse and redefine it for the future generations to come, but for now they are only budding movements.

5 Conclusion

This paper's purpose was to lay the foundation for the link between herbivory and the asexual umbrella, and recognise their common features, not only as sexual orientations, but as subversive discourses of sexuality and potential status as cultures of resistance. Despite both groups having a considerable amount of variation regarding definition, expression, and characteristics, a few common features could be observed:

From an essentialist perspective, herbivore men can be found under the asexual umbrella due to their lack of interest in sex. From a constructivist view, both asexual men and herbivore men deviate from prescriptive norms of sexuality and hegemonic masculinity, belonging to subordinate manifestations of masculinity due to their removing one of the main means of asserting dominance; furthermore, asexuality as a whole goes against the underlying heteronormative principles which define modern society, as well as against the essentialist notion of sex as an intrinsic desire of humanity (Scherrer, 2008). Though currently they are both restricted to small communities and use of confession as a means of expressing, developing, and accepting their sexual self, as groups which have emerged in the past decade and saw quick considerable growth, they have the potential to become recognised as cultures of resistance when assumed as a self-identified sexual identity, as they subvert compulsory heteronormativity by removing one of its main acts of reproduction, as

their members are uninterested in 'matters of the flesh'. Despite their lack of interest in sexual or romantic matters, members of both groups have exhibited attempts to partake in them, motivated by peer pressure or the desire to start a family, as seen in personal narratives described in current literature, a pressure which would be removed if they became accepted as valid expressions of sexual identity.

Social pressure is unlikely to disappear anytime soon, as concerns regarding the ageing population force public discourse to take a negative stance regarding asexuality and herbivory. However, neither group is entirely averse to romantic love, nor to procreation, so perhaps more acceptance regarding their identity would allow these groups to integrate better in society and become more capable of finding suitable partners for their own sake, rather than out of social obligation.

Future research needs to delve deeper into their mentality and see how it can reach more acceptance in mainstream discourse. Rather than ostracise them for their lack of participation in the system of reproduction, they should, as Morioka states, find a niche within society where they can develop freely and live in a manner that is true to themselves. As asexuality makes its way into Japan, herbivory as a manifestation of sexuality can reach new depths.

Acknowledgements

The author acknowledges support from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT) of Japan, and is grateful for the support of their professors and colleagues at Nagoya University, as well as for the insightful contributions of the anonymous referees for the *Gender and Sexuality* journal.

Footnotes

- ¹ The terms *soushokudanshi* (herbivore men) and *soushokukeidanshi* (herbivore-type men) are sometimes used interchangeably and at other times carefully differentiated, but as the former has seen predominantly more usage (Morioka, 2013), this paper will use *herbivore men*.
- ² Here, we refer to the 'essentialist' as the school of thought which believes that 'certain phenomena are natural, inevitable, and biologically determined', as opposed to social construction, which considers that 'reality is socially constructed and emphasizes language as an important means by which we interpret experience' (DeLamater and Hyde, 1998). The paper covers the similarities between the two groups from both perspectives.
- ³ Of note is the fact that this question specifically uses the term 'lack of sexual attraction' as a permanent factor throughout one's life, which can explain the difference in percentage when compared to Kitamura (2011), which asks 'are you interested in sex?', to which 17.7% of respondents answer positively.
- ⁴ Morioka (2013) mentions that slenderness was permanently associated in the public mind with herbivory based on the random drawing on the cover of his 2008 book, *Lessons in Love for Herbivore Men* (p. 5).
- ⁵ Initially, Morioka (2005 / 2013) began his research with 'frigid' men, men who retreat into sexual fantasies involving animated characters, young girls, schoolgirl uniforms, and other fetishes, as a result of their inability to achieve sexual gratification from conventional means of sexual expression; However, he points out that herbivore men and 'frigid' men have the same sexual identity formation background as a reaction to their inability to conform to hegemonic masculinity (2005 / 2013, p. 216), even though their final manifestation differs. As both 'types' describe Morioka's personal sexual identity building, and are positively correlated when it comes to the matrix in which they are restricted, the social conditions which lead to their establishment and marginalisation from hegemonic masculinity, it can be assumed that 'frigidity' was Morioka's early explanation for herbivory.

References

- American Psychiatric Association (APA) (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-5*. Washington, D.C: American Psychiatric Association.
- AVEN. (n.d.). The Asexual Visibility and Education Network | asexuality.org.
Retrieved from <http://www.asexuality.org/home/>
- Aセクシャルとは? [What is asexual?]. (n.d.).
Retrieved from <http://www.asexual.jp/info.php>
- Bogaert, A. F. (2004). Asexuality: prevalence and associated factors in a national probability sample. *Journal of Sex Research*, 41 (3), 279–287. doi: 10.1080 / 00224490409552235
- Bogaert, A. F. (2006). Toward a conceptual understanding of asexuality. *Review of General Psychology*, 10 (3), 241–250. doi: 10.1037 / 1089–2680.10.3.241
- Butler, J. (1999). *Gender trouble* (10th anniversary ed). London, UK and New York, NY: Routledge (Originally published in 1990)
- Chasin, D. (2011). Theoretical issues in the study of asexuality. *Archives of Sexual Behavior*, 40 (4), 713–723. doi: 10.1007 / s10508–011–9757–x
- Chavez, A. (2011, December 17). Herbivorous men, where's the beef? *Japan Times*.
Retrieved from <http://www.japantimes.co.jp/community/2011/12/17/our-lives/herbivorous-men-wheres-the-beef/>
- Chivers, M. L., Seto, M. C., Lalumière, M. L., Laan, E., & Grimbos, T. (2010). Agreement of self-reported and genital measures of sexual arousal in men and women: a meta-analysis. *Archives of Sexual Behavior*, 39 (1), 5–56. doi: 10.1007 / s10508–009–9556–9
- Chodorow, N. (1994.). *Femininities, masculinities, sexualities: Freud and beyond*. Lexington, KY: University Press of Kentucky.
- Connell, R. W. (1984). *Which way is up?* Boston, MA: Allen & Unwin.
- Coulmas, F. (2007). *Population decline and ageing in japan —the social consequences*. London, UK and New York, NY: Routledge.
- Dasgupta, R. (2005). Salarymen doing straight. In M. McLelland & R. Dasgupta (Eds.), *Genders, transgenders and sexualities in japan* (pp. 153–182). London, UK and New York, NY: Routledge.

- Decker, J. S. (2014). *The invisible orientation: An introduction to asexuality*. New York, NY: Carrel Books.
- DeLamater, J. D., & Hyde, J. S. (1998). Essentialism vs. Social Constructionism in the Study of Human Sexuality. *The Journal of Sex Research*, 35 (1), 10–18.
- Demisexuality Resource Center. (n.d.). What is demisexuality?.
- Retrieved from <http://demisexuality.org/articles/what-is-demisexuality/>
- Deguchi, H. (出口治明). (2009). 「婚活に関する調査」 [*Marriage-related survey*]. 東京：Lifenet Seimei Life Insurance Co.
- Retrieved from <http://www.lifenet-seimei.co.jp/newsrelease/2009/1646.html>
- Foucault, M. (2006). *The history of sexuality: The will to knowledge v. 1*. Trans R Hurley. London: Penguin Books(Originally Published in 1976)
- Fukasawa, M. (真紀深澤). (2006, October 13). 「第5回 草食男子」 [Number 5: Herbivore men]. 日系ビジネスOnline.
- Retrieved from <http://business.nikkeibp.co.jp/article/skillup/20061005/111136/?rt= nocnt>
- Hall, S. Introduction: Who needs identity? (1996). In S. Hall & P. du Gay (Eds.), *Questions of cultural identity* (pp. 1–21). London; Thousand Oaks, CA: SAGE Publications
- Haworth, A. (2013, October 20). Why have young people in Japan stopped having sex? *The Guardian*.
- Retrieved from <http://www.theguardian.com/world/2013/oct/20/young-people-japan-stopped-having-sex>
- Hezekiah. (2013, May 8). The development of gray asexuality and demisexuality as identity terms [Blog post].
- Retrieved from <https://pianycist.wordpress.com/2013/05/08/the-development-of-gray-asexuality-and-demisexuality-as-identity-terms/>
- Hidaka, T. (2010). *Salaryman masculinity: the continuity of and change in the hegemonic masculinity in Japan*. Leiden, Netherlands: Brill.
- Ichibancho Herbivore and Carnivore Research Centre (一番町☆草食肉食研究会). (2009). 『草食男子の診断書』 [*The Herbivore Men's Diagnosis Manual*]. 東京：宝島社.

- Ito, K. (2005). An introduction to men's studies. In M. McLelland & R. Dasgupta (Eds.), *Genders, transgenders and sexualities in Japan* (pp. 145–152). London, UK and New York, NY: Routledge.
- Katz, J. N. (1995). *The invention of heterosexuality*. New York, NY: Dutton.
- Kinsey, A. C., Wardell, B. P., & Clyde, E. M. (1948). *Sexual behavior in the human male*. Philadelphia and London: W.B. Saunders Company.
- Kitamura, K. (北村邦夫) . (2011). 『セックス嫌いな若者たち』 [*The young people who hate sex*]. 東京：メディアファクトリー.
- Makoto, A. (2001). Very low fertility in Japan and value change hypotheses. *Review of Population and Social Policy*, 10: 1–21.
- Marcuse, H. (1955). *Eros and civilization: a philosophical inquiry into Freud*. Boston, MA: Beacon Press.
- McCurry, J. (2009, December 27). Japan's "grass eaters" turn their backs on macho ways. *The Guardian*. Tokyo.
Retrieved from <http://www.theguardian.com/world/2009/dec/27/japan-grass-eaters-salaryman-macho>
- Meiji Yasuda Institute of Life and Wellness (明治安田生活福祉研究所) . (2014). 「2014年 20～40代の恋愛と結婚」 [*2014 Marriage and Romance Report*] (結婚・出産に関する調査より No. 8) .
Retrieved from http://www.myilw.co.jp/life/enquete/08_marriage.html
- Miller, T. (2012). Analysis of the 2011 Asexual Awareness Week Community Census.
Retrieved from <http://www.asexualawarenessweek.com/docs/SiggyAnalysis-AAWCensus.pdf>
- Miyamoto M. (宮本みち子) . (2002). 『若者が『社会的弱者』に転落する』 [*The descent of young people into the socially weak*]. 東京：洋泉社
- Miyamoto, M. (宮本みち子) , Yamada, M. (山田昌弘) , & Iwagami, M. (岩上真珠) . (1997). 『未婚化社会の親子関係』 [*Parent-child relations in a society with an increasing unmarried population*]. 東京：有斐閣
- Morioka, M. (森岡正弘) . (2009). 『最後の恋は草食系男子が持ってくる』 [*Herbivore men will bring your last love*]. 東京：マガジンハウス.

- Morioka, M. (森岡正弘). (2013). 『感じない男』 [*Confessions of a frigid man: A philosopher's thought on male sexuality*] (Reprint). 大阪：ちくま新書. (Originally published in 2005)
- Morioka, M. (2013). A phenomenological study of "herbivore men". *The Review of Life Studies*, 4, 1–20. Retrieved from <http://hdl.handle.net/10466/12907>
- National Institute of Population and Social Security Research (IPSS). (2011). *Report on the Fourteenth Japanese National Fertility Survey in 2010: Marriage Process and Fertility of Married Couples* (Survey Series No. 29). Retrieved from http://www.ipss.go.jp/site-ad/index_english/survey-e.asp
- Neill, M. (2009, June 8). Japan's "herbivore men" — less interested in sex, money. *CNN*. Retrieved from <http://edition.cnn.com/2009/WORLD/asiapcf/06/05/japan.herbivore.men/index.html?iref=topnews>
- Otagaki, Y. (2009, July 27). Japan's "herbivore" men shun corporate life, sex. *Reuters*. Tokyo. Retrieved from <http://www.reuters.com/article/2009/07/27/us-japan-herbivores-idUSTRE56Q0C220090727>
- Pacho, A. (2013). Establishing asexual identity: The essential, the imaginary, and the collective. *Graduate Journal of Social Science*, 10 (1), 14–35.
- Prause, N., & Graham, C. A. (2007). Asexuality: classification and characterization. *Archives of Sexual Behavior*, 36 (3), 341–356. doi: 10.1007 / s10508–006–9142–3
- Przybylo, E. E. (2011). *Asexuality and the feminist politics of "not doing it."* (Master's Thesis, University of Alberta, Alberta, Canada). Retrieved from <https://era.library.ualberta.ca/files/wp988m00d#.VnjCrVLcqQM>
- Przybylo, E. (2013, September 4). Asexuality and the sexual imperative: an interview with Ela Przybylo (Part 1) [Blog post] (Baptiste, Interviewer). Retrieved from <https://asexualagenda.wordpress.com/2013/09/04/asexuality-and-the-sexual-imperative-an-interview-with-ela-przybylo-part-1/>
- Przybylo, E. (2014). Masculine doubt and sexual wonder. In K. J. Cerankowski & M. Milks (Eds.), *Asexualities: Feminist and queer perspectives* (pp. 225–246). London, UK and New York, NY: Routledge.

- QueenieOfAces. (2012, November 29). What's the deal with the Japanese "herbivore men"? [Blog Post].
Retrieved from <https://asexualagenda.wordpress.com/2012/11/29/whats-the-deal-with-the-japanese-herbivore-men/>
- Roberson, J. E., & Suzuki, N. (2002). *Men and masculinities in contemporary Japan: Dislocating the salaryman doxa*. London, UK and New York, NY: Routledge.
- Rubin, G. (1975). The traffic in women: Notes on the "political economy" of sex. In R.R. Reiter(Ed.), *Toward an anthropology of women* (pp. 157–210). New York: Monthly Review Press.
- Scherrer, K. S. (2008). Coming to an asexual identity: Negotiating identity, negotiating desire. *Sexualities*, 11 (5), 621–641.
<http://doi.org/10.1177/1363460708094269>
- Scutti, S. (2015, May 7). Asexuality is real: How a rare orientation helps us understand human sexuality. *Medical Daily*.
Retrieved from <http://www.medicaldaily.com/asexuality-real-how-rare-orientation-helps-us-understand-human-sexuality-332346>
- Statistics Bureau. (2015). Statistics Bureau Home Page / Statistical Handbook of Japan 2015.
Retrieved from <http://www.stat.go.jp/english/data/handbook/c0117.htm>
- Storms, M. D. (1980). Theories of sexual orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38 (5), 783–792. <http://doi.org/10.1037/0022-3514.38.5.783>
- Sundrud, J. L. (2011). *Performing asexuality through narratives of sexual identity*. (Master's Thesis, San José State University, San José, CA).
Retrieved from http://scholarworks.sjsu.edu/etd_theses/4074
- Taga, F. (2005). Rethinking Japanese masculinities. In M. McLelland & R. Dasgupta (Eds.), *Genders, transgenders and sexualities in Japan* (pp. 153–167). London, UK and New York, NY: Routledge.
- Takeuchi, H. (2010). 『草食男子0.95の壁—動物行動学的男選び』 [*Herbivore men's 0.95 obstacle - an ethological perspective to choosing men*]. 東京: 文芸春秋.
- The Asexuality Archive. (2012). *Asexuality: A brief introduction*. CreateSpace Independent Publishing Platform.

- The Thinking Asexual. (2012, April 12). Male asexuality and its challenge to masculinity [Blog Post].
Retrieved from <https://thethinkingasexual.wordpress.com/2012/04/12/male-asexuality-and-its-challenge-to-masculinity/>
- The World Bank. (2015). Fertility rate, total (births per woman) | Data | Table.
Retrieved from <http://data.worldbank.org/indicator/SP.DYN.TFRT.IN>
- Ueno, C. (1998). The declining birthrate: Whose problem. *Review of Population and Social Policy*, 7, 103–128.
- Ushikubo, M. (牛窪恵). (2009). 『草食系男子の取扱説明書』 [*The Herbivore Men's User Manual*]. 東京：ビジネス社.
- Wakatsuki, Y. (2015, June 24). Middle-aged virgins: Why so many Japanese stay chaste. CNN. Retrieved July 28, 2015,
from <http://edition.cnn.com/2015/06/24/asia/japan-middle-aged-virgins/>
- Weeks, J. (2003). *Sexuality*. London: Psychology Press.
- Willy. (2014, October 13). 「若者が草食化した本当の理由」 [The Real Reason why young people become herbivores] [Blog].
Retrieved from <http://wofwof.blog60.fc2.com/blog-entry-646.html>

肉を避ける人々：草食男子と無性愛 フォタケ・イワナ

本稿は草食男子と無性愛の共通する特徴を説明するものである。

無性愛は少しずつ性的指向として西洋の言説の中で受け入れられ始めている。他方、草食男子は日本のメディアにおいて注目を集めている。

筆者は草食性に関する先行研究を見直し、無性愛の特徴と比較することで、草食男子と無性愛に共通の基盤を見出すことが出来ると考えている。それを明らかにすることで、無性愛と同様に草食性が異性愛中心言説に対して抵抗的なアイデンティティ・ポリティックスとなる可能性を秘めていることを提示出来るのだ。

現在の強制的異性愛中心主義の社会は、ジュディス・バトラー（1999）が定義した「異性愛的マトリックス」によって保たれている。このマトリックスはジェンダー・セックス・欲求の相関関係によって成立するが、草食男子や無性愛者はこの相関関係から「欲求」を欠落させている。このことから、彼らは既存の支配的マトリックスを破壊し、男らしさの言説を再定義する可能性を持つと考えられる。すでに、先行研究では、無性愛が自然な行動異で、性愛中心主義に対して抵抗出来る可能性を持つと論じられている。しかし、無性愛と草食性の共通性は未だ考察されていない。その結果、草食性は異性愛中心主義に抵抗する可能性を持った性的志向としてではなく、日本社会への社会経済的反応として研究されてきた。草食男子のインタビューによると、彼らは根本的にセックス、または恋愛に興味がないことが明らかとなっている。これは無性愛者の定義そのものである。無性愛者コミュニティの「傘」の下に彼らの居場所を見出すことで、草食男子は自らのセクシュアリティや行動をより理解出来るようになると思う。

Keywords:

草食男子、無性愛、セクシュアリティ、性的欲望、アイデンティティ・ポリティックス

ケア役割とキャリアをめぐる「困難」 —— 家族を介護する 20 代から 30 代女性の場合 松崎実穂

はじめに

2013 年頃から日本では「家族を介護する若者」がヤングケアラー、若年介護者などと呼ばれ、¹ 注目されるようになった。各種メディアから取材されたかれらは介護を担っているためにライフコース選択の機会を逸し、キャリア形成における困難を抱えていること、また、友人ネットワークや学校から孤立し、介護に関する各種制度からも排除される存在として描かれている。メディア表象におけるそうした「困難」の描かれ方にはジェンダー差異があり、介護を担う若い女性の「キャリアにおける困難や選択」についてはあまり取り上げられていない（松崎，2015）。介護を担う若い女性の「困難」の状況が重視されなければならない、介護を担うことの何が問題であるのかが不明瞭となる可能性に注意すべきである。² 本稿では以上に述べた問題関心から、若い女性のケア役割とキャリアをめぐる「困難」について考えてゆきたい。

本稿では第一に、近年の日本の若者研究における、家族のケア役割を引き受けている女性の青年期から成人期への移行についての先行研究を整理する。また英国におけるヤングアダルトケアラーに関する研究と、日本における青年期のケアラー研究における知見についても触れる。第二に、筆者が実施した、家族を介護する 20 代～30 代女性へのインタビュー調査の内容を分析する。最後に以上の分析を踏まえ今後の課題について述べる。

筆者は現在、これまでに家族の介護を経験した、または現在も介護を行っている若者（介護経験時の年齢は 10 代～30 代）へのインタビュー調査を進めている。ただし本稿において取り上げる対象者の介護開始年齢についてはいずれも 20 代である。本稿では、介護役割の引き受けからその終了まで、あるいは介護の続く現在に至るプロセスにおいて、調査対象者が介護役割と自分自身の人生のライフコースやキャリアについてどう考え、また実際にどのような行動を取ったのか等について分析する。

1 近年の日本の若者研究における「家族を介護する若者」

1990年代末期の若者雇用の不安定化を背景として、学校卒業から初就職という青年期から成人期への移行パターンに異変が生じ、無業者や非正規雇用者が急増した。そのためこの実態と構造を探る一連の研究がなされるようになった。ここで取り上げるのは、2002年から2008年の間で5回に渡り実施された高校卒業者の追跡インタビュー調査（東京都立大学・首都大学東京）を基にした研究成果である。³ 2010年前後に発表された成果において、全調査へ参加した31事例のうち、家族へのケア役割を引き受けている若者は3事例（堀さん一育児、若林さん一難病の母親と祖母を介護、吉川さん一知的障害の妹を世話。いずれも女性で、名前は仮名である）が報告されている。これら事例は、全てB高校（東京都内の下町地区で受験難易度がもっとも低い）卒業者である。また若林さんと吉川さんに関しては母子家庭である。さらに、若林さんの場合は生活保護受給世帯でもある。本稿ではケア役割の中でも介護について論じるため、以下では介護の事例（若林さん、吉川さん）を中心に見ていく。

宮島（2013）は以上の3事例をとりあげ、学卒後の生活でケア役割を担うことにより、移行のあり方がどのように規定されているかを論じている。また児島他（2010）では、若林さんの事例が取り上げられている。この二つの先行研究を通じたそれぞれの事例と分析を以下要約する。

若林さんは母親、妹、弟との4人で同居していた。若林さんは、以前から難病の母親の代わりに、家事仕事一切を妹とともに引き受けてきた。その一方で、若林さんの母親は、弟に対しては家事や介護を要請しない。若林さん一家は生活保護世帯でもあり、経済的事情は厳しい。若林さんは短大へ入学したが、その後の四年制大学への編入および、英語に関わる仕事への道等を断念した。その背景には、家事と介護という役割に加えて、生活全般について母親から過度の管理・干渉があった。短大卒業後は不安定な就労状況で働き続ける中、母親からの要請で、近居していた祖母と同居し、世話をすることになった。若林さん本人は、こうした状況について八方塞がりと感じており、また、自分自身が母親に暴力を振るってしまうのではないかとという危惧を抱いていた。また、生保受給のため世帯全体での収入を抑制する必要がある、その事情を理解してくれる職場でなければ働くことができない。かといって、若林さん

一人で独立することも難しい状況だった。短大卒業からさらに数年が経ち、祖母が他界したため、若林さんは実家に呼び戻された。だが、話し合いの末、親の借りたアパートで一人暮らしをすることになった。これは世帯分離をケースワーカーから助言されたことも背景にあると考えられる（児島他, 2010, pp. 29–33; 宮島, 2013, pp. 159–164）。宮島（2013）はこの若林さんの事例に関し、ケアの強要を生み出す要因として、ケアは女性がするものというジェンダー規範、母親の健康不安、生活保護を受給している家庭の貧困状態、母親との親子関係のあり方（支配というかたちの依存）、また若林さん自身が自分に頼る母親を放棄できないと感じていることを挙げている（宮島, 2013, pp. 165–169）。

次に、きょうだいをケアする吉川さんである。吉川さんは、母親、障害のある妹と暮らしている。母親と吉川さんは共に妹の日常的な介助を担っている（宮島, 2013, p.145）。吉川さんは、進学した専門学校で希望していた勉強ができず、学校を辞めざるをえなくなった。その後、不安定な仕事を渡り歩きながら、ずっと妹の介助を行ってきた。入浴など手段的な介助に留まらず、常に妹のことを考え、ケアを自分が将来的に担っていくことを考えている（宮島, 2013, pp. 170–171）。宮島は、吉川さんが妹のケアを続けて担おうとする見通しの裏にあった、それを方向づける要因を指摘している（宮島, 2013, p. 171）。第一に、妹のケアを外部化したくないという思いから、介助を家族で抱えようという吉川さん自身の姿勢である。第二に、根強いジェンダー規範の存在である。「男性は安定した仕事に就いて稼ぐものだが女性は必ずしもそうではない」という性別分業イメージが、吉川さんがフリーターで居つづけながら妹のケアを担う、という吉川さん自身の考えにつながっていると分析されている（宮島, 2013, pp. 171–172）。第三に、吉川さん自身が経験してきた働き方の影響である。それまでの職場で目にしてきた正社員の理不尽な働き方は、吉川さんにはとても望ましいものに思えない。また正社員になったら仕事に時間が取られ、妹のケアが十分にできない。吉川さんが妹のケアをするためには、時間の融通が利く必要があるからである（宮島, 2013, p. 172）。このようなさまざまな制約が何重にもある状態の上で、将来的には妹を自分がみるという見通しを吉川さんは持っている。このことについて、宮島は「自分自身に対するいわば

折り合い」という（宮島, 2013, p. 173）。

児島他（2010）では、さまざまな家族における問題状況と不安定な就労状況の両方に置かれている女性7事例の検討が行われている（その事例の一つが若林さんである）。ここでは、まず①親の病気、介護等の家族問題の深刻さといった家族間問題と就労との関連が、就労を不安定にさせることが示されている。また、そのような状況においては、②家族問題に対して一定距離を取り、わずかながらでも自己の裁量権を持つことの余地や視点を可能にする、友人などのインフォーマルネットワークという足場を持つ重要性が指摘されている。この論考は、若者の青年期から成人期への移行における困難は、要因としての「家族問題」と、フリーター・ニートなど非正規雇用といった若者の就労の問題とが別々のものではなく、相互に絡み合っているという複雑性を示したものと見える。家族への介護を含むケア役割を担うことや、担わざるを得ない背景自体が、家族問題の一部として取り上げられ、それが若者の移行困難の要因となることが示されているのである。

また宮島（2013）は、子育てや介護・介助といった家族を支えるケアワーク全般が一般的に女性に偏って担われていることを踏まえつつ、こうした傾向が若い女性たちの移行過程にどのような影響を及ぼしているのかという実態を、移行過程の問題として問おうとした論考である。宮島は、堀さん（育児）、吉川さんの事例に関しては「ケア役割によって解決策のない状態に陥っているにもかかわらず、自分のおかれた状況に折り合いをつけ、『ケアされる人』とともに生きる見通しをもち始めている」（宮島, 2013, p. 176）と見ている。一方で過重なケアを強いられている若者は、ケア役割に折り合いをつけることなどできず、自らの意味づけによって『ケアする人』にはなれていないとも指摘する。その上で「ケア役割に折り合いをつけ、自ら『ケアする人』としてケアワークにかかわれるようになること」が根本的に求められるという（宮島, 2013, p. 176）。この論考においては、宮島の関心は「ケア役割の遂行が移行過程の若者に及ぼす影響」である。そのため、若者自身による自らの役割や将来の見通しを考える中で、「ケア役割に折り合いをつけること」が重要であると指摘しているのであろう。ただし、事例が女性のみであること、またケア役割の女性への偏りや、ケアに関するジェンダー規範の存在、また不安定な就労

状況という背景を考えると、「ケア役割に対する折り合い」の背景に対しては、ジェンダー視点からのさらなる省察が必要ではないだろうか。

2 ヤングアダルトケアラーの移行に関する課題

英国においても、近年、家族のケアを担う子どもの成人への移行が注目されている。Beckerら（2008）によるとヤングアダルトケアラー⁴は、社会的交流の機会の制約、社会的サポートについての情報不足、勉強とケアのバランスをとることに対する要請、離家に関する複雑な問題に直面している（Becker, F. & Becker, S., 2008）。また男性に比較して、女性のヤングアダルトケアラーは、ケア役割の一部としての家庭運営の中心的な役割を年齢が上がるほどに引き受ける傾向があり、そのためにいっそうケア役割を離れる（離家するなど）が難しくなっているという（Becker, F. & Becker, S., 2008, p. 52）。

一方、日本における研究でも、森田（2010）は事例の検討を通じ、ケアを担う子どもが、青年期から成人期への移行にあたって直面している課題を明らかにすることの重要性を指摘している（p. 2）。また前節で参照した児島他（2010）では、若者に対する支援を就労支援に限定せずに、かれらの背景にある家庭問題などもカバーするような包括的支援の必要性が指摘されている（p. 42）。

先行研究では、青年期から成人期への移行において、家族へのケアを担うことが若者に与えている影響が示されていた。その状況に対し支援が必要だという点では、英国でも日本でも指摘されているといえる。

3 インタビュー調査とその内容分析

3.1 インタビュー調査の概要

本節では3名の女性の事例を取り上げる。いずれも18歳以上～39歳までの間に家族・親族の介護を経験している者（介護経験当時「若者」であった者ならびに、現在「家族を介護する若者」である者）である。3事例に共通する特徴としては、まず、首都圏在住で、四年制大学を卒業している（うち2事例は大学院を修了）。また、いずれの事例も介護開始時における年齢が20代⁵であり、当時被介護者（2事例：親、1事例：祖父母）と同居していた。インタ

ビュー調査は2014年から2015年に実施し、全て筆者が対象者と一対一で行った。インタビューは半構造化された形式で実施し、対象者の介護経験や、介護時と介護後それぞれの時点において、家庭や社会でどのような経験をしたのかを伺った。

以下では主に、インタビュー対象者が、介護と自分自身のキャリアについてに関わりに触れている部分を検討する。そして自らの介護役割がキャリアのあり方や、キャリアに対する考え方にどのように影響していると考えているのかについて示してゆく。なお、プライバシー保護のため、以下の項におけるインタビュー対象者の名前は全て仮名である。

3.2 介護を引き受けた時の状況とその後の経緯

今回取り上げる3事例は、それぞれ家族の介護をいつどのような状況において引き受けることになったのだろうか。

まず、高橋さん(39歳)は、23歳だった社会人1年目の時に、脳出血で倒れた父親(当時50代)の介護を始めている。高橋さんは一人っ子であり、両親と3人暮らしであった。当初は高橋さんの母親が主に介護にあたり、仕事の忙しかった高橋さんは補佐的立場だった。しかし27歳の時、母親(当時50代)が病気となり、長期入院した。高橋さんは父親の介護や諸手続きを一人で担うことになった。高橋さんは、母親が病気と判明する直前に転職をしていた。転職先では最初はアルバイトで入社していた。母親の闘病と、父親の介護負担が重かった間は、そのままアルバイトの立場でいた。母親の病状が落ち着いた後、正社員として雇用された。その後再度転職して自営業となり、30代で結婚して実家を出た。現在は高橋さん宅と同市内の実家で母親が父親を介護し、高橋さんは仕事と育児をしている。しかし、もし何かあれば、父親の介護が高橋さんに回ってくる可能性はある。

次に、鈴木さん(29歳)は、両親と同居する大学院生であったが、27歳の時に父親(当時70代)の認知症が判明した。母親(当時50代)は正規で働いており、多忙である。鈴木さんのきょうだいは皆、実家を離れている。鈴木さんは、学業のため、それまで続けていた非常勤の仕事をほぼ休んでおり、通院の付き添いや介護の諸手続きを一手に担うこととなった。現在、夜と週末は母

親がいるが、平日は鈴木さんが主に父親を見守る体制である。

次に、佐藤さん（28 歳）は、大学院入学前の受験生であった 25 歳の時、家のリフォーム等がきっかけで、実家に近い祖父母宅に住むことになる。当時祖父母は共に 90 代。祖父は認知症の初期段階であったが元気であり、祖母は要支援ではあったが運動クラブにも通っていたという。同居開始当初は、祖父母の食事を作ってあげ、様子をみてあげれば十分であった。しかし翌年、祖母が入院し、自立歩行困難な要介護状態となった。また祖母の入院中に、祖父の認知症が進行し、佐藤さんが祖父の介助や見守りをした。その最中、佐藤さんは大学院に入学したが、ほどなく祖母も退院してきた。祖母の退院後の数ヶ月間には、佐藤さんの両親（母は正規で勤め、父は早期退職で主夫）、おば（祖父母の子ら）も介護に関わっていた。しかし、祖父母の主な介護者は佐藤さんという状況が続いた。その後、佐藤さんは両親に提案して祖父母の家を出、通いの介護に切り替える。インタビュー当時はほぼ介護から手を引いていた。以上が、今回の 3 事例における介護開始時とその後の経緯である。

以下の分析では対象者本人が自分自身のキャリアや人生、介護に対しての考え方を、家族への介護をしながらどのように考えていたかを中心に述べてゆく。

3.3 介護とキャリアの両立、キャリア選択について

高橋さんは、転職して「最初はアルバイトから」という条件で勤め始めた直後、父親の介護と母親の長期入院に一人で対処した。もし、母親の病气入院が入社前であれば「あぶれてたと思いますよ、完全に。職にはつけなかった、そのまま介護離職」（高橋さん）という。母親の病状が落ち着くまで約 1 年、アルバイトを続け、正規雇用された。会社にはよくしてもらったと感じている。しかし「そのまま母が死んだりしたら、父みなきやいけないから、『そんなの正社員で雇うか』みたいなもの……わからないけど……だったのかもしれないですね」（高橋さん）という。また、アルバイトだった時期の仕事と介護の両立については、以下のように述べている。

持って帰って夜中に仕事をしたりとか、与えられたことはなるたけこなそうという。若かったからっていう。本当寝ないで、昼間は病院行ったり、父の世話をしたりしながら、夜中仕事したり、ちょっと母の病院行く前にやったりとかそんな感じ。(高橋さん)

当時の高橋さんは、もし仕事がこなせなければ解雇されるかもしれないと、また強く希望していた仕事であったことから、無理をしていたことが窺える。

鈴木さんは、介護が始まった当初、学業は進めつつも、家にいて父親の介護に対処した。だが、大学院修了のための論文を書かなくてはならず、「母のこと支えなきゃいけないとか、決めてかなきゃいけない、今後のこと考えなきゃいけない、けど学業も終わらせなきゃいけない。仕事のことも考えなきゃいけない」(鈴木さん)という状況で、パニックに陥った。その後大学院を修了し、学生時代からの非常勤の仕事にも復帰できた。しかし、現在は、自分がいなくなったら父親の通院すら難しくなること、そして全てが母親の負担となることが想定されるため、自分自身のキャリア上の選択肢が事実上狭まっていると感じている。

(前略) 例えば私が進学なりお仕事なりで東京っていうところを離れなきゃいけない、決定しました、これは多分私の将来的には大事なものです、みたいになった時には、母が全部自分で背負おうとするっていうのはわかってる。わかっているっていうか、そういうふうに感じているので、(中略) 自分の中で、選択肢から排除される形になってしまう。(鈴木さん)

また佐藤さんは、大学院に入学した前後で介護負担が重くなり、学業との両立で困難を感じた。また学業だけではない自分の時間の使い方や、今後のキャリアを考えたときに問題があると感じていた。

こういう生活してて、キャリア形成すごく難しい。「デイサービス

行ってるじゃない」っていうけどなんか役に立たない。時間のことにしてはね、役に立たない。だって 5 時に帰ってきちゃうんだもん。

〔調査者：確かにね。「こっちは 5 時に帰って来れないよ」っていう時にどうするっていうのがない。〕

そうですね、ない。いやまあ、どうするって一応ね、だから、縛りつけられるっていうか。(佐藤さん)

3.4 介護をする中での人生選択の変化

高橋さんは、介護が始まってからずっと、家族の介護都合を優先してきたが、その後 30 代で考え方を以下のように変えたという。

(前略) 本当はお父さんとお母さんには申し訳ないけど、多分自分の方が長く生きるし、母親にそうやって「家に早く帰ってくるように言われても」「やだ」とか言っちゃって、もちろん喧嘩とかになっても「どうにかしてよ」とか言っちゃって(笑)。ひどいけど。ちょっと反抗期。(中略) もうなんか怒られてもいいから、若干両親を犠牲にしないと、なんか自分の人生ダメになるなとか思って、(中略) 実際遊んでも楽しくないんですけど、[両親を] 犠牲にしていると。それでも「そういう風にしなきゃだめだ」って意図的に切り離す。(高橋さん)

また、佐藤さんは、介護事業者の選択や、家のリフォームといった、介護に関する決めごとについて、家族とのすれ違いを経験した。さらに、家賃や生活費が親持ちであることと、佐藤さんが主に介護をしていることに対しての親の見解に怒りを感じていた。その後、両親と話し合った上で祖父母の家を出た。介護の主な担当は両親にシフトしたが、佐藤さんは祖父母宅に週 2 回程度泊まる形で、介護や見守りをその後も続けた。

3.5 介護経験の中での将来への見通し、考え方の変化

高橋さんは会社員として勤めた後、自営業となった。だが、同じように自営業だった父親の介護を通じ、会社員として勤める方が病気になった時等は安心

だ、と考えるようになった。自営業の仕事を続ける中、一人っ子であったため結婚をしたいという思いもあり、婚活をした。その時は「結婚出来なかったらもう本当にスパーンと自営を辞めて、会社員になるくらい」（高橋さん）の気持ちであったという。自分自身の仕事の状況と、結婚との関連について、高橋さんは以下のように述べている。

なんか二択みたいな。切羽詰まった二択。結婚できなかったら会社員に戻る。[転職と婚活] 両方一緒に。すごい転職サイト見たりとかしつつ、婚活サイトを見たりとか（笑）。(中略) 結婚しないんだったらちゃんと保障のある仕事をしなきゃ、この国では生きていけない、みたいな。父をみて。(高橋さん)

鈴木さんは、父親の介護を通じて、将来の親の介護に対する考え方が変わったという。父親のことは以前から好きではなく、気持ちの上でさまざまな葛藤があった。だが、今は割り切って介護することができているという。しかし、大好きである母親に対しては、以前は「母が病気になっても何があっても私が支える」（鈴木さん）と思っていたのが「母が例えば認知症で、ってなったら私は多分介護したくない」（鈴木さん）と変化したという。それは、母親のことが好きであるからこそ、認知症になった母親と接することや、母親が鈴木さんを認識できないかもしれないことを「つらい」と感じると想像できるようになったからという。

一方佐藤さんは、祖父母の介護を通じ、親の介護や、自分自身への介護も含め、介護全般に「興ざめ」（佐藤さん）したという。佐藤さんは熱心に祖父母の介護に取り組み、在宅介護がやはり良いとも思っているのだが、同時に「在宅介護の痛いところ」（佐藤さん）をみたという。これが「興ざめ」につながっているのではないだろうか。佐藤さんは以下のようにいう。

家族の、今のシステムの中で、家族の人間関係だとか個人の、私のキャリアとかいう点から見たら、在宅、言ったら死んで行く人間たちに対してかけてる労力に対してあまりにも釣り合いが取れてない、影響が

大きすぎるし、例えば十円ハゲできちゃうのも困った話だし、非常に精神衛生面がよくない。キツイ、しかも先が見えなすぎる【原文ママ】。
(佐藤さん)

介護経験を通じて、佐藤さんは、「自分のような若い人が家族の介護をするべきではない」と感じるようになった。その理由として、佐藤さん自身は、ケア責任の重さ、また若い人のキャリアを介護が阻害することを指摘する。

(前略) 私の1時間のほうが彼女たち（仕事をしている母やおば）の1時間より、なんだろう、高い1時間なんじゃないの？みたいな。キャリア形成の途中だから。(中略) [キャリアが] 決まっちゃってる人の1時間と違うでしょう。これで人生変わるからどうなんだろう。若い子の時間っていうところは。私なんかはやっぱ親世代の1時間と違う気がする。(中略) 価値は違うと思うから。若い介護者の時間っていうのは、奪っている物が大きすぎると思いますね。(佐藤さん)

3.6 小括

今回取り上げた3事例は、大卒後の社会人や、大学院生であり、介護が始まったのはいずれも20代に入ってからである。先行研究で取り上げた、高校から仕事への移行期における、ケア役割の遂行と就労との関わりにみられる困難を経験している事例とは、年齢層、社会的立場、学歴などの資源も異なる。しかし、成人期に移行後と見なされやすい社会的立場（社会人や、四年制大学を卒業している状態）や、年齢層であっても、これら3事例をみる限りでは、介護と仕事・学業の両立に関する困難は見られた。たとえば、高橋さんはアルバイトを、身体的も精神的にも無理しながらこなしていた。また、鈴木さん、佐藤さんは、受験準備で無職だった時点や学生であった時点に介護が始まり、その後の学業に強い支障を感じていた。

キャリア選択に対する介護の影響を考えると、まず、就職していた高橋さんに関しては、早く正社員になりたいとも、ケア責任が重い間は時給で働くアルバイトという立場でいた。こうして、キャリアと介護との間でバランスを取っ

ていたのである。しかし、途中から自己犠牲をやめ、自分の人生のために行動した。高橋さん自身は、その選択が今の結婚につながったと感じている。

鈴木さんは父親の介護が続く状況で、これからのキャリアの選択肢が狭まっていると感じている。それには、鈴木さんが介護を担わなくなれば、残った母親が介護負担を全て負ってしまうことが予想できるだけに、それを避けたいという鈴木さん自身の思いがある。それを考えると、実家から遠く離れたり、なかなか家に帰れなかったりする仕事は選べないのである。また、佐藤さんは祖父母の家を離れ、ケア責任は家族メンバーに分散したが、介護に費やす時間の犠牲は、自分自身の将来を考えるととても大きく、若い人は介護をするべきではないと思うようになった。

また、鈴木さんは将来の母親の介護に対し、佐藤さんは将来の親の介護と自分自身が介護されることに対して、介護経験を通じて考え方に変化が生じた。

今回は、いずれもの事例も、介護開始時にはすでに成年となっている。だが、介護を引き受けたことがその後のキャリア選択に与えた影響は大いにある。また、高橋さんの語りにあるように、家族の介護を引き受けている若者が、自分自身のやりたいことを追求するためには、思い切って自己犠牲をやめなくてはならないが、そのことで、他の家族（被介護者である家族や、共同の介護者である家族）にも変化を強いること——つまり、自分自身の将来を優先することが、家族を犠牲にすること——が引き替えになっていることを、若者自身が受け入れなくてはならないということが窺える。また、今回の3事例はいずれも、家族への介護という経験を通じ、将来の親への介護や自分自身への介護といった、先々のことに関しても具体的に考えるようになったり、自分自身の介護に関する気持ちの変化を感じていたりしている。

4 おわりに

本稿では、移行過程中や、成人への移行後と見られがちな就職後、高等教育以降の段階において、家族を介護する若い女性に何が起きているのかを、先行研究のレビューと筆者自身によるインタビュー調査の内容分析を通じて検討し、今後の研究や調査に向けての予備的な内容整理を行った。その上で本稿の限界および今後の研究における課題について最後に触れておきたい。

本稿の限界としては第一に、先行研究における事例と比較して、本稿で取り上げたインタビュー対象者は年齢層が上であり、属する社会階層（学歴や経済状況等）が異なることが挙げられる。このため、先行研究と本稿の事例を単純に並列して「家族を介護する若者」として論じることとはできない。今後は年齢層や社会階層差による相違、また共通することにも注目して研究を進める必要がある。

第二に、先行研究および本稿の事例は女性に限られていることである。今後の研究においては若い男性のキャリアと介護役割についても注視する必要がある。

現時点での限界と課題を踏まえ、今後はインタビュー調査対象を広げ、さらに分析を進めていきたい。

Footnotes

- ¹ 1980年代末から行政的対応や支援がはじまった英国では、こうした子どもはヤングケアラー（**young carer**）と呼ばれる。ベッカーはヤングケアラーを「家族メンバーのケアや援助、サポートを行なっている（あるいは行うことになっている）18歳未満の子ども。こうした子どもたちは、恒常的に、相当量のケアや重要なケアに携わり、普通は大人がするとされているようなレベルの責任を引き受けている。ケアの受け手は親であることが多いが、時にはきょうだいや祖父母や親戚であることもある。そのようなケアの受け手は、障害や慢性の病気、精神的問題、ケアやサポートや監督が必要になる他の状況などを抱えている」（Becker, 2000 / 2010）としたが、年齢や関わるケアの量に関して議論があり、より広い定義を取っている民間団体もある（三富, 2008, pp. 282–283）。またBecker（2010）は、成年への移行期にあたる16歳から24歳までを**young adult carer**としており、必ずしも18歳という英国における法的な成人年齢と整合性のある定義とはしていない。近年日本でも「ヤングケアラー」という語が使われはじめたが、現状では中高年以外の比較的若い介護者全般に対して、未成年・成年の別を問わず使われており、定義については未整理のままである。
- ² 一方家族の介護を担う若い男性が、「介護によって失ったもの（彼らのキャリア）を取り戻す方向に動くべき」とされるのであれば、それにより彼らにどのようなプレッシャーがかかるのか、またキャリアが「取り戻」せなかった時にどうなるのかについて検討する必要がある。
- ³ これらの調査概要については乾（2013）参照。
- ⁴ 註1を参照。
- ⁵ インタビュー実施当時の年齢は20代が2名、30代が1名である。
- ⁶ インタビューの語りの引用中、[] 部分は筆者による補足である。注釈が必要な箇所は【 】で示した。

References

- Becker, Saul. (2010). 「家族ケアを行なう子ども（ヤングケアラー）の定義」. (澁谷智子, Trans.). 『澁谷智子のホームページ』. (最終アクセス 2015/8/30) <http://shibuto.la.coocan.jp/sub7.html> = (Original work published 2000). 'Young carers', in Davies, M. (ed). *The Blackwell Encyclopaedia of Social Work*. Oxford: Blackwells, p. 378.
- Becker, F. and Becker, S., (2008). *Young Adult Carers in the UK: Experiences, Needs and Services for Carers Aged 16–24*. London: The Princess Royal Trust for Carers.
- 乾彰夫. (2013). 「若者たちの移行に寄り添う」. 乾彰夫編『高卒 5 年—どう生き、これからどう生きるのか』. 東京：大月書店, 9–36.
- 児島功和, 藤井（南出）吉祥, 船山万里子, 宮島基. (2010). 「若者の移行における困難の複雑性：就労および家族問題に着目して」. 『人文学報. 教育学』. 45, 23–45. <http://hdl.handle.net/10748/3914>
- 松崎実穂. (2015). 「メディアにみる「家族を介護する若者」——日本における社会問題化を考える」. 『Gender & Sexuality』. 10, 187–201.
- 三富紀敬. (2008). 『イギリスのコミュニティケアと介護者—介護者支援の国際的展開』. 京都：ミネルヴァ書房.
- 宮島基. (2013). 「家族を支える女性たち——若者の移行とケアワーク」. 乾彰夫編『高卒 5 年 どう生き、これからどう生きるのか』. 東京：大月書店, 145–180.
- 森田久美子. (2010). 「メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験—不安障害の親をケアする青年のライフストーリー」. 『立正社会福祉研究』. 12 (1), 1–10.

Difficulties Faced by Caring Roles and Careers
—Case Studies of Women in their 20s–30s Who Care Family Members
Miho MATSUZAKI

In the 2010s, young people who care family members started to receive attention in Japan. These young people, who began appearing in various forms of media, lost the opportunity to choose a life course due to their caring roles, and thus experience difficulties in forming a career path. Moreover, they are depicted as being isolated from schools and peer networks, and are excluded from a multitude of systems related to caring. There is a gender difference in how these difficulties are depicted, however, in that they rarely feature problems or decisions surrounding career paths for young women who have undertaken carer roles. For this reason, it is necessary to conduct a qualitative analysis that thoroughly analyzes the individual experiences of actual young people who care their families.

This paper will summarize the issues at hand by first reviewing the literature on young people in contemporary Japan, and in particular on women who perform caring roles and who are transitioning from adolescence to adulthood. This paper will also discuss the findings of research on young adult carers in England. Second, while referencing the issues summarized above, this paper will analyze interviews conducted by the author with women in early adulthood who care family members (who began caring in their 20s) .

The cases treated in the literature review and the subjects interviewed in the author's survey differ in terms of age, history of becoming a carer, and social class. There may be a large disparity in how these factors impact a person's life course. However, there are also similarities in the problems they have experienced until now, as well as those presumed to occur in the future.

In addition, the subjects interviewed by the author are both older and come from a higher social class compared to the cases in the literature review, but through their caring experiences, they are changing the way they think about their own futures, lives, and caring in general.

To summarize the literature review and interview case study, the effects that caring has on a person's career or life course are truly diverse. Consequently, it is necessary to perform additional research and analysis on young people—especially women—who care family members, as well as the effects caring has on life courses and careers after caring has ended.

Keywords:

young people who perform caring roles within their families, young women in early adulthood, young carer, young adult carer, career

報告：第4回 みんなで語ろう！大学での子育て
コーディネーター：生駒夏美
国際基督教大学

今回で4回目となった恒例の座談会だが、今年は開催日が学期末となったこともあり、参加者が前回ほどには集まらなかった。そんな中、妊娠中や妊活中の教職員、他大学で女性教員のサポート役を請け負っておられる方、そして学生、大学院生の方々が参加してくださったのには勇気付けられた。ご参加くださった皆様に感謝したい。

長年のCGSでの活動の成果もあり、大学での託児の必要性については本学でも認識されるに至っている。ただ現在キャンパスにあって閉園が決まっている幼児園の施設をどのように利用できるのかについて、コンセンサスが得られていないため、具体的に事態が進捗しないという状況になっている。

私たちとしては、大学側がイニシアチブを持って事態の打開を図ってもらいたいと願うとともに、必要性について粘り強く訴えていきたいと考えている。

今回は、ネパールからの留学生が特に窮状を伝えてくれた。彼は配偶者も留学生であり、オンキャンパスの託児施設がないことや、学内の寮には子供を持つカップルの入居が許されていないこともあり、現在は母国の家族のもとに子供を残して留学生活を送っている。しかし、子供と共に生活したいという気持ちは強く、わたしたちの活動に希望を見出したという。託児施設をめぐる状況が膠着していることを伝えざるを得ないことが、非常に心苦しかった。

多くの大学教職員にとっては、託児所開設が実現するのが何年後であっても有難い嬉しいことだろうが、数年間しか本学に在籍しない学生にとっては、「いま必要」なのであって、数年後では意味がない。今後、留学生は増えることが予想され、そうすると今回のケースに類似したケースも増えていくだろう。オンキャンパスの託児施設はますます必要性が高まる。また、託児所のみではなく、学生寮にも家族で入居できるようにしていく必要がある。日本の大学には大学生を「結婚前の若者」と想定している傾向がある。国際性を打ち出しているにもかかわらず、本学もその例に漏れない。しかし世界に目を向ければ、大学に通うのが必ずしも20歳あたりの若者であるとは限らない。まして

や大学院となれば、**mature students**は当たり前の存在である。グローバルスタンダードと言うのであれば、学生に配偶者がいたり子供がいるというケースを特殊事例として考えるのではなく、普通のこととして扱えるように教職員側の想定も改める必要がある。また、大学設備もそのようなケースを想定して作られるべきである。本学では新たに寮が建設されるが、ぜひとも子供連れでも入居可能なものにしていただきたいと願う。また現在キャンパスにある研究者用宿泊施設にも、子供連れでの宿泊が認められていないが、これは外部から子育て中の研究者を招聘する際の障壁となっている。研究者にもシングルマザーやシングルファザーがおり、必ずしも子供を置いて一人で本学に来られるとは限らない。独身者をモデルとしたこのような施設の運営方針を、ぜひとも見直していただきたい。

いままさに保活をしていて、保育園を確保することの難しさに直面しているある教職員もオンキャンパス託児施設が「いま必要」との声を届けてくれた。子育てをしながら勉強をしたり、仕事をしたりするには、安心して子供を預けられる環境があることが必須条件である。それが整わないために職場復帰やさらには子供を持つことそのものに不安を覚える人もいることを大学側は認識しなければならない。人生の大切な選択肢を、職場の環境のせいで狭めてしまうことのないように、大学側にはその切迫した状況を理解していただきたいし、早急な解決をお願いしたい。

保育が必要な時期は、その子供の人生の最初のほんの数年間である。しかしその時期を支える仕組みがないと、これからの社会では学生、大学院生、留学生、教員、職員にとって魅力的な学び舎・職場と成りえないのではないだろうか。

以下に、ネパールからの留学生 **Jiwak Raj Bajracharya** さんの文章をご本人の許可を得て掲載する。

I am so glad to know that CGS is aiming to gather its efforts for the establishment of a childcare facility at ICU.

Why do I need a childcare facility at ICU? Indeed, I have a 17 months old daughter who was born in Tokyo and remained with us (me and my wife) only for 6 months. Presently, I and my wife are doing PhD and would greatly appreciate an on-campus childcare facility. The reason behind this is I was not able to get a place at Hoikuen due to the shortage of Hoikuen in Mitaka city. Graduate students like me (including Japanese and non-Japanese students) are desperate to have a childcare facility on his / her own university so that they can manage time for both study and children. I know there are many private Hoikuen outside of Mitaka city but it is very difficult to arrange transportation and is time-consuming, too.

I am sure that, CGS will implement its planning into action in near future soon.

Additionally, ICU has very good apartments for couple within reasonable price range but children were not allows to live in them. Can CGS put its effort for this matter too?

Sincerely
Jiwak

2015年度CGSイベント報告

第3回R-Week報告

堀真悟

CGS研究所助手 / 準研究員

2015年6月1～6日（月～土）の1週間、CGS主催のもと、第3回「R-Week」が開催された。

CGSが展開する「R-Week project」は、ジェンダー・セクシュアリティを主としてICU学内で経験されるさまざまな問題に対して、学生自らがアクションを起こすことをさまざまな方法でサポートすることを目的としたものである。その一環としてCGSでは、毎年6月第1週目はR-Weekと銘打つイベント週間を開催してきた。第3回の内容は以下の通りである。

6月1～5日（月～金） R-Week連動学生有志企画「Sp [R] ead: あなたのRで、多様性をICUから『Sp [R] ead』しよう。」

6月1～5日（月～金） ダブルパネル展「ふわりんといっしょ ～ICUでも、ひとりじゃないよ～」、「多様な性、知っていますか？ ～あなたも私も、このまちで～」(東京都平成24年度地域自殺対策緊急強化補助事業)

6月1日（月） オープニングティーパーティー

6月2日（火） 講演会「学生の『問題経験』を考える
—大学におけるハラスメント—

講師：湯川やよい（一橋大学大学院社会学研究科特別研究員）

6月3日（水） 講演会「『性同一性障害』のこれからを考える
—医療モデルと生活モデルの視点から—

講師：針間克己（はりまメンタルクリニック院長）、
東 優子（大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類）

6月4日（木） 第24回「ふわカフェ」トークテーマ：リラックス

6月5日（金） 講演会「薬物を使う人はなぜ助けを求められないのか」
講師：倉田めば（大阪DARC）

6月6日（土） CGS主催同窓会「Rainbow Reunion」

今年から始まった新たな取り組みが、本館3階ラウンジでおこなったパネル展である。日比谷潤子学長やICU 食堂スタッフの塩田かずこさんなど学内の教職員のLGBTサポートイヴな声を、パネル化して展示したのだ。同パネルは今後も使用し、内容もボリュームアップしていきたい。

また、講演会も充実していた。まず、ハラスメント問題の研究を専門とする社会学者の湯川やよいさんを招いておこなわれた「学生の『問題経験』を考える」である。ハラスメントを被る学生の問題経験を中心に据えた対策について再考するこの会は、ハラスメント対策に関心をもつ教職員の来場もあり、やや小規模ながら充実したものとなった。

ついで『『性同一性障害』のこれからを考える ―医療モデルと生活モデルの視点から』では、医師の針間克己さんとソーシャルワーク論を専門とする東優子さんが、医療モデルと生活モデルのそれぞれの視点から、「性同一性障害」をめぐる日本社会の近年の動向と今後について講演をおこなった。学外からの来場者も交えた討議は白熱し、結果的に初学者向けというよりやや専門性の高い内容となった。

そして「薬物を使う人はなぜ助けを求められないのか」ではピア・ドラッグ・カウンセラーとして活動する倉田めばさんを迎え、薬物依存者への社会的排除や刑事罰を自明視したこれまでの対応・予防策への批判的な問い直しを聞いた。学内でも薬物依存をスティグマ化する風潮が根強いなか、「ダメ絶対!」と連呼するのではない対策がいかに可能か。それは、CGSそしてICUが考えるべき喫緊の課題であることを再認識できた。

このほか、CGS主催同窓会 Rainbow Reunion の開催も忘れてはならない。CGS 関係者やpGSS（ジェンダー・セクシュアリティ研究メジャー）の卒業生は相当数にのぼるにも関わらず、CGS主催のもと集まる機会はこれまでになかった。また残念ながら既存の同窓会組織では、ジェンダー・セクシュアリティについての関心や話題が共有されることは皆無である。そこで初めて企画されたのがRainbow Reunionであり、今回は35名の参加者を得られた。異性愛主義や男女二元論がヘゲモニーを握る社会を生き延びるべく、CGSでは今後

も卒業生のネットワークづくりに継続して取り組んでいきたい。

さて、こうしたイベント週間の開催も3年目を迎えたわけだが、今年は昨年以上に学生からの注目度が高いように感じられた。とりわけ、「R」のボディペイントやロゴマークの写真をTwitter・Facebook上で拡散することで多様性をアピールする「Sp [R] ead」が、R-Week連動企画として学生有志の手で開催されたのは特筆すべき点である。

一方で、「Sp [R] ead」以外の企画準備を研究所助手で分担した結果、助手たちがオーバーワークに陥ってしまったことは反省すべき点である。R-Week projectは学生が主体となって運営されることを期待して立ち上げられたものだが、これまではその前段階として助手が運営を担い、R-Weekへの関心向上を図ってきた。だが、助手それぞれが業務を抱えるなか、次年度以降も同様の規模でR-Weekを運営していくことは難しい。学生の関心を次第に得つつある今だからこそ、R-Weekは誰が何のためにおこなうのかを振り返ることが必要だろう。

R-Week担当者として、この小さな大学ですら何かを動かしたり変えたりすることはかくも難しいことなのだと、あらためて痛感させられる。ただ、これまでのR-Weekがまったくの無意味だったとも思わない。2016年度、R-Week projectの担当者は変わり、R-weekは助手の負担が大きい1週間の集中開催から、複数週で開催されるR-Weeksとして新たにスタートする。そのなかでも、学生一人一人の問題意識や経験が出発点としてつねに大切にされることを願っている。時に非常に難しいことではあったが、しかしどんなに困難でも、それこそがR-Week projectの存在意義だと思うのだ。

AY2015 CGS Event Report
3rd Annual R-Week Report
Shingo HORI
Research Institute Assistant / Associate Research Fellow, CGS

CGS hosted the 3rd annual “R-Week” from June 1st–6th (Mon–Sat), 2015.

CGS developed the R-Week project in order to support students who wish to take action against the various (mainly gender and sexuality-related) problems they experience on ICU’s campus. As part of that project, CGS holds an event dubbed “R-Week” for one week in June every year. The 3rd annual event proceeded as follows.

June 1st–5th (Mon–Fri): R-Week Joint Student Volunteer Project
“Sp [R] ead” — “Sp [R] ead diversity at ICU with your [R]”

June 1st–5th (Mon–Fri): Double Panel Exhibition, “Together with Fuwarin—You’re Not Alone at ICU,” “Do You Know about Sexual Diversity?—You and I, Here in this City” (Tokyo Metropolis AY2012 Subsidy Program for the Immediate Strengthening of Community-Based Suicide Prevention Efforts)

June 1st (Mon): Opening Tea Party

June 2nd (Tue): Lecture, “Discussing Problematic Experiences of Students—Harassment on Campus”

Lecturer: Yayoi YUKAWA (Research Fellow, Hitotsubashi University Graduate School of Social Sciences)

June 3rd (Wed): Lecture, “The Future of ‘Gender Identity Disorder’—From the Perspectives of Medical and Lifestyle Models”

Lecturers: Katsuki HARIMA (Director, Harima Medical Clinic), Yuko HIGASHI (Osaka Prefecture University College of Health and Human Sciences School of Social Welfare and Education)

June 4th (Thu): 24th Fuwa Café (Theme: “Relaxing”)

June 5th (Fri): Lecture, “Why Can’t People Who Use Drugs Ask for Help?”

Lecturer: Meba KURATA (Osaka DARC)

June 6th (Sat): CGS-sponsored Alumni Party “Rainbow Reunion”

Our newest endeavor that began from this year is the panel exhibition held at the 3rd floor lounge in Honkan. We plan to use the same panels in the future, while increasing the amount of content.

The lectures held during the week were all rewarding. At the first lecture, which reconsidered measures for students who have experienced harassment, faculty members who were interested in harassment prevention also attended. While it was a small-scale event, it was also a fruitful one.

The next lecture, “The Future of ‘Gender Identity Disorder’—From the Perspectives of Medical and Lifestyle Models,” explored GID from the viewpoints of both medical and lifestyle models, within the context of recent and future trends in Japanese society.

Finally, in “Why Can’t People Who Use Drugs Ask for Help?” the lecturer critically questioned the heretofore treatment / prevention policies that regarded social exclusion and / or criminal punishment for drug-dependent individuals as self-evident.

Aside from these, the CGS-sponsored alumni event Rainbow Reunion was also held, with over 35 people in attendance. At CGS, we hope to continue creating networks for our graduates.

After three years of holding this event week, I felt that it gained even more attention from students compared to the previous year. In particular, the student volunteer-led "Sp [R] ead," organized as an R-Week joint project, deserves special mention.

It was regretful, however, that the RIAs who assisted in planning and preparing events other than "Sp [R] ead" ended up working overtime. It is necessary to reflect on for whom and for what purpose we are holding R-Week.

As the representative of R-Week, I was painfully reminded of how difficult it is to move or change things, even at a small university like ICU. Yet, I hope that the R-Week project will continue to be valued as an event that begins with each individual student's awareness and experience.

2015年度多摩ジェンダー教育ネットワーク 第21回-24回会合 加藤恵津子

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」について

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」（以下「ネットワーク」）は、2009年11月に発足した、多摩地区の大学でジェンダー教育に携わる人々の「人間関係」です。

ジェンダー関連科目はあっても、ジェンダー教育がプログラムや専攻として制度化しにくい日本の諸大学にあって、その教育に携わる人々は孤立しがちです。当ネットワークはそのような人々をつなぎ、経験、スキル、そして直面している問題点を分かち合うことで互いをエンパワーすべく始めました。

これには「顔の見える」関係づくりが重要と考え、まずは行き来のしやすい多摩地区の大学教員を中心メンバーとしています。主な参加者は、多摩地区に職場またはご自宅のある方々ですが、中には「越境」参加者もおられます。また大学院生、NPO等の活動家、自治体職員（2013年度より多摩市男女共同参画担当の方々も参加）、出版社の方など、ジェンダー・セクシュアリティ教育・研究に関心のある様々な方にもご参加いただいています。

会合は3～4か月に一回、平日の夜19～21時、多摩地区の諸大学およびTAMA女性センター（京王線 聖蹟桜ヶ丘駅前）で、持ち回りで開催しています。メンバーによる教育・研究実践の報告の他、特定のテーマに基づき、外部講師をお招きしてのレクチャー形式の会合も開催しています。

参加をご希望の方、また参加を勧めたいお知り合いのいらっしゃる方は、お気軽に以下の代表アドレスまでご連絡下さい。

メールアドレス：tama.gender.education@gmail.com

世話人（2015年度現在）：

石川照子（大妻女子大学比較文化学部）

加藤恵津子（国際基督教大学ジェンダー研究センター）

稲本万里子（恵泉女学園大学）

事務担当：松崎実穂（国際基督教大学ジェンダー研究センター 研究所助手 / 準研究員）

報告

〈第21回会合〉

日 時：2015年3月4日（水）

テーマ：「軍隊と性暴力の密接な関係を考察する：日本軍『慰安所』と占領軍『慰安所』と」

発表者：平井和子（一橋大学社会学研究科特任講師）

場 所：一橋大学

出席者：14名

VAWWRAC（「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター）による日韓「慰安婦」アンケート調査（2013）と、ご自身の入門ゼミ「日本軍『慰安婦』問題を多方面から考察する」（2014）についてご発表いただきました。前者では、日韓での認識の違いや温度差が浮き彫りになり、後者では、1、2年生の男女8人が、独創的な視点から真摯に研究を深めるプロセス、またその内容のレベルの高さが大きな印象を残し、活発な議論が行われました。

〈第22回会合〉

日 時：2015年7月15日（木）

テーマ：『源氏物語絵巻』をジェンダーとセクシュアリティの視点から分析する」

発表者：稲本万里子（恵泉女学園大学）

場 所：TAMA女性センター

出席者：9名

本年度の年間テーマである「表象のジェンダー研究」に沿って、ご専門の美術史の中の『源氏物語絵巻』を、ジェンダーとセクシュアリティの視点から考察したご発表をいただきました。Visual images（視覚表象）が、観者の人生観、すなわち恋愛観や結婚観をいかに規定し、また今でも規定し続けているかということについて、題材である『源氏物語絵巻』を詳細に分析された内容は、参加者の大きな関心を引き出し、活発な議論が行われました。

〈第23回会合〉

日 時：2015年10月8日（木）

テーマ：「今どきのヒーロー・ヒロインは？：アニメ・マンガ・映画にみる
ジェンダー」

発表者：駒谷真美（昭和女子大学大学院准教授）

場 所：成蹊大学

出席者：8名

子どもが人生初期に出会うアニメキャラは、「ヒーローもの」「ヒロインもの（魔法もの）」など、多くが深くジェンダー化されている。時代とともに「闘う」ようになって、少女キャラの設定は依然としてプリンセスやアイドルなど「女の子らしさ」の刷り込みに加担している。またTV世代からSNS世代へと移るにつれ、メディアが作る「現実」の子どもへの刷り込まれ易さは増すと考えられる…。一見「楽しい」トピックでありながら、こうした危険性が説得的に伝わり、参加者一同「来し方行く末」を省みつつ、熱く質疑応答や議論を行いました。

〈第24回会合〉

*** TAMA女性センター公開講座を兼ねる。**

日 時：2015年1月28日（木）

テーマ：「若者のあいだで今、HIV感染が増えています！：行政・CBO・学生・
研究機関の連携の可能性を探る」

発表者：野口雅美（東京都多摩府中保健所 保健対策課 感染症対策係）、
岩橋恒太（名古屋市立大学研究員、akta研究部門長）、
鈴木菜月（ICU学部生）、
加藤悠二（ICUジェンダー研究センター嘱託職員 CGS事務局担当）

場 所：TAMA女性センター

出席者：9名（一般市民を含む）

多摩府中保健所、特定非営利活動法人akta、ICUジェンダー研究センターは、2014年度より、若者のためのHIV・エイズ予防啓発資料とプログラムを協同開発し、中学・高校に啓発リーフレットを配布してきました。それぞれの

代表者が、HIV / AIDSをめぐる首都圏の現状、啓発活動にあたって参考にした若者の声などを紹介しながら、行政、CBO（Community Based Organization）、教育機関が協働して若者のセクシュアルヘルス・プロモーションにあたる重要性を、明快、具体的に論じました。多くのカラフルな配布物も配られ、若者の心をつかむヒントも豊富に紹介されました。

From 21st to 24th Meetings of the Tama Gender Education Network
2015
(Summary)
Etsuko KATO

The Tama Gender Education Network (hereafter, “Network”) is an association of lecturers who teach gender-related courses at universities in the Tama district. Due to the Japanese academic environment which marginalizes gender and sexuality studies, the lecturers tend to be isolated from each other. The Network, launched in November 2009, aims at mutual empowerment of its members through sharing experiences, teaching skills, and hardships. Having started within the Tama district to enhance face-to-face communication, the Network now welcomes members from outside the district or academia, including activists, publishers or local government staff.

In the academic year 2015 the Network organized four meetings, whose topics varied from “comfort women” issues to visual images in the illustrated scroll of *The Tale of Genji* or in anime. The final meeting, co-hosted by Tama municipal government, dealt with sexual health promotion for youth.

For inquiries, please feel free to contact the Network:

E-mail: tama.gender.education@gmail.com

Organizers (as of 2015):

Teruko Ishikawa

(Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women’s University)

Etsuko Kato (Center for Genders Studies, ICU)

Inamoto Mariko (Keisen University)

Clerical Staff:

Miho Matsuzaki

(Research Institute Assistant, Center for Gender Studies, ICU)

2015年度ジェンダー研究センター（CGS）活動報告

■春学期

4月13日（月）・14日（火）・15日（水）

オープンセンター・pGSS説明会開催

4月18日（土）

YoRAP（Young Research Action Project）2016公開討論会

クィア・ネガティヴィティ再考

基調報告：

宮澤由歌（大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会特別研究員）

藤高和輝（大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程）

島田陽祐（大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程）

飯田麻結（ロンドン大学ゴールドスミス校 メディア・コミュニケーション学科 博士後期課程）

羽生有希（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手）

井芹真紀子（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手 / CGS 準研究員）

司 会：清水晶子（東京大学大学院 総合文化研究科 准教授）

コーディネーター：井芹真紀子（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手 / CGS 準研究員）

共 催：CGS、東京大学大学院総合文化研究科 表象文化論コース 清水晶子研究室

場 所：国際基督教大学 ダイアログハウス2F 国際会議室

4月23日（木）

第22回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学CGS

世話人：上田真央、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS事務局担当）

4月20日（月）～春学期読書会 開催

1. *Excitable Speech: A Politics of the Performative*

著：Butler, Judith

担当者：羽生有希（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手）

日 時：4月20日～（毎週月曜日）

2. 『出口なお』

著：安丸良夫

担当者：内藤希（一橋大学大学院 言語社会研究科 修士課程）

日 時：4月21日～（毎週火曜日）

3. 『フェミニズムはみんなのもの』

著：ベル・フックス（堀田碧, Trans.）

担当者：五十嵐舞（一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程 / JSP 特別研究員DC）

日 時：5月11日～（毎週月曜日）

5月22日（金）

第23回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS 研究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS事務局担当）

6月1日（月）～6月6日（土）

第3回 R-Week イベント週間

6月1日（月）～6月5日（金）

ダブルパネル展：

R-Week パネル展「ふわりんといっしょ～ICU でも、ひとりじゃないよ～」
東京都 平成24年度地域自殺対策緊急強化補助事業「多様な性、知っていますか？ ～あなたも私も、このまちで。～」

場 所：国際基督教大学 本館 2階ラウンジスペース

Twitter連動企画：写真撮影会 “Sp [R] ead”

場 所：国際基督教大学 バカ山（本館前芝生エリア）

6月1日（月）

オープニングティーパーティー

場 所：国際基督教大学 CGS

6月2日（火）

R-Week 特別講演会：学生の「問題経験」を考える ——大学におけるハラスメント

講 師：湯川やよい（一橋大学大学院 社会学研究科 特別研究員）

場 所：国際基督教大学 本館215号室

6月3日（水）

R-Week 特別講演会：「性同一性障害」のこれからを考える ——医療モデルと生活モデルの視点から（GE「日常生活とジェンダー」共催企画）

講 師：針間克己（はりまメンタルクリニック院長）

東優子（大阪府立大学 教授）

場 所：国際基督教大学 本館367号室

6月4日（木）

第24回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学 CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS研究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS事務局 担当）

6月5日（金）

R-Week特別講演会：薬物を使う人はなぜ助けを求められないのか

講 師：倉田めば（大阪DARCセンター長）

場 所：国際基督教大学 本館 304号室

6月6日（土）

CGS主催同窓会：Rainbow Reunion

場 所：国際基督教大学 アラムナイハウス2Fラウンジ

7月16日（木）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第22回会合

場 所：TAMA女性センター

■秋学期

9月 CGSニューズレター 018号発行

9月5日（土）

LGBT職場環境アンケート報告会「データを職場環境改善のチカラに in 東京 2015」

共 催：特定非営利活動法人 虹色ダイバーシティ、国際基督教大学 ジェンダー研究センター

会 場：武蔵野公会堂2階 第1・第2合同会議室

司会進行：

村木真紀（特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ代表）

データ解説：

平森大規（ワシントン大学大学院 社会学研究科博士前期課程 / CGS 研究メンバー）

トークゲスト：

生島嗣（特定非営利活動法人 ふれいす東京代表）

杉浦郁子（和光大学 准教授 / 特定非営利活動法人 共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク理事）

9月6日（日）

出張ふわカフェ in 東京迂回路研究

会 場：芝の家

世話人：上田真央、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS 事務局担当）

9月14日（月）～秋学期読書会 開催

関連文献講読：『同性パートナー ——同性婚・DP法を知るために』他

編 著：赤杉康伸、土屋ゆき、筒井真樹子

担当者：羽生有希（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手）

日 時：9月14日～（毎週月曜日）

9月17日（木）

第25回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS 研究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS 事務局担当）

9月18日（木）・19日（金）

オープンセンター・pGSS説明会開催

9月18日（金）～10月30日（金）

ランチタイムレクチャー2015：クィア理論入門

9月18日（金）イントロダクション：「クィアって何？」

9月25日（金）沈黙＝死：エイズ危機とドラッグ

10月2日（金）見えない差異：フェムレズビアンとトランスセクシュアル

10月9日（金）クローゼットの認識論：パスとカミングアウト

10月16日（金）フレキシブルな身体：ネオリベラリズムと寛容の政治

10月30日（金）クィア障害学の射程：クィアと〈強い〉身体

講 師：井芹真紀子（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS研究所助手 / CGS準研究員）

場 所：国際基督教大学 第一教育研究棟（ERB-1）347

10月8日（木）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第23回会合

場 所：成蹊大学6号館 502教室

10月14日（水）

第26回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS研究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS事務局担当）

11月7日（土）

ジェンダー研究センター・キリスト教と文化研究所 共同企画シンポジウム

お伽話 その遺産と転回：ジェンダー×セクシュアリティ×比較文学

登壇者：

村井まや子（神奈川大学 教授）

リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS研究所助手）

クリストファー・サイモンズ（国際基督教大学 上級准教授 / CGS所員）

加藤ダニエラ（広島女学院大学 准教授）

生駒夏美（国際基督教大学 上級准教授 / CGS センター長）

司 会：生駒夏美（国際基督教大学 教授 / CGS センター長）

場 所：国際基督教大学 本館 116 号室

11 月 9 日（月）

第 27 回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学 CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS 研究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS 事務局担当）

■冬学期

12 月 11 日（金）

トークセッション：

「We ARE Here ——日本で HIV / エイズ支援に関わる、ということ」

出 演：

生島嗣（NPO 法人ぶれいす東京代表）

高田良実（国際基督教大学 相談員）

場 所：国際基督教大学 第一教育研究棟（ERB-1）347

12 月 16 日（金）

第 28 回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学 CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS 研究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS 事務局担当）

12 月 17 日（木）

講演会：デート DV って、知ってる？ ——学生発信型啓発活動の在り方を考える

講 師：兵藤智佳（早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター
（WAVOC）准教授）

湯山秀平（早稲田大学 学部学生）

場 所：国際基督教大学 本館213号室

1月13日（水）～ 冬学期読書会 開催

『レズビアン・アイデンティティーズ』

著 者：堀江有里

羽生有希（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS研究所助
手）

日 時：1月13日～（毎週水曜日）

1月21日（木）

第29回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS研
究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS事務局担当）

1月25日（月）

YoRAP（Young Research Action Program）2016

第4回 みたかジェンダー・セクシュアリティ映画祭in ICU

上映作品1：『メトロレディーブルース』『メトロレディーブルース3』

監 督：松原明、佐々木有美

トークゲスト：

後呂良子（メトロレディーブルース出演者）

加納一美（メトロレディーブルース出演者）

疋田節子（メトロレディーブルース出演者）

上映作品2：『らせん』

監督：根来祐

トークゲスト：根来祐（『らせん』監督）

コーディネート、トークショー司会：堀真悟（CGS 研究所助手 / CGS 準研究員）

場 所：国際基督教大学 本館 213 号室

1月28日（木）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第 24 回会合

場 所：TAMA 女性センター

2月9日（火）

トークセッション「みんなで語ろう！ 大学での妊娠・出産・子育て #5」

コーディネーター：生駒夏美（国際基督教大学 教授 / CGS センター長）

場 所：国際基督教大学 ダイアログハウス 2 階 中会議室（203, 204）

2月11日（木）

YoRAP（Young Research Action Program）2016 オープンレクチャー

女（わたし）のからだをとりまく魔のトライアングル

ゲスト：

米津知子（DPI 女性障害者ネットワーク）

大橋由香子（SOSHIREN 女（わたし）のからだから）

コーディネーター・司会：

佐々木裕子（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手 / CGS 準研究員）

場 所：国際基督教大学 本館 213 号室

2月12日（金）

第 30 回 ふわカフェ開催

場 所：国際基督教大学 CGS

世話人：リンジー・モリソン（国際基督教大学大学院 博士後期課程 / CGS 研究所助手）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS 事務局担当）

2月16日（火）

すみれカフェ開催

場 所：国際基督教大学 CGS

世話人：加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 / CGS 事務局担当）、すみれプロジェクト有志学生

2月23日（火）

CGS 卒業論文発表会

場 所：国際基督教大学 CGS

3月6日（日）

YoRAP（Young Research Action Program）2016 講演会

「クィア神学の課題と可能性」

講演者：

堀江有里（立命館大学他非常勤講師、日本基督教団・牧師）

工藤万里江（立教大学大学院 キリスト教学研究科 博士後期課程）

司 会：佐々木裕子（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手 / CGS 準研究員）

コーディネーター：

井芹真紀子（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手 / CGS 準研究員）

佐々木裕子（東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程 / CGS 研究所助手 / CGS 準研究員）

場 所：国際基督教大学 ダイアログハウス 2F 国際会議室

3月 CGS ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』第11号発刊

注

CGS公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター公式アカウント、facebook
では随時、情報を更新しています。

CGS ニュースレター、CGS ジャーナル『ジェンダー & セクシュアリティ』は
「CGS Online」でダウンロードできます。

AY 2015 Activity Report, ICU Center for Gender Studies (CGS)

■Spring Term

Monday, 13th – Wednesday, April 15th

Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

Saturday, April 18th

CGS, YoRAP (Young Research Action Project) 2016, Research Presentation

Rethinking Queer Negativity

Presenter:

Yuka MIYAZAWA (Ph.D. student, Graduate School of Human Sciences
Osaka, University)

Kazuki FUJITAKA (Ph.D. student, Graduate School of Human Sciences
Osaka, University)

Yosuke SHIMADA (Ph.D. student, Graduate School of Human Sciences
Osaka, University)

Mayu IIDA (Ph.D. student, Goldsmiths, University of London, Department
of Media and Communications)

Yuki HANYU (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences,
University of Tokyo / Research Institute Assistant, CGS)

Makiko ISERI (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences,
University of Tokyo / Research Institute Assistant / Associate Research
Fellow, CGS)

Moderator: Akiko SHIMIZU (Associate Professor, Graduate School of Arts
and Sciences, University of Tokyo)

Coordinator: Makiko ISERI (Ph.D. student, Graduate School of Arts and
Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant / Associate
Research Fellow, CGS)

Co-host: CGS, International Christian University / Akiko SHIMIZU, Graduate

School of Arts and Sciences, University of Tokyo

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F, International Christian University

Thursday, April 23rd

Fuwa Café #22

Organizer: Habiba-Mao UEDA, Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: CGS, International Christian University

From Monday, April 20th, 2015: Spring Term Reading Groups

1. *Excitable Speech: A politics of the performative*

Author: Butler, Judith

Organizer: Yuki HANYU (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant)

Date: Mondays, from 20th April

2. *Deguchi Nao*

Author: Yoshio YASUMARU

Organizer: Nozimi NAITO (M.A. student, Graduate School of Language and Society, Hitotsubashi University)

Date: Tuesdays, from 21st April

1. *Feminism wa minna no mono*

Author: HOOKS, Bell (Midori HOTTA, Trans.)

Organizer: Mai IGARASHI (Ph.D. student, Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University / Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science)

Date: Mondays, from 11th May

Friday, May 22th

Fuwa Café #23

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: CGS, International Christian University

June 1st–6th (Mon–Sat)

R-Week Project #3

June 1st–5th (Mon–Fri)

Double Panel Exhibition, “Together with Fuwarin—You’re Not Alone at ICU,” “Do You Know about Sexual Diversity?—You and I, Here in this City” (Tokyo Metropolis AY2012 Subsidy Program for the Immediate Strengthening of Community-Based Suicide Prevention Efforts)

Venue: 2F Lounge space Honkan, International Christian University

June 1st–5th (Mon–Fri)

R-Week Joint Student Volunteer Project “Sp [R] ead”–“Sp [R] ead diversity at ICU with your [R]” (Photo session)

Venue: BAKAYAMA, International Christian University

Monday, June 1st

Opening Tea Party

Venue: CGS, International Christian University

Tuesday, June 2nd

Lecture, “Discussing Problematic Experiences of Students—Harassment on Campus”

Lecturer: Yayoi YUKAWA (Research Fellow, Hitotsubashi University)

Graduate School of Social Sciences)

Venue: Room H-215, International Christian University

Wednesday, June 3rd

Lecture, "The Future of 'Gender Identity Disorder'—From the Perspectives of Medical and Lifestyle Models"

Lecturers: Katsumi HARIMA (Director, Harima Medical Clinic), Yuko HIGASHI (Osaka Prefecture University College of Health and Human Sciences School of Social Welfare and Education)

Venue: Room H-367, International Christian University

Thursday, June 4th

Fuwa Café #24

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: CGS, International Christian University

Friday, June 5th

Lecture, "Why Can't People Who Use Drugs Ask for Help?"

Lecturer: Meba KURATA (Osaka DARC)

Venue: Room H-304, International Christian University

Saturday, June 6th

CGS-sponsored Alumni Party "Rainbow Reunion"

Venue: Alumni house 2F, International Christian University

Thursday, July 16th

22nd Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: TAMA Women's Center

■ Autumn Term

September

Publication of the CGS Newsletter, No. 018

Saturday, September 5th

Workplace Environment Survey Report: “Using the Power of Data to Improve the Workplace Environment in Tokyo 2015”

Moderator: Maki MURAKI (Representative, NPO corporation Nijjiro Diversity)

Data commentator: Daiki HIRAMORI (M.A. student, Department of Sociology, University of Washington / Research member, CGS)

Talk guest:

Yuzuru IKUSHIMA (Representative, NPO corporation PLACE TOKYO)

Ikuko SUGIURA (Associate professor, Wako University)

Co-host: NPO corporation Nijjiro Diversity, CGS

Venue: Musashino Public Hall

Sunday, September 6th

Syuttyo Fuwa Café in TOKYO DIVER-SION RESEARCH

Organizer: Habiba-Mao UEDA, Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: Shiba no ie

From Monday, September 14th: Autumn Term Reading Group

1. *Dousei paatonaa—douseikon DPhou wo sirutameni. etc.*

Ysunobu AKASUGI, Yuki TSUCHIYA, Makiko TSUTSUI (Eds.)

Organizer: Yuki HANYU (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant, CGS)

Date: Mondays, from 14th September

Thursday, September 17th

Fuwa Café #25

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: CGS, International Christian University

Thursday, 18th – Friday, 19th September

Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

Friday, September 18th–Friday, October 30th

Lunch time lecture2015: Introduction for Queer Studies

Friday, September 18th, Introduction: "What Is Queer?"

Friday, September 25th, Silence = Death: The AIDS Crisis and Drag

Friday, October 2nd, Invisible Differences: Femme Lesbians and Transsexuals

Friday, October 9th, Epistemology of the Closet: Passing and Coming Out

Friday, October 16th, Flexible Bodies: Neoliberalism and the Politics of Tolerance

Friday, October 30th, The Range of Queer Disability Studies: Queerness and the "Strong / Able?" Body

Lecturer: Makiko ISERI (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant / Associate Research Fellow, CGS)

Venue: ERB1-347, International Christian University

Thursday, October 8th

23rd Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: Seikei University

Wednesday, October 14th

Fuwa Café #26

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: CGS, International Christian University

Saturday, November 7th

Center for Gender Studies / Institute for the Study of Christianity and Culture
Joint Symposium

Fairy Tales - Their Legacy and Transformation: Gender, Sexuality, and
Comparative Literature

Key Note: Mayako MURAI (Professor, Kanagawa University)

Presenter:

Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research Institute
Assistant, CGS)

Christopher E. J. SIMONS (Senior Associate Professor, ICU / Regular
member, CGS)

Daniela KATO (Associate Professor, Hiroshima Jogakuin University)

Natsumi IKOMA (Professor, ICU / Director, CGS)

Moderator: Natsumi IKOMA (Senior Associate Professor, ICU / Director, CGS)

Venue: Room H-116, International Christian University

Tuesday, November 9th

Fuwa Café #27

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research
Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat,
CGS)

Venue: CGS, International Christian University

■ Winter Term

Friday, December 11th

Talk session: We ARE Here: What It Means To Be Involved in HIV / AIDS Relief
in Japan

Cast:

Yuzuru IKUSHIMA (Representative, NPO corporation PLACE TOKYO)

Yoshimi TAKADA (Advisor, ICU)

Venue: ERB1-347, International Christian University

Wednesday, December 16th

Fuwa Café #28

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research
Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat,
CGS)

Venue: CGS, International Christian University

Thursday, December 17th

Lecture: "Do You Know About Dating Violence?: The Modalities of Student-
Led Activities for Raising Awareness"

Lecturer:

Chika HYODO (Associate Professor, Hirayama Ikuo Volunteer Center
(WAVOC), Waseda University)

Syuhei YUYAMA (Under graduate, Waseda University)

Venue: H-213, International Christian University

From Wednesday, January 13th: Winter Term Reading Group

1. *Lesbian identities*

Author: Yuri HORIE

Organizer: Yuki HANYU (Ph.D. student, Graduate School of Arts and

Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant, CGS)

Date: Wednesdays, from 13th January

Thursday, January 21st

Fuwa Café #29

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Monday, January 25th

Mitaka Gender & Sexuality Film Festival in ICU #4

1. "Metro Lady Blues", "Metro Lady Blues3"

Director: Akira MATSUBARA, Yumi SASAKI

Talk guest: Yoshiko USHIRO (Cast of *Metro Lady Blues*)

Kazumi KANO (Cast of *Metro Lady Blues*)

Setsuko HIKITA (Cast of *Metro Lady Blues*)

2. "Rasen"

Director: Yu NEGORO

Talk guest: Yu NEGORO (Director of "Rasen")

Coordinator & Moderator: Shingo HORI (Research Institute Assistant / Associate Research Fellow, CGS)

Venue: Room H-213, International Christian University

Thursday, January 28th

24th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: TAMA Women's Center

Tuesday, February 9th

Talk Session: Let's Talk about Pregnancy, Childbirth and Parenting on

Campus! #05

Coordinator: Natsumi IKOMA (Professor, ICU / Director, CGS)

Venue: 203 & 204, Dialogue House, International Christian University

Tuesday, February 11th

CGS, YoRAP (Young Research Action Project) 2016, Open lecture

“The Bermuda Triangle Surrounding the Female (My) Body”

Guest:

Tomoko YONEDU (DPI Women’s Network Japan)

Yukako OHASHI (SOSHIREN, from the Female (My) Body)

Coordinator & Moderator:

Yuko SASAKI (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant / Associate Research Fellow, CGS)

Venue: Room H-213, International Christian University

Friday, February 12th

Fuwa Café #30

Organizer: Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU / Research Institute Assistant, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS)

Venue: CGS, International Christian University

Monday, 15th and Thursday, 18th February

Program in Gender and Sexuality studies, “Approaches to Gender studies”

Special Guest week

Monday, February 15th

Lecturer: Akiru IIDA (Sexual health advisor)

Venue: Room H-213, International Christian University

Thursday, February 18th

Lecturer: Kazuko TANAKA (Representative, Ferment / former Professor, ICU)

/ the founder of CGS)

Venue: Room H-213, International Christian University

Friday, February 16th

Sumire Café

Organizer: Yuji KATO (Part-time employee, ICU / Secretariat, CGS), Voluntary students for Sumire Project

Venue: CGS, International Christian University

Tuesday, February 23rd

CGS, Senior thesis Presentation

Venue: CGS, International Christian University

Sunday, March 6th

CGS, YoRAP (Young Research Action Project) 2016, Open lecture

"Problems and Prospects of Queer Theology"

Speakers:

Yuri HORIE (Part-time lecturer, Ritsumeikan University, etc. / Pastor, The United Church of Christ in Japan)

Marie KUDO (Ph.D. student, Graduate School of Christian Studies, Rikkyo University)

Moderator: Yuko SASAKI (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant / Associate Research Fellow, CGS)

Coordinator:

Makiko ISERI (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant / Associate Research Fellow, CGS)

Yuko SASAKI (Ph.D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo / Research Institute Assistant / Associate Research

Fellow, CGS)

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F, International Christian University

March

Publication of the CGS Journal, *Gender and Sexuality*, Vol. 11

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website, Twitter and facebook. The CGS newsletters and journal may also be downloaded from the site.

2016年度ジェンダー研究センター（CGS）活動予定**オープンセンター（兼pGSS説明会）**

日時：2016年4月

場所：ジェンダー研究センター

春学期読書会

日時：2016年4月～6月

場所：ジェンダー研究センター

第31回 ふわカフェ

日時：2016年4月

場所：国際基督教大学

第25回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2016年5月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第32回 ふわカフェ

日時：2016年5月

場所：国際基督教大学

第4回 R-weeks開催

日時：2016年6月

場所：国際基督教大学

第33回 ふわカフェ

日時：2016年6月

場所：国際基督教大学

第26回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2016年7月

場所：国際基督教大学および周辺大学

オープンセンター（兼pGSS・GSS説明会）

日時：2016年9月

場所：ジェンダー研究センター

CGSニュースレター019号

発刊予定：2019年9月

第34回 ふわカフェ

日時：2016年9月

場所：国際基督教大学

秋学期読書会

日時：2016年9月～11月

場所：ジェンダー研究センター

第35回 ふわカフェ

日時：2016年10月

場所：国際基督教大学

第27回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2016年10月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第36回 ふわカフェ

日時：2016年11月

場所：国際基督教大学

冬学期読書会

日時：2017年12月～2015年2月

場所：ジェンダー研究センター

第37回 ふわカフェ

日時：2017年12月

場所：国際基督教大学

第38回 ふわカフェ

日時：2017年1月

場所：国際基督教大学

第28回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2017年1月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第5回 CGS映画祭

日時：2017年1月

場所：国際基督教大学

トークセッション「みんなで語ろう！大学での妊娠・出産・子育て Vol.6」

日時：2017年2月

場所：国際基督教大学

第39回 ふわカフェ

日時：2017年2月

場所：国際基督教大学

CGS, pGSS 卒論発表会

日時：2017 年 2 月

場所：国際基督教大学

若手研究者による研究ワークショップ (YoRAP)

日時：2017 年 2 月

場所：国際基督教大学

第 29 回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2017 年 3 月

場所：国際基督教大学および周辺大学

CGS ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』第 12 号

発刊予定：2017 年 3 月

注

CGS 公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター公式アカウント、facebook
では随時、情報を更新しています。

CGS ニュースレター、CGS ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』は
「CGS Online」でダウンロードできます。

AY 2016 CGS Activity Schedule

Open Center

Date: April 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Spring Term Reading Groups

Dates: April – June 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Fuwa Café Vol.31

Date: April 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

25th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: May 2016

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

Fuwa Café Vol.32

Date: May 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

R-weeks project Vol.4

Dates: June 2016

Venue: International Christian University

Fuwa Café Vol.33

Date: June 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

26th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: July 2016

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

Open Center

Date: September 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

CGS Newsletter No.019

Slated for publication: September 2016

Fuwa Café Vol.34

Date: September 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Autumn Term Reading Groups

Dates: from September to November, 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Fuwa Café Vol.35

Date: October 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

27th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: September 2016

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

Fuwa Café Vol.36

Date: November 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Winter Term Reading Groups

Dates: December 2016 to February, 2017

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Fuwa Café Vol.37

Date: December 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Fuwa Café Vol.38

Date: January 2017

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

28th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: January 2017

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

CGS Film Festival #5

Date: January 2017

Venue: International Christian University

Talk session: Let's talk about Pregnancy, Childbirth and Parenting on Campus Vol.6

Date: February 2017

Venue: International Christian University

Fuwa Café Vol.39

Date: February 2017

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

CGS, pGSS Senior thesis presentation

Date: February 2017

Venue: International Christian University

Research Workshop by Young Researchers (YoRAP)

Date: February 2017

Venue: International Christian University

29th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: March 2017

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

CGS Journal *Gender and Sexuality* Vol.12

Slated for publication: March 2017

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website, Twitter and facebook. The CGS newsletters and journal may also be downloaded from the site.

執筆者紹介 Author profiles

菊地 夏野

名古屋市立大学 人文社会学部 准教授

専門：フェミニズム理論

Natsuno KIKUCHI

Associate Professor, School of Humanities and Social Sciences, Nagoya City University

Specialization: Theory of feminism

高松 香奈

国際基督教大学 教養学部 准教授

専門：国際関係論、ジェンダー、政治学

Kana TAKAMATSU

Associate Professor, Division of Arts and Sciences, College of Liberal Arts, International Christian University

Specialization: International Relations, Gender Studies, Political Science

田中 京子

名古屋大学 国際教育交流センター 教授

専門：留学生教育

Kyoko TANAKA

Professor, International Education & Exchange Center, Nagoya University

Specialization: International Education

鄭暎惠

大妻女子大学 人間関係学部 教授

専門：社会学

Yeonghae JUNG

Professor, Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

Specialization: Sociology

虎岩 朋加

敬和学園大学 人文学部 准教授

専門：教育哲学、クリティカル・ジェンダー・スタディーズ

Tomoka TORAIWA

Associate Professor, Faculty of Humanities, Keiwa College

Specialization: Philosophy of education, Critical gender studies

飯田 麻結

ロンドン大学ゴールドスミス校 メディア・コミュニケーション学科 博士課程

専門：フェミニズム科学論、情動理論、論争分析（STS）

Mayu IIDA

Goldsmiths, University of London, Department of Media and Communications (MPhil / PhD)

Specialization: feminist technoscience, affect theory, controversy analysis (STS)

五十嵐 舞

一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程 / 日本学術振興会特別研究員

専門：クィア批評

Mai IGARASHI

Ph. D. student, Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University/
Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science

Specialization: Queer critique

羽生 有希

東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程

専門：フェミニスト哲学、クィア理論

Yuki HANYU

Ph. D. student, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo

Specialization: Feminist Philosophy, Queer Theory

フォタケ・イワナ

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科

専門：ジェンダー論

Ioana FOTACHE

Research Student, Nagoya University, Graduate School of Languages & Cultures

Specialization: Gender Studies

松崎 実穂

国際基督教大学 ジェンダー研究センター 研究所助手 / 準研究員

専門：家族社会学、福祉社会学、社会福祉学

Miho MATSUZAKI

Research Institute Assistant / Associate Researcher, Center for Gender Studies, International Christian University

Specialization: Family Sociology, Welfare Sociology, Social Welfare Studies

国際基督教大学ジェンダー研究センター（CGS）所員
Regular Members of the Center for Gender Studies, ICU
2016年3月現在
as of March, 2016

オリビエ・アムール＝マヤール

Olivier AMMOUR-MAYEUR

Women's Studies, French Literature, Film Theory

新垣 修

Osamu ARAKAKI

International Law

有元 健

Takeshi ARIMOTO

Cultural Studies

マット・ギラン

Matthew A. GILLAN

Music, Ethnomusicology

半田 淳子

Atsuko HANDA

Language Education,

Japanese Language Education

池田 理知子（運営委員）*

Richiko IKEDA (CGS Steering Committee Member)*

Communication

生駒 夏美（センター長、運営委員）*

Natsumi IKOMA (CGS Steering Committee Member) *

Contemporary English Literature, Representation of the Body in British and Japanese Literature

伊藤 亜紀

Aki ITO

Storia dell'arte italiana, Storia del costume italiano

上遠 岳彦

Takehiko KAMITO

Biology

加藤 恵津子（運営委員）*

Etsuko KATO (CGS Director, Steering Committee Member) *

Cultural Anthropology, Gender Studies

菊池 秀明

Hideaki KIKUCHI

The Social History of China in the 17th–19th Centuries

アレン・キム

Allen KIM

Sociology

ツベタナ・I・クリステワ

Tzvetana I. KRISTEVA

Japanese Literature

マーク・W・ランガガー*

Mark W. LANGAGER *

Education, Comparative and International Education

ジョン・C・マーハ

John C. MAHER

Linguistics

ショウン・マラーニー

Shaun MALARNEY

Cultural Anthropology

森木 美恵

Yoshie MORIKI

Cultural Anthropology, Demography

那須 敬

Kei NASU

History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

西村 幹子

Mikiko NISHIMURA

Sociology of education, International cooperation in educational development

大森 佐和

Sawa OMORI

International Public Policy, International Political Economy

クリストファー・サイモンズ

Christopher E. J. SIMONS

English Literature

高松 香奈（運営委員）

Kana TAKAMATSU (CGS Steering Committee Member)

Politics, International Relations

高崎 恵*

Megumi TAKASAKI *

Cultural Anthropology, Religious Studies

高澤 紀恵

Norie TAKAZAWA

Social History of Early Modern Europe

* 編集委員

Editorial Board Members

ICU ジェンダー研究所ジャーナル

『ジェンダー&セクシュアリティ』

第12号投稿規程

2016年3月現在

1) ジャーナル概要

『ジェンダー&セクシュアリティ』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学術界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあつて、学術界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の一側面を報告するもの）を掲載する。書評部門では、ジェンダー・セクシュアリティに関連する近刊書の書評を掲載する。

2) 第12号発行日：2017年3月

3) 第12号論文投稿締切：2016年8月31日（水）消印有効

4) 原稿提出先：国際基督教大学 ジェンダー研究センター 編集委員会

郵送：〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2 ERB301

Eメール：cgs@icu.ac.jp

5) 応募要綱

a) 原稿

・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、他誌へ投稿されていないものとする。

- ・使用言語は日本語または英語に限る。
- ・原稿の様式は、**Publication Manual of the American Psychological Association**（2010年発行第6版）の様式に従うこと。様式が異なる場合は、内容の如何に関わらず受理しない場合がある。見本が必要な場合は、CGS ホームページ上の過去のジャーナル（以下URL）を参照するか、CGSに問い合わせること。

<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html>（日本語）

http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html（English）

- ・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通すこと。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる場合がある。
- ・姓名・所属・専門分野・Eメール・住所・電話およびFAX番号は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿の他の部分では執筆者氏名は一切伏せること。
- ・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。
- ・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえたうえで原稿を執筆すること。
- ・本規定に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

a-1) 研究部門（研究論文・研究ノート）

- ・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で16,000–20,000字、英語の場合は6,500–8,500 wordsの長さとする。
- ・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字以内、英語で5,000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語 / 英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文として投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、研究ノー

トとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は研究論文に準ずる。

a-2) フィールド部門（フィールドレポート）

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で **12,000** 字、英語で **5,000 words** 以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長 **40** 字、英語は最長 **20 words** とする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語 / 英語両言語による要旨および **5** つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は **800** 字以内、英語は **500 words** 以内）。
- ・研究論文・研究ノートとして投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、フィールドレポートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は、研究論文・研究ノートに準ずる。

b) 図表および図版

- ・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。
- ・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。
- ・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。
- ・画像やイラスト、図表など著作権が著者にないものについては、署名された掲載使用の許可書を同時に提出すること。

c) 提出原稿

- ・原稿は、印刷コピーと電子ファイルの **2** 種類を提出する。
- ・印刷コピーは、**A4** 用紙に印刷したものを上記住所に **3** 部提出する。
- ・電子ファイルは、Eメールに添付して上記アドレスに提出する。
- ・電子ファイルの保存形式
 - ーできる限り **Microsoft Word** 形式（ファイル名 **.doc**）で保存したものを提出すること。拡張子 **.docx** の提出は認めない。
 - ー **.doc** 形式でのファイル保存が困難である場合は、**Rich Text** 形式（ファイル名 **.rtf**）、またはプレーンテキスト形式（ファイル名 **.txt**）で保存したものを提

出すること。

—上記以外の形式、特に紙媒体から読み込んだ画像データによる本文及び要旨の提出は認めない。

- ・添付ファイルおよび印刷コピーの内容は、完全に一致したものであること。
- ・提出された原稿等は返却しない。

6) 校正

校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

7) 審査過程

投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終判断は編集委員会が下すものとする。

8) 著作権

投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用権に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

9) 原稿の複写

原稿が掲載された執筆者には3冊（執筆者が複数いる場合は5冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

10) 購読申込

該当誌の購読の申し込みはEメール cgs@icu.ac.jp で受け付ける。

当規定は予告なく改定されることがある。

The Journal of the Center for Gender Studies, ICU
Gender and Sexuality
Journal Regulations for Vol. 12
as of March, 2016

1) Journal Overview

Gender and Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies (*1), and research notes (*2). The field section shall feature case studies by activists, and field reports (*3) concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels. The final book review section shall contain reviews on upcoming books pertaining to gender and sexuality.

*1 Research papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.

*2 Research notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.

*3 Field reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 12: March, 2017

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 12: Wednesday, August 31, 2016, as indicated by the postmark on the envelope.

4) Address for Manuscript Submissions:

Center for Gender Studies Editorial Committee

Postal Address: ERB 301, International Christian University

3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo, 181-8585

E-mail: cgs@icu.ac.jp

5) Rules for Application

Manuscripts

— Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, in full or in part.

— Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.

— Manuscript format must be in accordance with the Publication Manual of the American Psychological Association (6th Edition, 2010). Manuscripts submitted in other formats may be rejected regardless of their contents and their scholarly worth. For examples of the necessary formatting, please review past issues of the journal, which can be accessed from the CGS home page at the following URL (s), or contact the CGS directly with any inquiries about formatting.

<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html> (Japanese)

http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html (English)

— Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.

— The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address, telephone number, and fax number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in both English and Japanese. To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text.

- There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.
- Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.
- Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with a request for revision.

a-1) Research Section

- Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6,500 to 8,500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Research notes should be less than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper may be accepted as a research note, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers.

a-2) Field Section

- Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.

- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper or research note may be accepted as a field report, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers or research notes.

b) Figures and Graphic Images

- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.
- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high enough to resist degradation during printing.
- The approximate position of the figure / image in the document should be indicated.

c) Manuscript Submission

- Manuscripts should be submitted in both digital and hard copy.
- Three hard copies should be submitted. They should be double-spaced on single-sided A4 paper.
- The digital copy should preferably be submitted in MSWord (filename.doc) format. Files may also be submitted in Rich Text format (filename.rtf) or Plain Text format (filename.txt).
- Files in formats other than those listed above, such as .docx extension files or scanned copies of images or text, shall not be accepted.
- The digital copy shall be submitted as an e-mail file attachment to cgs@icu.ac.jp.
- The digital and hard copies should be completely identical.
- Manuscripts submitted will not be returned.

6) Revisions

If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the editorial committee.

7) Screening Process

Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarlyness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

8) Copyright

Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction rights or usage rights of the author's own manuscript.

9) Journal Copies

Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

10) Purchasing Orders

Orders for the journal can be submitted by e-mail to cgs@icu.ac.jp.

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

編集後記
加藤恵津子

ここに第11号をお届けできることを嬉しく存じます。年を追うごとに、より多くの論文・研究ノートのご応募があり、編集委員一同感激しております。また今年度も多くの査読者の方にご協力いただくこととなりました。その適切かつ丁寧な論評に、心から感謝申し上げます。最終的には招待論文5本、論文4本、研究ノート1本を厳選させていただきました。読者の皆様にはぜひお楽しみいただきますよう、そして今後とも当ジャーナルをご愛読下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、編集・発行作業にあたってくれたCGS関係者の皆様、今回も本当にありがとうございました。

Postscript from the Editor
Etsuko KATO

It is with great pleasure that we present the eleventh volume of Gender and Sexuality. We are delighted to have received an unprecedented number of manuscript submissions for this volume. The diversity of submissions required the assistance of many referees to whom we are indebted for their detailed evaluations. In this volume, five invited papers, four research papers and one research note have been carefully selected for their depth and significance. We trust that you will find them insightful and stimulating. Finally, I would like to thank all those at CGS who were involved in the editing and publication of this volume.

Gender and Sexuality Vol. 11

Journal of the Center for Gender Studies,

International Christian University

Printed and Published on March 31, 2016

Editor International Christian University
Center for Gender Studies Editorial Committee

Publisher Center for Gender Studies

International Christian University

ERB 301, 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN

Tel & Fax: +81 (422) 33-3448

Email: cgs@icu.ac.jp

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Printing Hakuhosya Co.,Ltd.

© 2005 by Center for Gender Studies, Japan.

All rights reserved

国際基督教大学ジェンダー研究センター ジャーナル

『ジェンダー&セクシュアリティ』第11号

2016年3月31日印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会

発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター

〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2 ERB301

Tel & Fax: (0422) 33-3448

Email: cgs@icu.ac.jp

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

印刷 株式会社 白峰社

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、
著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。

